

橋 元 遺 跡

国道118号袋田バイパス道路改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所
財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第356集

橋元遺跡

国道118号袋田バイパス道路改築
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24年3月

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所
財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進め
るため、また県土の均衡ある発展を支える基盤として、その骨格と
なる国道や主要地方道などの幹線道路網の整備が進められています。

その一環として、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所は、国道
118号線袋田地内の交通危険箇所及び交通渋滞原因を解消するため國
道118号袋田バイパス道路改築事業を決定しました。しかしながら、
この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である橋元遺跡が所在する
ことから、記録保存の措置を講じる必要があるため、当財団が茨城
県常陸大宮土木事務所大子工務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を
受け、第1次調査として平成17年12月から平成18年3月までの4
か月間、第2次調査として平成22年7月から平成22年9月まで3
か月間、計7か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、橋元遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研
究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・
文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託
者であります茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所から多大な御協
力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城
県教育委員会、大子町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた
御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成24年3月

財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木欣一

例　　言

1 本書は、茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所の委託により、財團法人茨城県教育財團が発掘調査を実施した、茨城県久慈郡大子町大字南田気字橋元 367 番地の 1 ほかに位置する橋元遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成 17 年 12 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

平成 22 年 7 月 1 日～9 月 30 日

整理 平成 23 年 7 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

3 当遺跡の発掘調査は、平成 17 年度が調査課長川井正一、平成 22 年度が調査課長池田晃一のもと、以下の者が担当した。

平成 17 年度

首席調査員兼班長 横村宣行 平成 17 年 12 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

主任調査員 後藤孝行 平成 17 年 12 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

主任調査員 栗田 功 平成 17 年 12 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

平成 22 年度

首席調査員兼班長 仲村浩一郎 平成 22 年 7 月 1 日～9 月 30 日

主任調査員 市村俊英 平成 22 年 7 月 1 日～9 月 30 日

主任調査員 長津盛男 平成 22 年 7 月 1 日～9 月 30 日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、主任調査員長津盛男が担当した。

5 本書の作成にあたり、出土した鍛冶関連遺物の分類については、たら研究会委員・製鉄遺跡研究会代表穴澤義功氏にご指導いただいた。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X軸 = + 84,260 m, Y軸 = + 48,400 m の交点を基準点（A 1 a1）とした。この原点は、世界測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 …とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3 … 0 とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	P - ピット	PG - ピット群	SA - 柱列跡	SB - 握立柱建物跡
	SH - 方形堅穴遺構	SI - 堅穴住居跡	SK - 土坑	
遺物	DP - 土製品	M - 金属製品	Q - 石器・石製品	TP - 拓本記録土器
土層	K - 掘乱			

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は 60 分の 1 の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

[■]	焼土・施釉・溶損物・被熱痕	[■]	火床面・墨痕・ガラス質滓				
[■]	炭化材・滓付着	[■]	柱痕跡・煤・油煙				
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品	△	金属製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, kg, g である。なお、現存値は（ ）で、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率や写真版番号、その他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真版に記した番号と同一とした。

6 堅穴住居跡の「主軸」は、竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E)。

目 次

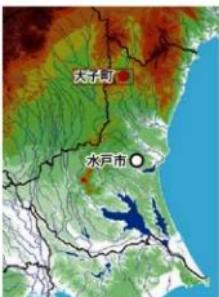
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 壺穴住居跡	10
(2) 土坑	11
2 平安時代の遺構と遺物	13
(1) 壺穴住居跡	13
(2) 工房跡	81
(3) 掘立柱建物跡	85
(4) 方形壙穴遺構	87
(5) 土坑	89
3 中世の遺構と遺物	118
(1) 掘立柱建物跡	118
(2) 方形壙穴遺構	121
(3) 土坑	127
4 その他の遺構と遺物	130
(1) 焼土遺構	130
(2) 土坑	132
(3) 柱跡跡	142
(4) ピット群	142
(5) 遺構外出土遺物	143
第4節 まとめ	146

付 章	166
写真図版	PL 1 ~ 34
抄 錄	
付 図	

橋元遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

橋元遺跡は、大子町の中央部を流れる久慈川右岸の標高 93 m の河岸段丘上に所在しています。今回の調査は、当遺跡が国道 118 号袋田バイパス道路改築事業地内に所在することから、遺跡の内容を図や写真に記録するために、茨城県教育財團が平成 17・22 年度に 7,700m²について発掘調査を実施しました。



南西方向からみた橋元遺跡（22 年度調査区）

調査の内容

調査の結果、縄文時代、平安時代、中世の遺構や遺物を確認し、断続的ながらも長期間にわたる土地利用の状況が明らかになりました。特に平安時代の住居跡が 37 軒確認され、遺跡の中心的な時期となります。集落の中には「村のかじや」（小鍛冶）もあり、農作業や織維生産にかかる鉄製品を作ったり、傷んだ鎌や鋤などの鉄製品の修理をしたりしていたと考えられます。



第1号住居兼鍛冶工房跡発掘状況

中央に見える穴が「鐵冶炉」です。ここで鉄を熱しました。隣の穴は「金床石」が据えられた穴で、ここで鉄を打ったと考えられます。まさに「鉄は熱いうちに打て！」ですね。



当時の鍛冶屋（イメージ）

橋元遺跡の鍛冶工房は、規模から1人もしくは2人で仕事をしていたと考えられます。「村の鍛冶屋さん」として昔に重宝されていたと考えられます。



地下式礎石を持つ掘立柱建物跡

調査区東部から、柱を建てた穴の底に、土台となる礎石が据えられた掘立柱建物跡を確認しました。一つの柱穴に石を3個重ねた所もあり、柱の高さを調節したと考えられます。



出土した土師器

住居跡など遺跡内から土師器の壺、椀、高台付椀、小皿、甕、小形甕などが出土しました。内面が黒色の壺や椀は、ヘラを用いて磨かれたものです。

調査の結果

奈良・平安時代の大字地方は、930年に編纂された『和名類聚抄』という辞典に記載されている「陸奥国白河郡依上」に比定できることから、陸奥国に属していたと考えられています。その後中世に入り、文禄4年（1595）の当地方の太閤検地以後に、陸奥国から常陸国に編入されたとみられています。

調査で確認された平安時代の住居跡も、煙道の長い竈が多く見られることから、東北地方南部や栃木県北東部との関連がうかがえ、当集落の人々がこれらの地方の人々との交流を盛んに行っていたことを裏付けています。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所は、大子町南田気において、交通の円滑化をはかるため国道118号袋田バイパス道路改築事業を進めている。

平成16年4月19日、茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長（現茨城県常陸大宮土木事務所大子工務所長）は茨城県教育委員会教育長あてに、国道118号袋田バイパス道路改築事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成16年6月4日に、現地踏査を行い、平成16年11月1・2・4・5日、平成16年12月2・3日に試掘調査を実施した。平成16年12月22日、茨城県教育委員会教育長は茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長あてに、事業地内に橋元遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成17年1月19日、茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3（現94条）に基づき、土木工事のため埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成17年1月25日、茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長あてに工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年3月2日、茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、国道118号袋田バイパス道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成17年3月8日、茨城県教育委員会教育長は茨城県大宮土木事務所大子土木事務所長あてに、橋元遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県常陸大宮土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年12月1日から平成18年3月31日、平成22年7月1日から9月30日までの2次にわたって発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

橋元遺跡の調査は、第1次調査として平成17年12月1日から平成18年3月31日まで、第2次調査として平成22年7月1日から平成22年9月30までの計7か月間にわたって実施した。以下、その概要を記載する。

平成17年度調査

工程	月	12月	1月	2月	3月
調査実施履歴		■			
査定調査			■	■	
遺物洗浄記録			■	■	■
結果調査				■	■

平成22年度調査

工程	月	7月	8月	9月
調査実施履歴		■		
査定調査			■	
遺物洗浄記録				■
結果調査				■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

橋元遺跡は、茨城県大子町大字南田気字橋元367番地の1ほかに所在している。

大子町は、北は福島県、西は栃木県に接する茨城県北西端の町である。地形的には、町の中央には北から南へ久慈川が流れ、その東側には生瀬盆地と久慈山地の断崖地形があり、西側には南北にのびる八溝山地などがある。久慈川の流域地形は、北部から八溝川、押川、瀧川の合流によってつくり出された氾濫原や河岸段丘が広く発達し、大子盆地を造っている。盆地南端の袋田から川下間に穿入蛇行区域にかけても河岸段丘が発達し、川下以南はほぼ直線的な峡谷地形となる。

久慈川の河岸段丘は、沖積世時代（200万年前～1万年前）に堆積した洪積堆積物と、沖積世時代（1万年前～現在）に堆積した沖積世堆積物からなり、両堆積物はどちらも砂礫と粘土などから構成されている。大きく区分すると上位段丘、中位段丘、下位段丘の三段に分けることができる。上位段丘は、下流から、西金橋本、^{さいきょうほん}南田気の中腹などが該当し、断片的に分布する丘陵地形である。中位段丘は、下流から、^{さとう}所谷、南田気、北田気などの平坦面に分布している。下位段丘は、久慈川の河床からの比高が小さく、久慈川流路に最も接近して分布している平坦面であり、上位、中位の段丘に比べて関東ローム層の厚さが非常に薄いのが特徴になっている。

当遺跡は、久慈川右岸の下位段丘の平坦地に位置している。流路に隣接し、河床からの比高は8mほどで、標高は約93mである。調査前の現況は畑地と水田である。

第2節 歴史的環境

大子町域は久慈川とその支流の広がりにより水利に恵まれていることから、古代より人々が生活を営む場となってきた。大子町域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しているが、特に縄文時代と奈良・平安時代の遺跡が多く確認されている。ここでは、当遺跡周辺の遺跡を中心に概観していく。

旧石器時代の遺跡は、確認されていないが、昭和58年に仲山古墳群の調査の際に、この古墳を造るために削った関東ローム層上部から頁岩の剥片が出土しているので、旧石器時代にここに人が生活していたことがわかる¹⁾。

縄文時代の遺跡は、約80か所ある²⁾。押川流域に多く分布しているが、早～前期の遺跡は少なく、中～後期の遺跡が多くなっている。時期ごとに遺跡分布を見てみると、早～前期の遺跡は久慈川本流に沿った丘陵上に見られる傾向があり、中～後期の遺跡は久慈川支流の押川流域に多く見られる。早期の遺跡は、本遺跡の北西に位置する内久根遺跡（8）、茅山式の土器片が出土している堂平遺跡などである。前期の遺跡は、当遺跡より約1km程の久慈川下流、当遺跡と同じく久慈川右岸の下位段丘上に位置している番城内遺跡³⁾（5）から、黒浜式の土器片が出土している。また塩の平遺跡からも、関山式・黒浜式の土器片が出土している。中期の遺跡は、大木8a式、加曾利E I式の土器片が出土している塙平C遺跡⁴⁾や、阿玉台式、加曾利E I式・E II式の土器片と打製石斧が出土している西境田遺跡、また經營形の硬玉製大珠が出土している日の上遺跡などがある。後期の遺跡は、土偶の右脚部、石棒、石皿、磨石や堀之内式・加曾利B式の土器片などが出土して

いる後谷津遺跡や、石鎚、石皿、石錘、蛇形装飾付土器の破片が出土している⁵⁾川西遺跡などがある。

大子地方に弥生文化が伝播するのは、弥生時代中期後半の紀元100年頃である。当遺跡周辺の弥生時代の遺跡は、番城内遺跡、小屋原遺跡（14）などがある。また、奥久慈窓いの森の入り口辺りから、弥生時代後期の壺形土器が単独出土している⁶⁾。

古墳時代の茨城県域は、多河（高）国、久慈（久自）国、那賀（仲）国、茨城国、新治国、筑波國の6つの国に分かれ、各々に国造が置かれていた⁷⁾。大子地方がこの6国の中の久慈国に含まれていたのか、現在の福島県域にあたる白河国に含まれていたのかは不明である⁸⁾。古墳時代初期の五領式土器の大子地方への伝播は、茨城県域の他の地域よりも遅れており、5世紀前半に位置づけられる五領式土器が下野宮遺跡から出土している⁹⁾。当遺跡周辺の古墳時代の遺跡としては中道遺跡（9）などがある。

奈良・平安時代の大子地方は、930年に編纂された『倭名類聚抄』に記載されている「陸奥國白河郡依上」に属していたと考えられている¹⁰⁾。また平安時代から中世にかけての大子地方は「依上」¹¹⁾と呼ばれ、「郷」のちに「保」として陸奥國白河郡から高野郡下に属していた。

当遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡として、久慈川下流に位置する番城内遺跡がある。9世紀後半～11世紀前半にかけての堅穴住居跡13軒、土坑2基が確認されている。その他、当遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡には、中津原遺跡（3）、大塩遺跡（4）、岩木遺跡（6）、内久根遺跡、前坪南遺跡（11）、前坪北遺跡（12）、後坪遺跡（13）、小屋原遺跡、馬場南遺跡（15）、馬場中遺跡（16）、馬場北遺跡（17）、塙平C遺跡、上ノ内南遺跡（18）などがある。

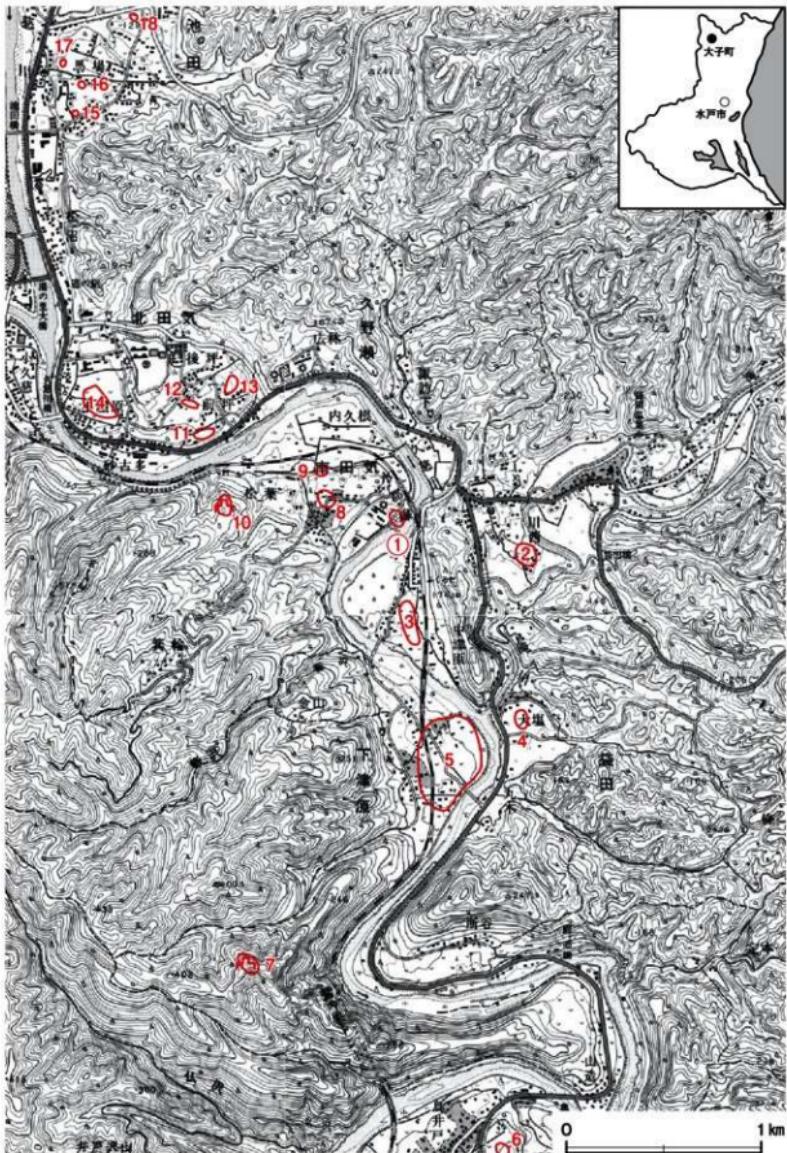
中世は、白河結城氏や岩城氏、芦名氏、伊達氏、佐竹氏の勢力の狭間で攻防が繰り返されたため、多くの城館跡が残っている。その多くは、山頂を切り崩した山城や、舌状台地に堀を設けるなど、山や川の自然条件を生かしたものである。当遺跡周辺の中世の遺跡としては、下津原要害跡（7）、天神山城跡（10）が挙げられる。中世から近世の遺跡としては、礎石3個や根石および据え穴30か所を検出する礎石建物跡が確認された宝泉寺跡¹²⁾がある。

16世紀になると佐竹氏の勢力が伸張して、白河結城氏をおさえ、依上保も佐竹氏の支配下におかれた。佐竹氏は、豊臣政権を背景として依上保内で金の採掘に力を入れ、常陸と陸奥南部に勢力を拡張した佐竹義宣は、文禄4年（1595）の当地方の太閤検地の結果、秀吉から54万5800石の所領を安堵された。依上保は太閤検地以後、陸奥國高野郡から常陸國久慈郡に編入されたとみられ¹³⁾、400年近い歳月を経た現在もなお、大子町一円が保内郷の呼称で親しまれている。

* 文中の〈 〉の番号は、第1図及び表1中の該当遺跡番号と同じである。

註

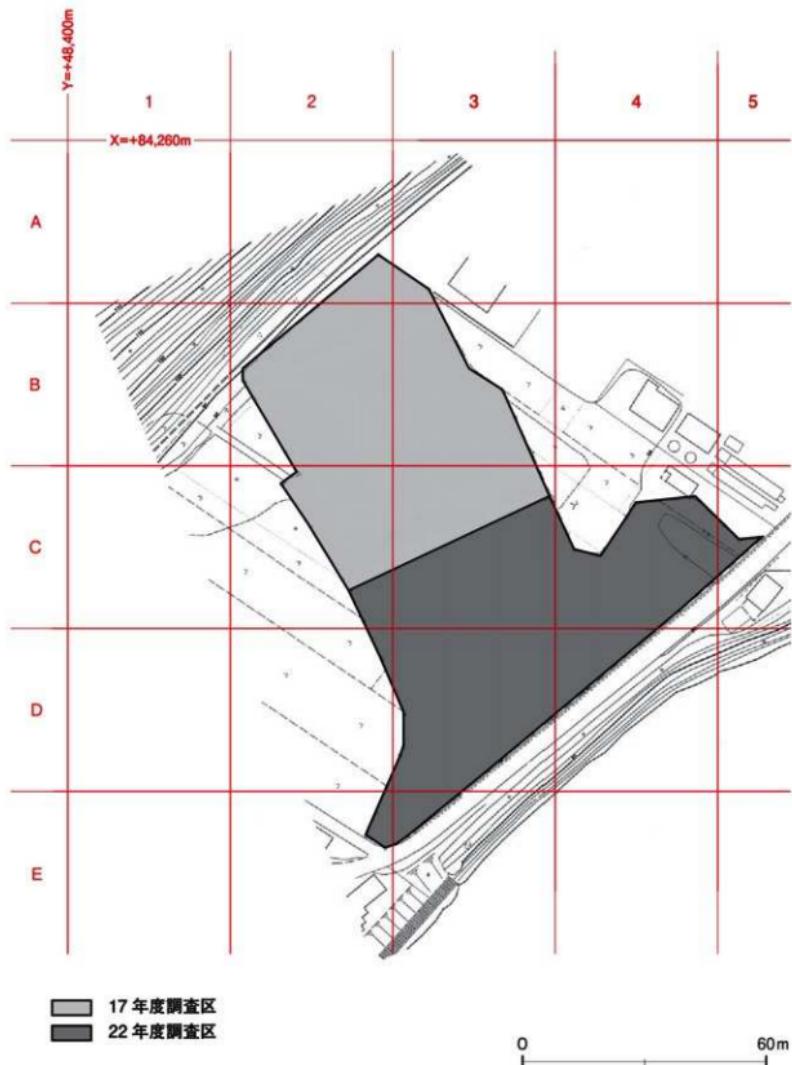
- 1) 大子町史編さん委員会『大子町史』通史編 上巻 大子町 1988年3月
- 2) 茨城県教育文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2009年3月
- 3) 柴田博行「一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 番城内遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第126集 1997年6月
- 4) 千種重樹『常陸大子 塙平C遺跡』大子町教育委員会 1995年9月
- 5) 註1文献に同じ
- 6) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 県北編』茨城新聞社 2002年5月
- 7) 大子町史編さん委員会『大子町史 写真集』大子町 1980年12月
- 8) 註3文献に同じ
- 9) 註3文献に同じ
- 10) 註3文献に同じ
- 11) 註4文献に同じ
- 12) 澄谷義彦『那珂・久慈・多賀の歴史』郷土出版社 2004年11月
- 13) 山武考古学研究所『宝泉寺跡』大子町教育委員会 1992年3月



第1図 橋元遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の1 「大子」「袋田」「大中宿」「常陸大沢」）

表1 橋元遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	中世
①	橋元遺跡	○		○	○	○		10	天神山城跡					○	
2	岡平遺跡	○						11	前坪南遺跡	○			○		
3	中津原平遺跡				○			12	前坪北遺跡				○		
4	大塙遺跡	○			○			13	後坪遺跡	○			○		
5	番城内遺跡	○	○	○	○			14	小屋原遺跡	○	○		○		
6	岩木遺跡	○			○			15	馬場南遺跡				○		
7	下津原要害跡					○		16	馬場中遺跡	○			○		
8	内久根遺跡	○			○			17	馬場北遺跡				○		
9	中道遺跡			○				18	上ノ内南遺跡	○			○		



第2図 橋元遺跡調査区設定図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

橋元遺跡は、大子町中央部を流れる久慈川右岸の標高93～95mの河岸段丘上に立地している。

平成17年度調査で、当遺跡は縄文時代及び平安時代の遺跡であることが確認されている。今回の調査区は、前回調査区の北東部に隣接しており、中世の遺構も確認された。

これまでの調査で確認した遺構は、竪穴住居跡38軒（縄文時代1、平安時代37）、鍛冶工房跡1軒（平安時代）、掘立柱建物跡2棟（平安時代、中世）、方形竪穴遺構8基（平安時代2・中世6）、土坑207基（縄文時代2、平安時代107、中世3、時期不明95）、焼土遺構3基（時期不明）、柱列跡1列（時期不明）、ピット群1か所（時期不明）である。

遺物は遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に60箱出土している。主な遺物は縄文土器（深鉢）、土師器（坏・高台付坏・高台付碗・甕）、須恵器（甕）、土製品（管状土錐・羽口）、鉄製品（小刀・刀子・鎌）、石器（砾器・石鏃・打製石斧・石皿・磨石・敲石）などが出土している。

第2節 基本層序

調査区西部の平坦面（C 2a4区）にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った。土層観察結果は以下の通りである。

第1層は、暗褐色を呈する現地表の表土である。細礫を主体とし、ローム粒子を微量に含んでいる。粘性は普通であるが、締まりは極めて強い。層厚は29～32cmである。

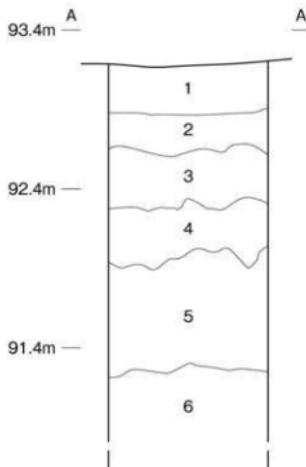
第2層は、暗褐色を呈する粘土層である。炭化粒子・白色スコリア粒子を微量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は20～28cmである。

第3層は、褐色を呈する粘土層である。白色スコリア粒子を微量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は27～37cmである。

第4層は、灰黄褐色を呈する粘土層である。炭化粒子・白色スコリア粒子を微量含んでいる。粘性・締まりとも強い。層厚は24～44cmである。

第5層は、灰黄褐色を呈する粘土層である。粘性は極めて強く、締まりも強い。層厚は64～78cmである。

第6層は、暗褐色を呈する粘土層である。粘性は極めて強く、締まりも強い。層厚は下層が未掘のため不明である。遺構は第2層上層で確認した。



第3図 橋元遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第45号住居跡 (第4・5図)

位置 調査区南部のD 32区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径4.00m、短径3.78mの円形である。壁高は6~8cmで、外傾して立ち上がっている。

炉 ほぼ中央部に付設された地床炉である。形状は長径118cm、短径72cmの楕円形である。確認面から6cmくぼんでおり、赤変は弱く硬化している。

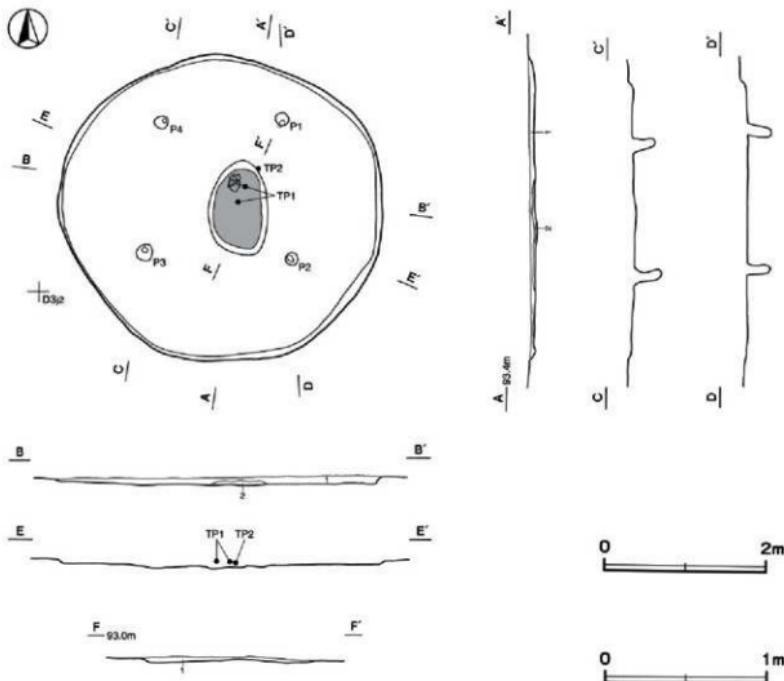
炉土層解説

1 にふい黄褐色 煙土ブロック・炭化物少量

床 ほぼ平坦である。

ピット 4か所。P 1~P 4は深さ26~32cmで、配置から主柱穴である。

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。



第4図 第45号住居跡実測図

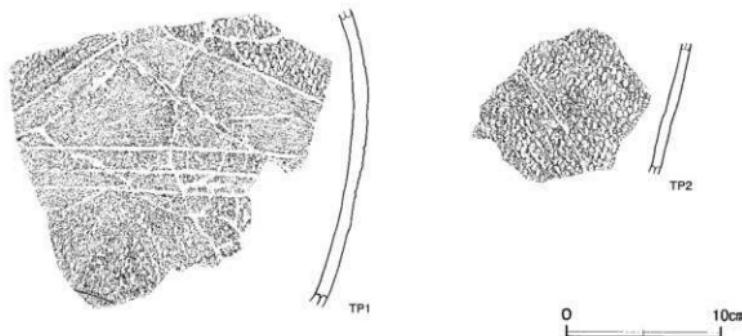
土層解説

1 明 色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗 色 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量

遺物出土状況 繩文土器片 2 点(深鉢)が出土している。TP 1・TP 2 とも炉内の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉に比定できる。



第5図 第45号住居跡出土遺物実測図

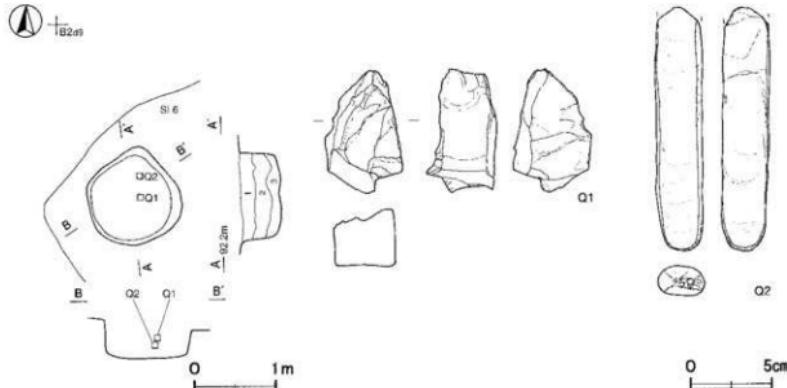
第45号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP 1	縄文土器	深鉢	長石・雲母	明褐色	3 本沈線 縄文 RL 光燒	伊賀土上層 加曾利 BII PL.25	
TP 2	縄文土器	深鉢	長石・雲母	に赤い赤褐色	縄文 RL	伊賀土上層 加曾利 BII PL.25	

(2) 土坑

第106号土坑(第6図)

位置 調査区北西部のB 2 d9 区、標高 92 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。



第6図 第106号土坑・出土遺物実測図

重複関係 第6号住居に掘り込まれている。

規模と形状 径1.21mの円形である。深さは42cm、底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 烧土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
2 黄褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

3 暗褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 覆土中層から、Q1とQ2が出土している。

所見 時期は、決定の根拠となる遺物が出土していないが、重複関係や出土遺物から縄文時代と推測できる。

第106号土坑出土遺物観察表（第6図）

番号	形 横	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q1	石棺	76	48	43	161.6	トロトロ石(ガラス質黒色ダイヤモンド)	多方向からの剥離面	覆土中層	PL31
Q2	縞石巖 巖石	(149)	29	18	(134.4)	頁岩	縞模1箇所 片面に研磨痕	覆土中層	PL32

第116号土坑（第7図）

位置 調査区北東部のC45区。標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.34m、短径1.28mの円形で、深さは28cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がりっている。

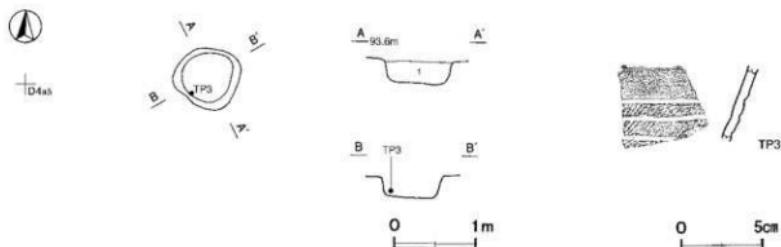
覆土 単一層である。粘土ブロックが多量に含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化物中量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片1点（深鉢）が出土している。TP3は南東部壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉に比定できる。



第7図 第116号土坑・出土遺物実測図

第116号土坑出土遺物観察表（第7図）

番号	種 别	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐	横帯文にLRの半周波文充填	覆土下層	加曾利Ⅳ PL25

表2 繩文時代 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
106	B 2.09	-	円形	121 × 120	42	外傾	平坦	人為	石器	本路→SI 6
116	C 4.05	N - 62° - E	円形	134 × 128	28	外傾	平坦	人為	繩文土器	

2 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡 38 軒、竪穴住居兼鍛冶工房跡 1 軒、掘立柱建物跡 1 棟、方形竪穴遺構 2 基、土坑 107 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第8・9図)

位置 調査区北西部の B 214 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 26 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が調査区域外へ延びていて、北西・南東軸は 4.00 m で、北東・南西軸は 3.30 m しか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推測でき、主軸方向は N - 46° - E である。壁高は 20 ~ 32 cm で、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。床面で多量の炭化材や焼土を確認した。

竪 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 100 cm で、燃焼部幅は 64 cm である。袖部は地山の粘土を掘り残し構築されている。火床部は床面から 11 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変化している。煙道部は壁外に 30 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竪土層解説

1	暗褐色	色	粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	5	灰褐色	燒土ブロック中量、炭化物少量
2	暗褐色	色	焼土ブロック中量、炭化物少量	6	にぶい赤褐色	燒土粒子多量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
3	黒褐色	色	焼土ブロック多量、粘土ブロック微量	7	褐色	燒土粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量
4	暗褐色	色	焼土ブロック・炭化材中量			

樋状施設 北東壁の窓右側に地山の粘土を掘り込んで構築されている。幅 70 cm、奥行 25 cm である。

ピット P 1 は深さ 4 cm で、性格不明である。

ピット土層解説

1	黒褐色	色	焼土ブロック・炭化粒子微量
---	-----	---	---------------

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径 68 cm、短径 50 cm の梢円形である。壁外へ奥行き 26 cm ほど袋状に掘り込まれている。

貯蔵穴土層解説

1	黒褐色	色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	3	黒褐色	焼土ブロック・炭化物微量
2	暗褐色	色	粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・白色 粒子微量	4	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量

覆土 7 層に分層できる。各層に粘土ブロックなどが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

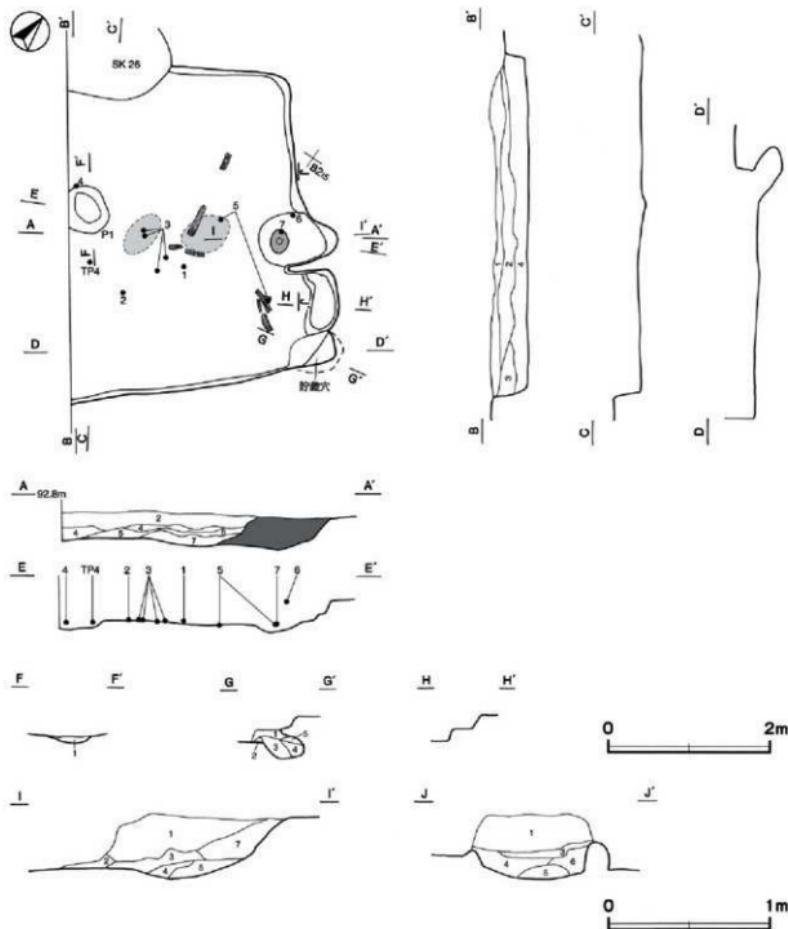
1	黒褐色	色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	5	暗褐色	粘土ブロック・炭化物・焼土粒子中量
2	黒褐色	色	粘土ブロック・炭化物少量	6	暗褐色	粘土ブロック微量、焼土ブロック・炭化物微量
3	黒褐色	色	炭化物・焼土粒子中量、粘土ブロック微量	7	黒褐色	粘土ブロック微量、炭化物微量
4	黒褐色	色	焼土粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量			

遺物出土状況 土師器片 121 点(坏 31、壺類 90)、須恵器片 1 点(壺)、鉄製品 1 点(刀子)が出土している。

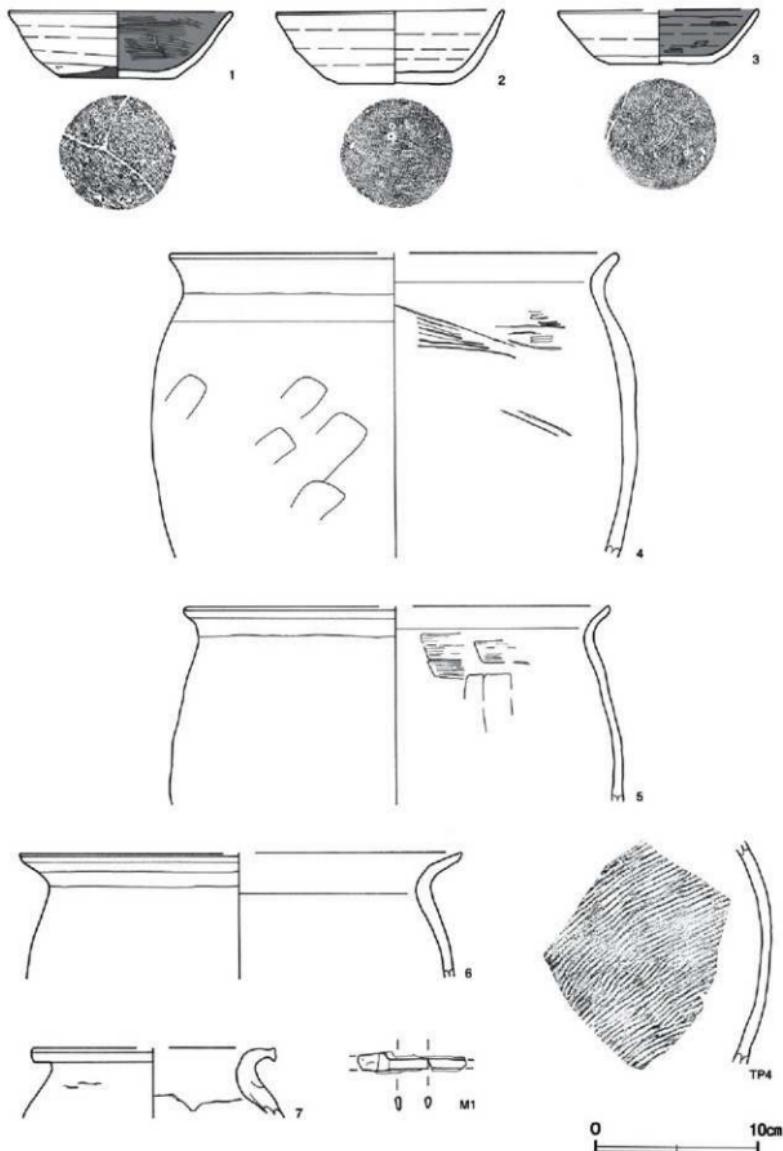
また、混入した石器(石鎌)も出土している。1・2・4・T P 4 は中央部の覆土下層からそれぞれ出土し

ている。3は中央部、5は竈前の覆土下層からそれぞれ出土した破片が接合したものである。7は竈の覆土下層から、6は竈の袖部上層からそれぞれ出土したものである。M1は覆土中から出土している。また覆土中からは、重さ325～5280gの砂岩や閃綠岩、花崗岩など16点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 床面に多量の炭化材や焼土が検出されたことから焼失家屋と考えられる。出土した炭化材については、樹種同定によってクリであることが判明した（付章参照）。時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第8図 第1号住居跡実測図



第9図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
1	土師器	壺	136	42	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	体部内面へラ磨き 体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	100% PL25
2	土師器	壺	140	45	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部多方向のナデ	覆土下層	95% PL25
3	土師器	壺	[122]	34	6.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	体部内面摩減へラ磨きを残す 体部下端回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL25
4	土師器	甕	[25] (18.8)	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外側ヘラ削り 体部内側ナラナデ	覆土下層	20%
5	土師器	甕	[26] (12.1)	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外側摩減方向のハケ 日測定と撫方向の沈縮 体部内側ヘラナデ	覆土下層	10% PL28
6	土師器	甕	[27] (7.7)	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外・内面ナデ	轍縁部上層	10%
7	土師器	甕	[14.8] (4.3)	-	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い素面	普通	口縁部外・内面機ナデ 輪縁み痕	覆土下層	10%

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備考
TP 4	須恵器	甕	長石・石英	灰黄褐色	体部外側斜位の平行叩き 内面ナデ	覆土下層	PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備考
M1	刀子	(6.8)	1.4	02~04 (7.2)	-	鉄 骨構に片区	-	覆土中	PL34

第3号住居跡（第10～12図）

位置 調査区中央部のC 312区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第34・52・53号土坑を掘り込み、第40号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.94m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-50°-Eである。壁高は6～8cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで140cmで、燃焼部幅は52cmである。袖部は地山の粘土を掘り残して基部とし、両袖の内側には土師器焼片を補強材として構築されている。また、焚口部には羽口が立位で半分埋まった状態で遺存し、さらにその上に土製の支脚が重ねられていた。火床部は床面とは同じ高さで使用しており、火床面は火を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に72cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

1	灰 黄褐色	燒土粒子・粘土粒子少量	6	黑 黄褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量、炭化物微量
2	暗 黄褐色	燒土粒子・粘土粒子少量	7	暗 黄褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
3	黒 黄褐色	燒土粒子多量、粘土ブロック少量、炭化物微量	8	に赤い青褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
4	灰 黄褐色	燒土ブロック・炭化物微量	9	赤 黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
5	暗 黄褐色	燒土ブロック多量、粘土ブロック・炭化物微量			

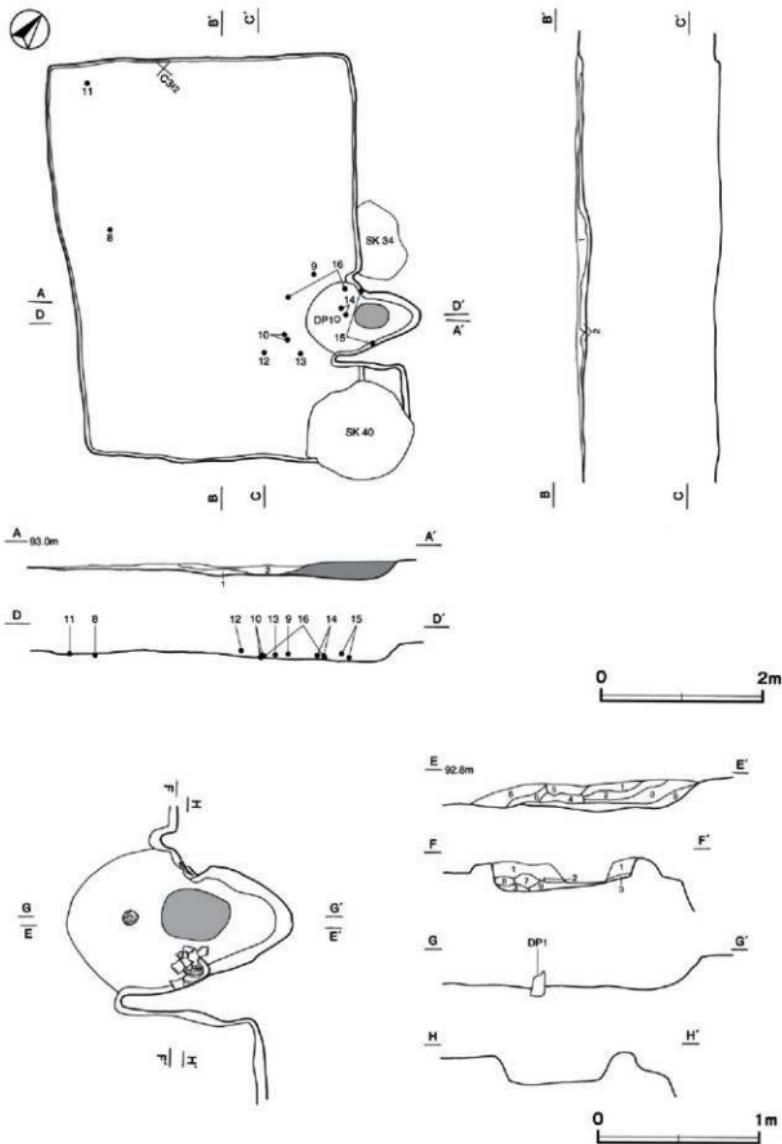
構造施設 北東壁の竈右側に地山の粘土を掘り込んで構築されている。第40号土坑に掘り込まれている為、幅は48cmしか確認できなかったが、奥行きは50cmである。

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

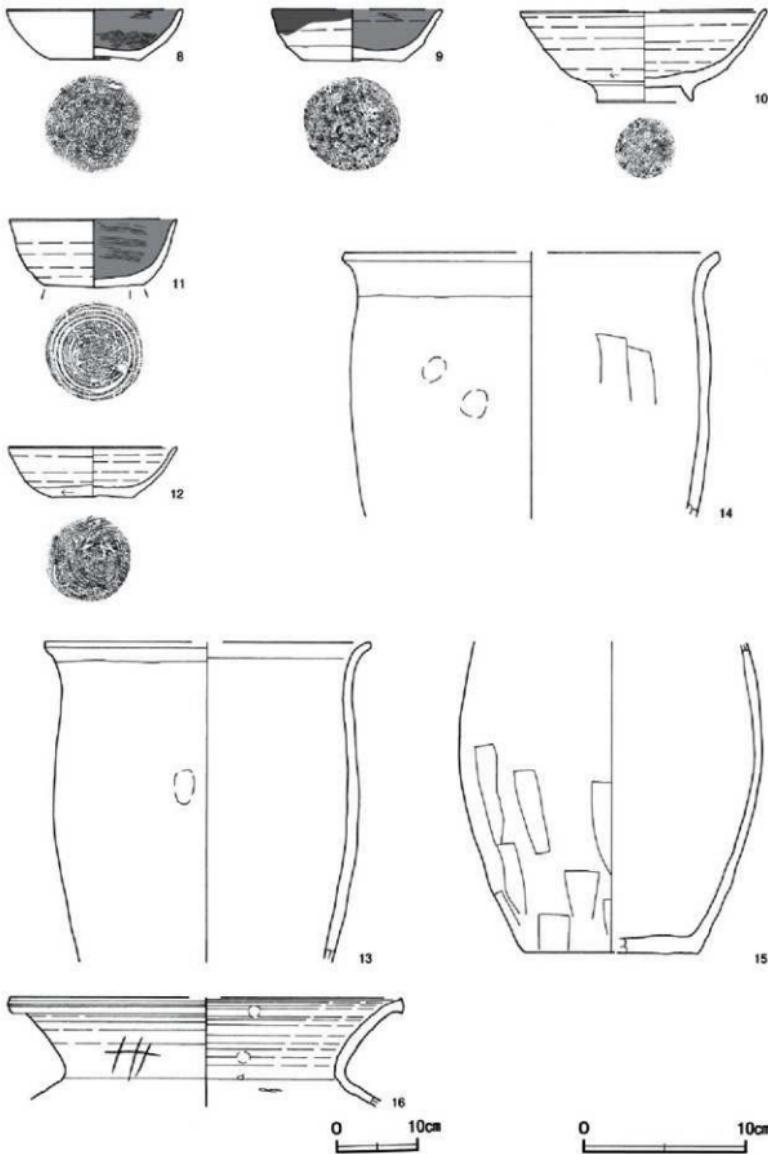
土層解説

1	灰 黄褐色	粘土ブロック多量、燒土ブロック・炭化物微量	2	黒 黄褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
---	-------	-----------------------	---	-------	----------------------

遺物出土状況 土師器片97点（壺4、高台付椀6、甕類87）、土製品2点（支脚）が出土している。また、混入した石器（石錐）も出土している。8は南西部、11は西部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。9・10・12・13は竈前、14は竈内の覆土下層から、15は竈の両袖部内側からそれぞれ出土している。16は竈前の床面と左袖部付近の下層から出土した破片が接合したものである。DP 1は竈の焚き口部から立位の状態で



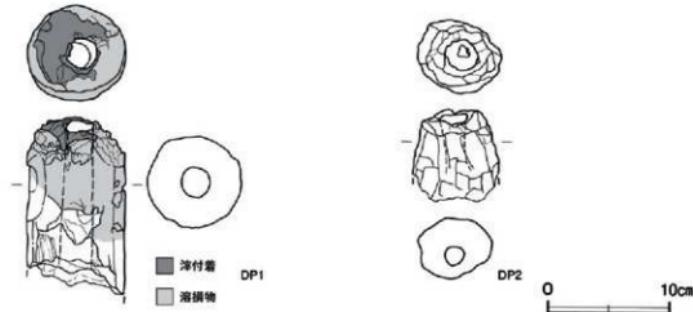
第10図 第3号住居跡実測図



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図(1)

出土しており、DP 2 は窓覆土中から出土した。また覆土中からは、重さ 225 ~ 8,550 g の砂岩や花崗岩、ディサイトなど 15 点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。また、出土した羽口は、本跡から東に 16 m 離れた第 1 号住居兼鍛冶工房跡から持ち込まれたと推測でき、本跡との関連が窺える。



第 12 図 第 3 号住居跡出土遺物実測図（2）

第 3 号住居跡出土遺物観察表（第 11・12 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
8	土器器	耳	10.7	3.1	5.6	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	体部内面ハラ磨き 底部削軸ハラ削り	覆土下層	90% PL25
9	土器器	耳	[10.4]	3.2	6.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	体部内面磨減ハラ磨きを残す 底部削軸ハラ削り	覆土下層	70% PL25
10	土器器	高台付脚	[15.2]	5.7	6.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	体部外・内面クロナダ	覆土下層	50% PL26
11	土器器	高台付脚	10.2	(4.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部内面磨減ハラ磨きを残す 底部削軸系切り 埋土の沈澱	覆土下層	80% PL27
12	土器器	小皿	10.8	3.2	5.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	底部削軸系切り後ナダ	覆土下層	50% PL28
13	土器器	甕	[20.0]	(19.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナダ 指削痕	覆土下層	20%
14	土器器	甕	[23.0]	(16.4)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナダ 体部内面ハラナダ 指削痕	窓覆土下層	20%
15	土器器	甕	-	(19.2)	[10.6]	長石・石英・赤色粒子・小粒	明黄褐色	普通	体部外・内面ハラナダ 体部外ハラ削り	窓部	30%
16	埴輪器	大甕	[48.0]	(13.5)	-	長石・石英・雲母	墨リード灰	普通	口縁部外・内ロクロナダ 指削痕 窓部「川」のハラ磨	窓部付近下層	10% PL29

番号	器 形	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 1	支脚	(14.9)	8.0	7.7	(780.0)	長石・石英・赤色粒子	羽口軸用 先端部溶損 頭部に津が付着	窓焚き口部	PL20

番号	器 形	最小径	最大径	高さ	重 量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 2	支脚	(4.6)	(6.9)	(7.7)	(24.9)	長石・石英・赤色粒子	体部外面削り痕 穴孔	覆土中	PL30

第 4 号住居跡（第 13・14 図）

位置 調査区西部の C 2 g0 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.24 m、短軸 3.92 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 53° - E である。壁高は 8 ~ 12 cm で、傾斜している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 90 cm で、燃焼部幅は 52 cm である。袖部は地山の粘土を掘り残し構築されている。火床部は床面から 2 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬

化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

1 喀 開 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	4 暗赤褐色 焼土粒子微量
2 底 黄褐色 焼土ブロック・炭化物少量・粘土ブロック微量	5 暗赤褐色 焼土粒子少量・炭化粒子微量
3 ぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子微量	6 雰 開 色 焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 2か所。深さはP 1が4cmで、P 2が10cmである。いずれも性格不明である。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

1 黒 開 色 粘土ブロック・炭化物少量・焼土ブロック微量	2 黑 開 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
-------------------------------	------------------------------

覆土 5層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

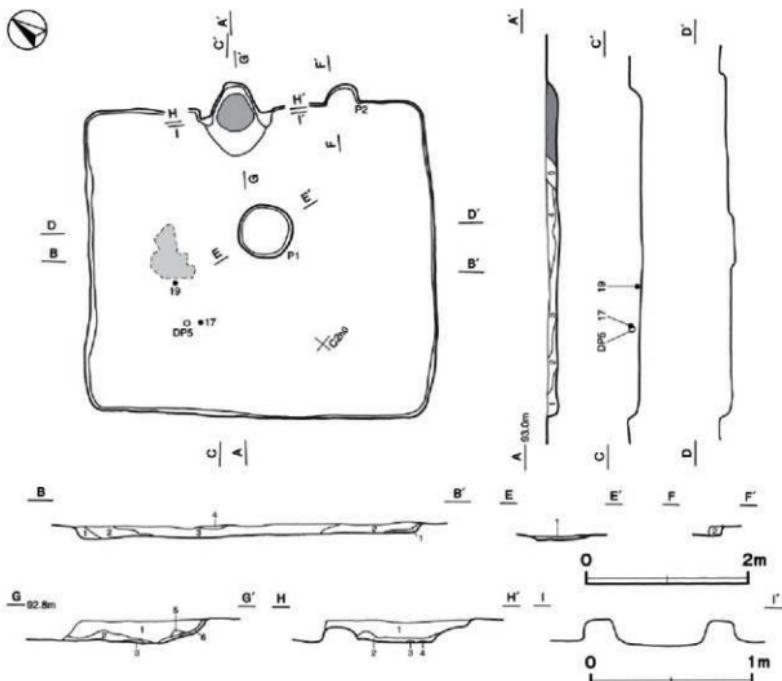
1 黒 開 色 粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化粒子・白色粒子微量	3 暗 開 色 焼土粒子・粘土粒子少量・白色粒子微量
2 暗 開 色 焼土ブロック・粘土ブロック少量・炭化粒子・白色粒子微量	4 暗 開 色 粘土粒子少量・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量
	5 黑 開 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片110点(环38、瓶1、甕類71)、土製品3点(管状土錐)が出土している。

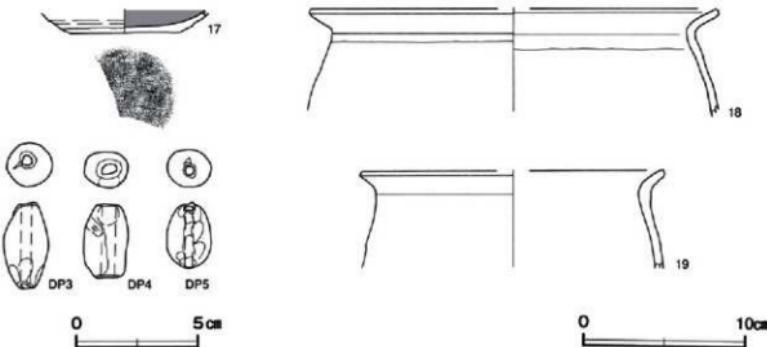
17・19・DP 5は中央部の覆土下層から出土している。DP 3は窓の覆土中、18・DP 4は覆土中から出土している。

また覆土中からは、重さ150~977gの砂岩が5点出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第13図 第4号住居跡実測図



第14図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
17	土師器	杯	~	(1.4)	6.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部下端回転ヘラ削り 内面摩減ヘラ磨きを残す		覆土下層	15%
18	土師器	甕	[25.0]	(6.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ		覆土中	5%
19	土師器	甕	[18.6]	(6.0)	-	長石・石英・細纖維	にぶい黃褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ		覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP 4	管状土錐	35	17	0.4	7.15	長石・石英・雲母	一方向から穿孔 孔端部ナデ	覆土中	PL30
DP 4	管状土錐	30	17	0.6	9.40	長石・石英	一方向から穿孔 孔端部ナデ	覆土中	PL30
DP 5	管状土錐	27	18	0.4	6.20	長石・石英・黒色 粒子	一方向から穿孔 孔端部ナデ	覆土下層	PL30

第5号住居跡（第15・16図）

位置 調査区西部のC 2c9区、標高93 mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第82号土坑跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.70 m、短軸3.40 mの隅丸方形で、主軸方向はN - 60° - Eである。壁高は16 ~ 22 cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで192 cmで、燃焼部幅は68 cmである。袖部は地山の粘土を掘り残し構築されている。左袖部の内側には板状の砂岩が、また火床面の奥からは、砂岩や花崗岩が出土しており、竈材として使用されていたと推測できる。火床部は床面から12 cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に128 cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒	色	粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	6 にぶい褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量
2 黒	色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	7 極暗赤褐色	焼土ブロック中量
3 褐	色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	8 黒 褐	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
4 にぶい黄褐色	色	粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量	9 褐 褐	焼土粒子多量、粘土ブロック・炭化物微量
5 にぶい黄褐色	色	焼土粒子・炭化粒子微量	10 黒 褐	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

ピット 深さ14 cmで中央部に位置しているが、性格不明である。

ピット土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量。焼土ブロック微量 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴 東壁中央部に位置している。長径108cm、短径64cmの楕円形で、深さ10cmである。床面は皿状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
2 にふい青褐色 粘土粒子多量。焼土ブロック微量

3 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
4 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量

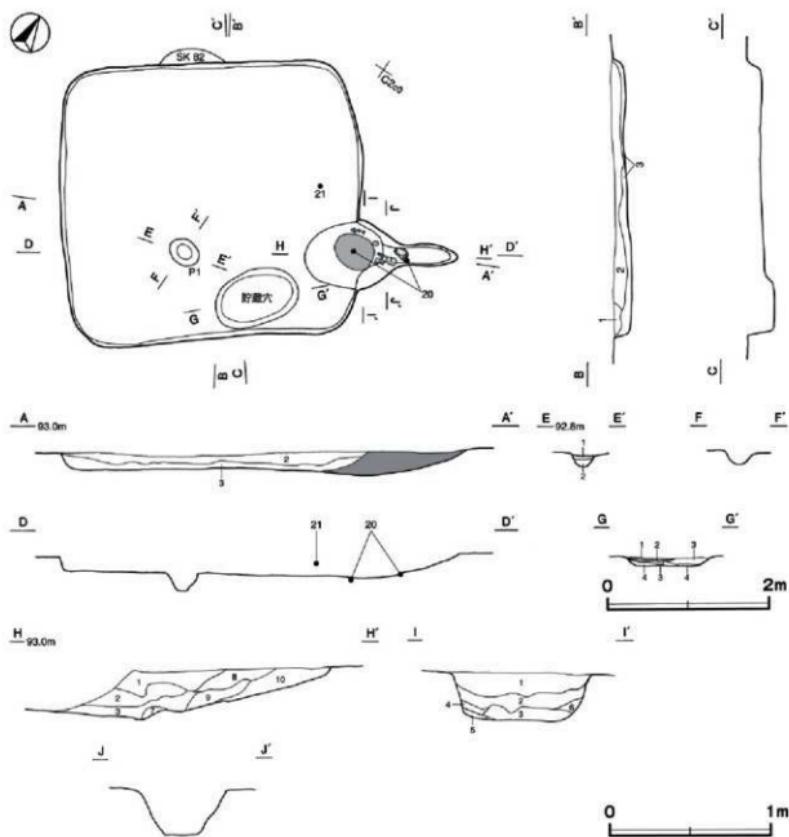
覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
2 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量

3 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片75点（壺・高台付壺25、甌類50）、須恵器片1点（甌）が出土している。また、混入した石器（スクレイバー）も出土している。21は北東壁寄りの覆土中層から出土している。20は竈の火床



第15図 第5号住居跡実測図

面と煙道部底面から出土した破片が接合したものである。また覆土中からは、重さ 141 ~ 1,590 g の砂岩、ディサイト、花崗岩など 27 点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 16 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図

第 5 号住居跡出土遺物観察表（第 16 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
20	土器器	高台付耳	—	(1.9)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	部体下端へ削り後、高台貼り付け	煙道底部	55%
21	瓦窓器	大甕	(48.0)	(9.8)	—	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面ロクロナデ	覆土中層	5%

第 6 号住居跡（第 17・18 図）

位置 調査区北西部の B 2 d9 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 105・106・107 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.98 m、短軸 3.88 m の方形で、主軸方向は N - 57° - E である。壁高は 46 ~ 50 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 116 cm で、煙道部幅は 44 cm である。袖部は、左袖部に砂岩を、右袖部に閃綠岩を芯材として、第 4 層を積み上げて構築されている。火床部は床面から 4 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 78 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。第 1 層は、袖部及び天井部の崩落土である。また、竈袖部の両脇には棚状施設が設けられている。

竈土層解説

1	暗 褐 色	焼土ブロック・粘土ブロック少量・炭化物微量	5	黒 褐 色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
2	黒 褐 色	粘土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物粒子少量	6	暗 赤 褐 色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量
3	暗 赤 褐 色	焼土粒子多量、炭化粒子微量	7	黒 褐 色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
4	黒 褐 色	焼土ブロック中量、炭化物微量			

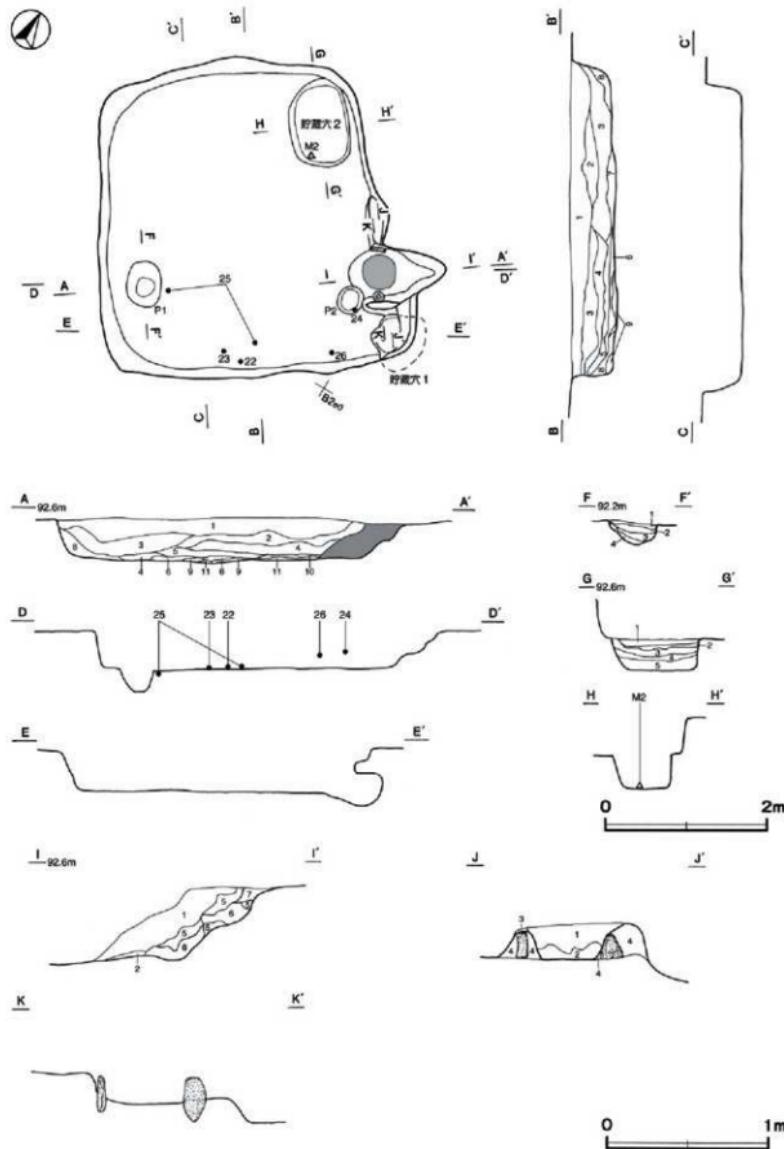
棚状施設 北東壁の竈両脇に地山の粘土を掘り込んで構築されている。左側の棚は幅 50 cm、奥行き 18 cm で、右側の棚は幅 47 cm、奥行き 15 cm である。

ピット 2 か所。P 1 は深さ 26 cm で、南東壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2 は深さ 28 cm で性格不明である。

ピット 1 土層解説

1	黒 褐 色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	3	黒 褐 色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
2	黒 褐 色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物粒子微量	4	黒 褐 色	焼土ブロック・炭化物微量

貯蔵穴 2 か所。貯蔵穴 1 は、東コーナー部に位置している。長軸 72 cm、短軸 68 cm の不定形で、深さは 70 cm である。壁外に奥行き 26 cm ほど袋状に掘りこまれている。貯蔵穴 2 は北部に位置し、長径 108 cm、短径 72 cm の楕円形を呈しており、深さは 42 cm である。底面は平坦で壁は直立している。



第17図 第6号住居跡実測図

貯蔵穴2 土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|--------------------------|---|------|-----------------------|
| 1 | 灰 黄褐色 | 炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | 4 | 暗褐 色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 | 黒 色 | 炭化粒子多量、粘土粒子少量 | 5 | 黒褐 色 | 粘土ブロック小量、炭化物微量 |
| 3 | 褐 色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量 | | | |

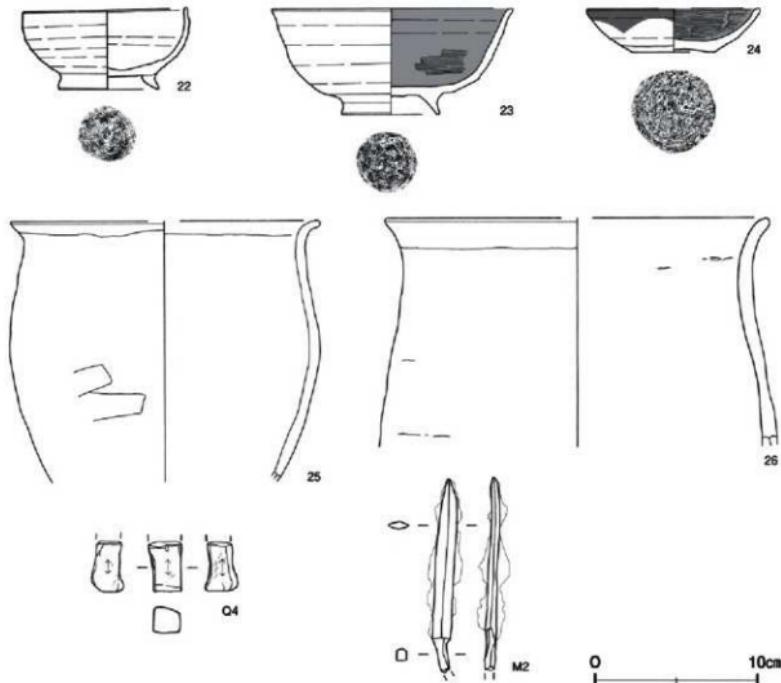
覆土 11層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|--------------------------|----|--------|------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量 | 6 | にぶい黄褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐 色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物、白色粒子微量 | 7 | 暗褐 色 | 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 | 暗褐 色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 8 | 黒褐 色 | 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 4 | 黒褐 色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量 | 9 | にぶい青褐色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 黒褐 色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量 | 10 | 黒褐 色 | 炭化粒子中量、焼土粒子少量、粘土ブロック微量 |
| | | | 11 | 褐 色 | 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土器器片 495点（坏52、椀11、高台付椀11、壺類421）、須恵器片1点（壺）のほか、鉄製品1点（鉈）が窓周辺から南東部にかけての覆土下層を中心に出土している。22・23は南東部壁際の床面から出土している。M2は貯蔵穴2の底部から出土している。25は南部の床面と南東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。24は壺前、26は東部の覆土中層からそれぞれ出土している。Q4は覆土中から出土している。また覆土中からは、重さ100～6,090gの砂岩、花崗岩、黒雲母片岩など15点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。



第18図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地底	手法の特徴ほか	出土位置	備考
22	土師器	高台付楕	9.9	5.0	6.1	長石・石英・雲母・赤色鉄粒子	橙	普通 十字	体部外・内面クロナデ 底部回転ヘラ切り後	床面	100% PL27
23	土師器	高台付楕	15.0	6.5	6.0	長石・石英・赤色鉄粒子	橙	普通	体部外側丁寧なヘラ磨き	床面	60% PL27
24	土師器	小皿	[10.4]	2.7	5.0	長石・石英・雲母・赤色鉄粒子	[にい]青緑	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ 内面ヘラ磨き	覆土中層	70% PL28
25	土師器	甕	[19.0]	(16.1)	-	長石・石英・雲母・赤色鉄粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ヘラ削り	床面 覆土下層	50% PL29
26	土師器	甕	[23.6]	(14.1)	-	長石・石英・赤色鉄粒子	[にい]青緑	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	瓶	(12.0)	1.2	0.6	(71.2)	鉄	刃部は両刃 底部新面方形	野藏穴2底部	PL34

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	砥石	(3.1)	2.1	2.0	(19.5)	凝灰岩	砥面3面	覆土中	PL32

第7号住居跡（第19・20図）

位置 調査区北西部のB 3j1区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第14号住居跡を掘り込み、第90号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.54 m、短軸 3.74 m の長方形で、主軸方向は N - 65° - E である。壁高は 8 ~ 12 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 208 cm で、燃焼部幅は 68 cm である。袖部は、地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から 6 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 160 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	8	黒褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
3	暗赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・粘土粒子微量	9	[にい]青褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4	黒褐色	焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	10	[にい]青褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
5	黒褐色	焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量	11	黒褐色	炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量

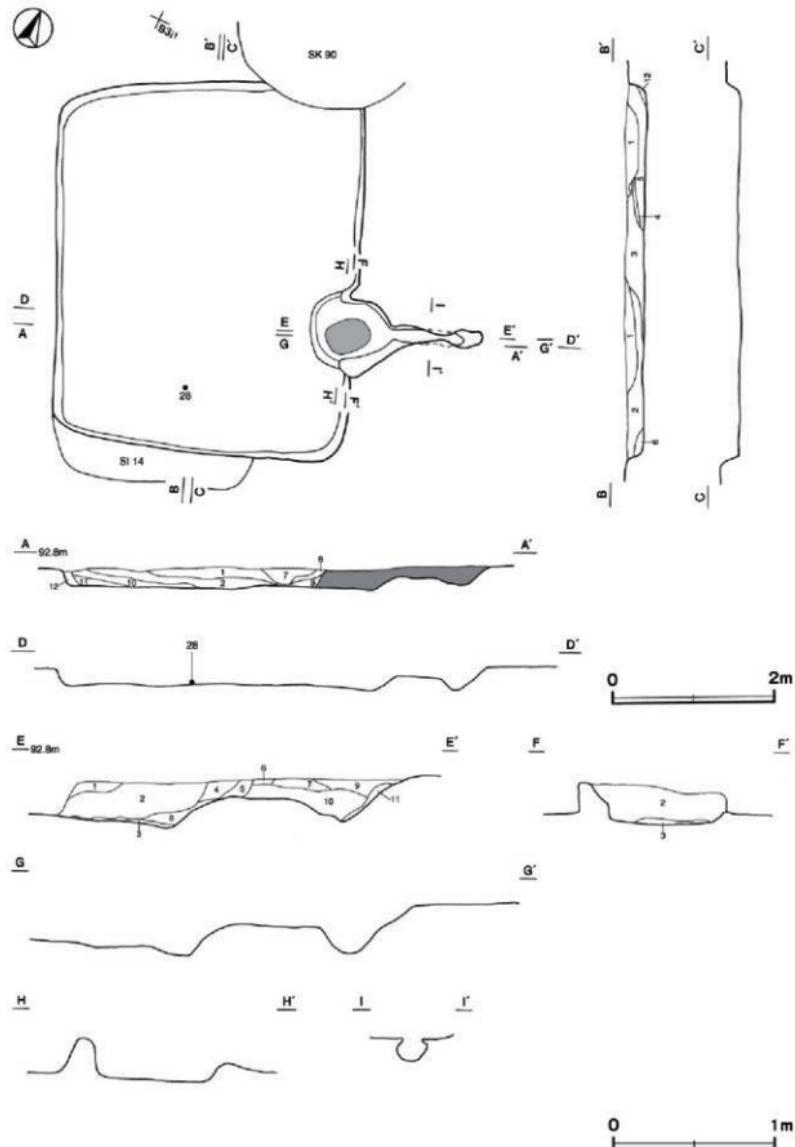
覆土 12 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	[にい]青褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量
2	暗褐色	炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	8	暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
3	[にい]青褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量	9	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	10	黒褐色	炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
5	暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	粘土粒子中量、炭化粒子微量
6	黒褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量	12	黒褐色	炭化粒子少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片 79 点（坏 9、高台付楕 3、甕類 67）、須恵器片 2 点（甕類）が出土している。28 は南部の覆土下層、27 は南部の覆土中からそれぞれ出土している。また覆土中からは、重さ 118 ~ 4,080 g の砂岩、花崗岩、ディサイトなど 18 点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。



第19図 第7号住居跡実測図



第20図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
27	土壺器	壺	~	(22)	5.8	長石・石英・藍母・赤色粒子	暗	普通	体部内面摩滅黒色処理を残す 底部削軸斜切り	覆土中	20%
28	土壺器	甕	[24.8]	(6.5)	~	長石・石英・赤色粒子・繊維	明黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%

第8号住居跡（第21・22図）

位置 調査区中央部のC 3 d3 区、標高 93m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 3.52 m、短軸 2.86 m の長方形で、主軸方向は N - 55° - E である。壁高は 4 ~ 6 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 2か所。竈 1 は、北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 150cm で、燃焼部幅は 64cm である。袖部は、右袖部のみ遺存しており、地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から 10cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 94cm 剥り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。竈 2 は、南西壁の南よりに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 158cm で、燃焼部幅は 90cm である。火床部は床面から 8cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 94cm 剥り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。両竈とも土層からは壁を形成した痕跡がみられず、住居の廃絶時に埋め戻されていることから、両竈は同時期に併存していたと考えられる。また、当遺跡にて竈が併存した類例として、本跡から北東方向へ 16 m 先に位置する第 11 号住居跡からも、竈が 2 か所確認され、両竈が同時期に併存していたと考えられる。

竈 1 土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|----------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 燒土粒子・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 | 炭化粒子多量、燒土ブロック少量、粘土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物少量、燒土粒子少量 | 6 黒褐色 | 燒土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | 燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 7 にぶい青褐色 | 燒土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | 炭化物少量、粘土ブロック・燒土粒子微量 | | |

竈 2 土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | 燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 | 4 黒褐色 | 燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物中量、燒土ブロック・粘土ブロック少量 | 5 暗褐色 | 燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | 炭化物・燒土粒子微量 | 6 暗褐色 | 粘土ブロック少量、炭化物微量 |

ピット 2か所。深さは P 1 が 9 cm、P 2 が 14 cm で、いずれも性格不明である。

ピット 土層解説 (P1・P2共通)

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化物中量、粘土ブロック少量、燒土ブロック微量 | 2 暗褐色 | 粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量 |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径 50cm、短径 42cm の楕円形で、深さは 10cm である。底面は皿状で、

壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

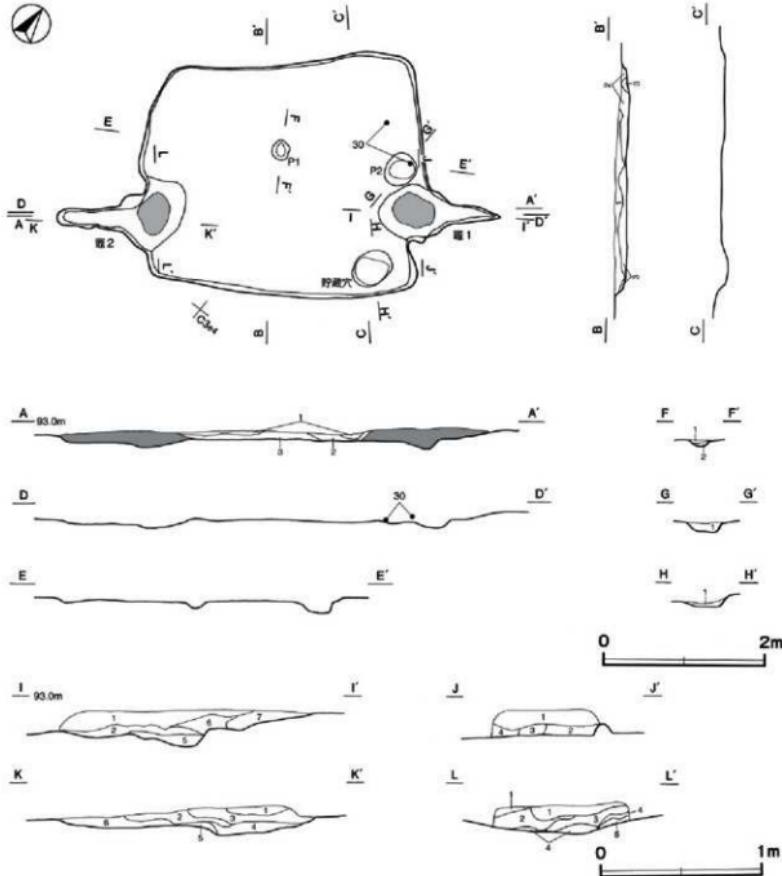
1 暗褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量

2 黒褐色 炭化粒子中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量

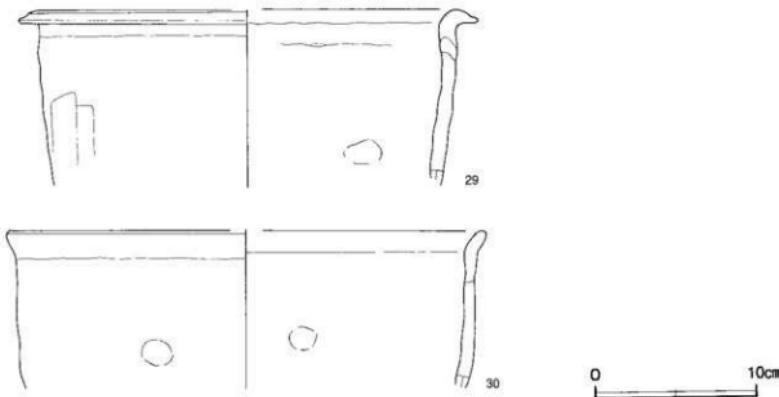
3 暗褐色 炭化物少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量

遺物出土状況 土師器片 62点(坏1, 壺類61), 須恵器片 1点(甕)が出土している。30は北東壁付近の覆土中層から出土した破片が接合したものである。29は覆土中から出土している。また覆土中からは、重さ 117 ~ 1,024 g の砂岩, 花崗岩, 泥岩など14点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉に比定できる。



第21図 第8号住居跡実測図



第22図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
29	土器器	甕	[25.4]	(10.8)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・雜	褐	普通	口縁部外・内面模様子 底部外面へウケ取り。指 壓痕	覆土中	10%
30	土器器	甕	[29.1]	(9.8)	-	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面模様子 指圧痕	覆土中層	10%	

第9号住居跡（第23・24図）

位置 調査区北部のB37区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第10号住居に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外へ延びており、北西部は第10号住居に掘り込まれているため、北東・南西軸は1.78m、北西・南東軸は0.82mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推測でき、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は32~38cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

貯蔵穴 南西コーナー部に位置している。長径78cm、短径66cmの楕円形で、深さは38cmである。底面は鍋底状で壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック中量、炭化物、燒土粒子微量	3 黒褐色	粘土ブロック・炭化物少量、燒土ブロック微量
2 黒褐色	炭化材・燒土粒子微量	4 黒褐色	粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化物微量

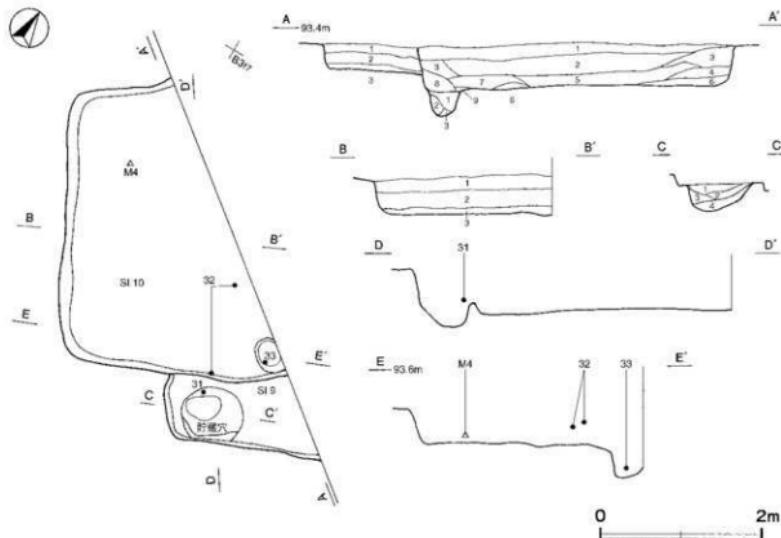
覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

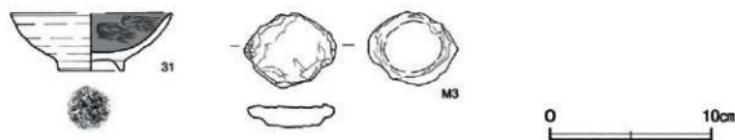
1 黒褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	3 黒褐色	粘土ブロック・炭化物少量、燒土ブロック微量
2 黒褐色	粘土ブロック中量、炭化物、燒土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片70点（壺・高台付椀9、甕類61）、須恵器片1点（甕）、鐵製品1点（鍋）が出土している。31は南コーナー部の覆土上層から出土している。M3は覆土中から出土している。また覆土中からは、重さ147~2,600gの砂岩、泥岩など13点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、10世紀中葉に比定できる。



第23図 第9・10号住居跡実測図



第24図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
M1	土師器	高台付瓶	[98]	34	40	瓦石・石英・重母 赤色粒子・繩	青い背景	普通	体部内面ハラ焼き	覆土上層	30%
<hr/>											
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M3	鍛造品	(46)	(56)	(1.1)	(64.3)	鉄	外周部全面破面 表面放射割れ(鋳造品)		覆土中	PL33	

第10号住居跡（第23・25図）

位置 調査区北部のB37区。標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第9号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 北東部が調査区域外へ延びており、南北軸は3.56m、東西軸は2.56mしか確認できなかった。

平面形は方形または長方形と推定され、主軸方向はN-30°-Wである。壁高は32~40cmで、外傾して立ち上がりっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

ピット 深さ48cmであるが、性格不明である。

ピット土層解説

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物少量 | 3 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 | |

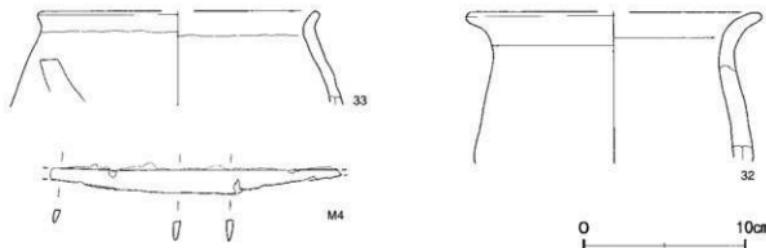
覆土 9層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|---------------------------------|------------------------------|
| 1 にぶい黄褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 黒褐色 粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量 | 7 暗褐色 粘土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 8 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 4 黒褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量 | 9 にぶい黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | |

遺物出土状況 土器器片37点(坏6、甕類31)、鉄製品1点(刀子)が出土している。33は東部のP1の覆土下層から出土している。32は南部と西部の覆土中層から出土した破片が接合したものである。M4は中央部の床面から出土している。また覆土中からは、重さ183～15,600gの砂岩、閃緑岩、花崗岩など6点が出土地してあるが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀後葉に比定できる。



第25図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表(第25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
32	土器器	甕	[17.7]	(9.2)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面微ナデ	覆土中層	5%
33	土器器	甕	[17.0]	(5.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面微ナデ 体部外側ヘラ削り	P1 覆土下層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M4	刀子	(18.0)	(1.3)	02-03	(16.4)	鉄	先切と茎部の先端欠損 刃部直線状	床面	PL34

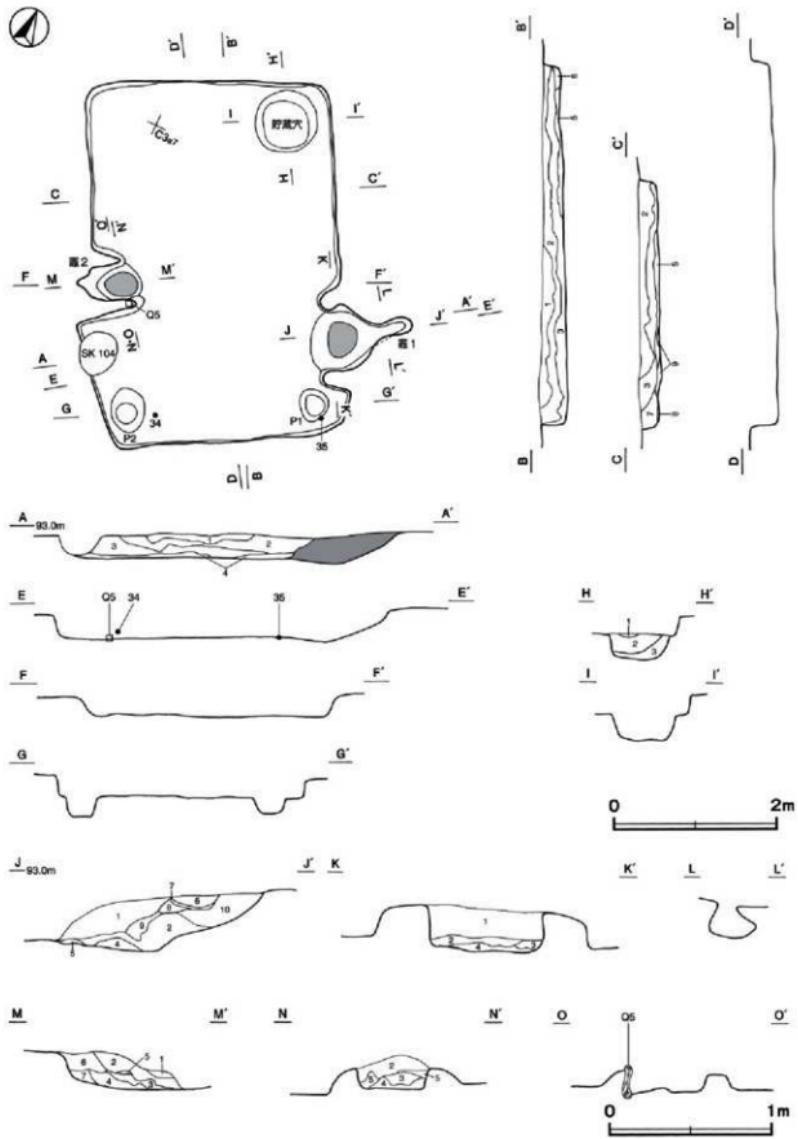
第11号住居跡(第26・27図)

位置 調査区中央部のC3a7区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第104号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.44m、短軸3.02mの長方形で、主軸方向はN-60°-Eである。壁高は20～30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。



第26図 第11号住居跡実測図

竈 2か所。竈1は、東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで126cmで、燃焼部幅は70cmである。袖部は、地山の粘土を掘り残して構築されている。火床面の東部から横位の状態で出土した板状の砂岩は被熱しており、本來は竈の補強材であったと推測できる。火床部は床面から10cmほどくぼんでおり、火床面から煙道部にかけて火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に82cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。竈2は、西壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで80cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は、地山の粘土を掘り残して構築されており、左袖部の内側には繩文時代の石皿とみられるQ5を補強材として転用している。火床部は床面から6cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に10cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。両竈は袖部が残存していることから、廃絶時まで併存していたものと考えられる。

竈1土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック・燒土粒子少量。炭化物微量	6 にい赤褐色	燒土粒子多量。炭化粒子微量
2 オリーブ褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量。炭化物微量	7 明赤褐色	燒土粒子多量
3 オリーブ褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	8 灰褐色	燒土ブロック中量。粘土ブロック・炭化粒子微量
4 暗赤褐色	燒土ブロック中量。粘土ブロック・炭化粒子微量	9 灰灰褐色	粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
5 暗赤褐色	炭化物多量。燒土ブロック少量	10 黒褐色	燒土粒子少量。粘土ブロック・炭化物微量

竈2土層解説

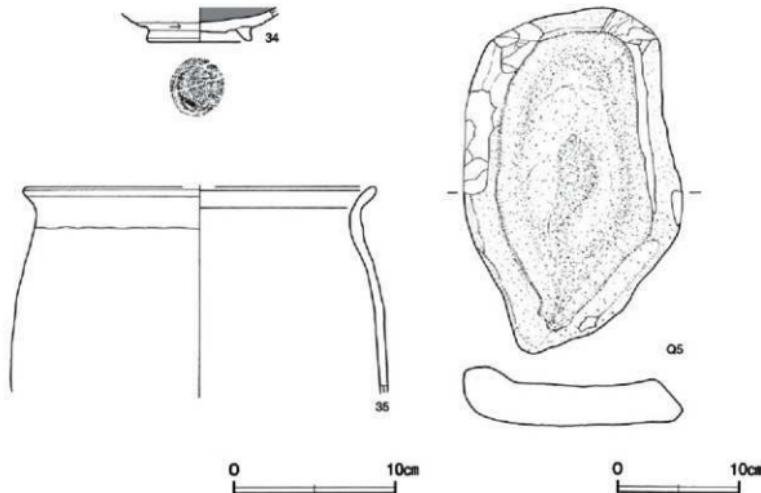
1 灰褐色	粘土ブロック・炭化物・燒土粒子微量	5 暗赤褐色	燒土ブロック中量。粘土ブロック微量
2 灰褐色	粘土ブロック少量。燒土ブロック・炭化物微量	6 暗灰褐色	燒土ブロック少量。粘土ブロック・炭化物微量
3 灰褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	7 黑褐色	燒土ブロック・炭化粒子少量。粘土ブロック微量
4 灰褐色	燒土ブロック中量。粘土ブロック・炭化物微量		

ピット 2か所。深さはP1が18cm、P2が22cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。

貯蔵穴 北コーナー部に位置している。径76cmの円形で、深さは34cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	3 黒褐色	粘土ブロック・炭化物・燒土粒子微量
2 暗褐色	粘土粒子中量。炭化物・燒土粒子微量		



第27図 第11号住居跡出土遺物実測図

覆土 9層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 細 色 炭化物・焼土粒子・粘土粒子微量	6 暗 細 色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 細 色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗 細 色 粘土ブロック少量・炭化粒子微量
3 暗 細 色 粘土ブロック少量・炭化物・焼土粒子微量	8 暗 細 色 粘土ブロック中量・焼土粒子微量
4 暗 細 色 粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗 細 色 粘土ブロック・炭化粒子微量
5 暗 細 色 粘土ブロック少量	

遺物出土状況 土師器片 91点（坏10、高台付椀2、壺類79）が、北東部の覆土中層から下層にかけて出土している。35は南東コーナー部の壁面近くの床面から、34はP2近くの南コーナー部の壁面近くの覆土下層から、Q5は窓2の左袖部の内側からそれぞれ出土している。また覆土中からは、重さ215～6,110gの砂岩、花崗岩、頁岩など9点が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第11号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	断 土	色 調	地成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
34	土師器	高台付椀	—	(21)	64	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	に赤い斑模	普通	体部内面へラ磨き	覆土下層	30%
35	土師器	壺	[21.2]	(127)	—	長石・石英・雲母・ 赤色粒子・難	黄褐色	普通	口縁部外・内面磨ナデ	床面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q5	石頭	287	178	47	3,250	砂岩	圓状の使用面	窓2左袖部	PL3I

第12号住居跡（第28・29図）

位置 調査区中央部のC3b5区。標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第95号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.88m、短軸2.20mの長方形である。主軸方向はN-35°Wである。壁高は8～10cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。床面に多量の炭化材や焼土を確認した。

竈 北西壁の西寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで90cmで、燃焼部幅は34cmである。袖部は、遺存していない。火床部は床面から4cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。火床面の北部には、長さ22.6cmの角柱状の砂岩が据えられおり、赤変していることから支脚として使用されたものと考えられる。煙道部は壁外に56cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒 細 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	7 暗 細 色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
2 黒 細 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	8 に赤い斑模 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
3 黒 細 色 焼土ブロック中量・炭化物少量	9 黒 細 色 粘土ブロック・炭化物少量・焼土粒子微量
4 黒 細 色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子少量	10 暗 細 色 粘土ブロック少量・焼土ブロック微量
5 黒 細 色 焼土ブロック・炭化物中量	11 暗 細 色 粘土ブロック少量
6 暗 細 色 粘土ブロック・炭化粒子少量・炭化物微量	

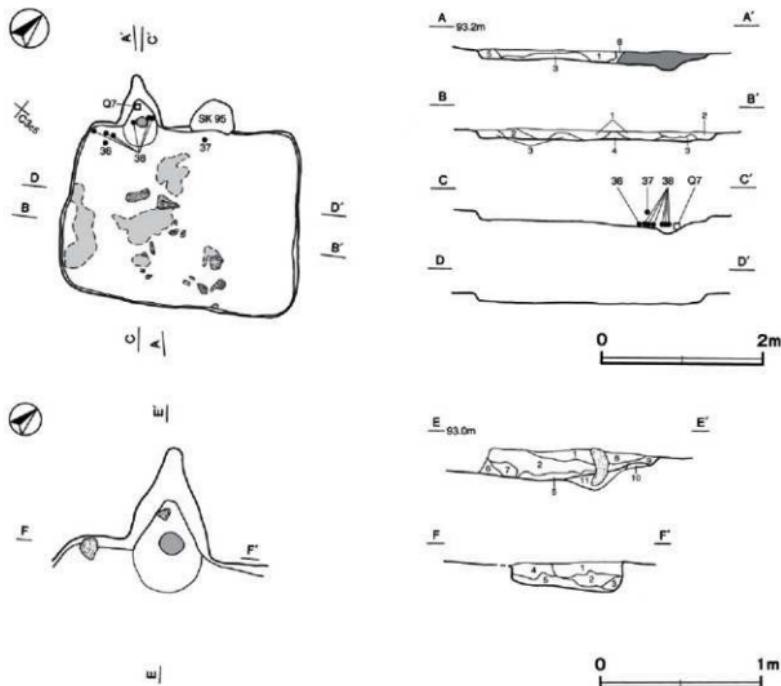
覆土 6層に分層できる。多くの層に粘土ブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗 細 色 粘土ブロック中量・焼土ブロック・炭化粒子少量	4 黒 細 色 焼土ブロック・炭化粒子少量・粘土ブロック微量
2 暗 細 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	5 黒 細 色 焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量
3 黑 細 色 焼土ブロック・炭化粒子中量・粘土ブロック微量	6 暗 細 色 粘土ブロック少量・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 15 点（環 12, 壺類 3）が出土している。36 は北西コーナー部の覆土下層から、38 は北西壁際の覆土下層と窓火床部から出土した破片が接合したものである。37 は北西壁際の覆土上層から出土した。Q 7 は火床面の北部から立位の状態で出土しており、支脚として使用されたものと考えられる。また重さ 1,458 g の砂岩が覆土中から出土しているが、使用痕は無く用途については不明である。

所見 床面に多量の炭化材や焼土が検出されていることから焼失家屋であると考えられる。時期は、出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。

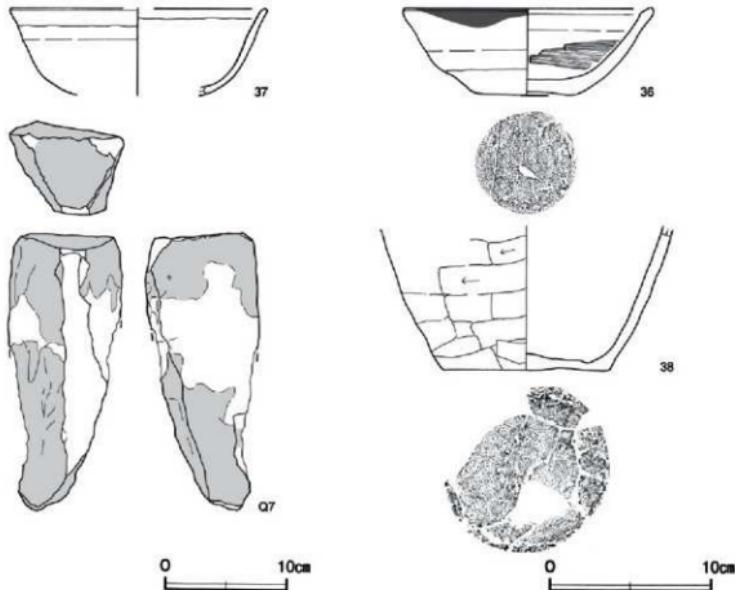


第 28 図 第 12 号住居跡実測図

第 12 号住居跡出土遺物観察表（第 29 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
36	土師器	環	15.4	5.4	6.4	長石・石英・雲母	にぶい・黄褐	普通	体部内底へラ削き 体部外面下位削輪へラ削り	覆土下層	95% PL25
37	土師器	環	[15.8]	(5.4)	-	長石・石英・雲母・半色粒子	褐	普通	ロクロ成形	覆土上層	30%
38	土師器	壺	-	(8.4)	10.4	長石・石英・雲母・小粒	褐	普通	体部下端へラ削り	覆土下層 窓火床下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 7	支脚	(22.6)	(9.3)	7.9	(1.287)	砂岩	被熱痕	窓火床面	PL32



第29図 第12号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡（第30図）

位置 調査区中央部のC3a5区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸318m、短軸256mの長方形で、主軸方向はN-68°-Eである。壁高は3~8cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで94cmで、燃焼部幅は40cmである。袖部は、地山の粘土を掘り残して構築されており、左袖部のみが遺存している。火床部は床面から8cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	粘土粒子中量、燒土ブロック・炭化粒子微量	3	暗褐色	燒土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量
2	黒褐色	炭化物・燒土粒子・粘土粒子微量	4	暗赤褐色	炭化物・燒土粒子中量、燒土ブロック少量

ピット 2か所。深さはP1が16cm、P2が10cmでいずれも性格不明である。

ピット土層解説（P1・P2共通）

1	黒褐色	粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
---	-----	---------------------

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径56cm、短径34cmの楕円形で、深さは10cmである。底面は皿状で、緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

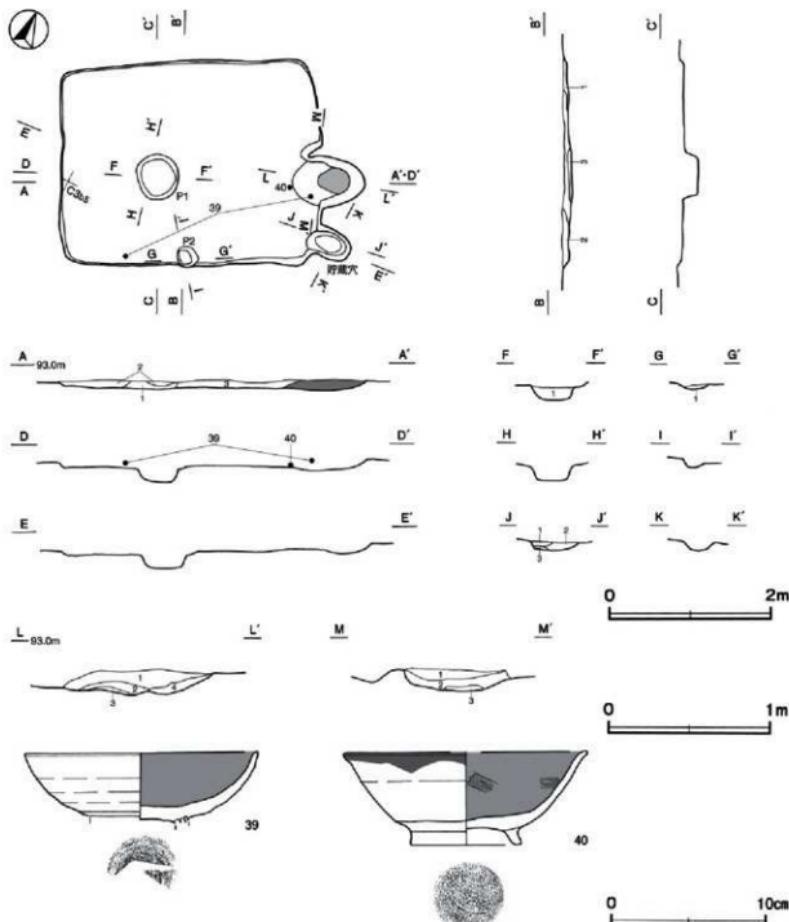
1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
2 に深い黄褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量

覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

遺物出土状況 土器器片 64点（高台付椀 3、壺類 60、瓶 1）が出土している。40は竈の焚口部の床面から出土している。39は南東壁際の覆土下層と竈の覆土中層から出土した破片が接合したものである。また覆土



第30図 第13号住居跡・出土遺物実測図

中からは、重さ 730 g のディサイトと、4,310 g の砂岩が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。

第 13 号住居跡出土遺物観察表（第 30 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
39	土器器	高台付杯	14.2	(4.6)	—	長石・石英・赤色	にぶい橙	普通	体部内面摩滅	西土下層 裏壁付近	40% PL26
40	土器器	高台付杯	14.8	6.3	6.8	長石・石英・赤母	橙	普通	体部内面へき離	東土下層 裏壁付近	40%

第 14 号住居跡（第 31 図）

位置 調査区北西部の B 3 j1 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 7 号住居に掘り込まれている。

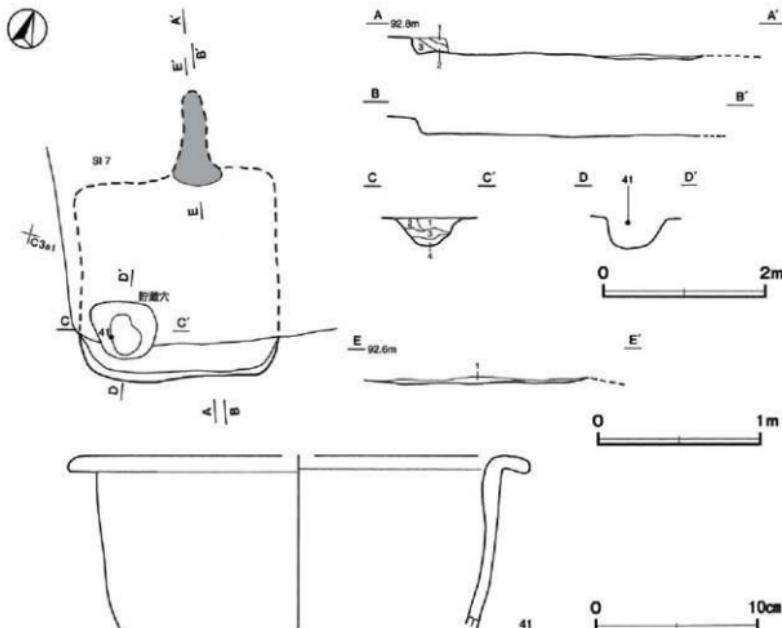
規模と形状 南部を残し大部分が第 7 号住居に掘り込まれており、南北軸 252 m、東西軸 242 m の方形と推定される。主軸方向は N - 24° - W である。壁高は 18 ~ 20 cm で直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。煙道部は赤変しており、長さ 120 cm と推定される。

竈土層解説

1 竈 赤褐色 塗土粒子多量、灰化物微量



第 31 図 第 14 号住居跡・出土遺物実測図

貯藏穴 南西コーナー部に位置している。長径 86cm、短径 70cm の楕円形で、深さは 38cm である。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯藏穴土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック・炭化物微量	3 暗褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	粘土ブロック・炭化物微量、燒土ブロック微量	4 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量

覆土 3 層に分層できる。粘土ブロックなどを含むことから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	炭化粒子・粘土粒子微量、燒土粒子微量	3 黒褐色	炭化粒子微量、粘土ブロック微量
2 黒褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土器片 4 点 (坏 3, 高台付坏 1) が出土している。41 は貯藏穴の覆土中層から出土している。

また覆土中からは、重さ 891 ~ 3780 g の砂岩、ディサイト、花崗岩など 5 点が出土しているが、使用痕は無く用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀中葉に比定できる。

第 14 号住居跡出土遺物観察表（第 31 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
41	土器器	壺	[26.0]	(10.7)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面横ナデ		貯藏穴 覆土中層	5% PL24

第 15 号住居跡（第 32・33 図）

位置 調査区北部の B 34 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 56 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺 3.30 m の隅丸方形で、主軸方向は N - 73° - E である。壁高は 22 ~ 26 cm で、緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部に、炉が設けられている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 126 cm で、燃焼部幅は 58 cm である。左袖部の内側からは長さ 33 cm ほどの板状の砂岩が、右袖部の内側からは長径 22 cm ほどの楕円形の砂岩が出土している。また、火床面からは、長さ 25 cm ほどのブロック状の砂岩が出土しており切石組竈の可能性がある。火床部は床面から 5 cm くぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 110 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	6 暗褐色	粘土粒子中量、燒土ブロック・炭化物微量
2 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	7 黒褐色	燒土ブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック・炭化粒子微量	8 暗赤褐色	燒土粒子多量、粘土ブロック微量
4 黒褐色	燒土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	9 黒褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック微量
5 暗褐色	燒土ブロック微量、粘土粒子・炭化物微量	10 暗黃褐色	粘土ブロック・燒土粒子少量

炉 ほぼ中央部に付設された地床炉である。規模は径 50 cm の円形である。確認面から 6 cm くぼんでおり、赤変は弱く硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色	燒土粒子少量、炭化物・粘土粒子微量	3 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
2 赤褐色	燒土ブロック多量		

貯藏穴 南東壁際の中央部に位置している。長軸 102 cm、短軸 78 cm の隅丸長方形で、深さは 46 cm である。底部は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯藏穴土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック・炭化物・燒土粒子微量	3 暗褐色	粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量
2 黑褐色	粘土ブロック中量、炭化物・燒土粒子微量		

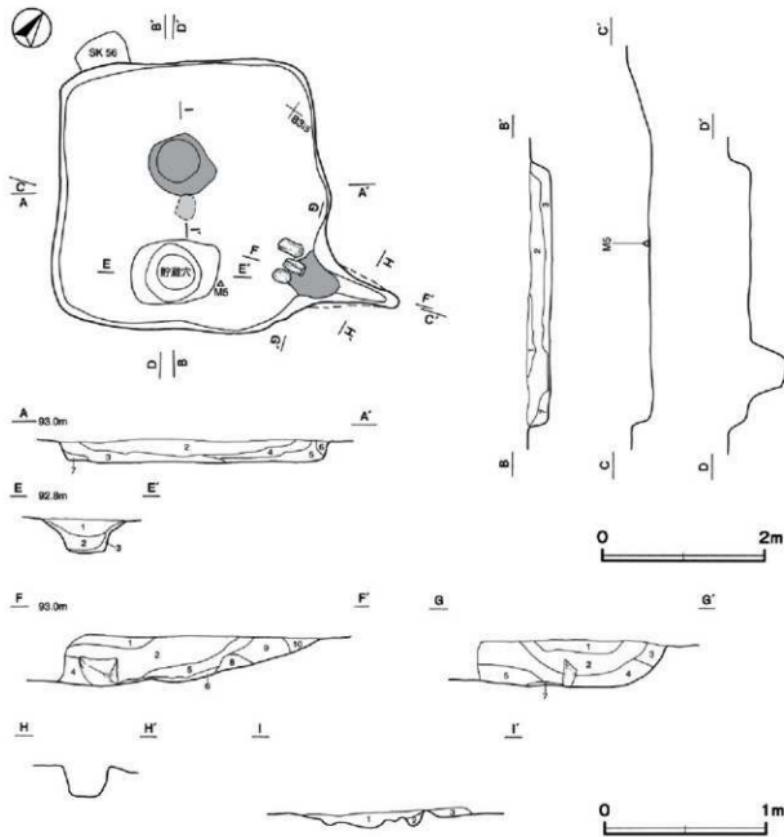
覆土 7層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、焼土・粘土ブロックや、炭化物が含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

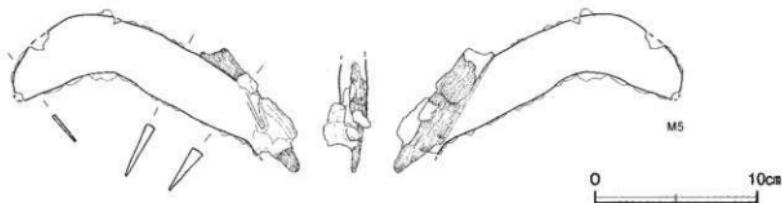
1 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 暗褐色	燒土ブロック・炭化粒子中量・粘土粒子少量
2 暗褐色	燒土ブロック・炭化物・粘土粒子微量	6 黑褐色	粘土ブロック多量・燒土粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック少量・炭化物・燒土粒子微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量・炭化物少量・燒土粒子微量
4 黑褐色	燒土ブロック・粘土粒子・炭化物微量		

遺物出土状況 土器器片 72点 (坏18、高台付椀2、甕類52) が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。M5は、南東部の床面から出土している。また、重さ121～4010gの砂岩、ディサイトなど17点が覆土中から出土しているが、使用痕は無く用途については不明である。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、内面を黒色処理が施された高台付椀の様相から10世紀前葉とみられる。炉を併設することから、工房跡の可能性も考えられる。



第32図 第15号住居跡実測図



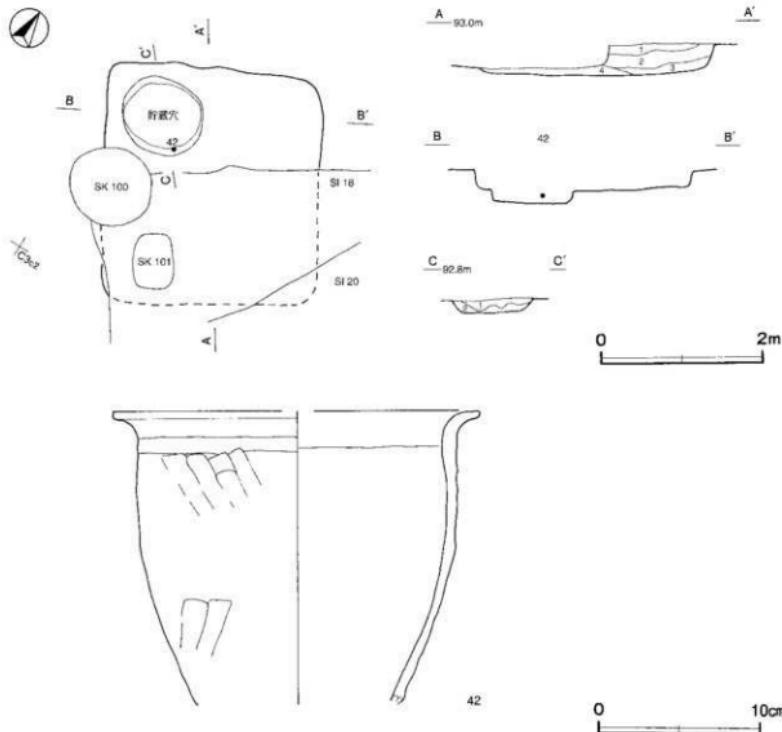
第33図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	木柄竹籠	(17.8)	(9.8)	0.1 - 1.1	(101.6)	鉄	木柄の痕跡を残す ほぼ完形（鉄造品）	床面	PL33

第16号住居跡（第34図）

位置 調査区中央部のC 3b2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。



第34図 第16号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 第18・20号住居、第100・101号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部を第18・20号住居に掘り込まれているため、東西軸は2.69mで、南北軸は1.30mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形であると推測され、主軸方向はN-33°-Wである。壁高は22~26cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

貯蔵穴 北西コーナー部に位置している。長径100cm、短径96cmの楕円形で、深さは40cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 2 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

覆土 4層に分層できる。各層に粘土ブロックを含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 黒褐色 炭化粒子少量、粘土ブロック微量
2 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 4 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片1点(甕)が出土している。42は貯蔵穴の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第16号住居跡出土遺物観察表(第34図)

番号	種別	器種	口径	都高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土器器	甕	[22.4]	(18.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・鐵	褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り	貯蔵穴 覆土上層	10%

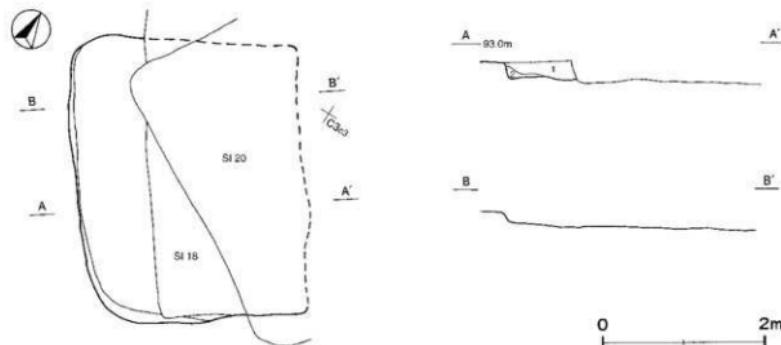
第17号住居跡(第35図)

位置 調査区中央部のC3c2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第18・20号住居に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第18・20号住居に掘り込まれているため、北西・南東軸は3.50mで、北東軸0.90mしか確認できなかった。平面形は、方形または長方形と推測される。主軸方向はN-34°-Wである。壁高は14~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。



第35図 第17号住居跡実測図

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 2 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片4点(壺類4)が出土している。土器片は細片の為、図示できなかった。また覆土中からは、重さ2,466gの砂岩が出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器が細片のため判断は困難であるが、第18号住居に掘り込まれていることや出土土器片から9世紀後葉から10世紀前葉とみられる。

第18号住居跡 (第36・37図)

位置 調査区中央部のC3b2区、標高93mほどの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第16・17号住居跡、第102号土坑跡を掘り込み、第20号住居、第100・101号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は550m、短軸は431mの長方形で、主軸方向はN-59°-Eである。壁高は16~39cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。床面に多量の焼土が遺存していた。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで200cmで、燃焼部幅は84cmである。袖部は、遺存していない。火床部の西寄りには、長さ28.3cmの角柱状の砂岩が立位で据えられおり、赤変している部分があることから支脚として使用されたものと考えられる。火床部は床面から24cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に90cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子微量
2 前ナリーブ紫色 炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	7 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子少量
3 黑褐色 粘土ブロック少量	8 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
4 暗灰黄色 焼土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
5 暗灰黄色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	10 暗褐色 焼土粒子多量、粘土ブロック・炭化粒子微量

ピット 深さ44cmで、性格は不明である。

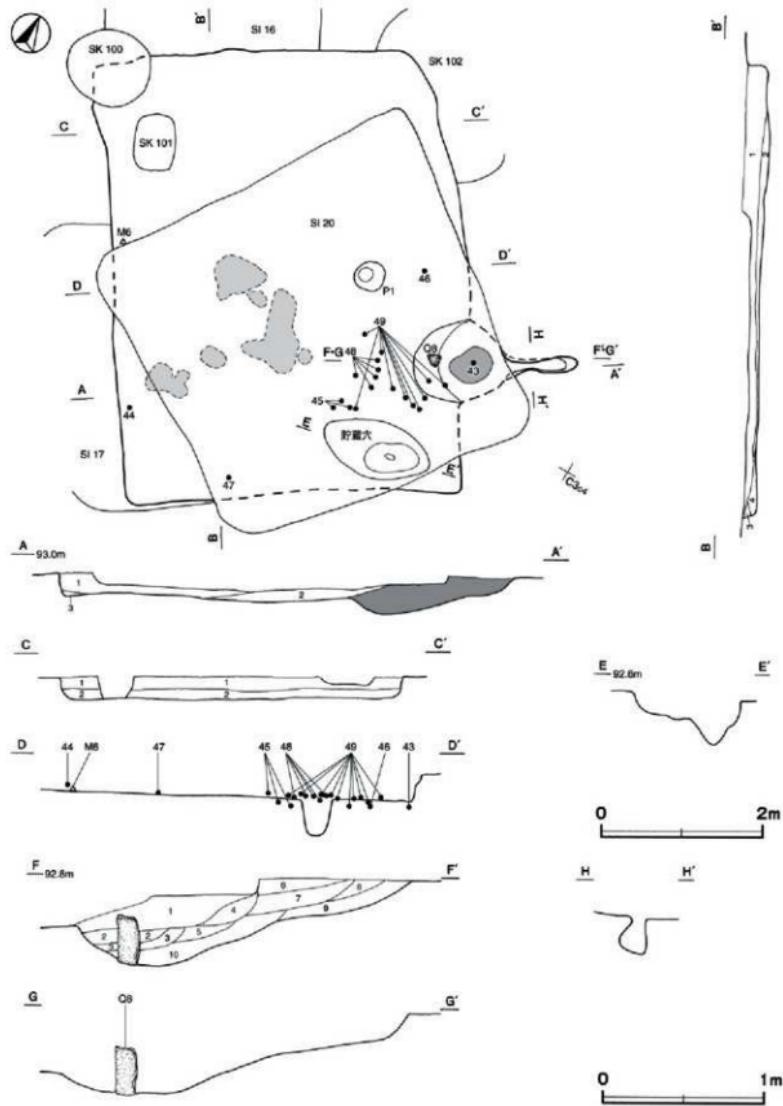
貯蔵穴 東部のコーナーに位置している。長径136cm、短径80cmの楕円形で、深さは50cmである。底面は凹凸で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。各層に焼土・粘土ブロックが含まれ、不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。

土層解説

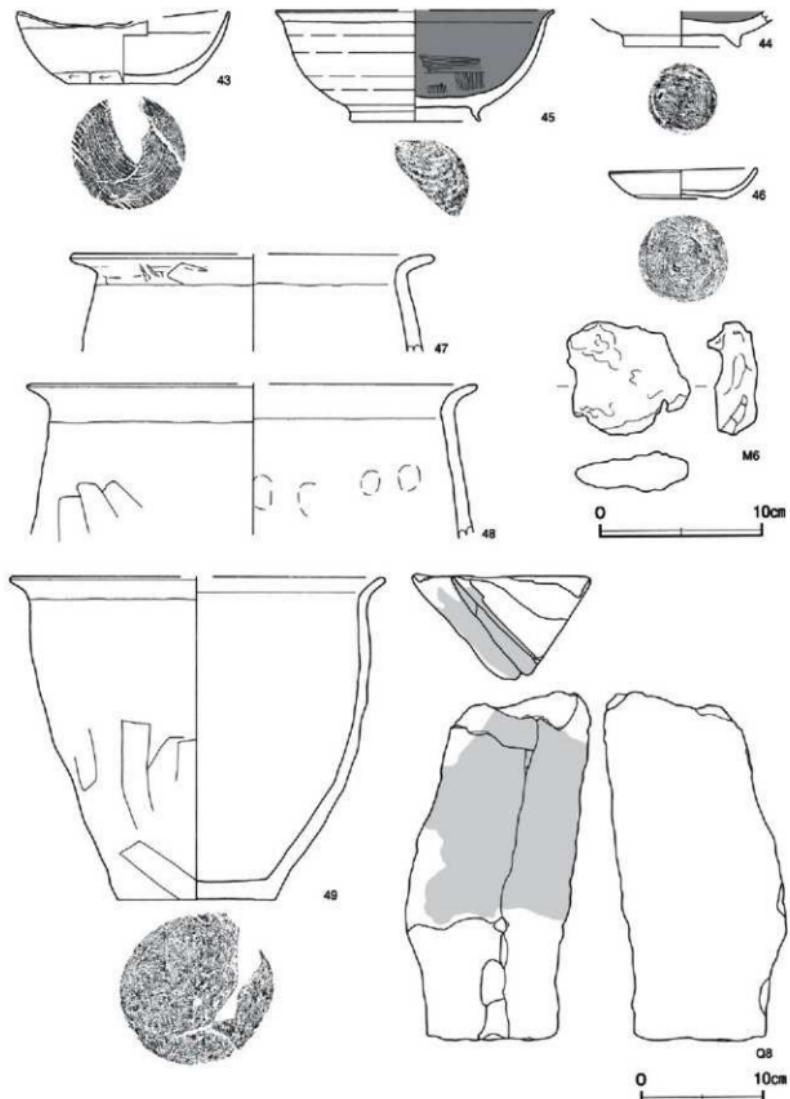
1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量	3 黑褐色 焼土粒子少量
2 前ナリーブ紫色 炭化粒子少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	4 暗灰黄色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片490点(壺・高台付壺・高台付碗236、壺類254)、須恵器片2点(壺)、石器1点(支脚)、鉄滓1点(138.8g)が出土している。また、混入した繩文土器片5点(深鉢)も出土している。46は東部の床面、47は南東部壁際の床面から出土している。45・48は中央部の床面からそれぞれ出土した破片が接合したものである。43、M6は南西部壁際の覆土下層からそれぞれ出土している。43は竈の火床面から出土している。49は竈前の床面から竈の火床面にかけて出土した破片が接合したものである。Q8は竈の火床面から立位の状態で出土している。また、重さ106~9,980gの砂岩、デイサイト、花崗岩、黒雲母片岩など15点が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。



第36図 第18号住居跡実測図

所見 床面に焼土が広がる箇所があることから、焼失家屋と推定される。時期は、出土土器から10世紀後葉に比定できる。



第37図 第18号住居跡出土遺物実測図

第 18 号住居跡出土遺物観察表（第 37 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
43	土器器	环	[13.0]	4.4	6.9	長石・石英・赤色 粒	明黄褐色	普通	体部下端ヘラ削り 体部内面ヘラ削き	龜穴床面	50% PL26
44	土器器	高台付环	-	(22)	7.0	長石・石英・赤色 粒	橙	普通	体部内面ヘラ削き	覆土下層	30%
45	土器器	高台付环	[17.0]	6.9	7.9	長石・石英・赤色 粒	橙	普通	体部外面ロクロナデ 体部内面ヘラ削き	床面	40% PL27
46	土器器	小環	9.0	1.9	5.4	長石・石英・赤色 粒	橙	普通	体部下端削鉈ヘラ削り後ナデ	床面	85% PL28
47	土器器	甕	[22.0]	(6.0)	-	長石・石英・雲母	黃橙	普通	口縁部ナデ 体部外面ヘラ削り	床面	5%
48	土器器	甕	[27.3]	(9.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面指痕	床面	15%
49	土器器	甕	[30.0]	26.3	12.7	長石・石英・雲母 小環	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラ削き	龜穴床面	60% PL29

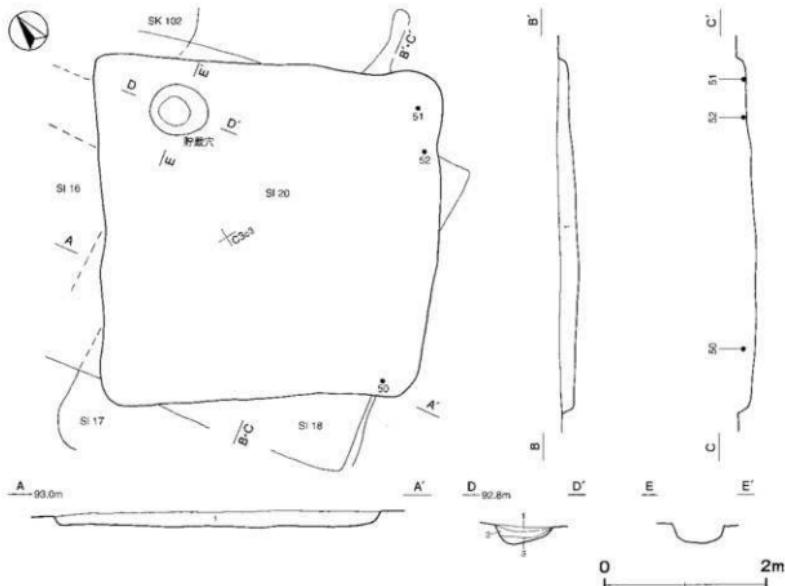
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 6	鐵冶窯	7.0	31	7.0	138.8	鐵	小型の楕形鍛冶窯	覆土下層	PL33

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 8	支撑	28.3	25.0	8.0	3.550	砂岩	部分的に被熱痕	龜穴床面	PL32

第 20 号住居跡（第 38・39 図）

位置 調査区中央部の C 3c3 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 16・17・18 号住居跡、第 102 号土坑跡を掘り込んでいる。



第 38 図 第 20 号住居跡実測図

規模と形状 長軸 4.14 m, 短軸 4.00 m の方形で、主軸方向は N - 32° - E である。壁高は 12 ~ 22 cm で、直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。床面には焼土や炭化材、炭化物の広がりを確認した。

貯蔵穴 北コーナー部に位置している。長径 76 cm, 短径 62 cm の梢円形で、深さは 20 cm である。底部は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

土層解説

1 黑褐色	粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	3 暗褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量
2 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物粒子微量		

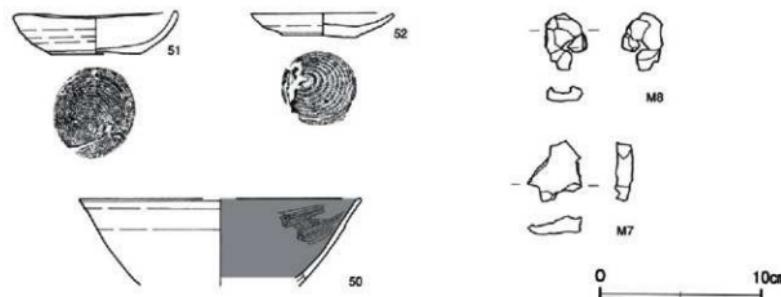
覆土 単一層である。粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 にい青褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
---------	---------------------

遺物出土状況 土師器片 246 点（环・小皿 62、高台付坏 9、甕類 175）のほか、鉄製品 1 点（鍋体部カ）、鍛錆 1 点 (16.1 g) が出土している。さらに、混入した縄文土器片 2 点（深鉢）も出土している。51 は東コーナー部の、52 は北東壁際の床面からそれぞれ出土しており、いずれも完形である。50 は南東壁際の覆土中層から出土している。M7・M8 は覆土中から出土している。また、重さ 197 ~ 591 g の砂岩、片麻岩など 4 点が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 11 世紀中葉に比定できる。



第 39 図 第 20 号住居跡出土遺物実測図

第 20 号住居跡出土遺物観察表（第 39 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
50	土師器	环	[17.3]	(5.4)	-	灰白・薄緑・赤色	にい青褐色	普通	内面ヘラナデ	覆土中層	20%	
51	土師器	小皿	10.0	2.6	5.4	灰白・石英・赤色	明黄褐色	普通	体部外周クロロナデ	床面	100% PL28	
52	土師器	小皿	8.7	1.4	4.7	灰白・石英・赤母・赤色粒子	橙	普通	体部外・内面クロロナデ	底部回転系切り	床面	100% PL28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	鍛錆	37	34	11	16.1	鉄	極小の輪形鍛錆の削部破片	覆土中	
M8	鍋カ	25	20	0.9	6.1	鉄	破面に微細な光沢や気孔（铸造品）	覆土中	

第 21 号住居跡（第 40 図）

位置 調査区東部の C 5 e1 区、標高 94 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 大半が調査区域外に位置しており、南西コーナー部のみを確認した。確認できたのは南北軸 1.48 m、東西軸 1.04 m のみで、南北軸方向は N - 15° - W である。壁高は 46 ~ 50cm で直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

覆土 5 層に分層できる。各層に焼土や粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

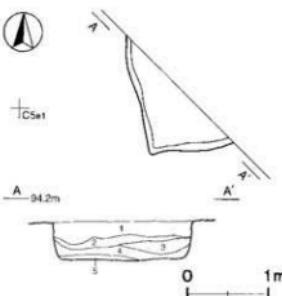
土層解説

- | | |
|----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 にぶい黄褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 5 暗褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片 6 点（坏 1、壺 5）が出土している。

土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、土師器坏の様相から 9 世紀後葉から 10 世紀前葉とみられる。



第 40 図 第 21 号住居跡実測図

第 22 号住居跡（第 41 ~ 43 図）

位置 調査区東部の C 47 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 23 号住居跡を掘り込み、第 158・171・194・195 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 6.32 m、短軸 5.04 m の長方形で、主軸方向は N - 70° - E である。壁高は 30 ~ 32 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されている。燃焼部幅は 80 cm である。袖部は、地山の粘土を掘り残して構築されており、右袖部の内側には、板状の花崗岩が補強材として使用されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 80 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

土層解説

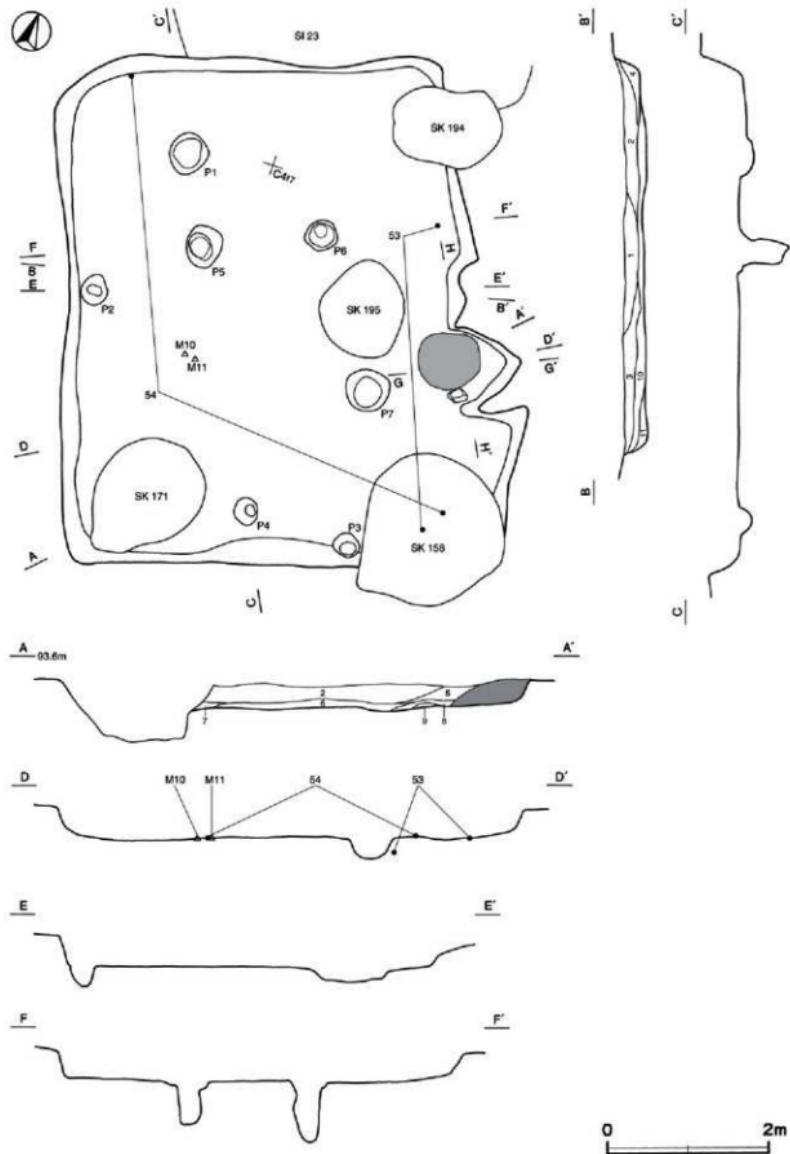
- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 極暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量 |
| 2 極暗褐色 | 焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、粘土ブロック少量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量 | 9 黒褐色 | 焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子中量 | 10 黑褐色 | 粘土粒子少量 |

ピット 7か所。P 1 は規模や配置から主柱穴と考えられる。P 2 は深さ 25 cm で、西壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 3 ~ P 7 は深さ 12 ~ 32 cm で、いずれも性格不明である。

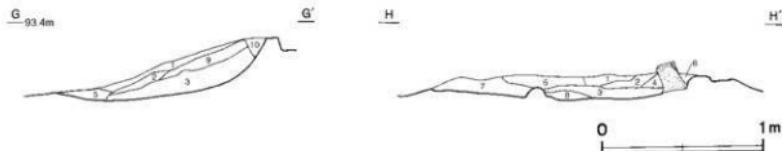
覆土 11 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量、粘土ブロック少量 | 8 黒褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック中量、炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 | 10 黒褐色 | 炭化物中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 4 暗褐色 | 炭化物中量、粘土ブロック・焼土粒子少量 | 11 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | | |
| 6 暗褐色 | 炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量 | | |
| 7 暗褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、粘土ブロック少量 | | |



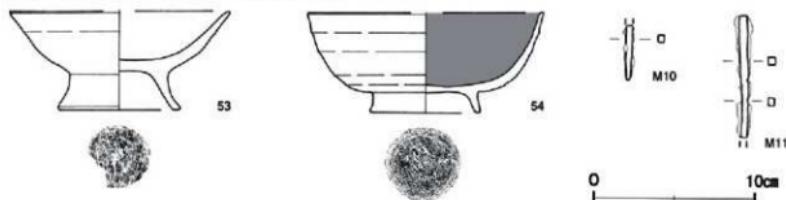
第41図 第22号住居跡実測図（1）



第42図 第22号住居跡実測図（2）

遺物出土状況 土師器片 1,262点（坏395、高台付椀 57、甕類 810）、須恵器片 11点（甕類）が、土製品3点（羽口）、鉄製品2点（釘カ、不明鉄製品）が、全面の覆土上層から下層にかけて出土している。53は北東部壁際、54は北西部壁際の床面から出土している。53・54は本跡を掘り込んでいる第158号土坑から出土した破片との接合関係が確認できた。M 10・M 11は中央部の床面からそれぞれ出土している。また、重さ436g、4,500gの砂岩2点が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第43図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表（第43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	後成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師器	高台付椀	[135]	61	73	長石・石英・赤色 粘土	にぶい橙	普通	高台部外・内面ナデ	床面 SK138裏土 片上層付 PL22	30% SK138 6塊
54	土師器	高台付椀	[144]	62	66	長石・石英・石墨 粘土粘土	にぶい橙	普通	体部外表面クロコ整形	床面 SK138裏土 片上層付 PL22	70% SK138 6塊

番号	器種	大きさ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 10	釘カ	(34)	0.4	0.5	(20)	鉄	横断面形は方形	床面 PL34	
M 11	不明鉄製品	(76)	0.6	0.5~0.6	(84)	鉄	棒状	床面 PL34	

第23号住居跡（第44・45図）

位置 調査区東部のC 4 e7区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第22号住居、第194号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東壁が中層まで削平されている。規模は南西・北東軸4.1m、南東・北西軸4.06mの隅丸方形と推測できる。主軸方向はN-47°-Eである。壁高は30~48cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。北・西コーナー部及び南西壁の壁下には礎溝が巡っている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで126cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は、地山の粘土を振り残して構築されている。火床部は床面から5cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

遺土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土ブロック・炭化物・燒土粒子少量 | 5 暗褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子中量。粘土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック中量。炭化物少量。燒土粒子微量 | 6 黒褐色 | 焼土ブロック多量。粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 黃褐色 | 燒土粒子・炭化粒子中量。粘土ブロック少量 | 7 暗褐色 | 焼土ブロック中量。粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黄褐色 | 粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子少量 | | |

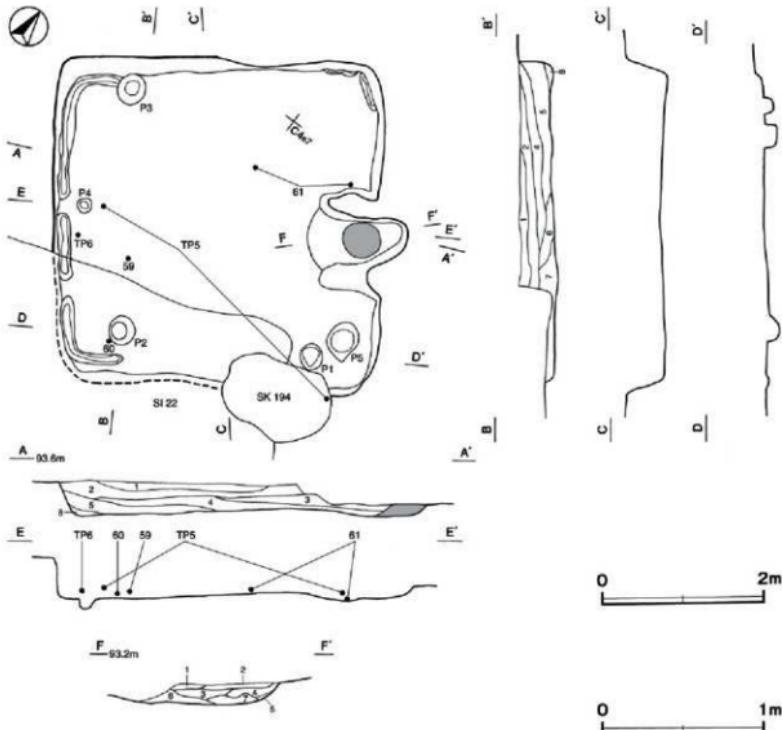
ピット 5か所 P 1～P 3は深さ8～13cmで、規模や配置から主柱穴である。P 4は深さ12cmで南西壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 5は深さ15cmで性格不明である。

覆土 8層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子少量。粘土ブロック微量 | 5 暗褐色 | 炭化物中量。粘土ブロック少量 |
| 2 にい赤褐色 | 粘土ブロック・炭化物少量。燒土粒子微量 | 6 暗褐色 | 炭化粒子中量。粘土ブロック微量 |
| 3 にい赤褐色 | 粘土ブロック・炭化物少量 | 7 暗褐色 | 炭化物中量。粘土ブロック・細纖少量 |
| 4 黄褐色 | 粘土ブロック・炭化物少量。燒土ブロック微量 | 8 暗褐色 | 粘土ブロック中量。炭化粒子微量 |

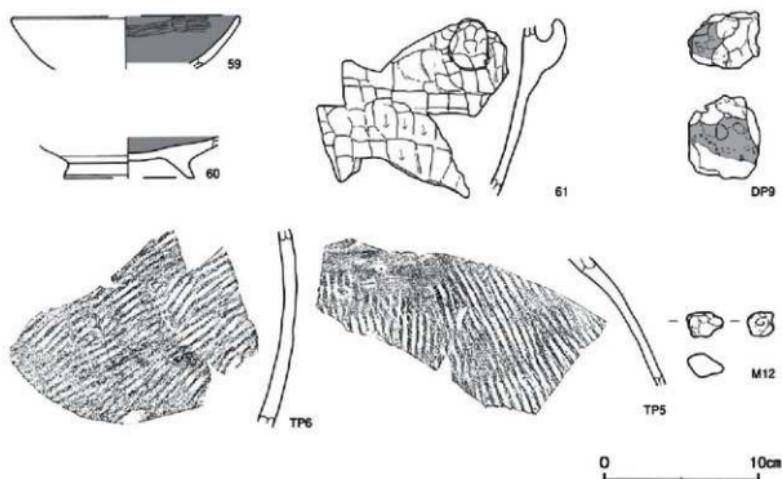
遺物出土状況 土器器皿191点(坏62、高台付椀8、甕類121)、須恵器片16点(甕類)、土製品1点(羽口)、ガラス質滓1点(1.9g)が、全面の覆土中層から下層にかけて出土している。59は南西部、60は南コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。61は中央部と、竈の左袖部付近の床面からそれぞれ出土した破片が接合したものである。TP 5は南東コーナー部、南西部の壁際の覆土中層からそれぞれ出土した破片



第44図 第23号住居跡実測図

が接合したものである。TP 6 は南西部の壁際の覆土中層から出土している。DP 9, M 12 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 45 図 第 23 号住居跡出土遺物実測図

第 23 号住居跡出土遺物観察表（第 45 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
59	土器器	壺	[130]	(3.3)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面ヘラ削き	覆土下層	5%
60	土器器	高台付壺	—	L5	(8.2)	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい黄 澄	普通	体部内面摩減黒色処理を残す	覆土下層	30%
61	土器器	瓶	—	(10.9)	—	長石・石英・雲母 赤色粒子	黄灰	普通	体部外面ヘラ削り 体部外面把手取り付け後削き	床面	5% PL28

番号	種別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP 5	須恵器	甕	長石・石英	暗灰黄	体部外面傾位の平行叩き 内面ナデ	覆土中層	PL20
TP 6	須恵器	甕	長石・石英	浅黄	体部外面傾位の平行叩き 外面に自然釉 内面ナデ	覆土中層	PL20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP 9	羽口	(35)	(28)	(24)	(13.1)	長石・石英・赤色 粒子	羽口先端部側面破片	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
M 12	ギタス留	16	23	16	19	鐵	粘土質の焼形鐵治溝	覆土中	

第 24 号住居跡（第 46 図）

位置 調査区東部の C 4 e5 区、標高 94 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、東西軸は 290 m、南北軸は 2.10 m しか確認できなかった。平面形は方形あるいは長方形と推定でき、南北方向は N - 13° - W である。壁高は 20 ~ 24 cm で、外傾して

立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

ピット 2か所。P1は深さ32cm、P2は深さ28cmで規模や配置から主柱穴である。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

1 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量

2 にい褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

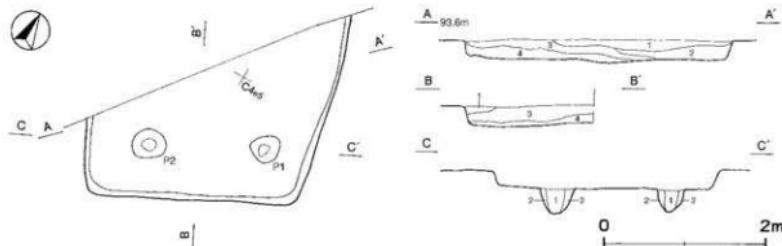
土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
2 にい褐色 粘土ブロック・炭化物少量

3 にい青褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
4 にい青褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片27点(环7、高台付椀1、甕類19)が出土している。土器片はいずれも細片のため図示できなかった。

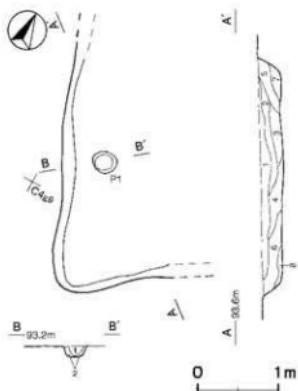
所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、内面黒色処理された高台付椀の様相から10世紀前葉とみられる。



第46図 第24号住居跡実測図

第25号住居跡 (第47図)

位置 調査区東部のC419区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。



規模と形状 北東部が削平されているため、南北軸は3.08m、東西軸は1.58mしか確認できなかった。南北軸はN-25°Wである。平面形は方形あるいは長方形と推定できる。壁高は20~26cmで、緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

ピット 深さ14cmで、規模や配置から主柱穴と推測できる。

ピット土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 にい褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量

覆土 8層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

第47図 第25号住居跡実測図

土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	5	にじ・青褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量
2	暗褐色	炭化物・粘土粒子少量・焼土ブロック微量	6	にじ・青褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量・焼土ブロック微量
3	暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7	にじ・青褐色	粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	炭化物・粘土粒子少量	8	褐色	粘土ブロック中量・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 19 点（坏 4、甕類 15）が出土している。土器片はいずれも細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、内面黒色処理された土師器坏の様相から 10 世紀前葉とみられる。

第 26 号住居跡（第 48～51 図）

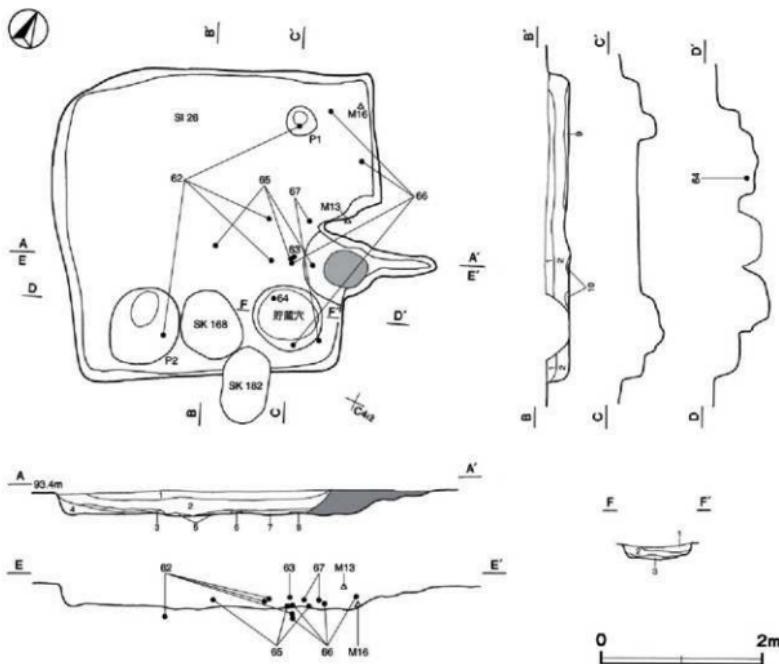
位置 調査区東部の C4h1 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 168・182 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.08 m、短軸 3.86 m の方形、主軸方向は N - 62° - E である。壁高は 26～30 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 162 cm で、燃焼部幅は 43 cm である。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されており、左袖部の内側には、ブロック状の安山岩が補強材として使用



第 48 図 第 26 号住居跡実測図（1）

されている。火床面の北東部には、角柱状の安山岩が据えられおり、赤変していることから支脚として使用されたものと考えられる。火床部は床面から6cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に96cm掘り込まれ、火床部から傾斜して立ち上がっている。

電土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	6	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子多量、粘土ブロック微量
2	黒褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	7	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
3	褐色	焼土ブロック・炭化材中量、粘土ブロック少量	8	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量	9	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量
5	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量			

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径84cm、短径80cmの梢円形で、深さは18cmである。床面は皿状で、壁は傾斜して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1	にじむ青褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子微量	3	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2	にじむ青褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量			

ピット 2か所。P 1は深さ20cmで、規模や配置から主柱穴である。P 2は深さ20cmで性格不明である。

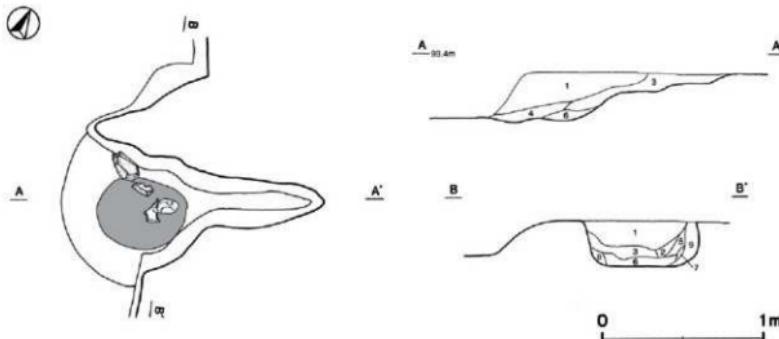
覆土 10層に分層できる。各層に焼土や粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

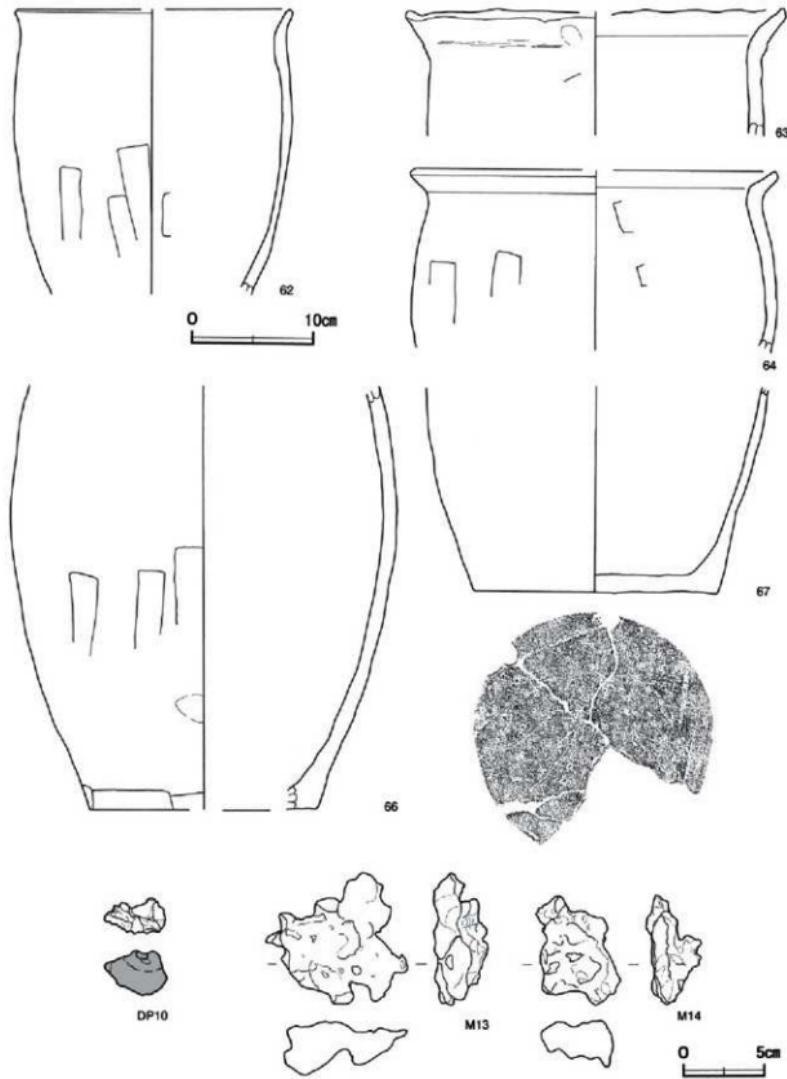
1	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量	6	にじむ青褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック中量、焼土ブロック少量	7	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	粘土ブロック・炭化材少量、焼土粒子微量	8	暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量
4	黒褐色	粘土ブロック中量、炭化材少量、焼土粒子微量	9	暗褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子微量
5	暗褐色	粘土ブロック・炭化材中量、焼土粒子微量	10	暗褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片167点(坏36、高台付坏1、壺類130)、土製品1点(羽口)、鉄製品2点(刀子、釘)、檍形鍛冶滓3点(264.7g)が出土している。65は中央部の覆土下層、窓前の床面から出土した破片が接合したものである。66は北東壁寄りの覆土上層から中央部床面にかけて出土した破片が接合したものである。62は北コーナー部付近、中央部の覆土中層、P 1・2の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。64は貯蔵穴の覆土中層から出土している。63は窓前の覆土上層から出土したものである。67は窓付近の覆土上層から出土した破片が接合したものである。M 16は北コーナー部の覆土下層、M 13は窓左袖部付近の覆土上層から出土している。DPI10、M 14、M 15、M 17は覆土中から出土している。また、重さ382~10,900gの砂岩・閃緑岩など3点が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

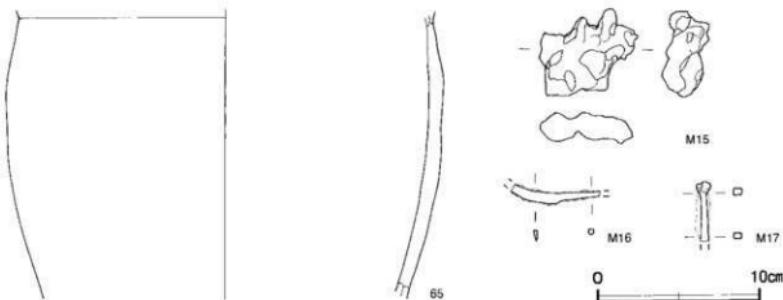
所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第49図 第26号住居跡実測図(2)



第50図 第26号住居跡出土遺物実測図(1)



第51図 第26号住居跡出土遺物実測図(2)

第26号住居跡出土遺物観察表(第50・51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
62	土器器	甕	[22.2]	[23.2]	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	明褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側へラブリ 体部内側へラナダ	覆土中層 PL1-2層上半層	30% PL29
63	土器器	甕	[23.1]	(7.7)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 指頭痕	覆土上層	10%
64	土器器	甕	[22.2]	(11.1)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側へラブリ 体部内側へラナダ	若土覆土中層	10%
65	土器器	甕	-	(17.7)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外側へラナダ	床面 覆土下層	30%
66	土器器	甕	-	(26.3)	[14.0]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外側へラブリ 体部内側へラナダ、体部外側指印痕	床面 覆土下層	30%
67	土器器	甕	-	(12.8)	15.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外側へラナダ、体部内側へラナダ	覆土上層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP10	羽口	(19)	(25)	(19)	(3.4)	長石・石英・赤色粒子	羽口の先端小破片	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 13	鍛治鋤	82	88	33	192.1	鉄	小型の楕円形鍛治鋤	覆土左端付近 覆土上層	PL33
M 14	鍛治鋤	67	53	34	70.0	鉄	極小の楕円形鍛治鋤	覆土中	PL33
M 15	鍛治鋤	53	61	29	326	鉄	不定形塊状のガラス質滓	覆土中	PL33
M 16	刀子	(5.6)	1.5	0.2~0.3	(3.6)	鉄	刃部無し上手側に向かい反る 片区不明	覆土下層	PL34
M 17	刃	(3.75)	1.0	0.4~0.6	(4.4)	鉄	横断面は長方形	覆土中	

第27号住居跡(第52図)

位置 調査区中央部のC 3 go 区、標高93 mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.54 m、短軸3.12 mの長方形で、主軸方向はN - 60° - Eである。壁高は30 ~ 32cmで、直立している。

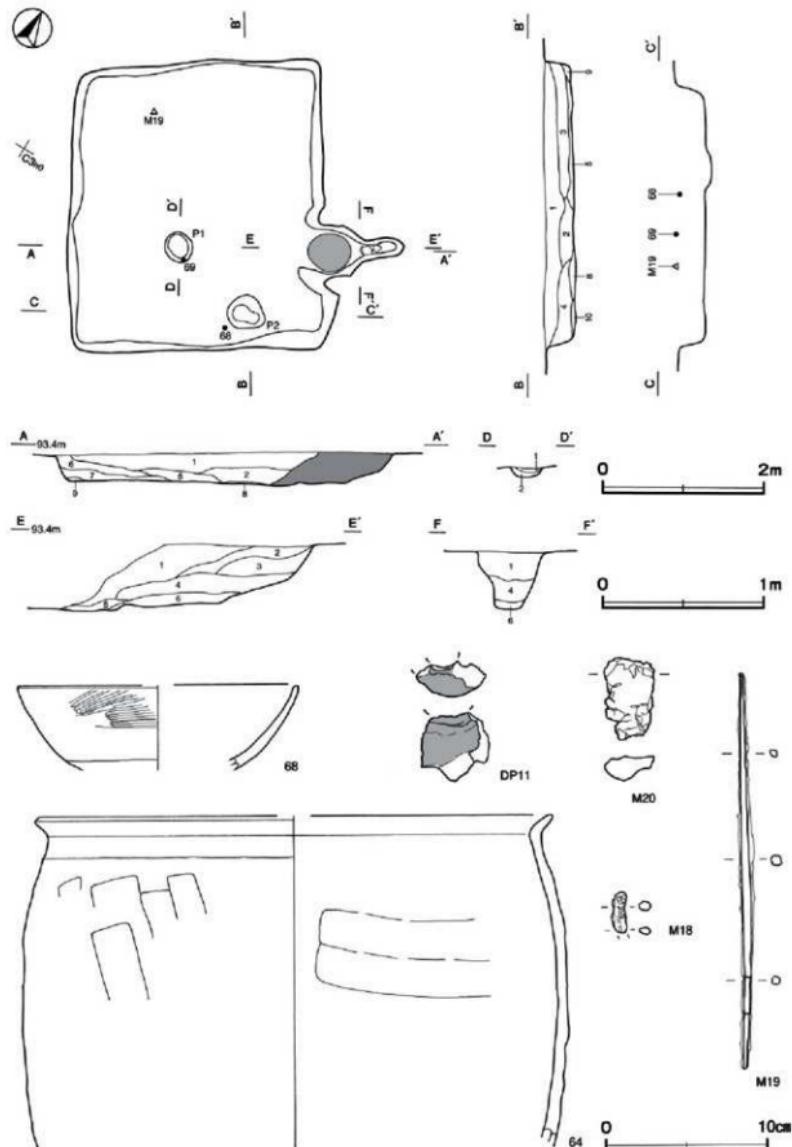
床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。燃焼部幅は48cmである。袖部は地山を掘り残して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に90cm掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

竈土層解説(P1 ~ P 4共通)

- | | | | | | |
|---|-----|------------------------|---|-----|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量 | 4 | 黒褐色 | 炭化粒子中量、粘土ブロック・燒土粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 5 | 黒褐色 | 燒土ブロック・炭化粒子中量、粘土ブロック少量 |
| 3 | 暗褐色 | 炭化粒子中量、粘土ブロック少量、燒土粒子微量 | 6 | 暗褐色 | 粘土ブロック中量、炭化粒子少量、燒土粒子微量 |

ピット 2か所。P 1は深さ8 cmで、規模や配置から主柱穴である。P 2は深さ12 cmで性格不明である。



第52図 第27号住居跡・出土遺物実測図

ピット土層解説 (P1 ~ P2 共通)

1 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

覆土 10層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	6 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
2 黒褐色	炭化物中量、粘土ブロック少量	7 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	8 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
4 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
5 暗褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量	10 暗赤褐色	炭化粒子少量、粘土ブロック微量

遺物出土状況 土器片120点(坏32, 梵2, 壁類86)のほか、鉄製品3点(釘カ、紡錘車軸、不明鉄製品)

土製品1点(羽口)が出土している。また、黒曜石の剥片も出土している。68は南東壁際、69は中央部、M19は北西部の覆土上層からそれぞれ出土している。M18、M20、DP11は覆土中から出土している。また、重さ138g、1766gの砂岩2点が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第27号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
68	土器器	輪	[17.2]	(5.2)	—	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外側ヘラ削き	覆土上層	20%	
69	土器器	甕	[31.5]	(20.4)	—	長石・石英・雲母 粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面削す 内面ヘラナダ	体部外側ヘラ削り	覆土上層	20% PL29

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP11	羽口	42	(4.5)	(2.2)	(27.1)	長石・石英・赤色 粒子	羽口の先端部小破片	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	釘カ	(25)	1.0	0.4~0.6	(22)	鉄	下手側に被面(鍛造品)	覆土中	PL34
M19	結縫車輪	24.4	0.5	0.4~0.7	24.1	鉄	定形の結縫車の輪 円盤部は脱落(鍛造品)	覆土上層	PL34
M20	不明鉄製品	5.1	3.1	1.5	24.9	鉄	表面には強い放射割れ(鍛造品)	覆土中	

第28号住居跡 (第53図)

位置 調査区北東部のC 4h9区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第48号住居跡、第167号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南半部が調査区域外に延びているため、東西軸は5.68mで、南北軸は2.95mしか確認できなかつた。平面形は方形もしくは長方形と推定できる。東西軸方向はN - 67° - Eである。壁高は38~50cmで、外傾して立ち上がりっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

ピット 2か所。P1は深さ14cm、P2は深さ30cmで性格不明である。

覆土 5層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

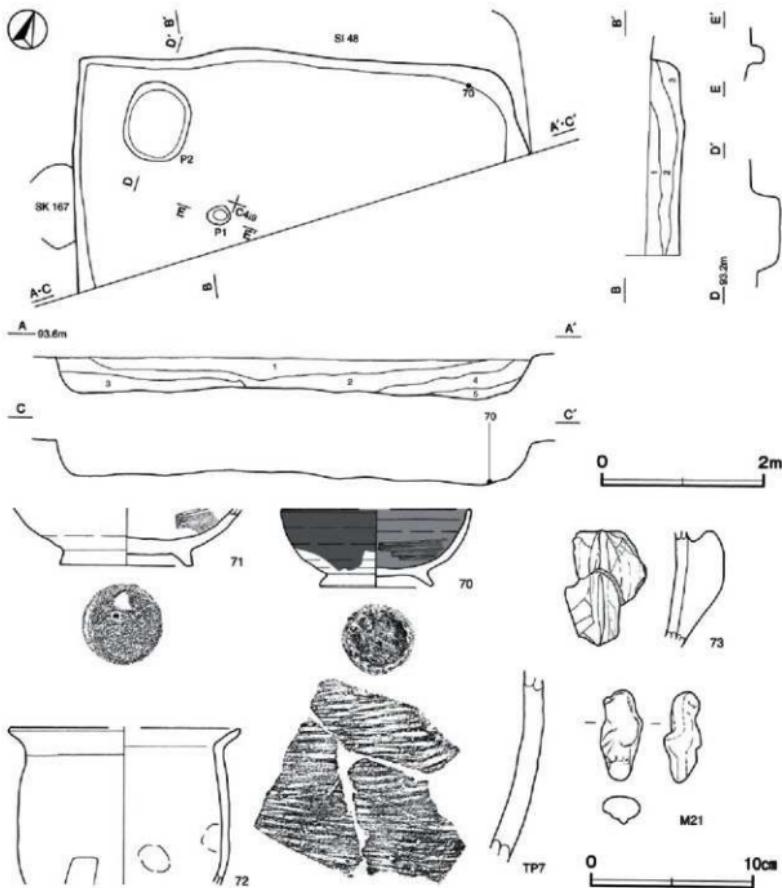
土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	4 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
2 黑褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量	5 暗褐色	粘土ブロック中量、炭化物少量
3 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量		

遺物出土状況 土器片326点(坏103、高台付碗4、甕類219)、須恵器片1点(甕)のほか、輪形鍛治1点(30.5g)が出土している。70は北東コーナー壁際の床面から出土している。71~73、TP7、M21は覆土中から

出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉とみられる。



第53図 第28号住居跡・出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土器器	高台付碗	[11.6]	4.8	6.8	長石・石英・漂母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面ヘラ削き	床面	50% PL27
71	土器器	高台付碗	-	(3.5)	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	普通	体部内面ヘラ削き	覆土中	30%
72	土器器	甌	[14.0]	(9.6)	-	長石・石英・漂母・赤色粒子	黄褐	普通	口縁部分・内面裏手ナデ 体部外側ヘラ削り 体部内面指擦痕	覆土中	10%
73	土器器	甌	-	(7.1)	-	長石・漂母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外側把手取り付け後磨き	覆土中	5% PL28

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴はか	出土位置	備考
TP.7	須恵器	甕	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	体部外表面斜面の平行叩き 体部内面ナデ	覆土中	PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M.21	須恵器	55	26	23	30.5	鉄	極小の輪形破片	覆土中	

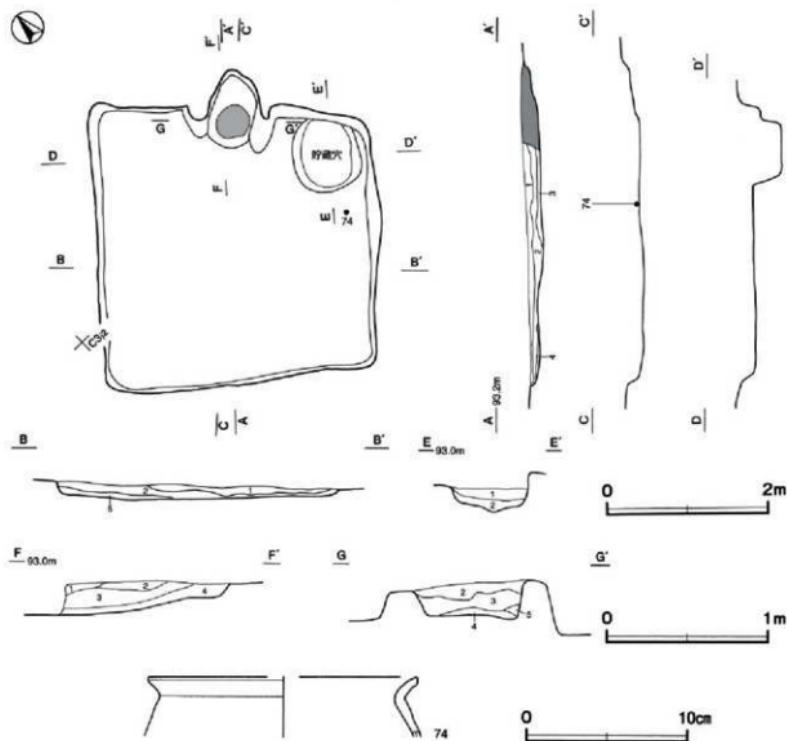
第30号住居跡(第54図)

位置 調査区南部のC3j2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.56m、短軸3.5mの方形で、主軸方向はN-45°-Eである。壁高は18~24cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cmで、燃焼部幅は50cmである。袖部は地山の粘土を掘り残し構築されている。火床部は床面とはほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。



第54図 第30号住居跡・出土遺物実測図

土層解説

1 喀 褐 色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗 褐 色 焼土ブロック多量、粘土ブロック少量、炭化物微量
2 暗 褐 色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	5 黒 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子少量
3 黑 褐 色 焼土粒子多量、粘土ブロック・炭化粒子微量	

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径 96cm、短径 86cm の梢円形で、深さは 28cm である。床面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 にふい赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量	2 にふい赤褐色 粘土ブロック・炭化物中量
------------------------------	-----------------------

覆土 5 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 喀 褐 色 粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量	4 暗 褐 色 粘土ブロック中量、焼土粒子微量
2 暗 褐 色 粘土ブロック多量、炭化物・焼土粒子微量	5 暗 褐 色 粘土ブロック少量、炭化物微量
3 黑 褐 色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量	

遺物出土状況 土師器片 77 点（环 31、高台付椀 2、壺類 44）が出土している。74 は南東壁寄りの床面から出土している。また、重さ 3,490 g の閃綠岩が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。

第 30 号住居跡出土遺物観察表（第 54 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
74	土師器	甕	[16.6]	(37)	-	良石・石英・雲母 赤色粒子・小鉢	にふい型 赤色粒子・小鉢	普通	口縁部外・内面横ナデ	床面	5%

第 31 号住居跡（第 55・56 図）

位置 調査区南部の D 3a9 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 215 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南西コーナー部が削平されているが、南北軸 5.48 m、東西軸 5.08 m の方形と推測でき、主軸方向は N - 82° - E である。壁高は 11 ~ 30cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 東壁の南部寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 119cm で、燃焼部幅は 50cm である。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されており、左袖部の内側には板状の花崗岩が補強材として使用されている。火床部は床面から 5cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 40cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

土層解説

1 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	4 暗褐色・赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量
2 黑 褐 色 炭化物・焼土粒子・粘土粒子少量	5 暗 褐 色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗 褐 色 焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	

ピット 2 か所。P 1 は深さ 16cm であり、配置から主柱穴である。P 2 は深さ 20cm で性格不明である。

土層解説 (P 1 - P 2 共通)

1 にふい黄褐色 焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量	3 にふい黄褐色 炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量
2 にふい黄褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。長径 114cm、短径 98cm の梢円形で、深さは 15cm である。床面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 にふい赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量	2 にふい赤褐色 粘土ブロック・炭化物中量、焼土ブロック少量
------------------------------	--------------------------------

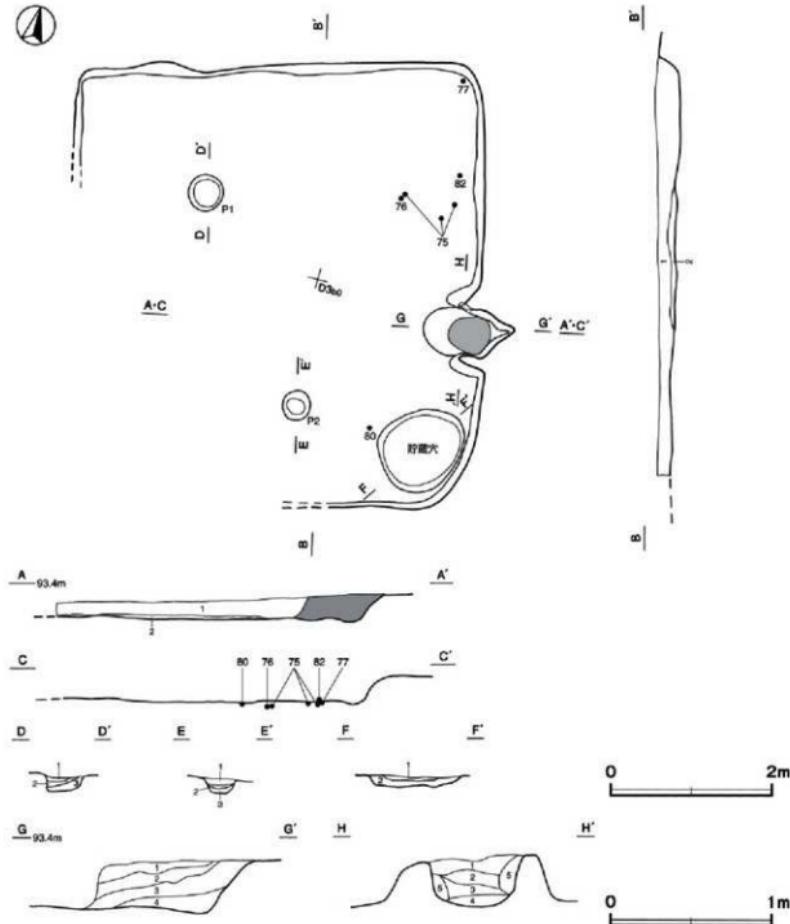
覆土 2 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

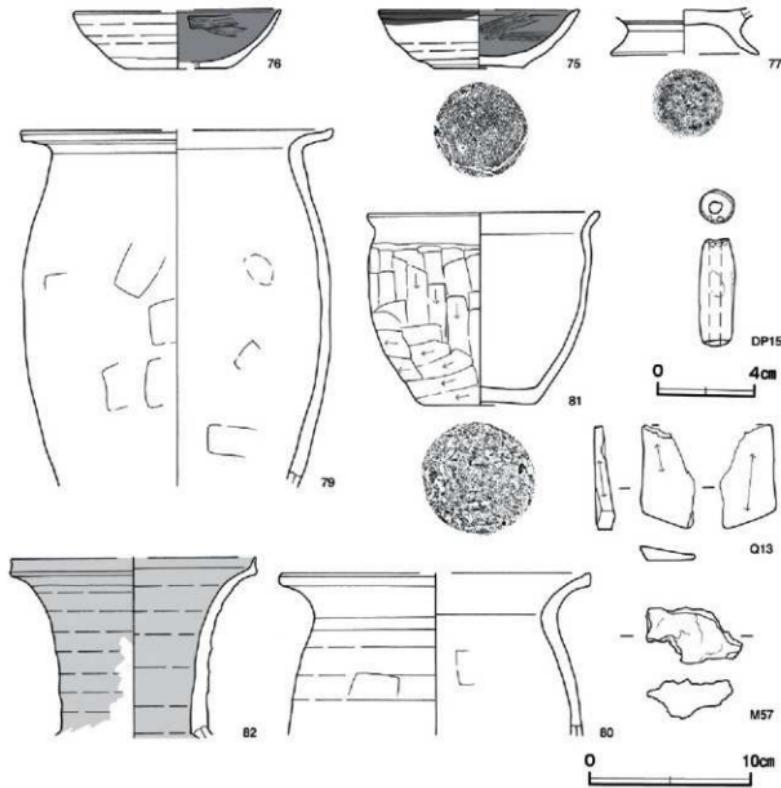
1 帯褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 2 にい褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片409点(坏63、高台付掩2、甕類339、小形甕5)、灰釉陶器1点(長頸瓶)、土製品1点(管状土錐)が、南東コーナー部付近の覆土中層から下層を中心に出土している。75、76は北東部の床面から出土している。77は北東コーナー壁際、80は南東コーナー部、82は東壁際の床面から出土している。DP15、79、81、Q13、M57は覆土中から出土している。また、重さ242~3,930gの砂岩や泥岩が6点覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。



第55図 第31号住居跡実測図



第 56 図 第 31 号住居跡出土遺物実測図

第 31 号住居跡出土遺物観察表（第 56 図）

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
75	土鉢器	環	[124]	36	58	長石・石英・黒墨・赤色粒子	棕	普通	体部内面ヘラ磨き 体部下端回転ヘラ削り後ヘラナデ	床面	80% PL26
76	土鉢器	環	[128]	(36)	-	長石・石英・赤色粒子	棕	普通	体部内面ヘラ磨き	床面	40%
77	土鉢器	筒形直輪	-	(28)	(90)	長石・石英・黒墨 棕・小輪	にぶい棕	普通	高台部外・内面ナデ	床面	30%
79	土鉢器	甕	[190]	(21.9)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい棕	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部内面擦痕	覆土中	20%
80	土鉢器	甕	[190]	(10.0)	-	長石・石英・黒墨 棕・小輪	にぶい棕	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外・内面ヘラナデ	床面	5%
81	土鉢器	小形甕	14.0	12.0	63	長石・石英・赤色 粒子・繊維	にぶい棕	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外側ヘラ削り	覆土中	50% PL28
82	灰槽陶器	長圓瓶	[15.1]	(11.1)	-	長石・白色粒子	灰オーリア	良好	体部外・内面施釉 外面釉剥離がれ	床面	5% PL30

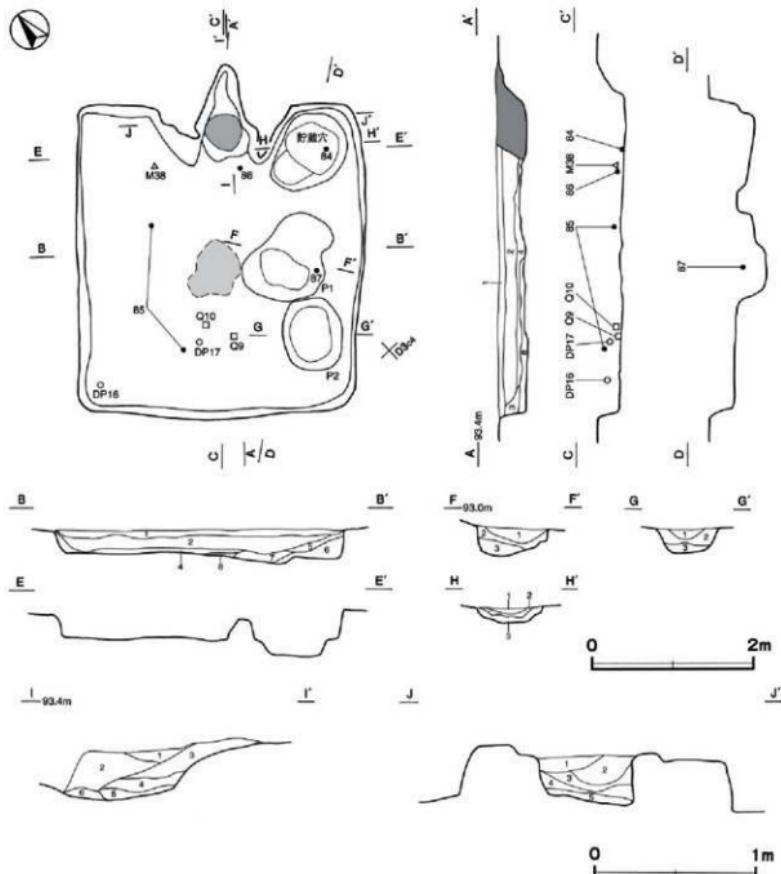
番号	器種	長さ	幅	孔深	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DPI15	管状土錐	45	15	0.5	6.35	長石・石英・黒墨	一方向から穿孔 孔端部ナデ 裏面一部欠損	覆土中	PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	砥石	(6.4)	35	13	(238)	砂岩	底面3面 無は破断面 覆土中	覆土中	PL32
M 57	鉄滓	34	6.0	2.3	60.3	鉄	小型の輪状鍛冶滓破片	覆土中	

第32号住居跡（第57・58図）

位置 調査区南部のD 3b3区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.82m、短軸3.60mの方形で、主軸方向はN-43°-Eである。壁高は30~36cmで、直



第57図 第32号住居跡実測図

立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部から焼土塊が確認された。

竈 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から6cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に62cm掘り込まれ、火床部から傾斜して立ち上がっている。

竈土層解説

1 黑褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量	4 黒褐色	焼土ブロック中量	5 灰褐色	焼土ブロック中量	8 黒褐色	粘土ブロック少量
2 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	3 灰褐色	焼土ブロック少量	6 黒褐色	粘土ブロック少量	7 黒褐色	炭化粒子微量
3 灰褐色	焼土ブロック中量	4 灰褐色	粘土粒子微量	5 灰褐色	焼土ブロック少量	6 黒褐色	粘土ブロック少量

ピット 2か所。P1は深さ34cm、P2は深さ28cmで性格不明である。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

1 灰褐色	焼土ブロック中量	2 黒褐色	粘土ブロック・炭化物少量	3 灰褐色	焼土ブロック中量	4 黒褐色	粘土ブロック少量
2 灰褐色	粘土ブロック多量	3 黑褐色	焼土ブロック少量	4 黑褐色	粘土ブロック少量	5 黑褐色	炭化粒子微量

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径108cm、短径80cmの梢円形で、深さは18cmである。床面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

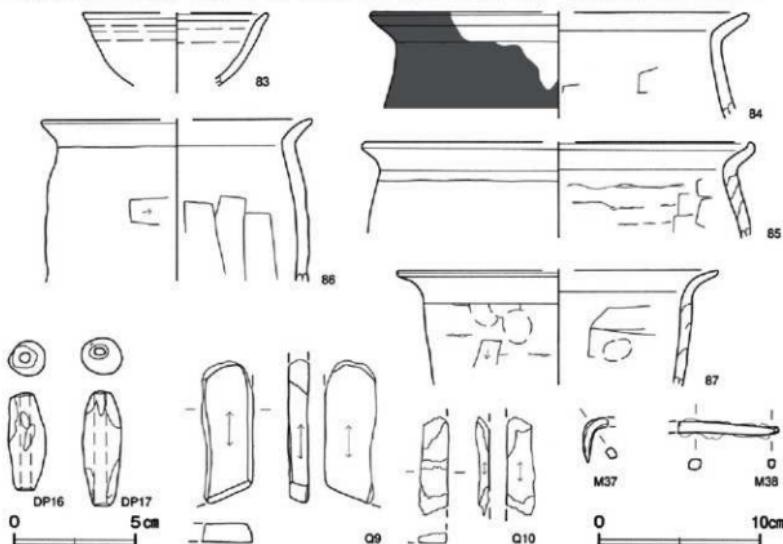
1 灰褐色	焼土ブロック・炭化物中量	3 暗褐色	焼土ブロック多量	5 黒褐色	粘土ブロック少量	7 黒褐色	炭化物微量
2 にせい赤褐色	粘土ブロック・炭化物中量	4 黑褐色	焼土ブロック少量	6 黑褐色	粘土ブロック・炭化物少量	8 黑褐色	粘土ブロック少量

覆土 8層に分層できる。各層に焼土や粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量	2 黒褐色	焼土ブロック・炭化物中量	3 暗褐色	粘土ブロック・炭化物少量	4 黑褐色	焼土ブロック少量
2 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	3 暗褐色	粘土ブロック・炭化物中量	4 黑褐色	焼土ブロック少量	5 黑褐色	粘土ブロック・炭化物少量
3 赤褐色	粘土ブロック・炭化物少量	4 黑褐色	焼土ブロック・炭化物少量	5 黑褐色	粘土ブロック中量	6 黑褐色	焼土ブロック・炭化物少量
4 暗褐色	焼土ブロック中量	5 黑褐色	粘土ブロック・炭化物少量	6 黑褐色	粘土ブロック中量	7 黑褐色	粘土ブロック少量

遺物出土状況 土器器片413点(坏38、壺類375)、土製品2点(管状土錐) 鉄製品2点(鎌カ、刀子カ)



第58図 第32号住居跡出土遺物実測図

石製品 2 点（砥石）が、全体の覆土上層から下層にかけて出土している。84 は貯蔵穴の覆土上層から、87 は P1 の覆土中層からそれぞれ出土している。85 は中央部の覆土下層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。86 は竈前の覆土下層から出土している。DP16 は南西コーナー部、DP17 は中央部の覆土中層から出土している。Q9 は中央部の床面、Q10 は中央部の覆土下層から出土している。M38 は竈付近の覆土下層から出土している。83、M37 は覆土中層から出土している。

所見 時期 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。

第 32 号住居跡出土遺物観察表（第 58 図）

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
83	土器器	灰	[11.4]	(4.4)	-	長石・石英・雲母	に深い黒褐色	普通	体部内面摩滅へラ磨きを残す	覆土中	10%
84	土器器	灰	[22.9]	(6.6)	-	長石・石英・雲母	に深い黒褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面部付着 体部内面凹凸ナデ	竈穴覆土上層	5%
85	土器器	灰	[23.7]	(5.9)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 内面輪幅削を残す 体部内面凹凸ナデ	覆土下層 覆土中層	5%
86	土器器	灰	[16.3]	(10.0)	-	長石・石英・雲母	に深い黒褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へラ削り 体部内面へラ削り	覆土下層	5%
87	土器器	灰	[19.8]	(7.0)	-	長石・石英・雲母	に深い黒褐色	普通	口縁部外・内面ロタキナデ 体部内面輪幅削を残す 体部外面へラ削り 体部内面へラ削り	P1 覆土中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	砥石	(88)	32	12	(69.8)	砂岩	砥面 3 面 他は破断面	床面	PL32
Q10	砥石	(60)	(18)	(69)	(10.1)	凝灰岩	砥面 2 面 他は破断面	覆土下層	PL32

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎 土	特 徵	出土位置	備 考
DP16	管状土錐	4.0	1.6	0.5	5.6	長石・石英・雲母	一方向から穿孔。孔端部ナデ	覆土中層	PL30
DP17	管状土錐	4.7	1.7	0.5	6.55	長石・石英・雲母	一方向から穿孔。孔端部ナデ	覆土中層	PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備 考
M37	鋸	(26)	1.5	0.6	(1.9)	鉄	断面は方形	覆土中	PL33
M38	刀子	(6.2)	0.7	0.5~0.7	(8.8)	鉄	断面は左右とも縦字	覆土下層	PL34

第 34 号住居跡（第 59 図）

位置 調査区南部の D 3e7 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 5.18 m、短軸 4.15 m の長方形で、主軸方向は N - 60° - E である。壁高は 22 ~ 32 cm⁶、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平圧で、壁際まで踏み固められている。北東コーナー部から北西壁にかけての壁下には、壁溝が巡っている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 116 cm⁶、煙道部幅は 61 cm⁶である。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 58 cm⁶掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

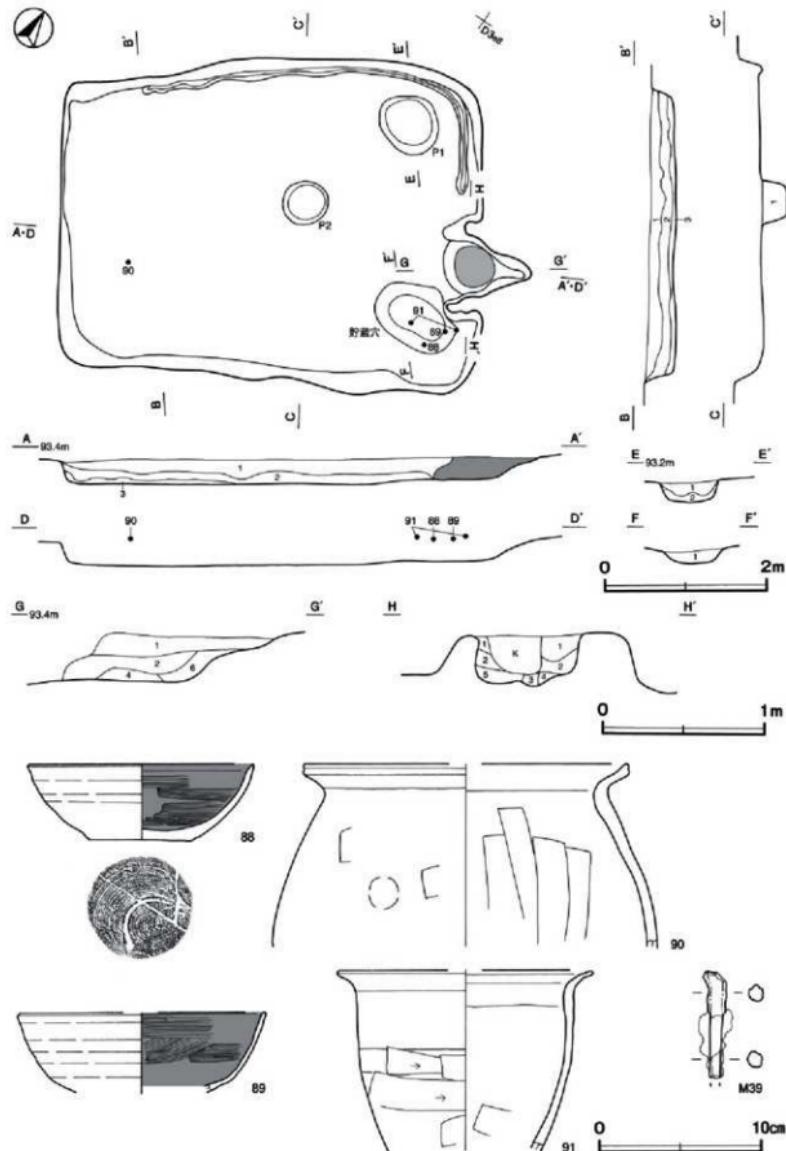
竈土層解説

1	暗 褐 色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4	黑 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
2	暗 褐 色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5	暗 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
3	黑 褐 色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	6	に深い黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量

ピット 2か所。P1・P2ともも深さ 22 cm⁶で性格不明である。

ピット土層解説（P1・P2 共通）

1	暗 褐 色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量	2	暗 褐 色	粘土ブロック多量、焼土粒子微量
---	-------	-----------------	---	-------	-----------------



第59図 第34号住居跡・出土遺物実測図

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長径 104cm、短径 78cm の梢円形で、深さは 14cm である。床面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 赤褐色 燃土ブロック・炭化物中量。粘土ブロック微量

覆土 3 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	燃土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	3 黒褐色	粘土ブロック中量、炭化物・燃土粒子微量
2 暗褐色	燃土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師器片 204 点（坏 35、高台付坏 4、甕類 159、小形甕 6）、鉄製品 1 点（釘）が出土している。88・89・91 は東コーナー部、90 は南西壁付近の覆土上層からそれぞれ出土している。M39 は覆土中から出土している。また、重さ 435 ~ 1,661 g の砂岩や花崗岩が 6 点覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。

第 34 号住居跡出土遺物観察表（第 59 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
88	土師器	坏	13.9	4.8	6.4	長石・石英・雲母	にい赤褐色	普通	体部内面へラözき 体部下端回転へラözり 成型	覆土上層	95% PL26
89	土師器	坏	[15.0]	(4.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・鐵	橙	普通	体部内面へラözき	覆土上層	30%
90	土師器	甕	[20.0]	(11.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にい青褐色	普通	口縁部外・内面織子テ 体部外側へラözり 接觸燒成 体部内面のヘラözり	覆土上層	5%
91	土師器	甕	[15.5]	(11.2)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面織子テ 体部外側横位のヘラözり 体部内面へラözき	覆土上層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	等級	出土位置	備考
M 39	釘	(66)	1.0	6.8~0.8	(20.3)	鉄	前面は方形	覆土中	PL34

第 35 号住居跡（第 60 図）

位置 調査区分南西部の D 3 b1 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 178・210 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.60 m、短軸 2.75 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 50° - E である。壁高は 10 ~ 18 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

竈 北東壁のやや南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 70 cm で、燃焼部幅は 44 cm である。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 30 cm 堀り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

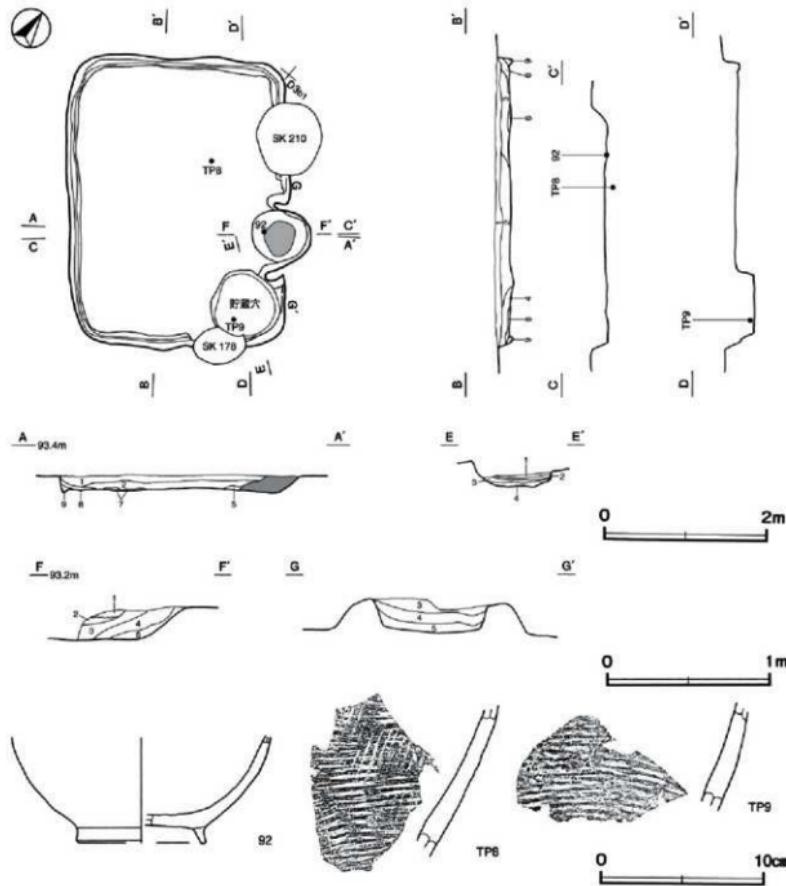
竈土層解説

1 黒褐色	燃土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	4 極暗赤褐色	燃土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2 黒褐色	炭化粒子・粘土粒子少量、燃土粒子微量	5 極暗赤褐色	燃土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
3 暗褐色	燃土ブロック・炭化粒子・粘土粒子少量		

貯蔵穴 南東コーナー部に位置している。径 84 cm の円形で、深さは 23 cm である。床面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック・炭化物少量、燃土粒子微量	3 黒褐色	粘土ブロック・粘土粒子・炭化粒子少量
2 にい青褐色	粘土ブロック中量、燃土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	燃土ブロック中量、炭化材・粘土ブロック少量



第60図 第35号住居跡・出土遺物実測図

覆土 9層に分層できる。多くの層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 にふい黄褐色	粘土ブロック・炭化物少量	6 黒褐色	炭化物中量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色	粘土粒子少量、炭化物、焼土粒子微量	7 にふい黄褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子、炭化粒子微量
3 にふい黄褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	8 黒褐色	炭化物中量、粘土ブロック、焼土粒子少量
4 暗褐色	炭化物少量、粘土ブロック、焼土粒子少量	9 握色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量
5 黒褐色	粘土ブロック・炭化物、焼土粒子少量		

遺物出土状況 土師器片111点(壺・高台付椀15、甕類96)、須恵器片2点(甕類)が出土している。92は竈の火床面から出土している。TP9は貯蔵穴の覆土下層から、TP8は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。

第35号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土器	高台碗	-	(6.5)	(7.8)	長石・石英・葉母・小種	灰褐色	普通	体部内面摩滅へつ磨きを残す	壁火床面	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 8	須恵器	甕	長石・石英	暗灰黃	体部外面横位と斜位の叩き 内面ナデ	覆土中層	PL30
TP 9	須恵器	甕	長石・石英	黃灰	体部外面横位の平行叩き 内面ナデ	軽石蓋土下層	PL30

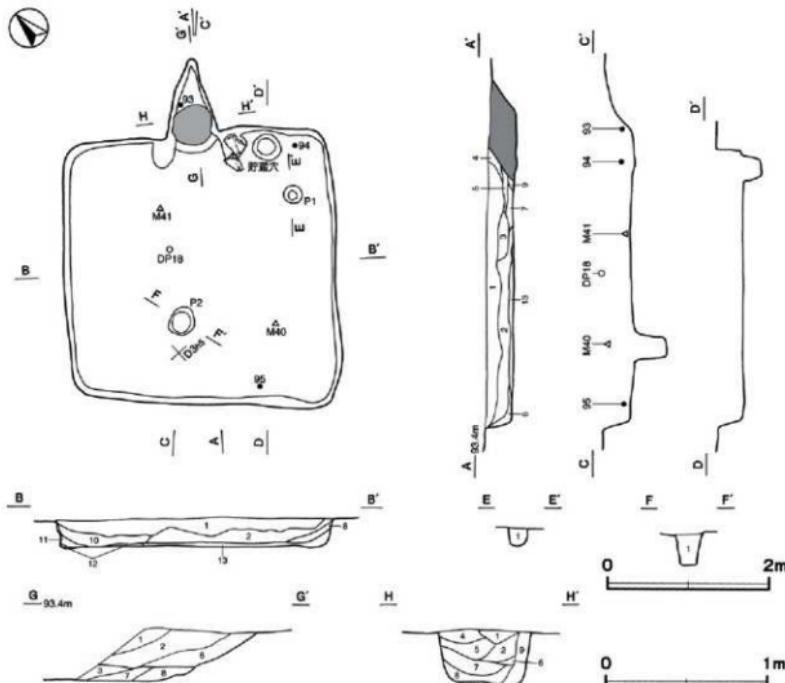
第36号住居跡（第61・62図）

位置 調査区北南部のD 3g5区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.49m、短軸3.36mの方形で、主軸方向はN-40°-Eである。壁高は30~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

窓 北東壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで114cmで、燃焼部幅は54cmである。袖部は地山の粘土を掘り残して構築されている。右袖部付近から窓の補強材であったと考えられる安山岩が出土して



第61図 第36号住居跡実測図

いる。火床部は床面から4cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変化している。煙道部は壁外に94cm掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

遺土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量
2 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量	7 黒褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック少量
3 黒褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	8 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック中量	9 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック少量
5 暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量	10 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック微量

ピット 2か所。P1は深さ22cmで、規模や配置から主柱穴である。P2は深さ38cmで性格不明である。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

1 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
-------	----------------------

貯蔵穴 東コーナー部に位置している。長軸36cm、短軸30cmの楕円形で、深さは12cmである。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

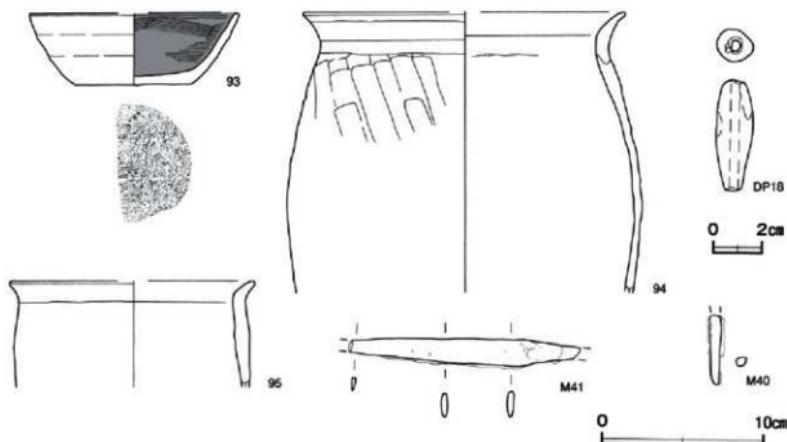
覆土 13層に分層できる。各層に粘土ブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	8 黒褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量
2 黒褐色	粘土ブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量	9 暗褐色	粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化物微量
3 黒褐色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	10 暗褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子微量
4 暗褐色	炭化物、焼土粒子・粘土粒子少量	11 暗褐色	粘土ブロック多量、炭化ブロック中量
5 暗褐色	粘土ブロック・炭化物、焼土粒子少量	12 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量	13 黒褐色	粘土ブロック中量、燒土ブロック少量
7 黒褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片82点(环7, 壺類72, 小形壺3)、土製品1点(管状土錘)、鉄製品2点(不明鉄製品、刀子)が出土している。95は南コーナー部付近の覆土下層から、93は窓の煙道部から出土している。94は東コーナー部付近の覆土中層から出土している。M41は中央部の覆土下層、DP18、M40は中央部の覆土上層から出土している。また、重さ164～1,152gの砂岩、デイサイトや泥岩が4点覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。



第62図 第36号住居跡出土遺物実測図

第36号住居跡出土遺物観察表（第62図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	土師器	环	[128]	4.4	7.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぼい橙	普通	体部内面ヘラ削り 体部下端回転ヘラ削り	縦溝部	40%
94	土師器	甕	[198]	(17.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・小礫	にぼい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外曲ヘラ削り、輪	覆土中層	30% PL29
95	土師器	小形甕	[149]	(16.5)	-	長石・石英・雲母・小礫	にぼい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土下層	5%

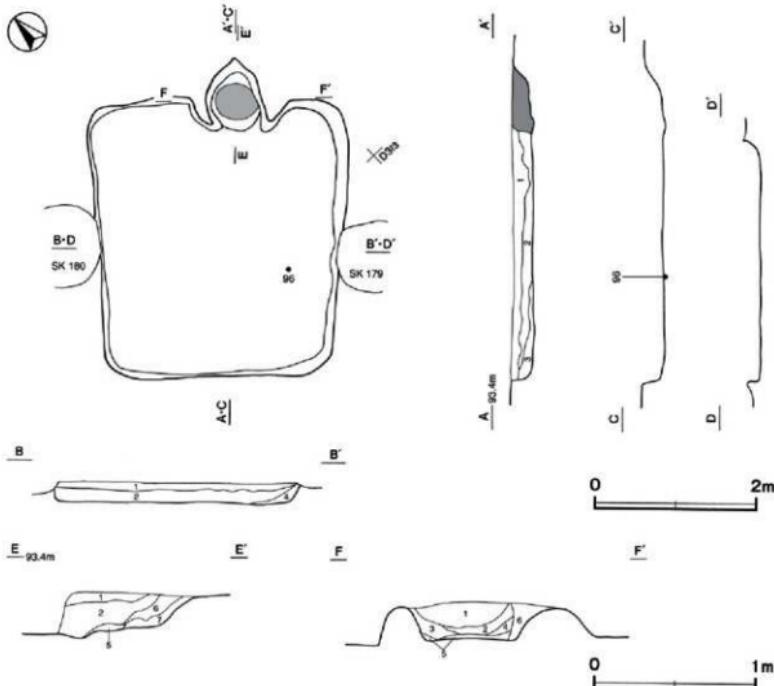
番号	器種	長さ	幅	孔深	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DPI18	管状土錐	4.6	1.5	0.4	8.9	長石・石英・雲母	一方から穿孔 孔端部ナデ	覆土上層	PL30

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M-40	不明鉄製品	(4.3)	0.8	0.7	(7.6)	鉄	棒状の不明鉄製品	覆土上層	PL34
M-41	万子	(14.4)	1.7	0.2~0.7	(26.5)	鉄	両端部小破面	覆土下層	PL34

第37号住居跡（第63・64図）

位置 調査区南部のD 3e2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第179・180号土坑に掘り込まれている。



第63図 第37号住居跡実測図

規模と形状 長軸 3.48 m、短軸 3.14 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 45° - E である。壁高は 20 ~ 22 cm で、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁のやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 92 cm で、燃焼部幅は 50 cm である。

袖部は地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から 4 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に 50 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

遺土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック中量、炭化物・白色粒子少量 粘土ブロック微量
2	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量
4	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
5	暗褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子微量
6	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
7	暗褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子少量

覆土 4 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	黒褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量
2	暗褐色	粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
3	にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量
4	暗褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土器片 36 点（坏 17, 高台付坏 5,

甕類 14）が出土している。96 是南東壁寄りの床面

から出土している。また、重さ 409 g のディサイ

トや、3,240 g の砂岩が覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。

第 37 号住居跡出土遺物観察表（第 64 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
96	土器	甕	(18.5)	(17.7)	-	瓦石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面擦ナメ 体部外側へラブリ 体部内面へナマコ	指痕有 外側焼付有	床面	40% PL29

第 39 号住居跡（第 65 図）

位置 調査区南部の D 3e6 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 4 号方形窓穴遺構、第 187 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部を第 4 号方形窓穴遺構に掘り込まれているが、長軸 3.50 m、短軸 3.32 m の隅丸方形である。

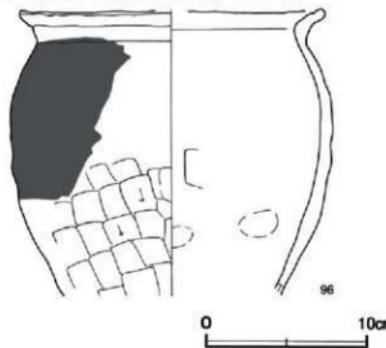
主軸方向は N - 60° - E である。壁高は 18 ~ 20 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。燃焼部幅は 35 cm のみが確認された。袖部は左袖のみが遺存しており、地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から 4 cm ほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 52 cm 掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

遺土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	4	暗褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量
2	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量	5	にぶい黄褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土ブロック少量
3	黒褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量			



第 64 図 第 37 号住居跡出土遺物実測図

ピット 2か所。P 1は深さ10cmで、南西壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 2は深さ10cmで性格不明である。

ピット土層解説 (P1・P2共通)

1 岩 色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

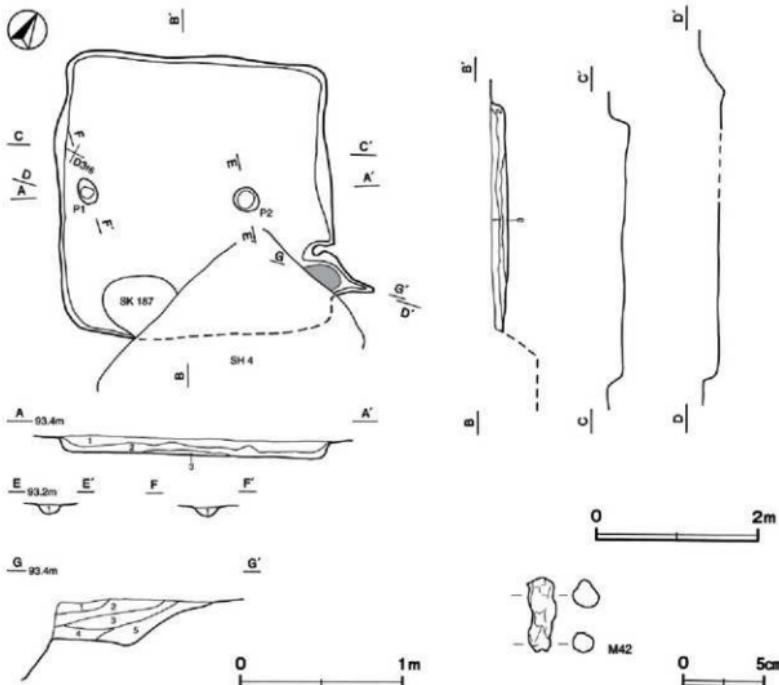
覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 岩 褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 3 黒褐 色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 岩 褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片40点(环4、甕類36)、鉄製品1点(釘)が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。M42は覆土中から出土している。また、重さ632gの花崗岩や、776gのデイサイトが覆土中から出土しているが、使用痕はなく用途については不明である。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、9世紀後葉に比定できる第5号住居跡と主軸及び規模がほぼ同じであることから、9世紀後葉と考えられる。



第65図 第39号住居跡・出土遺物実測図

第39号住居跡出土遺物観察表(第65図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 42	不明鉄製品	4.7	1.9	13~16	14.8	鉄	棒状の不明鉄製品	覆土中	PL34

第42号住居跡（第66図）

位置 調査区南部のD.3g2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第46号住居跡、第186・208号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 南西コーナー部が調査区域外へ延びているが、平面形は長軸408m、短軸3.64mの隅丸長方形である。主軸方向はN-35°-Eである。壁高は4~20cmで、緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cmで、燃焼部幅は42cmである。袖部は左袖部のみ遺存しており、地山の粘土を掘り残して構築されている。火床部は床面から4cmほどくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に80cm掘り込まれ、火床部から緩斜して立ち上がっている。

電土層解説

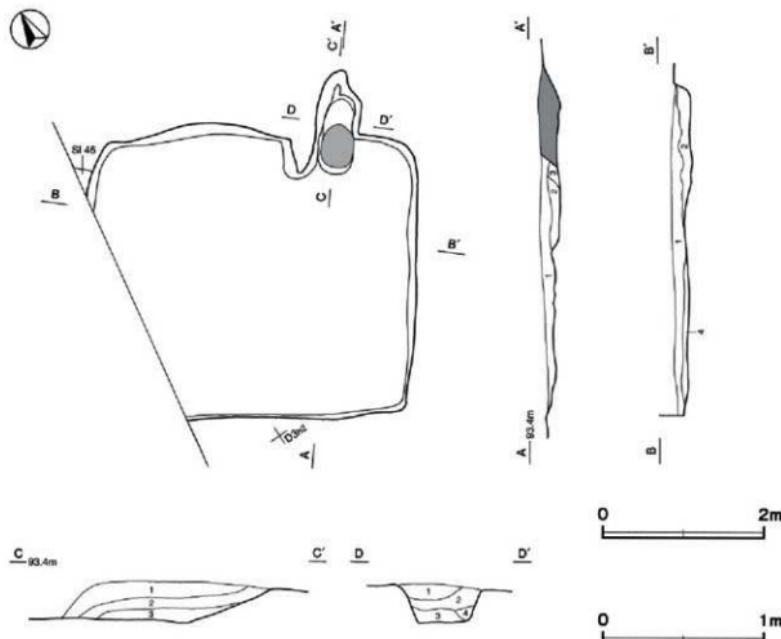
1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	3 暗赤褐色 焃土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子少量
2 暗褐色 焃土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	4 暗褐色 焃土ブロック・粘土ブロック少量

覆土 4層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 焃土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	3 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 焃土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	4 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片45点（環9、甕類36）が出土した。土器片は細片のため図示できなかった。



第66図 第42号住居跡実測図

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、土器の様相から10世紀代に北定される。

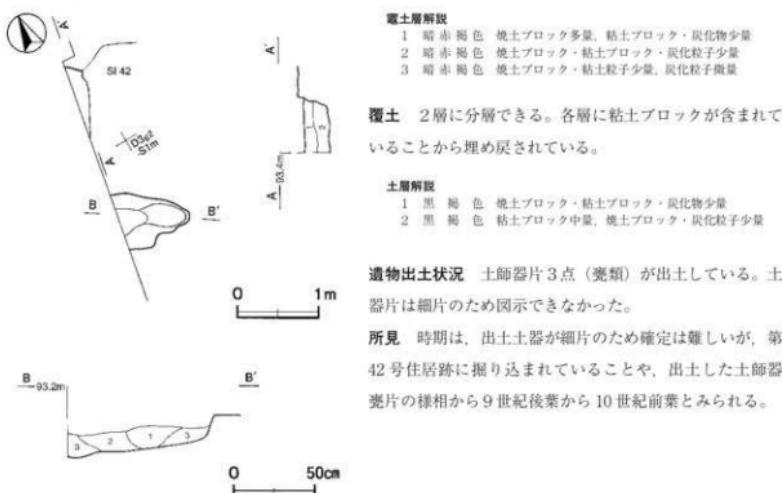
第46号住居跡（第67図）

位置 調査区南部のD 3gl区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第42号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 大半が調査区域外へ延びており、北東部のコーナー部と竈の煙道部しか確認できなかった。規模及び平面形は不明である。壁高は30cmで、外傾して立ち上がっている。

竈 煙道部から、南東向きの竈であったと推測できる。煙道部は、調査区域外から90cmを確認し、火を受けた赤変し、緩斜して立ち上がっている。



遺物出土状況 土師器片3点（壺類）が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、第42号住居跡に掘り込まれていることや、出土した土師器片の様相から9世紀後葉から10世紀前葉とみられる。

第67図 第46号住居跡実測図

第48号住居跡（第68図）

位置 調査区東部のC 4h8区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第28号住居、第2号掘立柱建物、第147・167号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びているため、東西軸は6.98mで、南北軸は4.02mしか確認できなかった。平面形は方形もしくは長方形と推測でき、主軸方向はN - 66° - Eである。壁高は40～46cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。

ピット 4か所。P 1～P 3は深さ16～27cmで、性格不明である。P 4は深さ18cmで、南北壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。

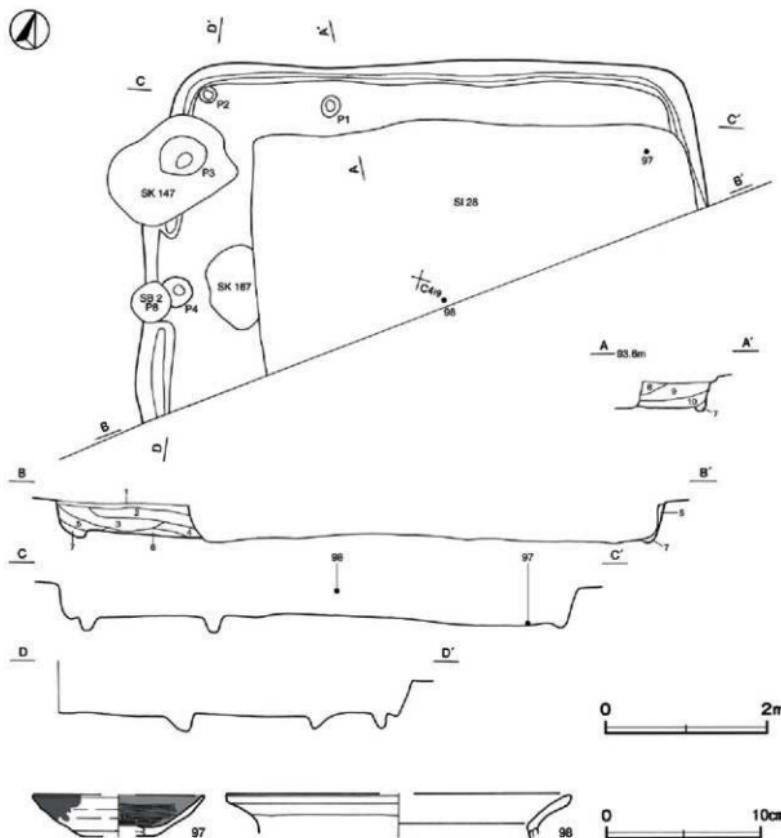
覆土 10層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	6	暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量・炭化粒子微量
2	暗褐色	粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	7	暗褐色	粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化粒子微量
3	にぶい黄褐色	粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量	8	黒褐色	粘土ブロック中量・焼土粒子微量
4	にぶい黄褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量・焼土ブロック微量	9	暗褐色	粘土ブロック少量・炭化粒子微量
5	暗褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	10	暗褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 94 点 (坏 18, 壺類 76), 須恵器片 1 点 (壺類) が出土している。97 は北東コーナー部付近の床面から, 98 は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉に比定できる。



第 68 図 第 48 号住居跡・出土遺物実測図

第48号住居跡出土遺物観察表（第68図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
97	土陶器	环	[10.4]	2.5	[42]	長石・雲母・小礫	橙	普通	体部内面へラ書き 体部外縁付着	床面	30%
98	土陶器	甕	[21.0]	[27]	-	長石・石英・赤色 粒子	にい・赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	5%

表3 平安時代 堅穴住居跡一覧表

番号	位置	平面形	主軸方向	規 模		埋 高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設			覆 土	主な出土遺物	時 期	備 考	
				長軸×短軸(m)	(m)				柱穴	出入口	ビット	印・墨				
1	B 24h	圓(丸)	N - 46° - E	4.00 × 3.30	20 - 32	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片、刀子	10世紀 前期	本跡 → SK26
3	C 3c2	長方形	N - 50° - E	4.94 × 3.80	6 - 8	平坦	-	-	-	1	甕1	-	人為	土陶器片、羽口、	10世紀 前期	SK34 - 52・53 → SK40
4	C 2g0	圓丸方形容	N - 53° - E	4.24 × 3.92	8 - 12	平坦	-	-	-	2	甕1	-	人為	土陶器片、滑状土	10世紀 後半	
5	C 2c2	圓丸方形容	N - 60° - E	3.70 × 3.49	16 - 22	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片、刀子	9世紀 後半	SK82 → 本跡
6	B 2b6	方形	N - 57° - E	3.98 × 3.88	46 - 50	平坦	-	-	-	1	甕1	2	人為	土陶器片、須恵器片、鐵石	10世紀 中期	本跡 → SK105 - 106・107
7	B 3j1	長方形	N - 65° - E	4.54 × 3.74	8 - 12	平坦	-	-	-	1	甕1	-	人為	土陶器片、須恵器片	10世紀 後半	SI 14 - 本跡 → SK90
8	C 3d3	長方形	N - 55° - E	3.52 × 2.86	4 - 6	平坦	-	-	-	2	甕2	1	人為	土陶器片、須恵器片	10世紀 後半	
9	B 3d7	長方形	N - 25° - W	3.10 × 1.78	32 - 38	平坦	-	-	-	-	1	人為	土陶器片、須恵器片、刀子、銅鏡	10世紀 中期	SI 10 - 本跡	
10	B 3f7	長方形	N - 30° - W	3.56 × 1.94	32 - 40	平坦	-	-	-	1	人為	-	人為	土陶器片、刀子	10世紀 後半	本跡 → SI 9
11	C 3a7	長方形	N - 60° - E	4.44 × 3.02	20 - 30	平坦	-	-	-	2	甕2	1	人為	土陶器片、石皿	10世紀 後半	本跡 → SK104
12	C 3b5	長方形	N - 35° - W	2.88 × 2.20	8 - 10	平坦	-	-	-	1	甕1	-	人為	土陶器片、支脚	10世紀 後半	本跡 → SK95
13	C 3a5	長方形	N - 68° - E	3.18 × 2.56	3 - 8	平坦	-	-	-	2	甕1	1	人為	土陶器片	10世紀 後半	
14	B 3j1	長方形	N - 24° - W	[2.52] × 2.12	18 - 20	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片	9世紀 後半	本跡 → SI 7
15	B 3i4	圓丸方形容	N - 73° - E	3.30 × 3.30	22 - 26	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、鍾	10世紀 後半	SK56 → 本跡
16	C 3b2	長方形	N - 33° - W	2.69 × 1.30	22 - 26	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片	10世紀 前半	本跡 → SI 18 - 20・SK100・101
17	C 3c2	長方形	N - 34° - W	3.50 × 0.90	14 - 20	平坦	-	-	-	-	1	人為	土陶器片	9世紀後半 10世紀前半	SI 18 - 20	
18	C 3b2	長方形	N - 59° - E	5.50 × 4.31	16 - 39	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片、支脚	10世紀 前半	SI 16 - 17・SK102 → 本跡 SI 20 - SK300 - 100
20	C 3c3	方形	N - 32° - E	4.14 × 4.00	12 - 22	平坦	-	-	-	-	1	人為	土陶器片、鍼	11世紀 後半	SI 16 - 17・SK18 - 20	
21	C 5e1	長方形	N - 15° - W	1.48 × 1.04	46 - 50	平坦	-	-	-	-	1	人為	土陶器片	9世紀後半 10世紀前半	SK102 → 本跡	
22	C 4f7	長方形	N - 70° - E	6.32 × 5.04	30 - 32	平坦	-	1	1	5	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片、刀子、銅鏡	10世紀 後半	SI 21 - 23 → 本跡・SK108 - 151・191 - 195
23	C 4e7	長方形	N - 44° - E	4.10 × 4.06	30 - 48	平坦	-	一部	3	1	1	人為	土陶器片、須恵器片、刀子、ガラス質浮	10世紀 後半	SI 22 - SK194	
24	C 4e5	長方形	N - 13° - W	2.90 × 2.10	20 - 24	平坦	-	2	-	-	1	人為	土陶器片	10世紀 後半		
25	C 4e9	長方形	N - 25° - W	[3.09] × 1.58	20 - 26	平坦	-	1	-	-	1	人為	土陶器片	10世紀 後半		
26	C 4a1	方形	N - 62° - E	4.08 × 3.86	26 - 30	平坦	-	1	-	1	甕1	-	人為	土陶器片、刀子、鉄製品、滑状土	10世紀 後半	本跡 → SK168 - 182
27	C 3g0	長方形	N - 60° - E	3.54 × 3.12	30 - 32	平坦	-	1	-	1	甕1	-	人為	土陶器片、須恵器片、滑状土	10世紀 後半	
28	C 4i9	長方形	N - 67° - E	5.68 × 2.80	38 - 50	平坦	-	-	-	2	甕1	-	人為	土陶器片、須恵器片、輪郭治溝	10世紀 後半	SI 48 - SK167 → 本跡
30	C 3j2	圓丸方形容	N - 45° - E	3.56 × 3.50	18 - 24	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片	9世紀 後半	
31	D 3a9	長方形	N - 82° - E	[5.48] × 5.08	11 - 30	平坦	-	1	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片、滑状土	9世紀 後半	SK185 - 215 → 本跡
32	D 3b3	方形	N - 43° - E	3.82 × 3.60	30 - 36	平坦	-	-	2	甕1	1	人為	土陶器片、土製品、鐵製品、銅鏡	9世紀 後半		
34	D 3e7	長方形	N - 60° - E	5.18 × 4.15	22 - 32	平坦	-	一部	-	2	甕1	1	人為	土陶器片、鉄製品	10世紀 後半	
35	D 3b1	圓丸方形容	N - 55° - E	3.60 × 2.75	10 - 18	平坦	全周	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、須恵器片	9世紀 後半	本跡 → SK178 - 210
36	D 3g5	方形	N - 40° - E	3.49 × 3.36	30 - 34	平坦	-	1	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、滑状土	10世紀 後半	
37	D 3e2	圓丸方形容	N - 45° - E	3.48 × 3.14	20 - 22	平坦	-	-	-	1	甕1	1	人為	土陶器片	10世紀 後半	
39	D 3e6	圓丸方形容	N - 60° - E	3.50 × 3.32	18 - 20	平坦	-	1	-	1	甕1	1	人為	土陶器片、鉄製品	9世紀 後半	SI 46 - SK187
42	D 3g2	長方形	N - 35° - E	4.08 × 3.64	4 - 20	平坦	-	-	-	1	甕1	-	人為	土陶器片	10世紀代 後半	SI 46 - SK186 → 本跡
46	D 3g1	不明	-	-	30	平坦	-	-	-	1	甕1	-	人為	土陶器片	9世紀後半 10世紀前半	本跡 → SI 42
48	C 4h8	長方形	N - 66° - W	6.98 × 4.02	40 - 46	平坦	全周	-	1	3	-	-	人為	土陶器片、須恵器片	9世紀 後半	本跡 → SI 28 - SK32・化粧

(2) 工房跡

第1号住居兼鍛冶工房跡 (SI 29) (第 69 ~ 73 図)

位置 調査区中央部の C 317 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.46 m、短軸 2.98 m の長方形で、主軸方向は N - 58° - E である。壁高は 8 ~ 10 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

竈 北東壁の南寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 120 cm で、燃焼部幅は 48 cm である。袖部は地山の粘土を掘り残して基部としている。右袖部付近から補強材と考えられる板状の砂岩が出土している。火床部は床面とほぼ同じ高さを使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 58 cm 掘り込まれ、火床部から外傾して立ち上がっている。

電土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック・燒土粒子少量	3 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	粘土ブロック少量、燒土粒子微量	4 暗褐色	燒土粒子・粘土粒子中量、炭化粒子少量

鍛冶炉 炉はほぼ中央部に付設され、規模は径 41 cm の円形で、床面を 7 cm 掘りくぼめた火床炉である。炉面及び炉壁は被熱を受けて赤変硬化している。

鍛冶炉跡土層解説

1 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量	3 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量、白色粒子微量		

ピット 7か所。P 1 は深さ 12 cm、P 2 は深さ 8 cm、P 3 は深さ 10 cm で規模や配置から主柱穴である。P 4・P 5 は深さ 4 cm ~ 18 cm で性格不明である。P 6 は長径 1.3 m、短径 1.2 m、深さ 16 cm の土坑状で性格不明である。P 7 は径 50 cm の円形で、深さは 8 cm である。鍛冶炉の南部に隣接することや、粒状漆出土分布（第 71 図）や鍛造剥片出土分布（第 72 図）状況から、金床石設置跡と推測できる。

土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量	6 にい黄褐色	粘土ブロック少量、燒土粒子微量
2 暗褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
3 黄褐色	粘土ブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	燒土ブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量
4 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量		・白色粒子微量
5 黄褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量

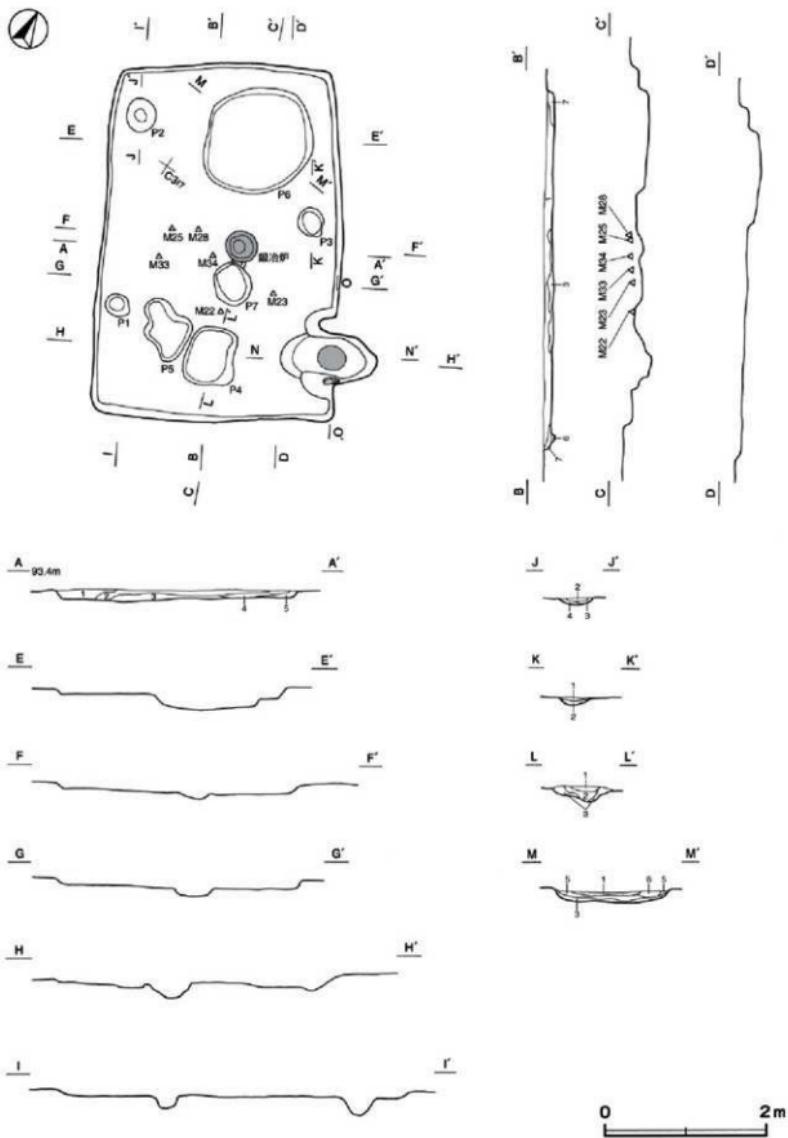
覆土 7 層に分層できる。各層に粘土ブロックが含まれていることから理め戻されている。

土層解説

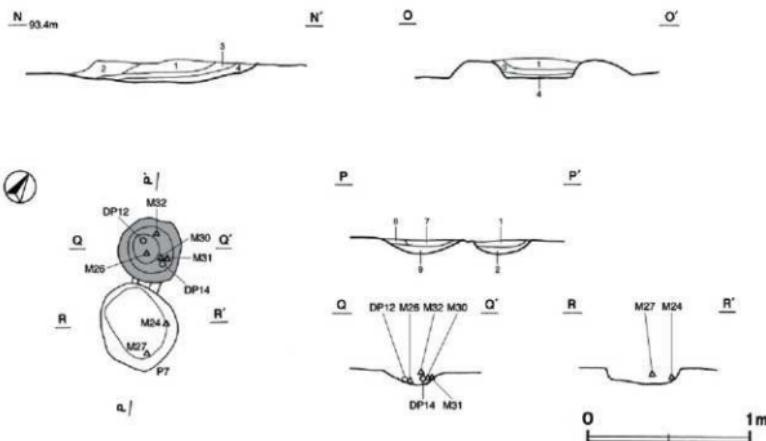
1 暗褐色	粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量	5 黄褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量	6 黄褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子微量
3 にい黄褐色	粘土ブロック少量、燒土粒子微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
4 にい黄褐色	粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 22 点（坏 5、甕類 17）、土製品 1 点（羽口）、鉄製品 3 点（刀子 2、釘 1）、椀形鍛冶漆 5 点（284.1 g）、鍛冶漆 5 点（37.9 g）、粒状漆（28.36 g）、鍛造剥片（601.59 g）、炉壁、粘土質溶解物が出土している。M22・M23・M25・M28・M33・M34 は中央部の覆土中層から出土している。DP12、DP14 は鍛冶炉床から、M26・M30・M31 は鍛冶炉の覆土中層から、M32 は鍛冶炉内の覆土上層から出土している。M24・M27 は P 7 の覆土中層から出土している。M35・M36 は P 7 から南東方面に向けての覆土中から多く出土している。DP13、M29 は覆土中から出土している。

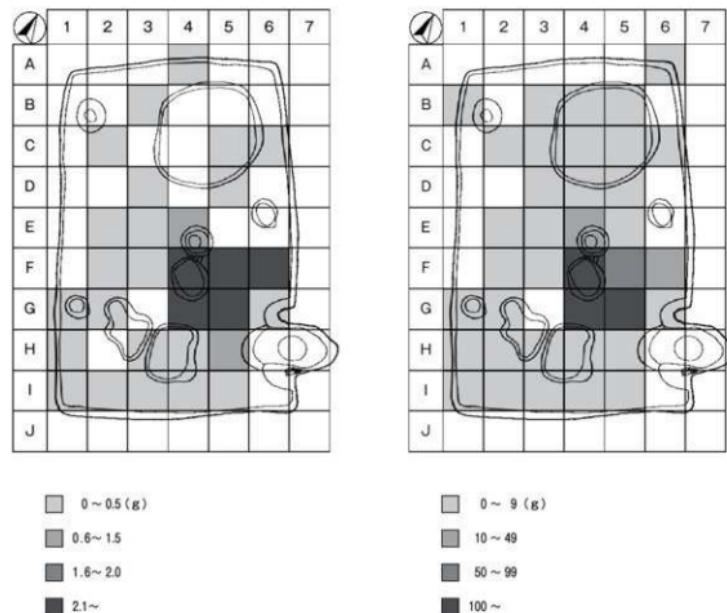
所見 竈と鍛冶炉を併設し、鍛錬鍛冶（小鍛冶）として鐵器の鍛造加工を行っていたと考えられる住居兼鍛冶工房跡である。中央部に位置している鍛冶炉は作り直した跡は確認できなかった。時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、内面を黒色処理された土師器坏の様相から 9 世紀後葉から 10 世紀前葉とみられる。



第69図 第1号住居兼鍛冶工房跡実測図(1)

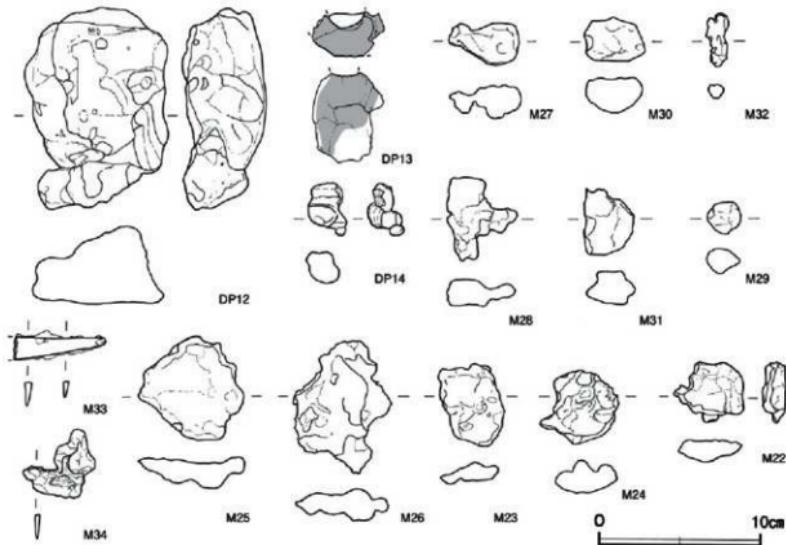


第70図 第1号住居兼鍛冶工房跡実測図（2）



第71図 粒状滓出土分布図

第72図 鍛冶剝片出土分布図



第73図 第1号住居兼鍛冶工房跡出土遺物実測図

第1号住居兼鍛冶工房跡出土遺物観察表（第73図）

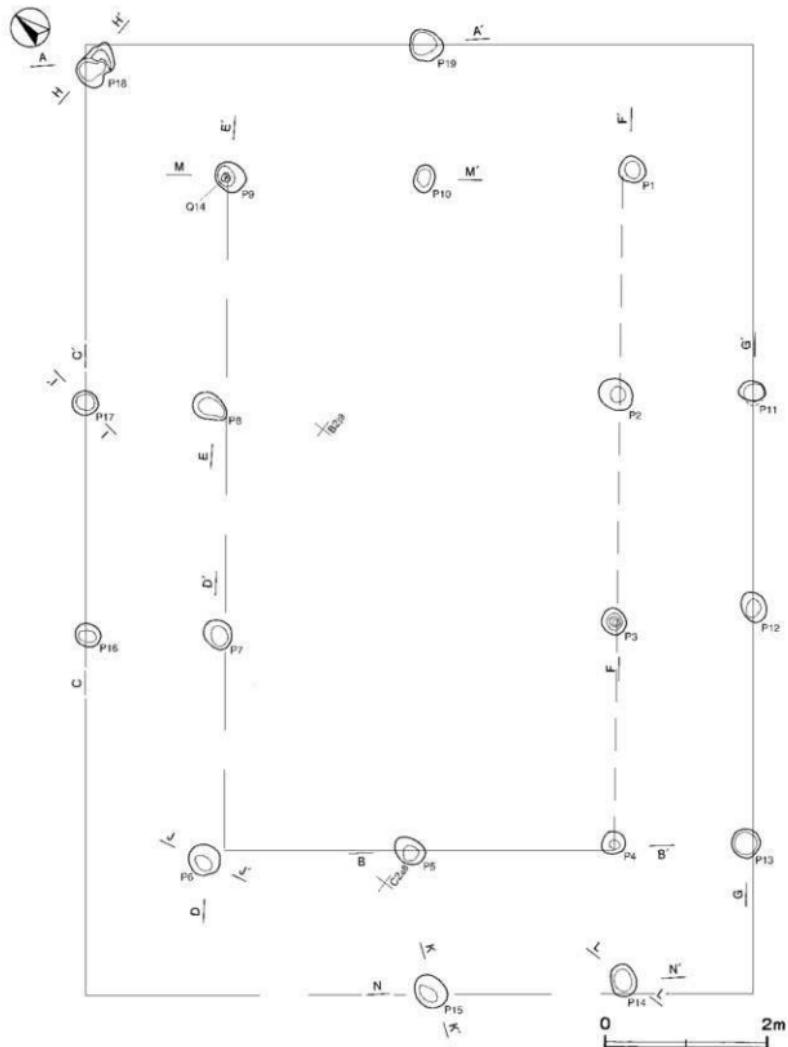
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP12	鉢	(8.3)	(5.9)	(3.4)	(95.2)	貝石・石英	内面表皮黒色ガラス質津化	鍛冶印床	
DP13	鉢口	(3.7)	(2.9)	(1.9)	(122)	長石・石英・赤色 粒子	先端部小破片 ガラス質津付着	覆土中	
DP14	陶土鉢脚	(2.2)	(1.6)	(1.4)	(3.4)	長石・石英・赤色 粒子	表皮の一部剥落	鍛冶印床	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 22	鍛治津	3.8	4.4	1.4	27.8	鉄	極小の楕形	覆土中層	
M 23	鍛治津	5.1	4.1	1.4	(35.0)	鉄	極小の楕形	覆土中層	
M 24	鍛治津	4.7	4.8	2.0	(44.8)	鉄	極小の楕形	鉄石右隣接 覆土中層	PL33
M 25	鍛治津	6.5	1.9	85.7	鉄	ほぼ完形の極小楕形	覆土中層	PL33	
M 26	鍛治津	8.2	6.1	2.0	90.5	鉄	極小楕形	鍛治印 覆土中層	PL33
M 27	鍛治津	1.8	3.0	1.5	9.2	鉄	小塊状の治津	鉄石右隣接 覆土中層	
M 28	鍛治津	3.5	2.8	1.1	12.3	鉄	側面や下面には木炭板や砂利がのみ込み	覆土中層	
M 29	鍛治津	1.4	1.4	1.1	1.7	鉄	小塊状	覆土中	
M 30	鍛治津	1.8	2.5	1.4	5.3	鉄	小塊状	鍛治印 覆土中層	
M 31	鍛治津	2.7	2.1	1.4	9.4	鉄	完形	鍛治印 覆土中層	
M 32	釤カ	2.2	1.0	0.6	1.8	鉄	下手側の端部の断面は方形	鉄石右隣接 覆土上層	
M 33	刀子	(5.7)	(1.4)	0.4	(13.8)	鉄	刀子の茎部無破片	覆土中層	PL34
M 34	刀子	(4.2)	4.5	0.2~0.3	(22.0)	鉄	刀子の刃部破片 薄板状	覆土中層	PL34
M 35	粒状津	-	-	-	28.36	鉄	球状の津	覆土中	
M 36	鍛造剥片	-	-	-	601.59	鉄	薄板状の剥離片	覆土中	

(3) 掘立柱建物跡

当時代と考えられる掘立柱建物跡を確認した。以下、遺構の特徴と遺物について記述する。

第1号掘立柱建物跡（第74～76図）

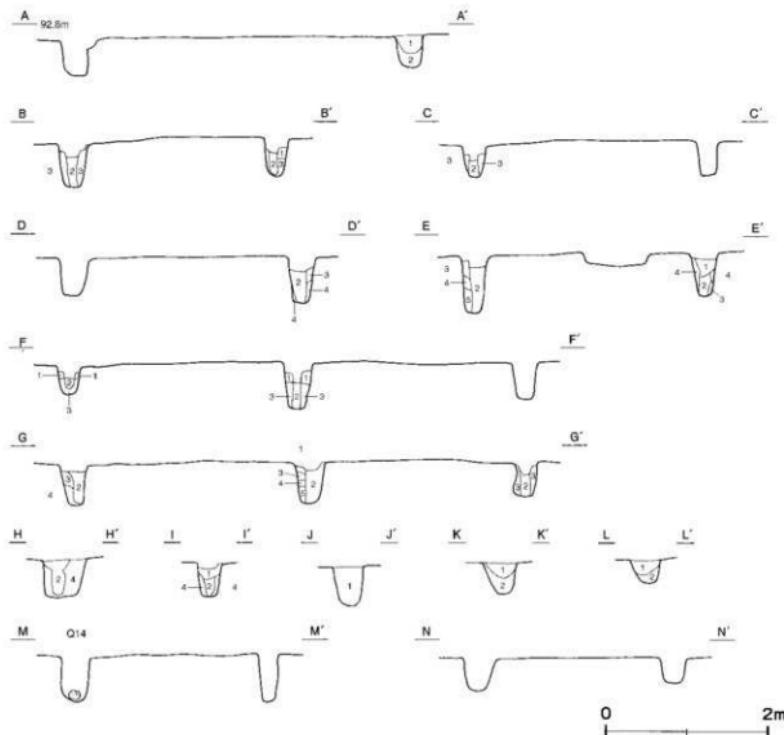


第74図 第1号掘立柱建物跡実測図（1）

位置 調査区北西部のB 2 h9～C 2 a9区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の身舎に四面庇が付く側柱建物跡で、桁行方向がN-55°-Eの東西棟である。規模は身舎が桁行838m、梁行482mで面積は40.39m²である。南・北庇の出は180m(6尺)、東の庇の出は150m(5尺)であり、西の庇の出は174m(6尺)である。東・西・南・北の庇を含めた桁行きは11.62m、梁行きは8.32mで面積は90.43m²である。北庇、東庇、西庇の一部の柱穴は確認できなかった。身舎の柱間寸法は、桁行が北妻から2.98m(10尺)・2.68m(9尺)・2.68m(9尺)とはば均一であり、柱筋もほぼ通っている。梁行は北平から2.40m(8尺)・2.44m(8尺)とはば均一であり、柱筋はほぼ揃っている。庇の柱間寸法は、2.56m(8.5尺)～4.42m(14.5尺)で不均等である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 19か所。P 1からP10は身舎の柱穴である。平面形は円形または橢円形で、径28～45cmである。深さは34～70cmである。P 9の底面からは凹石が出土しており、地下式礎石と考えられる。P11～P19は庇の柱穴である。平面形は円形、橢円形または不整橢円形であり長径30～56cm、短径26～38cmである。深さは28～52cmである。第1層は柱の抜き取り痕、第2層は柱痕跡、3～5層は掘方への埋土である。



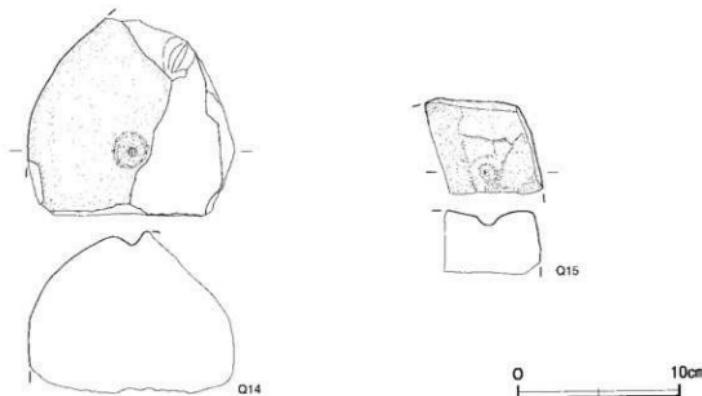
第75図 第1号掘立柱建物跡実測図（2）

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1	暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	4	暗褐色	粘土ブロック中量・炭化粒子微量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	5	褐色	粘土ブロック中量
3	暗褐色	粘土ブロック中量			

遺物出土状況 土師器片1点（甕）、石器2点（凹石）が出土している。甕片は、P12の覆土中から出土したが、細片のため図示できなかった。Q14はP9の底面から、Q15はP18の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、出土した甕片の様相や、本跡と隣接しており軸線が同じである第1号住居跡や第5号住居跡との関連から9世紀後葉から10世紀前葉と推測される。小形の倉庫と考えられる。



第76図 第1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第76図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	凹石	(122)	(128)	(10.07)	(1.988)	砂岩	円痕表1か所	P 9底面	
Q 15	凹石	(6.1)	(7.2)	(3.9)	(300)	砂岩	円痕表1か所	P18 覆土中	

(4) 方形堅穴遺構

当時代と考えられる方形堅穴遺構2基を確認した。以下、遺構の特徴と遺物について記述する。

第1号方形堅穴遺構（SI 2）（第77図）

位置 調査区北西部のB 216区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第51号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.56mで、短軸2.2mの長方形で、長軸方向はN-60°-Eである。壁高は10~24cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部からは炭化材、中央部から東コーナー部にかけては焼土が広がる範囲が確認された。

ピット 深さは3cmで、東コーナー部に位置している。性格は不明である。

ピット土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物少量

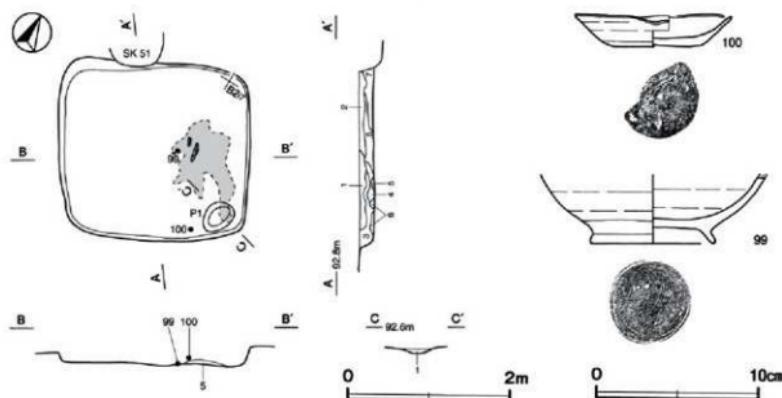
覆土 7層に分層できる。各層に焼土ブロックや粘土ブロックが含まれ、不自然な堆積状況から埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量	4 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量
2 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	5 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
3 黒褐色	炭化粒子中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量	6 黒褐色	粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片38点(坏20、高台付椀3、甕類15)、須恵器片1点(甕類)が出土している。99は中央部の床面から、100は南壁際の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。床面の中央部に炭化材がみられることや、中央部から東コーナー部にかけて焼土が広がる範囲があることから、焼失住居と考えられる。



第77図 第1号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第1号方形竪穴遺構遺物観察表 (第77図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
99	土器	高台付椀	-	(4.3)	7.6	粘土・石英・赤色	黒褐色	普通	底部斜軸切り 体部外・内面二次被熱痕	床面	40%
100	土器	皿	[97]	1.9	4.8	粘土・石英・赤色	青褐色	普通	口縁部に一部つまみ痕 体部外・内面クロナデ	覆土下層	45% PL28

第2号方形竪穴遺構 (SI 33) (第78図)

位置 調査区南部のD 3d8区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第181号土坑を掘り込み、第177号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸204m、短軸1.94mの方形で、長軸方向はN-50°-Wである。壁高は上部が掘削されて

いる為、4～12cmしか確認できなかった。壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。床面の中央部からは焼土、南部からは炭化物の抜がる範囲が確認された。

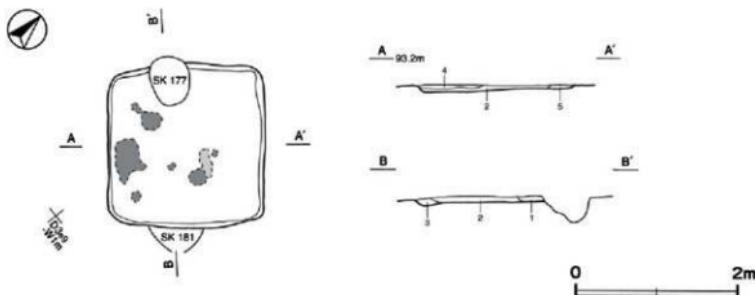
覆土 5層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1	褐	色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量	3	暗	褐	色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗	褐	色	4	暗	褐	色	炭化粒子微量
				5	暗	褐	色	粘土ブロック・炭化粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 16 点（坏 5、壺類 11）、須恵器片 1 点（壺）が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、内面を黒色処理された坏の様相から 9 世紀後葉とみられる。住居と考えられる。



第 78 図 第 2 号方形竪穴遺構実測図

表 4 平安時代 方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		底面	側面	覆土	主な出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)						
1	B 26	N - 60° - E	長方形	256 × 220	10 ~ 24	平坦	直立	人為	土師器	10世紀前葉	本跡 → SK51 新旧関係 (古→新)
2	D 3d8	N - 30° - W	方形	204 × 194	4 ~ 12	平坦	外傾	人為	土師器片	9世紀後葉 ~ 10世紀前葉	SK181 → 本跡 → SK177

(5) 土坑

当時代と考えられる土坑 106 基を確認した。ここでは、特徴ある 23 基について記述し、その他 83 基については、一覧表と実測図及び土層解説を記載する。

第 2 号土坑（第 79 図）

位置 調査区西部の C 2b8 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 170 m、短軸 0.98 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 26° - W である。深さは 38cm で、底面はほぼ平坦である。壁は直立している。

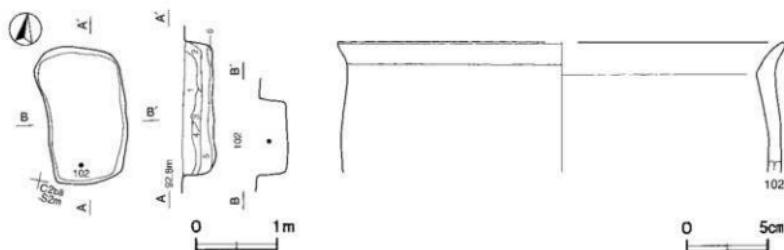
覆土 6 層に分層できる。粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	炭化物・燒土粒子微量	4 黒褐色	炭化物少量
2 暗褐色	粘土ブロック・炭化物微量	5 暗褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量
3 黒褐色	炭化物少量、燒土粒子微量	6 暗褐色	粘土ブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 18 点（环 12、高台碗 3、甕類 3）が出土している。102 は南部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第 79 図 第 2 号土坑・出土遺物実測図

第 2 号土坑遺物観察表（第 79 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
102	土師器	甕	[27.5]	(8.0)	-	長石・石英・雲母・ 鐵錆	褐	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土中層	5%

第 3 号土坑（第 80 図）

位置 調査区北西部の B 27J 区、標高 92 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径 1.26 m、短径 0.78 m の楕円形で、長径方向は N - 50° - W である。深さは 17 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

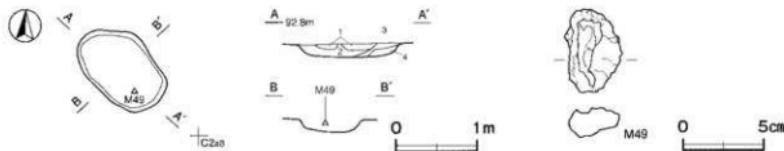
覆土 4 層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック・燒土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量
2 灰褐色	粘土ブロック・炭化物・燒土粒子微量	4 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量

遺物出土状況 楠形鍛冶滓 1 点 (60.7 g) が出土している。M49 は覆土中層から出土している。

所見 時期は、土器が出土していないため確定が難しいが、楠形鍛冶滓が出土していることから、9 世紀後葉から 10 世紀前葉とみられる。性格は不明である。



第 80 図 第 3 号土坑・出土遺物実測図

第3号土坑出土遺物観察表（第80図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M-49	圓底鋤	5.1	3.6	1.8	60.7	鐵	小形の輪形	覆土中層	PL33

第25号土坑（第81図）

位置 調査区西部のC 217区、標高92mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.12m、短径0.60mの梢円形で、長径方向はN-57°-Eである。深さは8cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

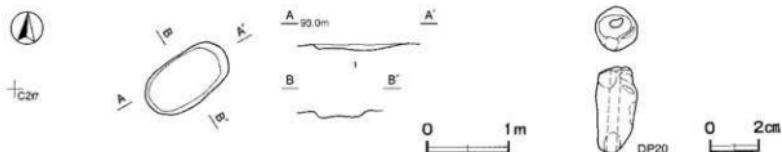
覆土 単一層である。炭化物を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 炭化物微量

遺物出土状況 土器片4点（壺類）、土製品1点（管状土錐）が出土している。DP20は覆土中から出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、出土した壺片の様相や、出土した管状土錐が隣接する第4号住居跡から出土した管状土錐と胎土や形態が似ていることから、同時期の10世紀前葉とみられる。性格は不明である。



第81図 第25号土坑・出土遺物実測図

第25号土坑出土遺物観察表（第81図）

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP20	管状土錐	4.6	1.5	0.4	8.9	長石・石英・雲母 一方向から穿孔・孔端部ナデ		覆土中	PL30

第40号土坑（第82図）

位置 調査区中央部のC 313区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第3号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.30m、短径1.26mの不整円形である。深さは34cmで、底面は東部に段を有している。壁は緩やかに立ち上がっている。

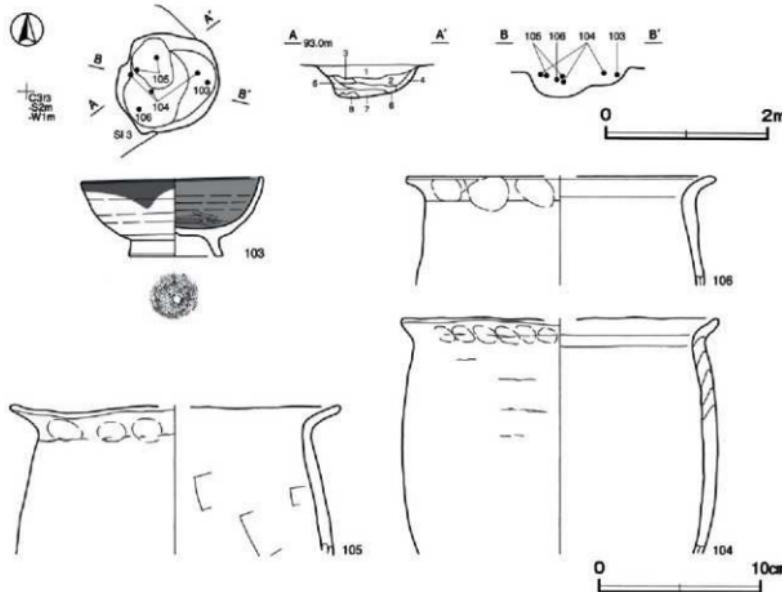
覆土 8層に分層できる。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-------|-----------------------|---|------|-------------------------|
| 1 | 灰黃褐色 | 粘土粒子中量、炭化物・焼土粒子微量 | 5 | 黒褐色 | 焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 | 6 | 灰黃褐色 | 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量 |
| 3 | 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量 | 7 | 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
| 4 | にい青褐色 | 粘土粒子多量、炭化物微量 | 8 | 灰黃褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片 51 点（高台付椀 1、甕類 50）が出土している。104 は、中央部から西部にかけての覆土中層と覆土上層から出土した破片が接合したものである。105 は中央部覆土中層から覆土上層にかけて出土した破片が接合したものである。106 は南西部壁際の覆土中層から出土したものである。103 は東壁寄りの覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第 82 図 第 40 号土坑・出土遺物実測図

第 40 号土坑出土遺物観察表（第 82 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎	土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
103	土師器	高台付椀	11.1	4.9	5.5	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	粒	普通	体部内面ハラ磨き、底部回転系切り体部外表面 付有	覆土上層	90%	PL27
104	土師器	甕	[19.2]	(14.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部外表面連続する指頭痕、輪積痕	覆土中層 覆土上層	20%	
105	土師器	甕	[20.2]	(9.2)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外表面指頭痕、輪積痕、体部内面ハラナゲ	覆土中層 覆土上層	10%	
106	土師器	甕	[18.8]	(6.7)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外表面指頭痕、輪積痕	覆土中層	5%	

第 52 号土坑（第 83 図）

位置 調査区中央部の C 32 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 3 号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 1.08 m、短軸 1.06 m の不整円形である。深さは 14 cm で、底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっており。

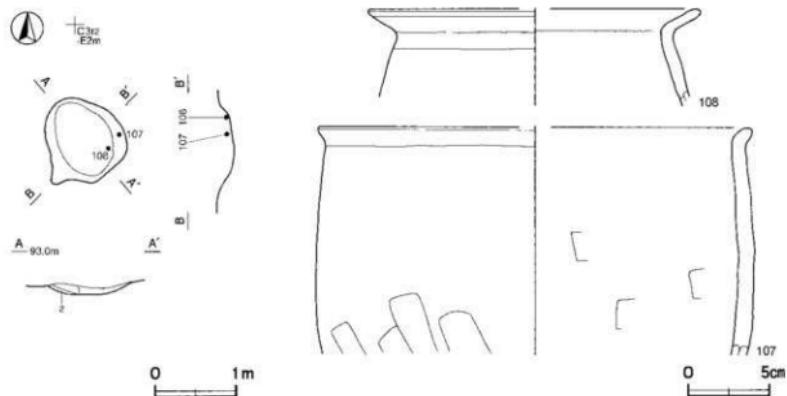
覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 喀 間 色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 2 極 色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 12点(环1, 壺類11)が出土している。107-108は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第83図 第52号土坑・出土遺物実測図

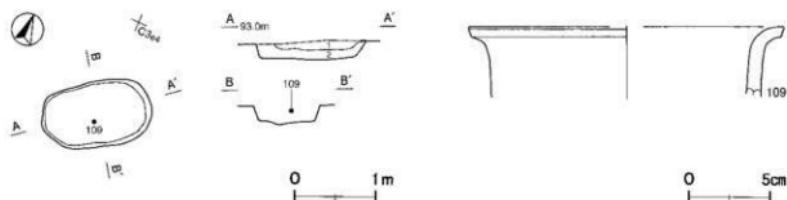
第52号土坑出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
107	土師器	壺	[286]	(14.1)	-	長石・石英・赤色 粘土・練り	にふい青緑	普通	口縁部外・内面糊ナデ 部内面糊ナデ	体部外面へラ削り	107	覆土下層 20%
108	土師器	壺	[200]	(6.0)	-	長石・石英・雲母	褐	普通	口縁部外・内面糊ナデ		108	覆土下層 5%

第60号土坑（第84図）

位置 調査区中央部のC 3e3区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.36m、短径0.79mの楕円形で、長径方向はN-53°-Eである。深さは18cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第84図 第60号土坑・出土遺物実測図

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(甕)が出土している。109は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。

第60号土坑出土遺物観察表(第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
109	土師器	甕	[194]	(43)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ	覆土上層	5%

第70号土坑(第85図)

位置 調査区北部のB 3h2区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径11.1m、短径1.00mの楕円形で、長径方向はN-80°-Eである。深さは16cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

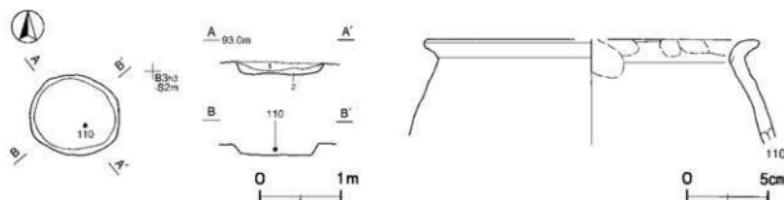
土層解説

1 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片16点(甕6、甕類10)が出土している。110は中央部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第85図 第70号土坑・出土遺物実測図

第70号土坑出土遺物観察表(第85図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
110	土師器	甕	[202]	(65)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面指頭痕	覆土下層	5%

第86号土坑(第86図)

位置 調査区北部のB 3f3区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径14.6m、短径0.64mの楕円形で、長径方向はN-52°-Eである。深さは12cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。各層に粘土ブロックや粘土粒子を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

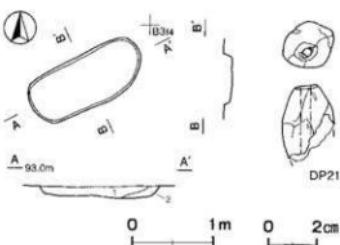
- | | | |
|---|-----|---------------|
| 1 | 暗褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック・炭化物微量 |

遺物出土状況 土師器片5点(壺類)、土製品1点(管状土錐)が出土している。DP21は、覆土中から出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、出土した壺片の様相や、管状土錐が出土した他遺構との関連から9世紀後葉から10世紀前葉とみられる。性格は不明である。

第86号土坑出土遺物観察表(第86図)

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP21	管状土錐	32	21	0.4	9.0	長石・石英・雲母	一方向から穿孔	覆土中	PL30



第86図 第86号土坑・出土遺物実測図

第112号土坑(第87図)

位置 調査区東部のC414区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径13.2m、短径12.8mの円形である。深さは38cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がりっている。

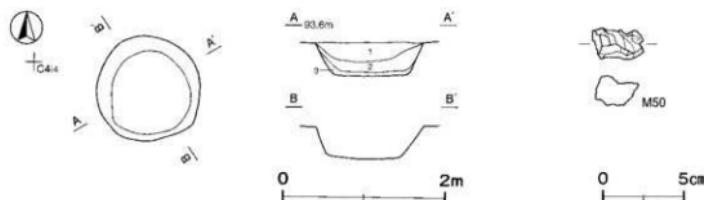
覆土 3層に分層できる。粘土ブロックや焼土粒子を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------|---|-----|-----------------|
| 1 | 黒褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 梭形鍛冶滓1点(14.4g)が出土している。M50は覆土中から出土している。

所見 時期は、土器が出土していないため、確定が難しいが、梭形鍛冶滓が出土していることから、9世紀後葉から10世紀前葉とみられる。性格は不明である。



第87図 第112号土坑・出土遺物実測図

第112号土坑出土遺物観察表(第87図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M50	鍛冶滓	20	32	19	14.4	鉄	小形の梭形	覆土中	

第113号土坑（第88図）

位置 調査区東部のC4g5区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第131号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.78m、短径0.64mの梢円形で、長径方向はN-88°-Wである。深さは32cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

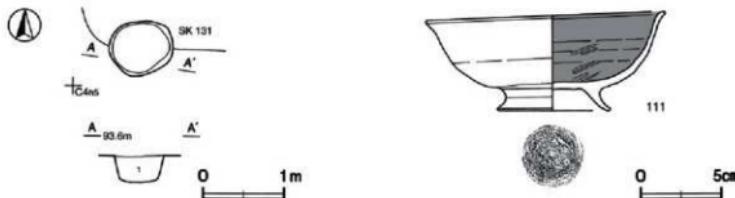
覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 にい青褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 壺器片5点（高台付椀1、壺類4）が出土している。111は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉に比定できる。性格は不明である。



第88図 第113号土坑・出土遺物実測図

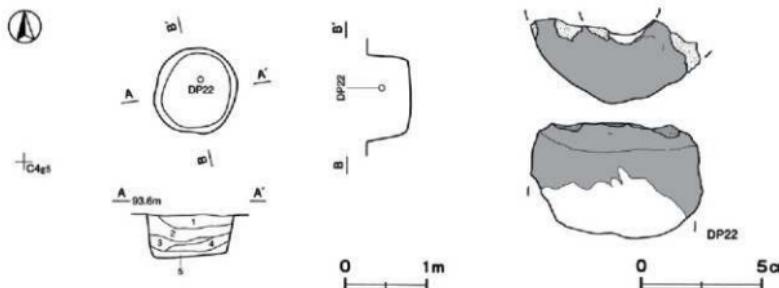
第113号土坑出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
111	土器	高台付椀	14.6	6.1	-	粘土 粒子	灰 色	普通	体部内面ハラ磨き 底部回転ハラ切り	覆土中	30% PL26

第115号土坑（第89図）

位置 調査区北東部のC4f5区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.06mほどの円形である。深さは54cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。



第89図 第115号土坑・出土遺物実測図

覆土 5層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 黑褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子少量、燒土粒子微量	4 暗褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子微量
2 黒褐色	粘土ブロック多量、燒土粒子少量、炭化物微量	5 黒褐色	粘土ブロック多量、炭化粒子少量
3 暗褐色	粘土ブロック多量、燒土ブロック少量		

遺物出土状況 土師器片 27 点（坏 6、甕類 21）、土製品 1 点（羽口）が出土している。DP22 は中央部の覆土中層から出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しいが、内面を黒色処理された坏の様相や、羽口が出土していることから 9世紀後葉から 10世紀前葉とみられる。性格は不明である。

第 115 号土坑出土遺物観察表（第 89 図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP22	羽口	(71)	(48)	(39)	(87.1)	長石・石英・赤色 粒子	先端部破片 2片が接着 ガラス質薄付着	覆土中層	

第 117 号土坑（第 90 図）

位置 調査区南東部の D 4 a6 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 径 0.98 m ほどの円形である。深さは 42 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がりっている。

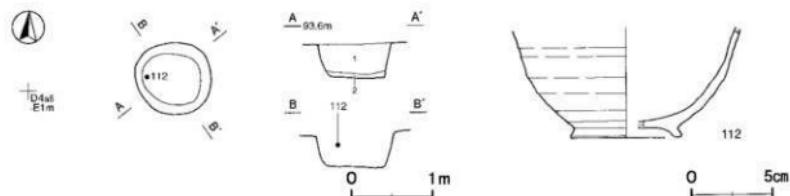
覆土 2 層に分層できる。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	粘土ブロック多量、燒土粒子、炭化粒子微量	2 暗褐色	燒土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
-------	----------------------	-------	-----------------------

遺物出土状況 土師器片 22 点（坏・高台付椀 6、甕類 16）が出土している。112 は北西部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から 10世紀中葉に比定できる。性格は不明である。



第 90 図 第 117 号土坑・出土遺物実測図

第 117 号土坑出土遺物観察表（第 90 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	他成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
112	土師器	高台付椀	-	(68)	[68]	長石・石英・赤色粒子	暗褐色	普通	体部外面クロコ形	覆土中層	10%

第 129 号土坑（第 91 図）

位置 調査区東部の C 4 h6 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径 1.46 m、短径 1.04 m の楕円形で、長径方向は N - 40° - E である。深さは 34 cm で、底面はほぼ平坦で、ピット 2 か所を確認した。壁は緩斜して立ち上がっている。

ピット 2 か所。P 1 は北西壁に接しており、径 10 cm ほどの円形で深さ 7 cm である。P 2 は北東壁に接しており、径 15 cm ほどの円形で深さ 14 cm である。

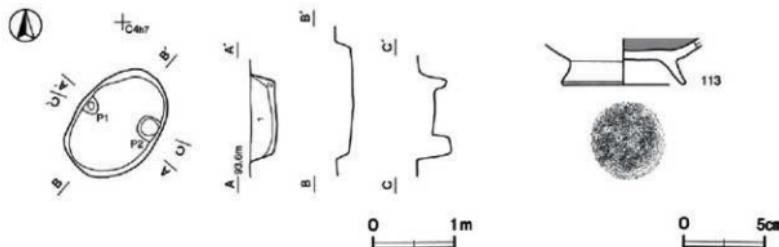
覆土 2 層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 噴 白 色 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒 子微量
2 暗 白 色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 27 点（坏 1、高台付碗 2、壺類 24）が出土している。113 は中央部の覆土中から出土した。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第 91 図 第 129 号土坑・出土遺物実測図

第 129 号土坑出土遺物観察表（第 91 図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	断 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
113	土師器	高台付碗	-	(29)	7.4	長石・石英・雲母	程	普通	高台部外・内面ナゲ	覆土中	10%

第 131 号土坑（第 92 図）

位置 調査区東部の C 4 g5 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 113 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径 2.46 m、短径 1.34 m の楕円形で、長径方向は N - 80° - W である。深さは 30 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土 3 層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

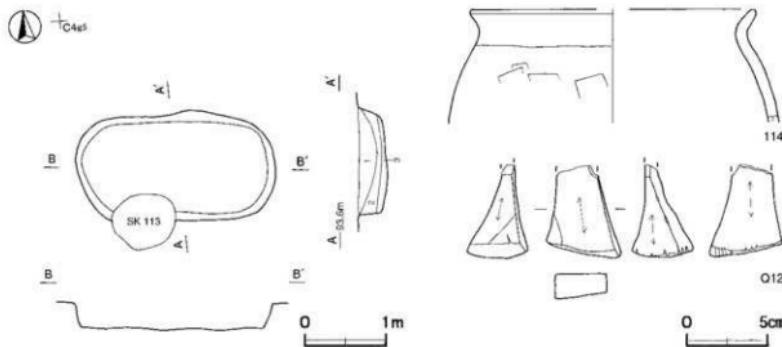
土層解説

1 黒 白 色 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒 子微量
2 黒 白 色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片 21 点（坏 9、壺類 12）、石製品 1 点（砥石）が出土している。114、Q12 は覆土中か

ら出土している。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第92図 第131号土坑・出土遺物実測図

第131号土坑出土遺物観察表（第92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
114	土師器	甕	[17.4]	(7.0)	-	長石・石英・雲母 に云母	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ヘラナデ		覆土中	5%
Q 12	砥石	(57)	45	38	(71.8)	凝灰岩	灰褐色	他は破断面		覆土中	PL32

第132号土坑（第93図）

位置 調査区北東部のC4g5区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

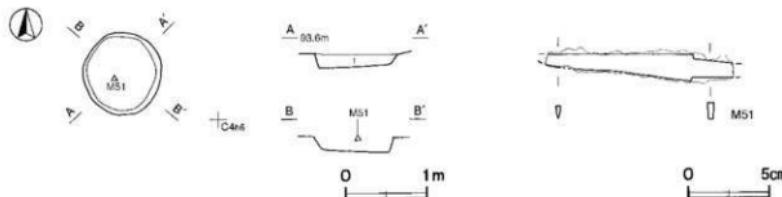
規模と形状 径1mほどの円形である。深さは20cmで、底面はほぼ平坦である。壁は直立している。

覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 粘土 売色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片3点（高台付椀1、甕類2）、鉄製品1点（刀子）が出土している。M51は中央部の覆土上層から出土している。土器片は細片のため図示できなかった。



第93図 第132号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器が細片のため確定が難しいが、内面を黒色処理された壺の様相から、9世紀後葉から10世紀前葉とみられる。性格は不明である。

第132号土坑出土遺物観察表（第93図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 51	万子	(11.7)	(1.3)	0.1~0.8	(28.9)	鉄	刃部先端と茎部基部を欠損	覆土上層	PL34

第142号土坑（第94図）

位置 調査区北東部のC4j3区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第145号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.36m、短径1.06mの楕円形で、長径方向はN-23°-Eである。深さは54cmで、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

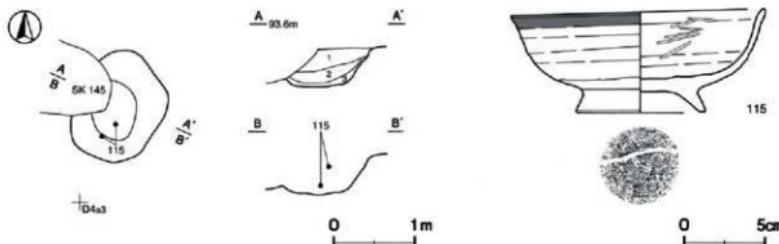
覆土 3層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|----------------------|---|-----|-----------------|
| 1 | 暗褐色 | 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 | 暗褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック多量、炭化粒子微量 | | | |

遺物出土状況 土師器片4点（高台付椀2、甕類2）が出土している。115は中央部の覆土下層から上層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。



第94図 第142号土坑・出土遺物実測図

第142号土坑出土遺物観察表（第94図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
115	土師器	高台付椀	15.7	6.4	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にい青帯	普通	体部内面へラ磨き　底部回転ヘラ切り　口縁部外面保有	覆土下層 覆土上層	70% PL26

第 152 号土坑（第 95 図）

位置 調査区北東部の C 5 e2 区、標高 94 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第 153 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.14 m、短径 0.94 m の梢円形で、長径方向は N - 25° - W である。深さは 50 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

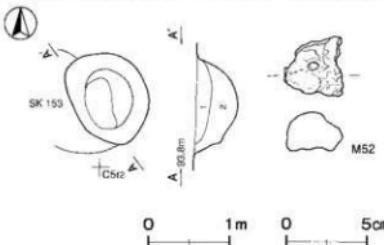
覆土 2 層に分層できる。ほとんどの層に粘土ブロックや焼土・炭化粒子を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | |
|---|--------|---------------|
| 1 | にぶい黄褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | 粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| | | 焼土ブロック
ク微量 |

遺物出土状況 土師器片 16 点（壺 7、甕類 8）、須恵器片 1 点（甕類）、鍛冶滓 1 点（34.4 g）が出土している。M52 は覆土中から出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器が細片のため確定は難しが、内面を黒色処理された壺の様相から 9 世紀後葉から 10 世紀前葉とみられる。性格は不明である。



第 95 図 第 152 号土坑・出土遺物実測図

第 152 号土坑出土遺物観察表（第 95 図）

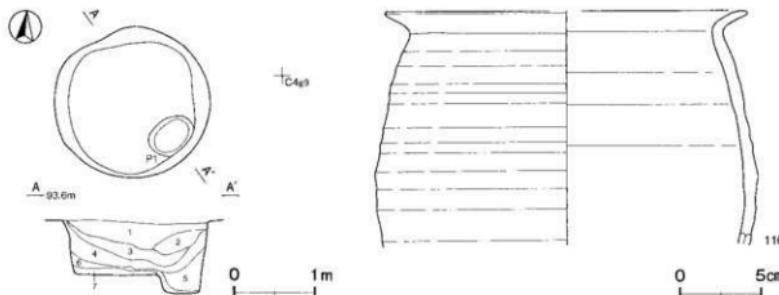
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	等級	出土位置	備考
M 52	鍛冶滓	37	36	(27)	(34.4)	鉄	鉄形	覆土中	

第 157 号土坑（第 96 図）

位置 調査区東部の C 4 g8 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 径 1.90 m ほどの円形である。壁は外傾して立ち上がっている。深さは 86 cm で、底面はほぼ平坦であり、ピットを 1 か所確認した。壁は緩斜して立ち上がっている。

ピット 南東壁に接しており、深さ 23 cm である。



第 96 図 第 157 号土坑・出土遺物実測図

覆土 7層に分層できる。各層に粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	5	にじむ黄褐色	粘土ブロック中量、炭化物微量
2	暗褐色	粘土ブロック・炭化物微量、焼土ブロック微量	6	黒褐色	炭化物多量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
3	黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量	7	にじむ黄褐色	粘土ブロック・炭化物微量、焼土粒子微量
4	黒褐色	粘土ブロック・炭化物微量、焼土粒子微量			

遺物出土状況 土師器片 21点 (坏 12, 壺類 9), 須恵器片 2点 (壺類 2) が出土している。116は覆土中から出土したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉に比定できる。性格は不明である。

第157号土坑出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
116	土師器	壺	[22.1]	(14.4)	-	長石・石英・漂母	にじむ黄褐色	普通	口縁部、体部外・内面クロコ形	覆土中	20%

第158号土坑 (第97・98図)

位置 調査区北東部のC 47区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第22号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径184m、短径1.72mの不整規円形で、長径方向はN-90°-Wである。深さは72cmで、底面は南部に段を有している。壁は外傾して立ち上がってている。

覆土 8層に分層できる。各層に粘土や焼土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

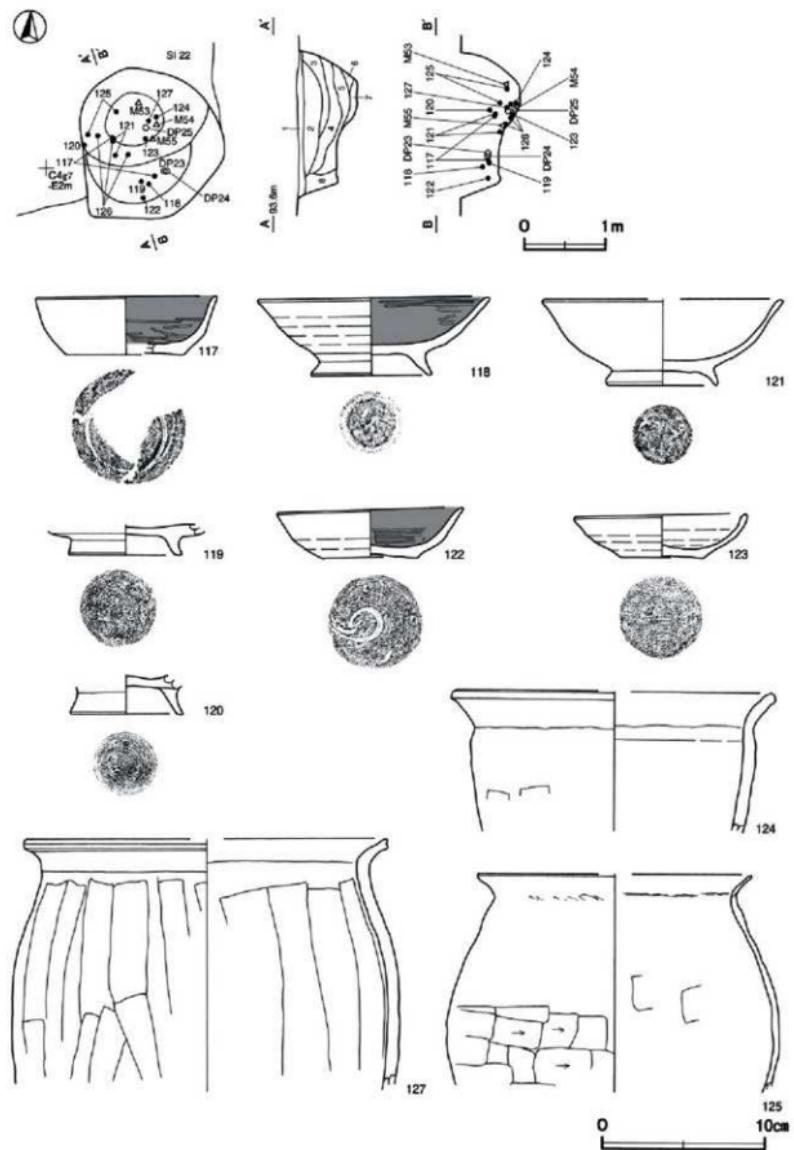
1	暗褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	6	暗褐色	炭化物中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
2	暗褐色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	7	黒褐色	炭化物中量、粘土ブロック少量、焼土粒子微量
3	暗褐色	粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	8	にじむ黄褐色	粘土ブロック・炭化物少量
4	暗褐色	炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量			
5	黒褐色	炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量			

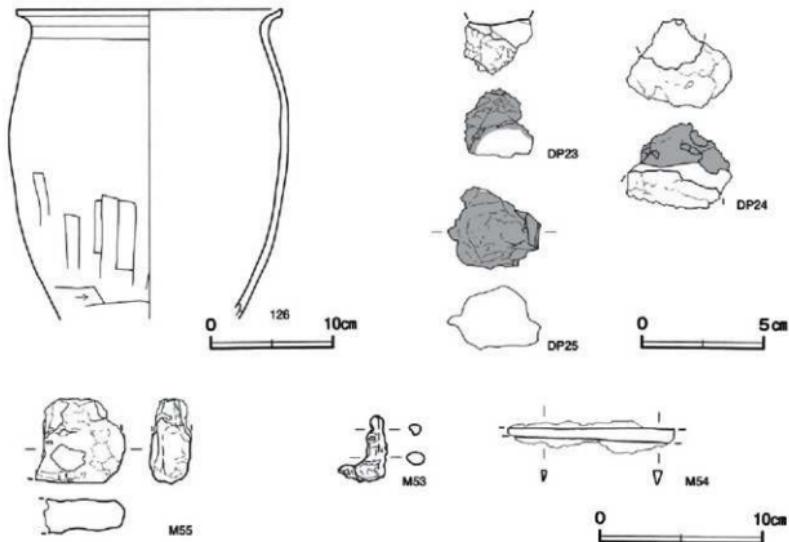
遺物出土状況 土師器片 69点 (坏・高台付坏・高台付碗・小皿 37, 壺類 32), 須恵器片 10点 (壺類), 鉄製品2点 (刀子, 不明鉄製品) 錫冶滓4点 (255.4g), 土製品3点 (羽口) が出土している。123・124, M54・M55は中央部底面から出土している。126は中央部底面から下層にかけて出土した破片が接合したものである。121は中央部の底面から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。117・127, DP25は中央部の, 122は南部の, 120は西部壁際のそれぞれ覆土下層から出土した。DP23・DP24, M53は中央部の, 118は南部のそれぞれ覆土中層から出土した。119は中央部覆土中層から出土した破片が接合したものである。125は中央部と西部の覆土下層から覆土中層にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、第22号住居跡を掘り込んでいることや、出土土器から10世紀前葉以降とみられる。廃棄土坑と考えられる。

第158号土坑出土遺物観察表 (第97・98図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
117	土師器	坏	11.0	36	[42]	長石・石英・漂母	にじむ黄褐色	普通	体部内面へラ書き 底部回転糸切り	覆土下層	60% PL26
118	土師器	高台付坏	14.2	4.8	7.2	長石・石英・漂母	にじむ黄褐色	普通	体部内面へラ書き	覆土中層	90% PL26
119	土師器	高台付碗	-	(1.9)	6.9	長石・石英・漂母 赤色粒子・繊維	にじむ黄褐色	普通	体部内面へラ書き 高台外側面ナデ	覆土中層	20%
120	土師器	高台付碗	-	(2.4)	7.0	長石・石英・漂母 赤色粒子	にじむ黄褐色	普通	体部内面へラ書き 底部回転糸切り	覆土下層	20%
121	土師器	高台付碗	[146]	53	6.6	長石・石英・漂母 赤色粒子・繊維	にじむ黄褐色	普通	体部内面黑色處理 底部回転糸切り	底面	30%
122	土師器	小皿	11.4	3.9	5.8	長石・石英・漂母	にじむ黄褐色	普通	体部外・内面クロコ形 底部回転糸切り	覆土下層	80% PL28





第98図 第158号土坑出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	他成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
123	土師器	小皿	10.5	2.7	5.0	長石・石英・雲母	ぶぶく質粗	普通	体部外・内面口クロナデ 底面わざかに回転丸 切り底全段	底面	80% PL28
124	土師器	甕	[19.2]	(8.6)	-	長石・石英・雲母	赤色粒子	灰褐色	普通 口縁部外・内面ナゲ 体部外面ヘラナデ	底面	10%
125	土師器	甕	[16.7]	(13.4)	-	長石・石英・雲母	赤色粒子・繊維	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ヘラナデ 輪組み底	覆土中層 覆土下層	10%
126	土師器	甕	21.4	(25.2)	-	長石・石英・赤色 粒子	ぶぶく質粗	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外面ヘラナデ	底面 覆土下層	30% PL29
127	土師器	甕	[22.2]	(15.5)	-	長石・石英・雲母	ぶぶく質粗	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部外・内面ヘラナデ	覆土下層	30% PL28

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	特 徴	出土位置	備 考
DP23	羽口	(1.9)	(2.7)	(1.7)	(7.8)	長石・石英・赤色 粒子	羽口先端部小破片 ガラス質津付着	覆土中層	
DP24	羽口	(3.8)	(3.7)	(3.5)	(38.4)	長石・石英・赤色	羽口先端部小破片 ガラス質津付着	覆土中層	
DP25	羽口	(3.8)	(2.7)	(3.4)	(25.5)	長石・石英・赤色 粒子	羽口先端部小破片 ガラス質津付着	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 復	出土位置	備 考
M 53	不明器物	4.1	2.9	0.7~0.8	8.6	鉄	横断面形、長方形	覆土中層	PL34
M 54	刀子	(10.0)	(0.9)	0.6	17.2	鉄	刃部先端・茎部欠損	底面	PL34
M 55	鍔治鋤	5.7	5.5	2.6	89.6	鉄	小型の鉈形	底面	PL33

第173号土坑(第99図)

位置 調査区北東部のC 319区。標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.66m、短径0.98mの不整楕円形で、長径方向はN-76°-Wである。深さは72cmで、底面は鍋底状である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。各層に粘土や焼土のブロックを含んでいることから埋め戻されている。

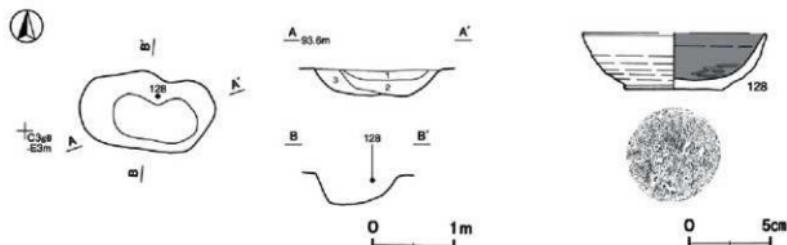
土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量

- 3 楠褐色 粘土ブロック少量

遺物出土状況 土師器片 16点（坏5、甕類11）が出土している。128は中央部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土器から9世紀後葉に比定できる。性格は不明である。



第99図 第173号土坑・出土遺物実測図

第173号土坑出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	基盤	口径	基高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
128	土師器	平	[112]	35	60	長石・石英・雲母	にふく黄褐	普通	内面ヘラ磨き 底部回転系切り	覆土上層	80% PL26

第176号土坑（第100図）

位置 調査区北東部のC 3 g0 区、標高 93 mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

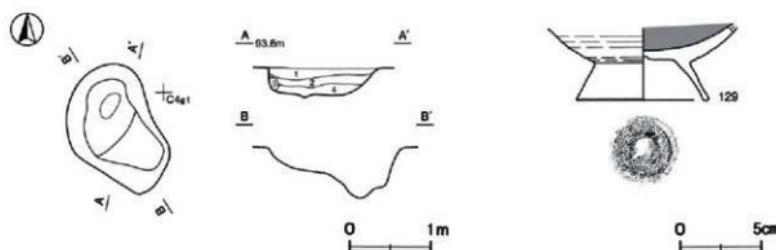
規模と形状 長径 168 m、短径 1.06 mの不整椭円形で、長径方向はN - 15° - Wである。深さは64cmで、底面は南部に段を有している。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。各層に粘土や焼土のブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物中量、粘土ブロック少量、焼土ブロック微量
4 黒褐色 粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2 黒褐色 炭化物・焼土粒子少量

遺物出土状況 土師器片 35点（坏・高台付椀9、甕類26）が出土している。129は覆土中から出土している。



第100図 第176号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。

第176号土坑出土遺物観察表（第100図）

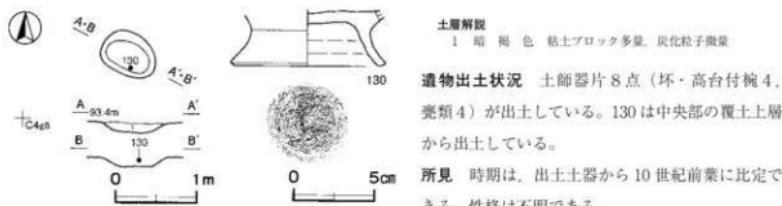
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	土師器	高台付椀	-	(4.5)	(7.9)	長石・石英・雲母 にぶい粒	普通	底部回転系切り		覆土中	30% PL27

第207号土坑（第101図）

位置 調査区東部のC 4f8区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.72m、短径0.52mの楕円形で、長径方向はN-58°-Wである。深さは12cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩斜して立ち上がっている。

覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。



第101図 第207号土坑・出土遺物実測図

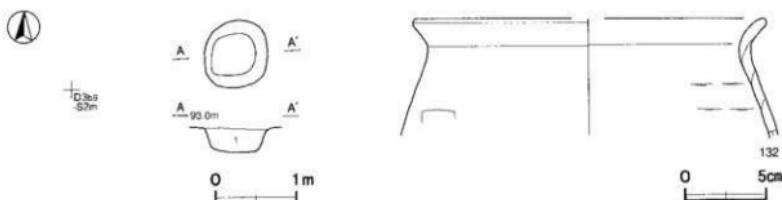
第207号土坑出土遺物観察表（第101図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
130	土師器	高台付椀	-	(3.4)	88	長石・石英・赤色 粒子	にぶい粒	普通	高台部ナデ 底部回転ヘラ切り	覆土上層	20% PL27

第215号土坑（第102図）

位置 調査区北東部のD 3b9区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.90m、短径0.80mの楕円形で、長径方向はN-33°-Eである。深さは30cmで、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。



第102図 第215号土坑・出土遺物実測図

覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒 開 色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

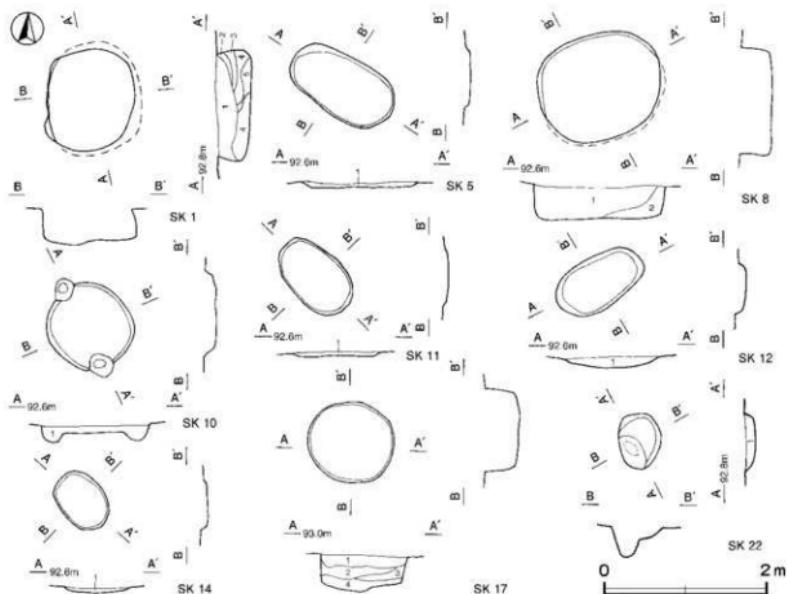
遺物出土状況 土師器片 10 点（环3、甕類7）が出土している。132は覆土中から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉に比定できる。性格は不明である。

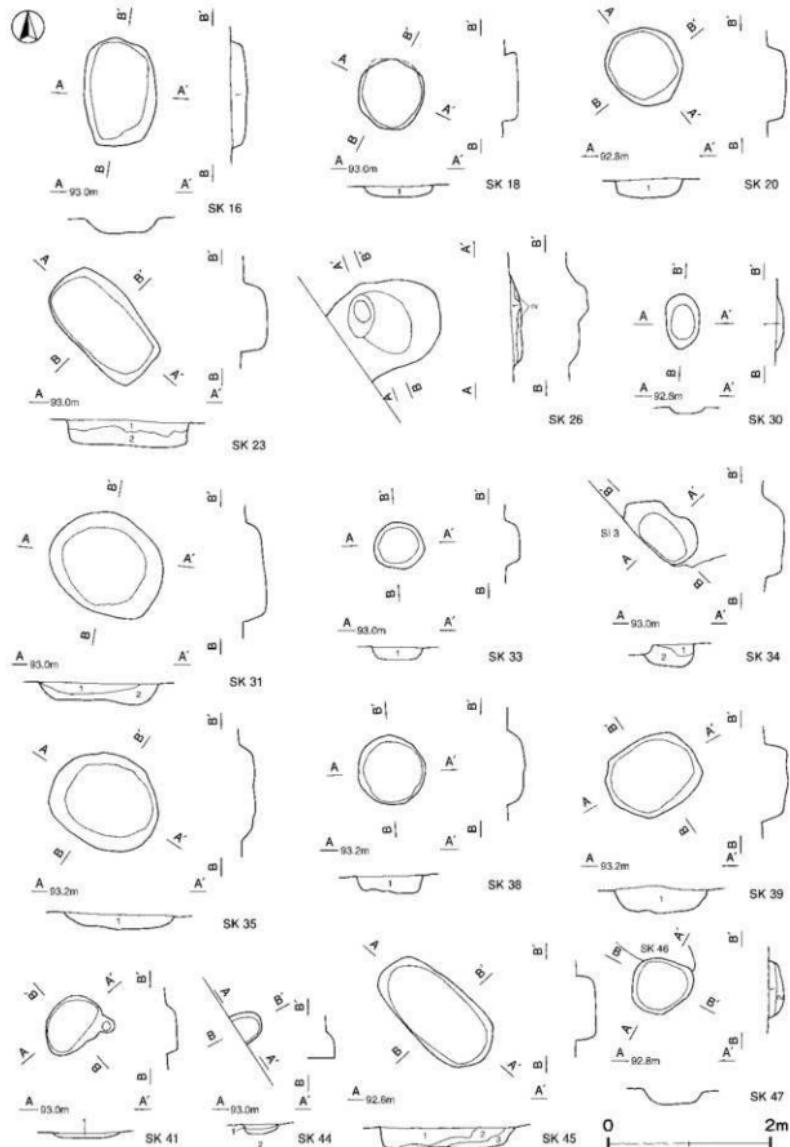
第215号土坑出土遺物観察表（第102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
132	土師器	甕	[108]	(7.4)	-	長石・石英・雲母 に多い黄鐵	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外側ヘラナデ	覆土中	20%	

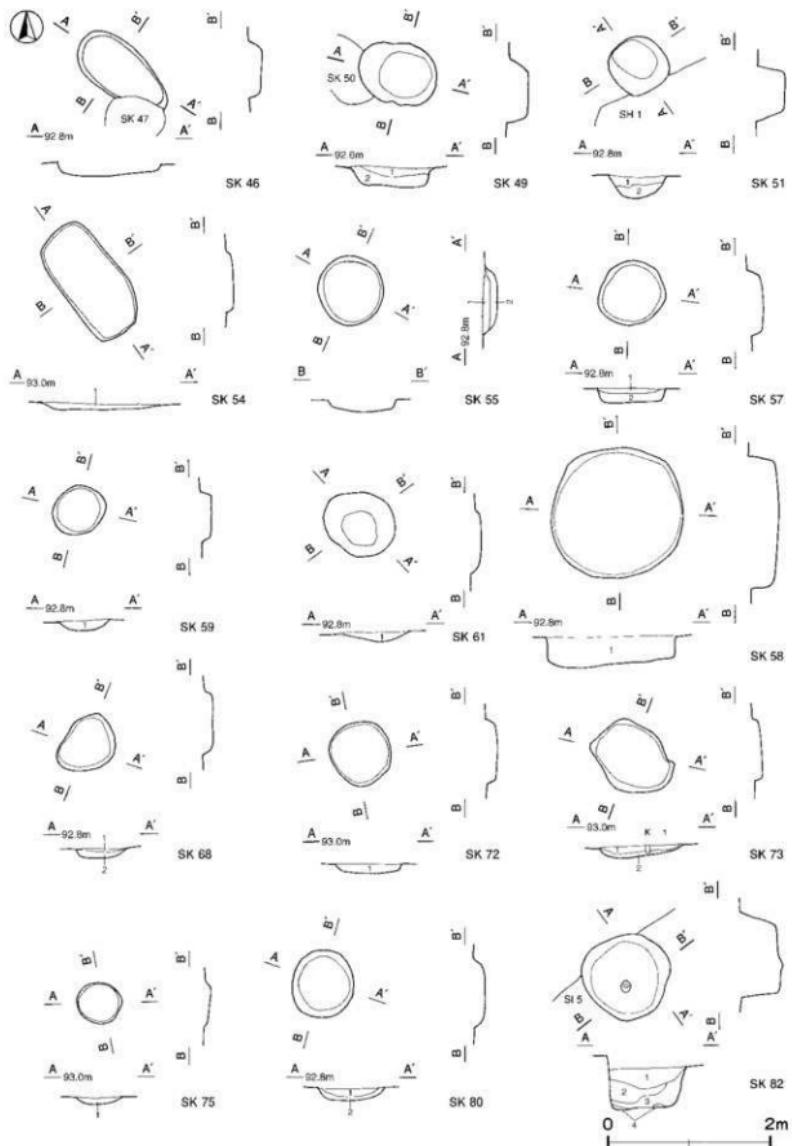
(2) 土坑（第103～108図）



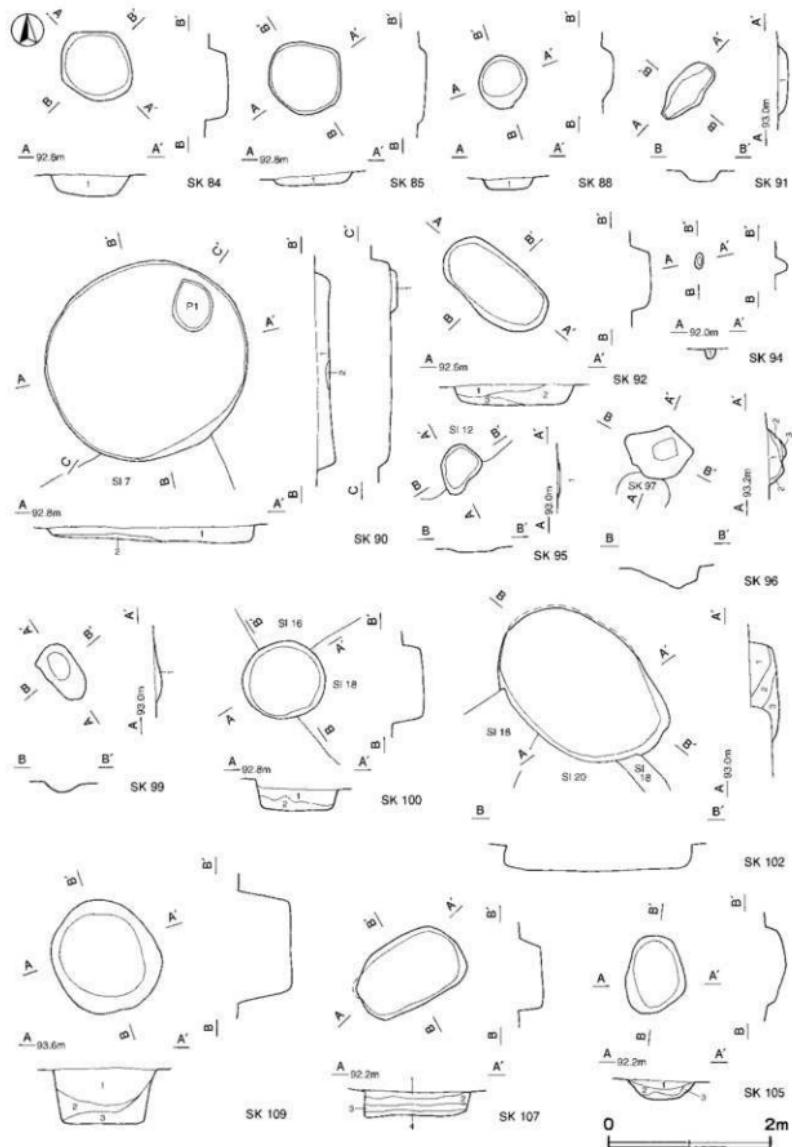
第103図 土坑実測図（1）



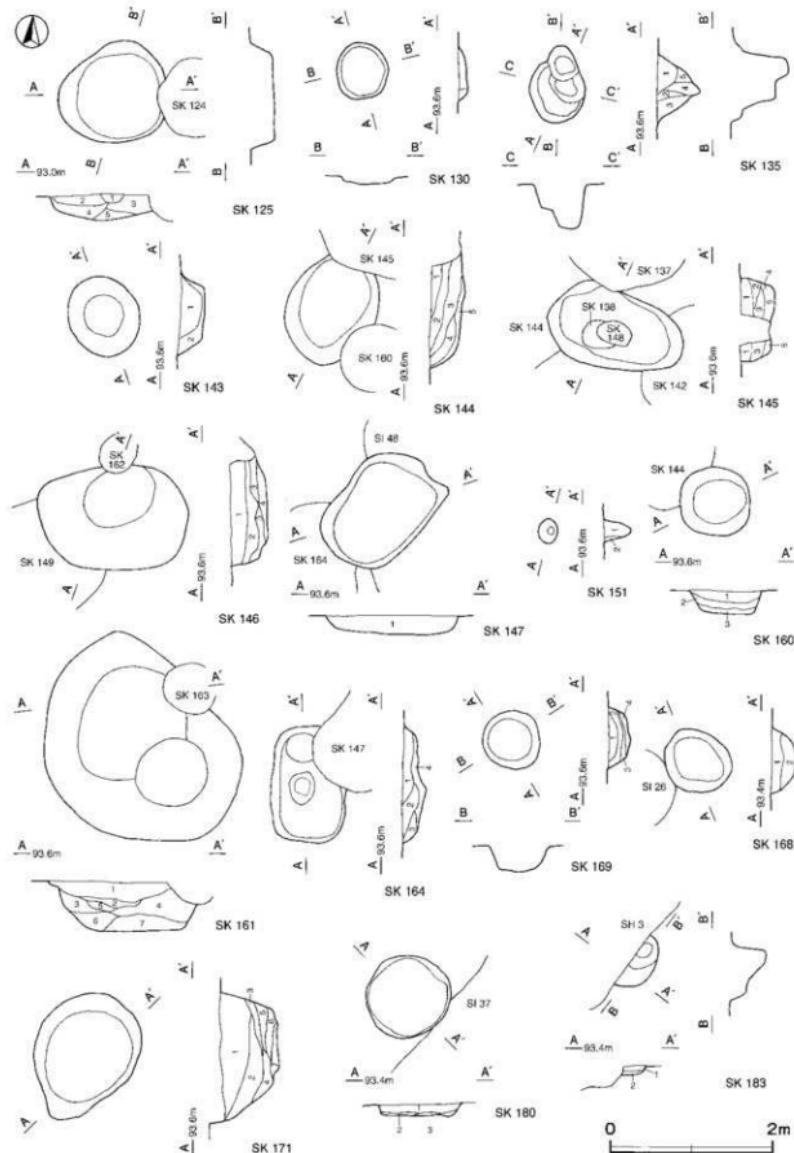
第104図 土坑実測図（2）



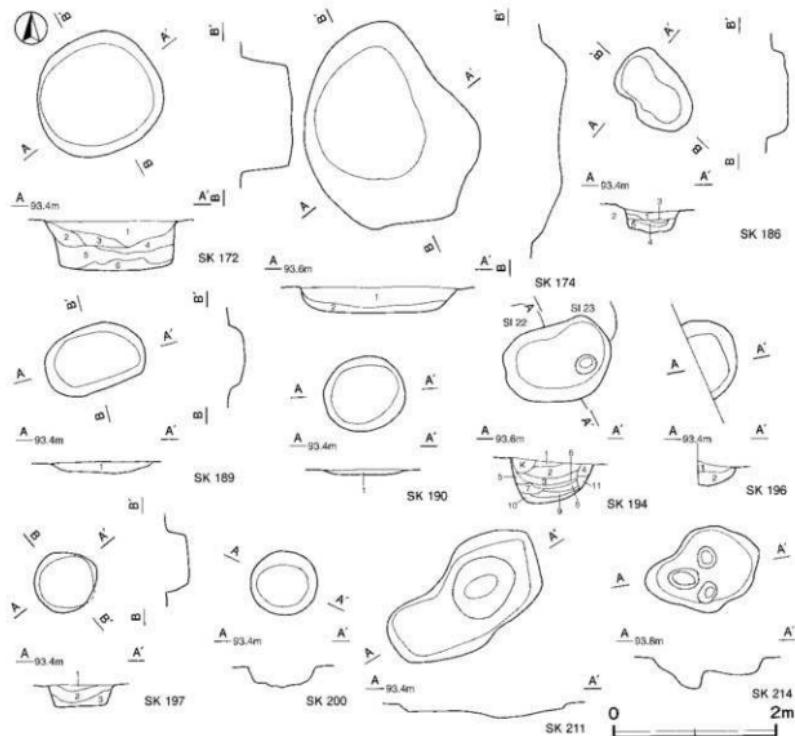
第105図 土坑実測図（3）



第106図 土坑実測図(4)



第107図 土坑実測図（5）



第108図 土坑実測図（6）

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック少量、炭化材微量
- 2 底黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 5 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第5号土坑土層解説

- 1 底黄褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第11号土坑土層解説

- 1 底黄褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第12号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第14号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第16号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第17号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第18号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量

第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量

第22号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・焼土粒子微量

第 23 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 26 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量

第 30 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第 31 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第 33 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 34 号土坑土層解説

- 1 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第 35 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第 38 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量

第 39 号土坑土層解説

- 1 広黄褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量

第 41 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 44 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 45 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化物微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

第 47 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黑褐色 烧土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量

第 49 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化物微量

第 51 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 54 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 55 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量

第 57 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第 58 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第 59 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 61 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量

第 68 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物微量

第 72 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 73 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黑褐色 粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 75 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量、焼土粒子微量

第 80 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
- 2 黑褐色 炭化粒子中量、粘土ブロック・焼土粒子少量

第 82 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 烧土ブロック・炭化物微量
- 3 黑褐色 烧土ブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量

第 84 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 85 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 烧土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 88 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 炭化粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量

第 90 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
- 2 にぶい黄褐色 粘土ブロック・炭化物中量、焼土ブロック微量

第 91 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 92 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック微量

第 94 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量

第 95 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 炭化物中量、焼土ブロック・粘土ブロック微量

第 96 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 炭化物、焼土粒子・粘土粒子微量
- 2 黑褐色 烧土粒子中量、炭化粒子少量、粘土粒子微量
- 3 暗褐色 粘土粒子中量、炭化粒子微量

第 99 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 100 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量

第 102 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

第 105 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 3 広黄褐色 粘土粒子中量、炭化物・炭化粒子微量

第 107 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
- 2 にい黃褐色 粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 4 暗褐色 粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量

第 109 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 2 にい黃褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 にい黃褐色 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

第 125 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量
- 2 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 粘土ブロック多量

第 130 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

第 135 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 粘土粒子多量、炭化粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
- 5 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 143 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子少量

第 144 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第 145 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第 146 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量

第 147 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

第 151 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量
- 2 にい黃褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 160 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・粘土ブロック・焼土粒子微量
- 2 黑褐色 粘土ブロック多量、炭化物微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子微量

第 161 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 焙土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焙土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 焙土粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 焙土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 粘土ブロック多量

第 164 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量、燒土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量、燒土粒子微量
- 3 にい黃褐色 粘土ブロック・炭化物少量、燒土粒子微量
- 4 黑褐色 炭化物中量、粘土ブロック少量

第 168 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

第 169 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物少量
- 2 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量
- 3 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

第 171 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 焙土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
- 2 黑褐色 烧化物・粘土ブロック・燒土粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量
- 5 にい黃褐色 焙土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量
- 6 にい黃褐色 粘土ブロック・炭化物少量
- 7 広黄褐色 粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量

第 172 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量、燒土粒子微量
- 2 黑褐色 烧化物中量、燒土ブロック・粘土ブロック・燒土粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子微量
- 4 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量
- 5 にい黃褐色 焙土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量
- 6 にい黃褐色 粘土ブロック・炭化物少量

第 174 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第 180 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・燒土粒子少量
- 2 黑褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量、燒土粒子微量

第 183 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子微量

第 186 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・燒土粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 粘土ブロック多量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 粘土ブロック多量、燒土粒子微量
- 4 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
- 5 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化物・燒土粒子微量

第 189 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 烧土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
- 2 広黄褐色 粘土ブロック中量、燒土ブロック少量、炭化粒子微量

第 190 号土坑土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量

第 194 号土坑土層解説

- 1 オリーブ褐色 炭化物微量
- 2 褐オリーブ褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
- 3 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量
- 4 黄褐色 粘土ブロック・炭化物少量・焼土ブロック微量
- 5 暗灰褐色 粘土ブロック中量・炭化物少量
- 6 暗オリーブ褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 7 暗灰褐色 炭化物中量・粘土粒子少量・焼土粒子微量
- 8 黒褐色 粘土ブロック中量・焼土ブロック少量
- 9 オリーブ黒色 炭化物中量・焼土ブロック・粘土ブロック少量
- 10 オリーブ褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
- 11 オリーブ褐色 粘土ブロック中量・炭化物・焼土粒子微量

第 196 号土坑土層解説

1 褐オリーブ褐色 粘土ブロック少量・炭化物・焼土粒子微量

2 黒褐色 粘土ブロック中量・炭化物少量

第 197 号土坑土層解説

1 褐黄褐色 粘土ブロック少量・炭化物・焼土粒子微量

2 褐褐色 粘土ブロック中量・炭化物少量

3 褐褐色 粘土ブロック少量・焼土ブロック微量

表5 平安時代 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C 2b7	-	椭円形	125 × 1.10	44	直立 内傾	平坦	人為	土師器片	
2	C 2b8	N - 26° - W	隅丸長方形	170 × 0.98	38	直立	平坦	人為	土師器片	
3	B 2b7	N - 50° - W	椭円形	126 × 0.78	17	外傾	平坦	人為	輪形鍔沿津	
5	B 2b9	N - 57° - W	椭円形	140 × 0.74	10	紙斜	平坦	人為	土師器片	
8	B 2c9	N - 63° - E	椭円形	158 × 1.28	42	直立 内傾	平坦	人為	土師器片	
10	D 2b10	N - 25° - W	不整椭円形	132 × 1.03	16	外傾	平坦	人為	土師器片	
11	B 2c0	N - 46° - W	椭円形	108 × 0.68	6	外傾	平坦	自然	土師器片	
12	B 2c0	N - 66° - E	隅丸長方形	116 × 0.62	14	外傾	平坦	人為	土師器片	
14	B 2c8	N - 46° - W	椭円形	0.78 × 0.58	5	紙斜	平坦	人為	土師器片	
16	C 2e7	-	椭円形	132 × 0.88	18	紙斜	平坦	人為	土師器片 頸窓器片	
17	C 2e7	-	円形	104 × 1.00	44	直立	平坦	人為	土師器片	
18	C 2e9	N - 30° - E	椭円形	0.86 × 0.80	18	直立	平坦	人為	土師器片	
20	B 2j5	-	円形	0.98 × 0.92	22	外傾	平坦	人為	土師器片	
22	B 2j5	N - 26° - E	椭円形	0.68 × 0.58	36	外傾	凹凸	人為	土師器片	
23	C 2d9	N - 50° - W	椭円形	1.50 × 0.86	30	直立	平坦	人為	土師器片	
25	C 2f7	N - 57° - E	椭円形	1.12 × 0.60	8	外傾 紙斜	平坦	人為	土師器片 管状土錐	
26	B 2i4	N - 60° - W	【椭円形】	(124) × 1.10	26	外傾 紙斜	凹凸	人為	土師器片	SI 1 → 本跡
30	B 3c2	N - 5° - E	椭円形	0.68 × 0.40	8	紙斜	平坦	人為	土師器片	
31	C 2e0	N - 58° - W	椭円形	1.45 × 1.22	28	紙斜	平坦	人為	土師器片	
33	C 2d8	N - 87° - E	円形	0.60 × 0.56	16	外傾	平坦	人為	土師器片	
34	C 3e2	N - 53° - W	【不整椭円形】	1.02 × (0.54)	24	外傾	平坦	人為	土師器片	本跡 → SI 3
35	B 3i8	N - 57° - W	椭円形	1.36 × 1.16	14	紙斜	平坦	人為	土師器片	
38	B 3g5	-	円形	0.88 × 0.82	20	外傾	平坦	人為	土師器片	
39	B 3i5	N - 61° - E	椭円形	1.16 × 0.94	30	外傾	平坦	人為	土師器片	
40	C 3f3	-	不整円形	1.30 × 1.26	34	紙斜	凹凸	人為	土師器片	SI 3 → 本跡
41	C 2e9	N - 53° - E	不整椭円形	0.82 × 0.72	12	外傾 紙斜	平坦	自然	土師器片	
44	C 2g7	N - 34° - W	【椭円形】	(0.26) × 0.40	8	紙斜	平坦	人為	土師器片	
45	B 2e7	N - 40° - W	椭円形	1.64 × 0.80	26	直立 外傾	平坦	人為	土師器片	
46	B 2e7	N - 57° - W	椭円形	1.30 × 0.66	14	外傾	平坦	人為	土師器片	本跡 → SK47
47	B 2e7	N - 57° - E	椭円形	0.82 × 0.68	16	紙斜	平坦	人為	土師器片	SK46 → 本跡
49	B 2e7	N - 74° - W	不整椭円形	0.98 × 0.78	24	外傾 紙斜	平坦	人為	土師器片	SK50 → 本跡
51	B 2b6	-	円形	0.70 × 0.68	34	紙斜	平坦	人為	土師器片	SI 2 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	幾 條		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
52	C 3 f2	-	不整円形	1.08 × 1.06	14	傾斜	平坦	人為	土師器片	本跡→SI 3
54	C 2 e9	N - 35° - W	隅丸長方形	1.50 × 0.75	12	外傾	平坦	人為	土師器片	
55	B 2 g	-	円形	0.84 × 0.84	15	外傾	平坦	人為	土師器片	
57	B 2 j0	-	円形	0.82 × 0.80	18	外傾	平坦	人為	土師器片	
58	B 2 i0	-	円形	1.62 × 1.60	36	外傾	平坦	人為	土師器片	
59	B 2 g9	N - 50° - E	橢円形	0.68 × 0.58	14	外傾	平坦	人為	土師器片	
60	C 3 e3	N - 53° - E	橢円形	1.36 × 0.79	18	外傾	平坦	人為	土師器片	
61	C 2 a9	N - 40° - W	橢円形	0.92 × 0.78	8	外傾	平坦	人為	土師器片	
68	B 3 d1	N - 40° - E	不整橢円形	0.78 × 0.58	11	外傾	平坦	人為	土師器片	
70	B 3 h2	N - 80° - E	橢円形	1.11 × 1.00	16	外傾	平坦	人為	土師器片	
72	B 3 g3	-	円形	0.80 × 0.76	11	直立	平坦	人為	土師器片	
73	B 3 g3	N - 64° - W	不整橢円形	1.01 × 0.81	12	直立	平坦	人為	土師器片	
75	B 3 h2	-	円形	0.56 × 0.54	8	直立	平坦	人為	土師器片	
80	C 3 b1	-	円形	0.83 × 0.76	13	傾斜	平坦	人為	土師器片	
82	C 2 e9	-	円形	1.10 × 1.08	50	外傾	平坦	人為	土師器片	SI 5 → 本跡
84	C 2 a8	N - 45° - W	橢円形	0.98 × 0.86	28	直立	平坦	人為	土師器片	
85	C 2 a8	-	円形	0.96 × 0.94	10	外傾	平坦	人為	土師器片	
86	B 3 f3	N - 52° - E	橢円形	1.46 × 0.64	12	外傾	平坦	人為	土師器片 管状土錐	
88	B 3 d2	N - 2° - E	橢円形	0.68 × 0.58	16	傾斜	平坦	人為	土師器片	
90	B 3 i1	-	円形	2.54 × 2.40	20	傾斜	平坦	人為	土師器片	SI 7 → 本跡
91	B 3 f6	N - 43° - E	橢円形	0.74 × 0.44	12	外傾	平坦	人為	土師器片	
92	B 2 e6	N - 48° - W	橢円形	1.50 × 1.45	24	外傾	平坦	人為	土師器片	
94	C 3 b4	N - 20° - E	橢円形	0.20 × 0.08	16	外傾	圓状	人為	土師器片	
95	C 3 b5	N - 23° - E	不整橢円形	0.62 × 0.46	3	傾斜	平坦	人為	土師器片	SI 12 → 本跡
96	B 3 j8	N - 58° - W	不整橢円形	0.80 × 0.69	28	外傾 傾斜	圓状	人為	土師器片	SK97 → 本跡
99	C 3 a6	N - 34° - W	橢円形	0.74 × 0.42	8	傾斜	圓状	人為	土師器片	
100	C 3 h2	-	円形	1.00 × 1.00	34	外傾	平坦	人為	土師器片	SI 16 → 18 → 本跡
102	C 3 b3	N - 50° - W	〔橢円形〕	2.24 × (1.56)	34	内傾 外傾	平坦	人為	土師器片 磨石	本跡→ SI 18 - 20
105	B 2 e9	N - 7° - E	橢円形	0.98 × 0.77	24	外傾	圓狀	人為	土師器片	SI 6 → 本跡
107	B 2 d9	N - 56° - E	隅丸長方形	1.34 × 0.88	30	直立 外傾	平坦	人為	土師器片	本跡→ SI 6
109	D 4 a2	N - 40° - W	橢円形	1.40 × 1.25	62	外傾	平坦	人為	土師器片	
112	C 4 i4	-	円形	1.32 × 1.28	38	外傾 傾斜	平坦	人為	輪形鍛冶津	
113	C 4 g5	N - 88° - W	橢円形	0.78 × 0.64	32	外傾	平坦	人為	土師器片	SK131 → 本跡
115	C 4 f5	-	円形	1.06 × 1.06	54	外傾	平坦	人為	土師器片 突口	
117	D 4 a6	-	円形	0.98 × 0.98	42	外傾	平坦	人為	土師器片	
125	C 4 j3	N - 18° - E	〔橢円形〕	(1.24) × (1.20)	29	外傾 傾斜	平坦	人為	土師器片	本跡→ SK124
129	C 4 b6	N - 40° - E	橢円形	1.46 × 1.04	22 ~ 34	傾斜	平坦	人為	土師器片	
130	C 4 h6	-	円形	0.72 × 0.70	10	傾斜	凹凸	人為	土師器片	
131	C 4 g5	N - 80° - W	橢円形	2.46 × 1.34	30	傾斜	平坦	人為	土師器片 砥石	本跡→ SK113
132	C 4 g5	-	円形	1.02 × 0.98	20	外傾	平坦	人為	土師器片 刀子	
135	C 4 g6	N - 5° - E	不整橢円形	0.94 × 0.70	54	外傾 傾斜	凹凸	人為	土師器片	
142	C 4 j3	N - 23° - E	〔橢円形〕	1.36 × (0.68)	48	傾斜	平坦	人為	土師器片	本跡→ SK145
143	C 4 i8	N - 26° - W	橢円形	1.00 × 0.85	30	傾斜	平坦	人為	土師器片	本跡→ SI2
144	C 4 j2	N - 20° - E	〔橢円形〕	(1.26) × (1.06)	40	凹凸	平坦	人為	土師器片	本跡→ SK145 - 160
145	C 4 j2	N - 71° - W	橢円形	1.68 × 0.92	42	外傾 傾斜	平坦	人為	土師器片	SK137 → 138 - 148
146	C 4 j2	N - 25° - E	橢円形	1.86 × 1.74	46	傾斜	平坦	人為	土師器片	SK137 → 本跡 → SK162

番号	位置	長径方向	平面形	幾 梢		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
147	C 4 i8	N - 32° - E	橢丸長方形	1.56 × 1.06	24	板斜	圓状	人為	土師器片	SK148・164 → 本跡→SB2
151	C 4 e5	N - 24° - E	橢円形	0.28 × 0.25	32	外傾	V字状	人為	土師器片	
152	C 5 e2	N - 55° - E	橢円形	1.14 × 0.94	50	板斜	平坦	人為	土師器片 植形礎治溝	SK53 → 本跡
157	C 4 g8	-	円形	1.92 × 1.86	86	外傾	平坦	人為	土師器片	
158	C 4 f7	N - 90°	不整橢円形	1.84 × 1.72	72	外傾	凹凸	人為	土師器片 刀子	SI 22 → 本跡
160	C 4 j2	-	円形	0.92 × 0.90	26	外傾	平坦	人為	土師器片	SK144 → 本跡
161	D 4 a1	N - 34° - W	橢円形	2.70 × 2.06	60	板斜	平坦	人為	土師器片	本跡→ SK163
164	C 4 j7	-	橢丸長方形	1.44 × 0.90	30	板斜	凹凸	人為	土師器片	本跡→ SK147
168	C 4 h1	N - 45° - W	橢円形	0.88 × 0.74	30	板斜	圓状	人為	土師器片	SI 26 → 本跡
169	C 3 i9	-	円形	0.72 × 0.72	30	外傾	圓状	人為	土師器片	
171	C 4 g6	N - 28° - E	不整橢円形	1.66 × 1.25	72	外傾 板斜	凹凸	人為	土師器片	SI 22 → 本跡
172	C 3 e9	-	円形	1.58 × 1.50	62	外傾 直立	平坦	人為	土師器片	
173	C 3 e9	N - 76° - W	不整橢円形	1.66 × 0.98	34	外傾 板斜	平坦	人為	土師器片	
174	C 3 e9	N - 27° - W	不整橢円形	2.54 × 2.00	28	板斜	平坦	人為	土師器片	
176	C 3 g9	N - 15° - W	不整橢円形	1.68 × 1.06	64	外傾 板斜	凹凸	人為	土師器片	
180	D 3 e2	-	円形	1.04 × 1.02	14	外傾	平坦	人為	土師器片	SI 37 → 本跡
183	D 3 g4	N - 35° - E	【橢円形】	0.74 × (0.28)	43	外傾	凹凸	人為	土師器片	本跡→ SH 3
185	D 3 e9	-	橢丸長方形	4.68 × 1.20	40	外傾	凹凸	人為	土師器片	SI 31 → 本跡
186	D 3 g2	N - 37° - W	不整橢円形	1.10 × 0.70	22	板斜	平坦	人為	土師器片	本跡→ SI 42
189	D 3 d3	N - 78° - E	橢円形	1.25 × 0.82	18	板斜	平坦	人為	土師器片	
190	D 3 e2	-	円形	1.00 × 0.92	8	板斜	平坦	人為	土師器片	
194	C 4 e7	N - 70° - E	不要橢円形	1.36 × 1.10	50	外傾	平坦	人為	土師器片	SI 22・23 → 本跡
196	D 3 e1	N - 21° - W	【円形】	1.00 × (0.50)	26	外傾	圓状	人為	土師器片	
197	D 3 e3	-	円形	0.80 × 0.76	28	外傾	平坦	人為	土師器片	
200	D 3 a2	-	円形	0.82 × 0.80	26	板斜	凹凸	人為	土師器片	
207	C 4 f8	N - 58° - W	橢円形	0.72 × 0.52	12	板斜	平坦	人為	土師器片	
211	D 3 a9	N - 44° - E	不整橢円形	2.16 × 1.10	20	板斜	平坦	人為	土師器片	
214	C 4 d9	N - 63° - E	不整橢円形	1.90 × 0.98	20～38	板斜	凹凸	人為	土師器片	
215	D 3 a9	N - 33° - E	橢円形	0.90 × 0.80	30	外傾	平坦	人為	土師器片	

3 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟、方形堅穴遺構6基、土坑3基が確認できた。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第109図）

位置 調査区東部のC 4b7～C 4j7区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第48号住居跡・第164号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 桁行4間、梁行2間の身舎に西に庇が付く側柱建物跡で、桁行方向がN - 42° - Eの南北棟である。棟通りよりやや北東部に、P 6・P12の床東が配置されている。規模は身舎が桁行7.32m、梁行3.52mで、面積は25.76m²である。庇の出は120m(4尺)で庇を含めた梁行は4.76m(16尺)で面積は34.84m²である。身舎の柱間寸法は、桁行が北妻から1.82m(6尺)・1.82m(6尺)・1.74m(6尺)・1.92m(6尺)とほぼ均等で、梁行は北妻で西平から2.42m(8尺)・1.12m(3.5尺)、南妻で西平から1.78m(6尺)・1.88m(6尺)で配置されている。柱筋はほぼ通っている。床東のP18は、P10からP2にかけて、2.42m(8尺)・1.16m(4尺)で、床東のP19はP9からP3にかけて、2.44m(8尺)・1.20m(4尺)で配置されている。柱筋はほぼ通っている。庇の柱間寸法は1.74m(6尺)～1.96m(6.5尺)ではほぼ均等であり、柱筋もほぼ通っている。

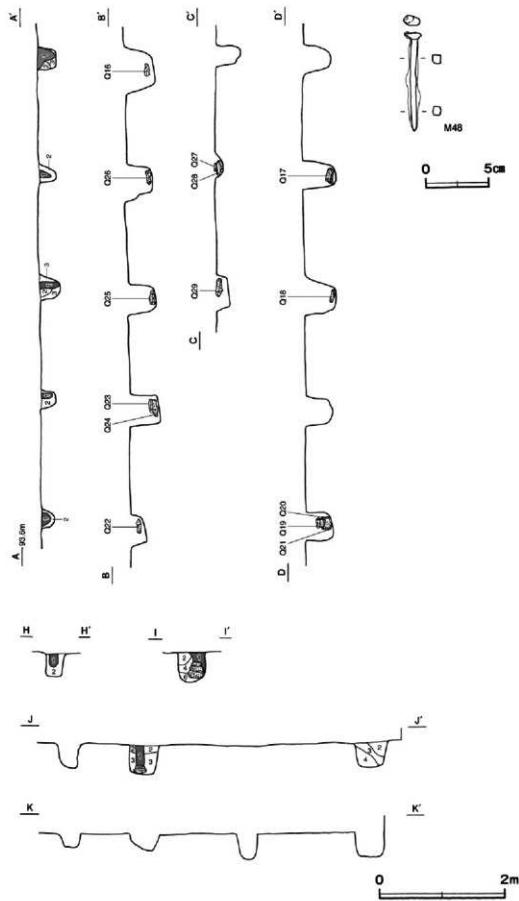
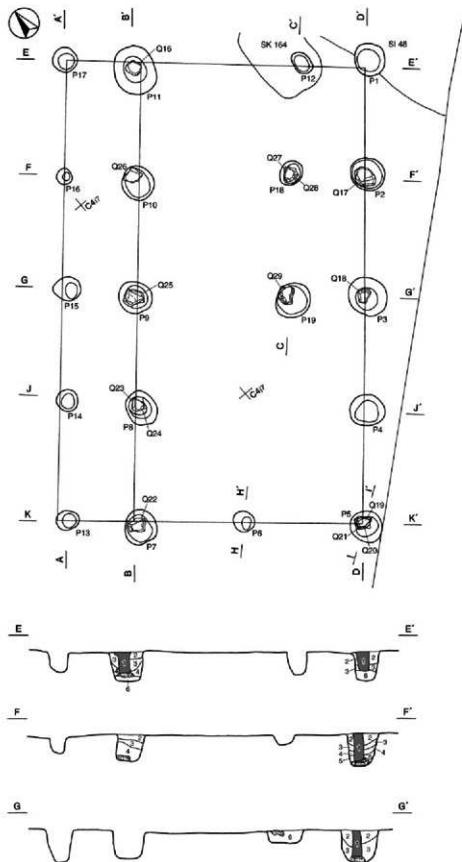
柱穴 19か所。P1からP12は身舎の柱穴である。平面形は円形または楕円形である。深さは26～50cmで、掘方の断面形はU字形・逆台形である。P2～P3、P5、P7～P11は地下式礎石を利用して柱あたりを標高92.88m～標高93.22mのレベルに調整している。P18・P19は床東で、平面形は楕円形である。P18は深さ16cmで掘方の断面形はU字形であり、地下式礎石を利用して柱あたりを標高93.32mのレベルに調整している。P19は深さ18cmで掘方の断面形は逆台形であり、地下式礎石を利用して柱あたりを標高93.30mのレベルに調整している。P13からP17は庇の柱穴である。平面形は円形または楕円形で深さは22～52cmで、掘方の断面形はU字形・逆台形である。第1層は柱痕跡、第2～6層は掘方への埋土である。

柱穴土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量	4 噴褐色 粘土ブロック多量
2 噴褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 噴褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
3 噴褐色 粘土ブロック中量	6 黒褐色 粘土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土器師器片9点(甕類)、鉄製品1点(釘)が各柱穴から出土している。M48はP3の埋土から出土している。Q16はP11の埋土から、Q17はP2の底面から、Q18はP3の底面から、Q19・Q20・Q21は上から順に重なってP5の底面から、Q22はP7の埋土から、Q23・24は上から順に重なってP8の埋土から、Q25はP9の底面から、Q26はP10底面から、Q27・Q28は上から順に重なってP18の底面から、Q29はP19の埋土からそれぞれ出土している。Q16～Q29は、柱の高さを調節する地下式礎石として使用されている。

所見 時期は、土器が出土しない為確定は難しいが、側柱の柱間間隔がほぼ一定の1.8m(6尺)であることや、放射性炭素年代測定から13世紀後葉から14世紀前葉と比定される第5号方形堅穴遺構、第6号方形堅穴遺構と主軸が同じであることから、当遺構も同時期とみられる。住居と考えられるが、当遺構は久慈川に隣接することから、川を意識した利用が推測される。



第109図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第109図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
							定形（鉄造品）				
M-48	釘	78	13	0.7	135	鉄				P-3 地下式	PL34

表6 第2号掘立柱建物跡地下式礎石計測表

番号	形状	規模(cm)			材質	出土位置	柱根	規模(cm)			材質	出土位置	柱根				
		長さ	幅	厚さ				長さ	幅	厚さ							
Q16	不整形	21.6	21.1	7.8	5,400	花崗岩	P11 地下	身寄	Q23	不整形	21.6	19.2	6.5	3,980	砂岩	P-8 地下 (上)	身寄
Q17	不整形円形	32.8	27.1	14.4	12,500	砂岩	P-2 底面	身寄	Q24	不整形円形	28.8	21.6	6.3	5,960	砂岩	P-8 地下 (下)	身寄
Q18	不整形方型	21.3	18.0	5.3	2,610	砂岩	P-3 底面	身寄	Q25	不整形円形	27.9	28.2	5.3	6,760	砂岩	P-9 底面	身寄
Q19	不整形円形	21.3	17.1	6.7	2,860	砂岩	P-5 底面 (上)	身寄	Q26	不整形	24.8	21.3	7.6	5,310	砂岩	P-10 底面	身寄床東
Q20	不整形方型	19.6	17.8	6.1	3,500	頁岩	P-5 底面 (中)	身寄	Q27	不整形方型	19.0	14.2	4.8	1,804	砂岩	P-18 底面 (上)	床東
Q21	不整形方型	24.3	21.2	7.6	5,900	砂岩	P-5 底面 (下)	身寄	Q28	不整形円形	24.2	21.5	10.1	6,750	砂岩	P-18 底面 (下)	床東
Q22	不整形方型	27.1	20.3	7.5	4,550	砂岩	P-7 地下	身寄	Q29	不整形方型	29.4	21.8	9.1	7,510	砂岩	P-19 地下	床東

※ 地下式礎石が権に重なる場合、位置関係は（上）・（中）・（下）で記載

(2) 方形堅穴造構

一辺が2mを超える規模で、平面形が方形の造構である。窓をもたないことから、堅穴住居と区別して方形堅穴造構とした。当時代の方形堅穴造構は6基を数える。以下、造構と遺物の特徴について解説する。

第3号方形堅穴造構 (SI 38) (第110図)

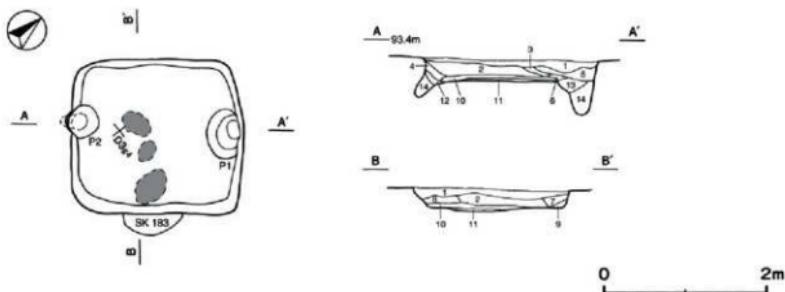
位置 調査区南部のD-34区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第183号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.14m、短軸1.92mの長方形で、長軸方向はN-40°-Eである。壁高は21~30cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部から東側にかけて炭化物が広がる範囲が確認された。

ピット 2か所。P-1は深さ41cm、P-2は20cmで、規模や位置から主柱穴である。P-2の土層は壁外に突出



第110図 第3号方形堅穴造構実測図

している。

覆土 14層に分層できる。焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。14層はピットの覆土である。

土層解説（ピット土層共通）

1 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	8 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
2 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子少量	9 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
3 黒褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	10 黑褐色 焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量
4 暗褐色 炭化物・焼土粒子微量	11 暗褐色 粘土ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	12 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	13 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量
7 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量	14 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 土器片5点（壺類）が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、伴う土器が出土していないため確定は難しいが、第5号方形竪穴遺構、第6号方形竪穴遺構と主軸が同じで同形態であることから、同時期の13世紀後葉から14世紀前葉に比定できる。住居と考えられる。

第4号方形竪穴遺構（SI 40）（第111・112図）

位置 調査区南部のD316区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

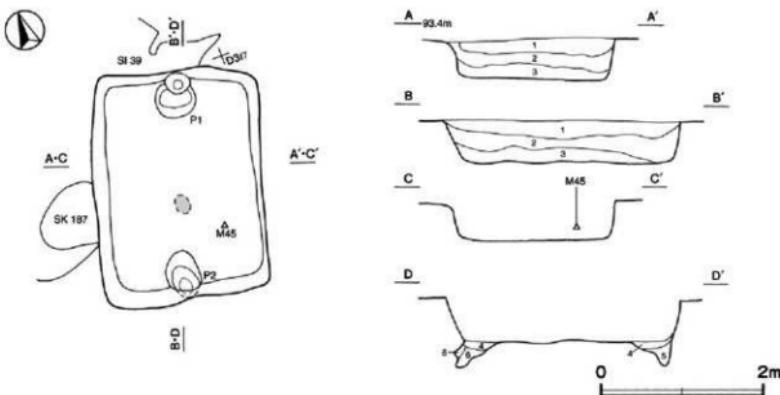
重複関係 第39号住居跡、第187号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.92m、短軸2.10mの長方形で、長軸方向はN-20°-Eである。壁高は48cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部から焼土が確認された。

ピット 2か所。P1は深さ30cm、P2は径52cmの円形で深さ36cmで、規模や位置から主柱穴である。

覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。4~6層はピットの覆土である。



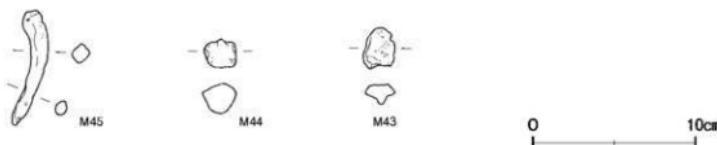
第111図 第4号方形竪穴遺構実測図

土層解説 (ピット土層共通)

1 黒褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	5 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	6 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色 炭化粒子中量、粘土ブロック・焼土粒子少量	
4 黒褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	

遺物出土状況 土師器片 24 点 (坏 4, 高台付碗 2, 壶類 18), 鉄製品 2 点 (釘, 不明鉄製品) 梱形鍛治溝 1 点 (7.8 g) が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。M45 は中央部の覆土中層から出土している。M43・M44 は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、伴う土器が出土していないため確定は難しいが、第 5 号方形竪穴遺構、第 6 号方形竪穴遺構と主軸がほぼ同じで同形態であることから、同時期の 13 世紀後葉から 14 世紀前葉に比定できる。住居と考えられる。



第 112 図 第 4 号方形竪穴遺構出土遺物実測図

第 4 号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第 112 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 43	鍛治溝	25	20	12	7.8	鉄	極小の楕円形肩部破片	覆土中	
M 44	鉄製品	18	20	18	10.1	鉄	炭化土跡に覆われている (含鉄)	覆土中	
M 45	鉢	7.1	22	0.9~1.1	(23.3)	鉄	一部わずかに欠ける	覆土中層	PL34

第 5 号方形竪穴遺構 (SI 41) (第 113 図)

位置 調査区南部の D 313 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.52 m、短軸 2.22 m の長方形で、長軸方向は N - 45° - E である。壁高は 52 ~ 56 cm で、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部の 2 か所から焼土と炭化材が確認された。

ピット 2 か所。P 1 は深さ 18 cm、P 2 は深さ 12 cm で、規模や位置から主柱穴である。

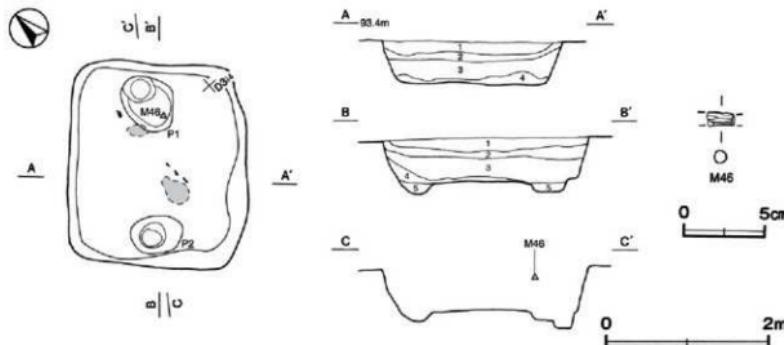
覆土 4 層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。5 層はピットの覆土である。

土層解説 (ピット土層共通)

1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土ブロック少々、炭化物・白色粒子微量	3 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック少々、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化材・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 6 点 (坏 2, 壶類 4), 鉄製品 1 点 (不明鉄製品), 繩文土器片 1 片が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。M46 は中央部の覆土上層から出土している。

所見 床面から出土した炭化材については、樹種同定によってクリアであることが判明した。また放射線炭素年代測定から 13 世紀後葉から 14 世紀前葉の結果が得られた (付章参照)。住居と考えられる。



第113図 第5号方形竪穴遺構・出土遺物実測図

第5号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第113図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 46	不明鉄製品	(1.7)	0.8	0.7	(1.7)	鉄	棒状（鍛造品）	覆土上層	

第6号方形竪穴遺構 (SI 43) (第114・115図)

位置 調査区南部のD 35区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第7号方形竪穴遺構、第188号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.66m、短軸2.52mの方形で、長軸方向はN-38°-Eである。壁高は22~34cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部からは焼土と炭化材が確認された。

ピット 2か所。P 1は188号土坑に掘り込まれているが、深さ26cm、P 2は深さ12cmで、規模や位置から主柱穴である。

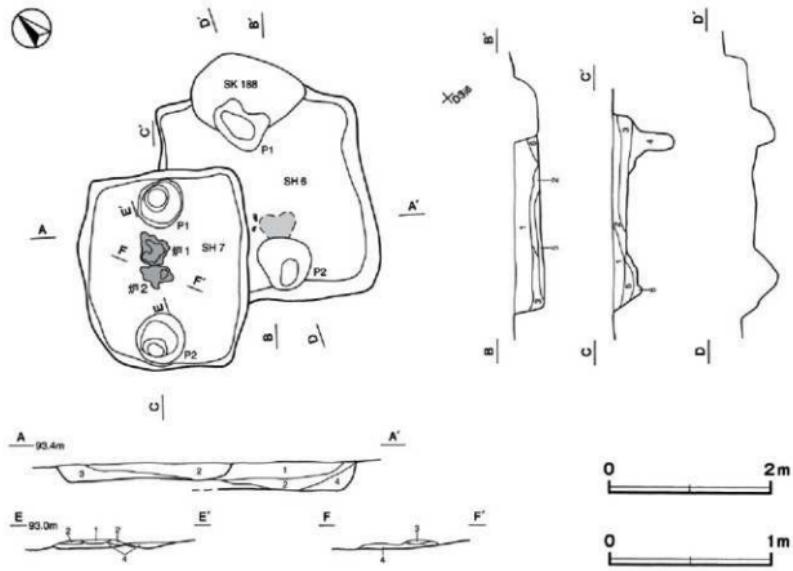
覆土 6層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。

土層解説（ピット土層共通）

1 極暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量	4 極暗褐色	炭化物・粘土粒子少量、焼土粒子微量
2 黒褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量	5 暗褐色	粘土ブロック中量、炭化材少量
3 黒褐色	粘土粒子少量	6 暗褐色	焼土ブロック中量、炭化物・粘土粒子少量

遺物出土状況 土師器片28点（环11、高台付楕2、甕類15）、鉄製品1点（刀子）、土製品1点（粘土質溶解物）が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。DP19、M47は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 床面から出土した炭化材については、樹種同定によってクリアであることが判明した。また時期は放射線炭素年代測定から13世紀後葉から14世紀前葉の結果が得られた（付章参照）。住居と考えられる。



第114図 第6・7号方形竪穴遺構実測図



第115図 第6号方形竪穴遺構出土遺物実測図

第6号方形竪穴遺構出土遺物観察表（第115図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP19	粘土鉢	(25)	(27)	(14)	(5.8)	長石・石英	表面に粉成の圧痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 47	刀子	(26)	1.4	0.4	(4.6)	鉄	刃部破片（鍛造品）	覆土中	PL34

第7号方形竪穴遺構 (SI 44) (第114・116図)

位置 調査区南部のD 34区、標高93.2mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第6号方形竪穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸2.46m、短軸2.10mの長方形で、長軸方向はN-40°-Eである。壁高は16~26cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部には炉が付設されている。

炉 2か所。炉1・2ともに、ほぼ中央部に付設されている。炉1は長軸45cm、短軸30cmの不定形であり、炉2は長軸44cm、短軸18cmの不定形である。いずれも火床面の掘り込みは4cmの地床炉である。火床面は炉1・炉2ともに赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック多量、炭化物微量	3	赤褐色	焼土ブロック多量
2	暗褐色	焼土ブロック多量	4	暗赤褐色	焼土ブロック多量

ピット 2か所。P1は深さ50cm、P2は深さ30cmで、規模や位置から主柱穴である。

覆土 3層に分層できる。レンズ状の堆積であるが、焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。4~6層はピットの覆土である。

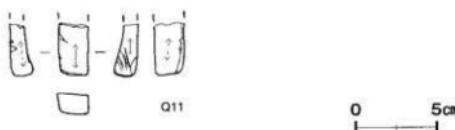
土層解説 (ピット土層共通)

1	黒褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	4	黒褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	5	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量
3	黒褐色	焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量	6	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土器片5点(甕類)、石器1点(砥石)が出土している。Q11は覆土中から出土している。

土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、伴う土器が出土していないため確定は難しいが、第5号方形竪穴遺構、第6号方形竪穴遺構と主軸がほぼ同じで同形態であることから、同時期の13世紀後葉から14世紀前葉に比定できる。住居と考えられる。



第116図 第7号方形竪穴遺構出土遺物実測図

第7号方形竪穴遺構出土遺物観察表 (第116図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	砥石	(33)	19	15	(135)	凝灰岩	砥面4面 他は破断面	覆土中	PL32

第8号方形竪穴遺構 (SI 47) (第117図)

位置 調査区分南部のD 3h6区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.18m、短軸2.06mの方形で、長軸方向はN-40°Wである。壁高は56cmで、直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。中央部やや東寄りに焼土が、中央部から南東部にかけて炭化物が確認された。

ピット P1は深さ16cm、P2は深さ10cmで、規模や位置から主柱穴である。

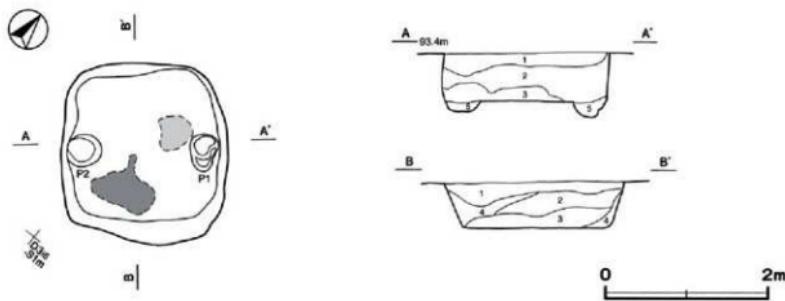
覆土 4層に分層できる。不規則な堆積であり、焼土・粘土ブロックや炭化物を含んでいることから埋め戻されている。5層はピットの覆土である。

土層解説 (ピット土層共通)

1 黒褐色 塗土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量	4 灰褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量
2 暗褐色 塗土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	5 黒褐色 粘土ブロック少量
3 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子少量	

遺物出土状況 土師器片 9点 (坏1, 高台付椀1, 壺類7) が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、伴う土器が出土していないため確定は難しいが、第5号方形竪穴遺構、第6号方形竪穴遺構と主軸がほぼ同じで同形態であることから、同時期の13世紀後葉から14世紀前葉に比定できる。住居と考えられる。



第117図 第8号方形竪穴遺構実測図

表7 中世 方形竪穴遺構一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸 (m)	深さ (cm)						
3	D 3Ⅲ	N - 40° - E	長方形	214 × 192	21 ~ 30	平坦	外傾	人為	土師器片	13C後葉～ 14C前葉	新旧開発 (古→新) SK183 → 本跡
4	D 3Ⅴ	N - 20° - E	長方形	292 × 210	48	平坦	外傾	人為	針・楕円鋸齿漆	13C後葉～ 14C前葉	SK 39 · SK 187 → 本跡
5	D 3Ⅲ	N - 45° - E	長方形	252 × 222	52 ~ 56	平坦	外傾	人為	鉄製品	13C後葉～ 14C前葉	
6	D 3Ⅴ	N - 38° - E	方形	266 × 252	22 ~ 34	平坦	外傾	人為	鉄製品	13C後葉～ 14C前葉	SK17 · SK118
7	D 3Ⅴ	N - 40° - E	長方形	246 × 210	16 ~ 26	平坦	外傾	人為	砾石	13C後葉～ 14C前葉	SH16 → 本跡
8	D 3Ⅵ	N - 40° - W	方形	218 × 206	56	平坦	直立	人為		13C後葉～ 14C前葉	

(3) 土坑

当時代と考えられる土坑3基を確認している。

第184号土坑 (第118図)

位置 調査区北東部のD 3Ⅴ区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.34m、短径0.30mの梢円形で、長径方向はN - 0°である。深さは19cmで、底面は椀状である。壁は緩やかに立ち上がりっている。

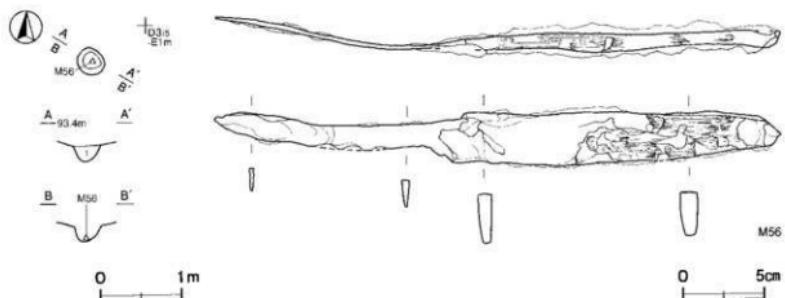
覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 に赤い鉄削色 粘土ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量

遺物出土状況 鉄製品1点(小刀)が出土している。M56は底面から刃部を天にした状態で出土した。M56に残存している木質部は、樹種同定によって広葉樹であることが判明した(付章参照)。

所見 時期は、出土した小刀や、13世紀後葉から14世紀前葉に比定している第5・6・7・8方形堅穴造構に隣接していることから、ほぼ同時期と考えられる。小刀は出土状況から意図的に埋設したと考えられるが、本跡の性格は不明である。



第118図 第184号土坑・出土遺物実測図

第184号土坑出土遺物観察表(第118図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 56	小刀	(349)	(37)	刃部0.2~0.4 全长12~10	(2590)	鉄	(注) 完形 刃部断面3角形 本柄の痕跡を残す(鐵製品)	底部	PL33

第188号土坑(第119図)

位置 調査区北東部のD315区、標高93mの河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第6号方形堅穴造構を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.42m、短径1.30mの楕円形で、長径方向はN-43°-Wである。深さは24cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がってている。

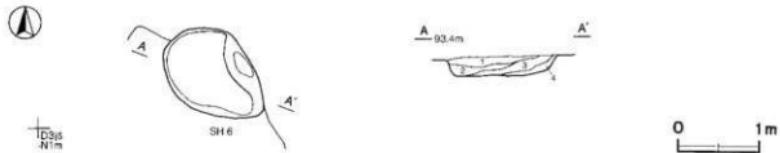
覆土 4層に分層できる。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

- 1 に赤い鉄削色 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片18点(坏8、甕類10)が出土している。土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、伴う土器が出土していないため細片のため確定は難しいが、13世紀後葉から14世紀前葉に比定している第6号方形堅穴造構を掘り込んでいることから、それより新しい中世とみられる。性格は不明である。



第119図 第188号土坑実測図

第210号土坑（第120図）

位置 調査区北東部のD 3 bl 区、標高 93 m の河岸段丘上の平坦部に位置している。

重複関係 第35号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 0.88 m、短径 0.70 m の椭円形で長径方向は N - 36° - W である。深さは 24 cm で、底面は 凹状である。壁はほぼ直立している。

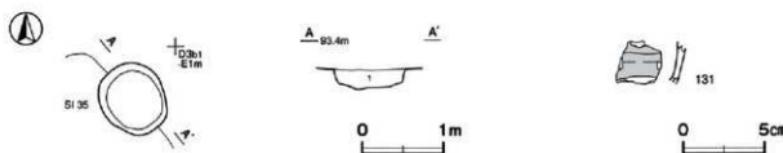
覆土 単一層である。粘土ブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説

1 層 色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 陶器1点（碗）が出土している。P131は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土した陶器から中世に比定できる。性格は不明である。



第120図 第210号土坑・出土遺物実測図

第210号土坑出土遺物観察表（第120図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	ほか	出土位置	備考
131	陶器	碗	-	(L2)	-	緻密	黒褐・淡黄	良好	外・内面鉄柱		覆土中	5% PL20

表8 中世 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長径×短径(m)	深さ(cm)					重複関係(古→新)	
184	D 3 bl	-	椭円形	0.34 × 0.30	19	輪状	縦斜	人為	小刀		
188	D 3 bl	N - 43° - W	椭円形	1.42 × 1.30	24	平坦	縦斜	人為	土器片	SH 6 → 本跡	
210	D 3 bl	N - 36° - W	椭円形	0.88 × 0.70	24	凹状	直立	人為	碗	SI 35 → 本跡	

4 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない焼土遺構3か所、土坑95基、柱穴跡1列、ピット群1か所を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 焼土遺構

第1号焼土遺構（第121図）

位置 調査区西部のC 2d6区、標高93mの河岸段丘上に位置している。

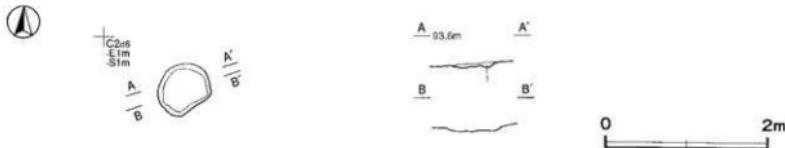
規模と形状 長径66cm、短径40cmの楕円形で、長径方向はN - 65° - Eである。確認面からの深さは6cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。床面には凹凸があり、底面や壁に赤変硬化した痕跡は確認されなかった。

火床面 焼土ブロック・粘土ブロックを含んでいる。

土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量

所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。本跡の周辺から硬化面や柱穴が検出されなかつことから、住居に伴う炉や野外炉ではないと判断し、焼土遺構とした。性格は不明である。



第121図 第1号焼土遺構実測図

第2号焼土遺構（第122図）

位置 調査区北西部のB 2d0区、標高93mの河岸段丘上に位置している。

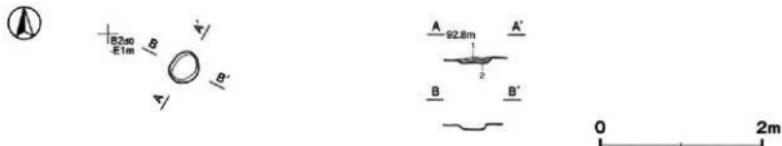
規模と形状 長径40cm、短径32cmの楕円形で、長径方向はN - 60° - Wである。確認面からの深さは8cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。火床面は皿状で、赤変している。

覆土 2層に分層できる。炭化物・焼土粒子を含み不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。火床面は第2層である。

土層解説

1 にぶい赤褐色 焼土粒子多量

2 灰赤色 炭化物・焼土粒子少量



第122図 第2号焼土遺構実測図

所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。本跡の周辺から硬化面や柱穴が検出されなかったことから、住居に伴う炉や野外炉ではないと判断し、焼土遺構とした。性格は不明である。

第3号焼土遺構（第123図）

位置 調査区北部のB 3j8区、標高93mの河岸段丘上に位置している。

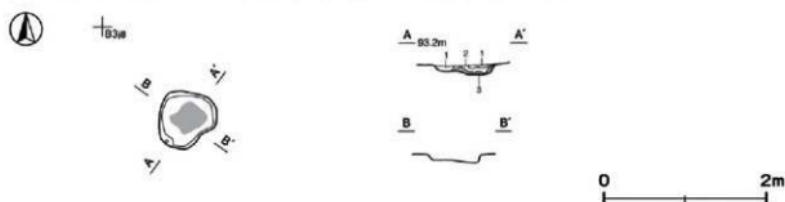
規模と形状 長径78cm、短径66cmの不整円形で、長径方向はN - 35° - Eである。確認面からの深さは10cmである。火床面は凹凸があり、赤変硬化している。

覆土 2層に分層できる。焼土ブロック・粘土ブロックを含み不規則な堆積状況を示すことから埋め戻されている。壁は外傾して立ち上がっている。火床面は第3層である。

土層解説

- | | | | | | |
|-------|----------|---------------|----------|--------|--------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子中量 | 粘土ブロック・焼土粒子微量 | 3 にぶい赤褐色 | 焼土粒子多量 | 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土ブロック中量 | 炭化粒子少量 | 粘土粒子微量 | | |

所見 遺物が出土しておらず、時期は不明である。本跡の周辺から硬化面や柱穴が検出されなかったことから、住居に伴う炉や野外炉ではないと判断し、焼土遺構とした。性格は不明である。

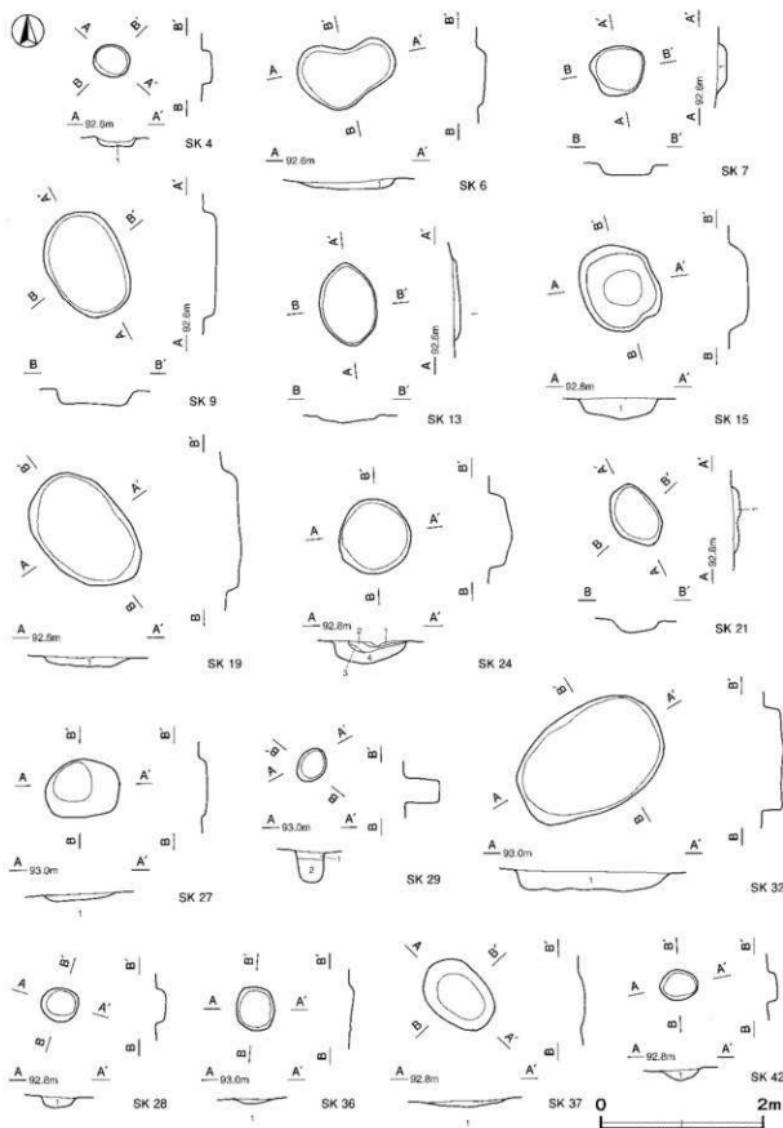


第123図 第3号焼土遺構実測図

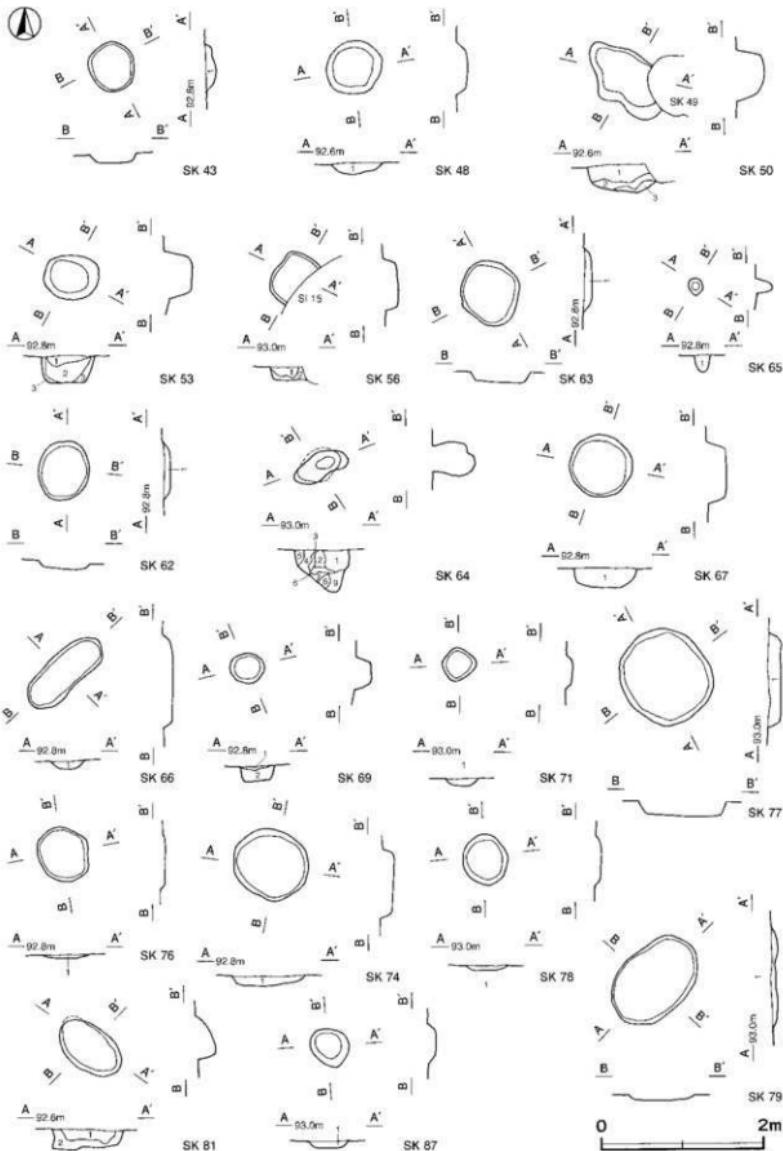
表9 焼土遺構一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C 2d6	N - 65° - E	椭円形	0.66 × 0.40	6	凹凸	壁斜	人為		
2	B 2d9	N - 60° - W	椭円形	0.40 × 0.32	8	圓状	壁斜	人為		
3	B 3j8	N - 35° - E	不整円形	0.78 × 0.66	10	凹凸	外傾	人為		

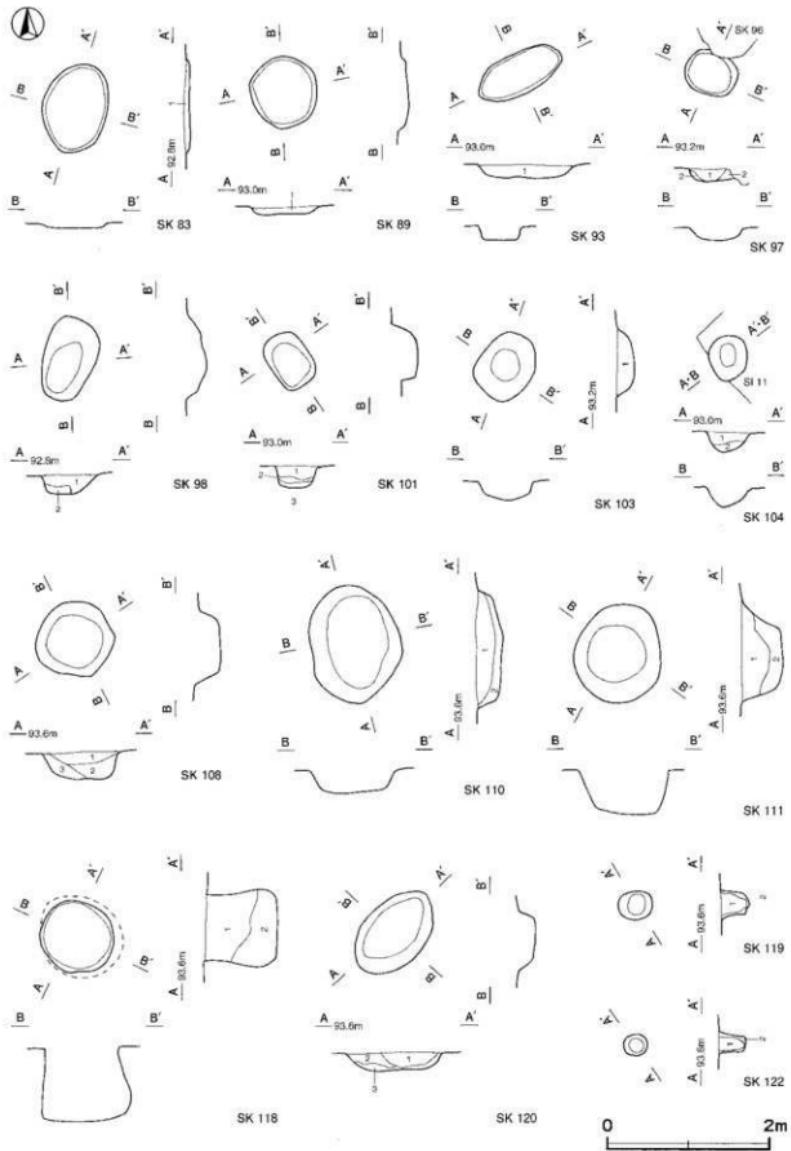
(2) 土坑(第124~129図)



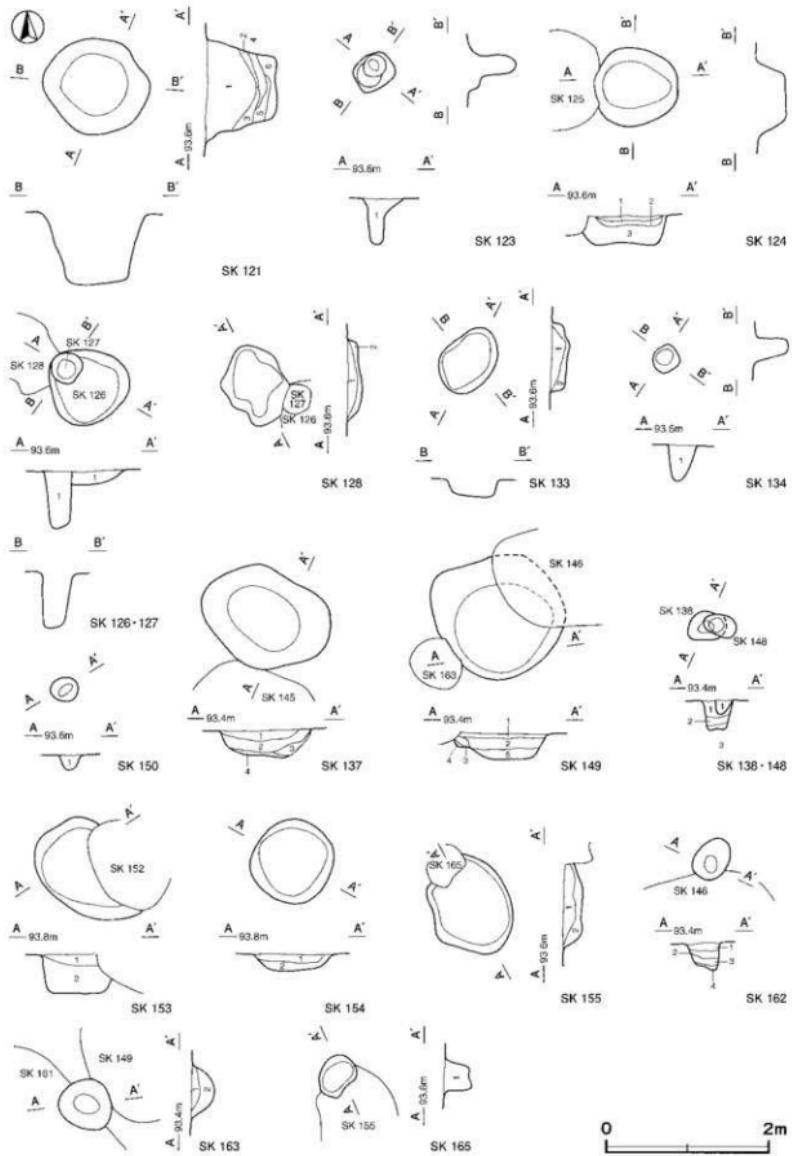
第124図 土坑実測図(1)



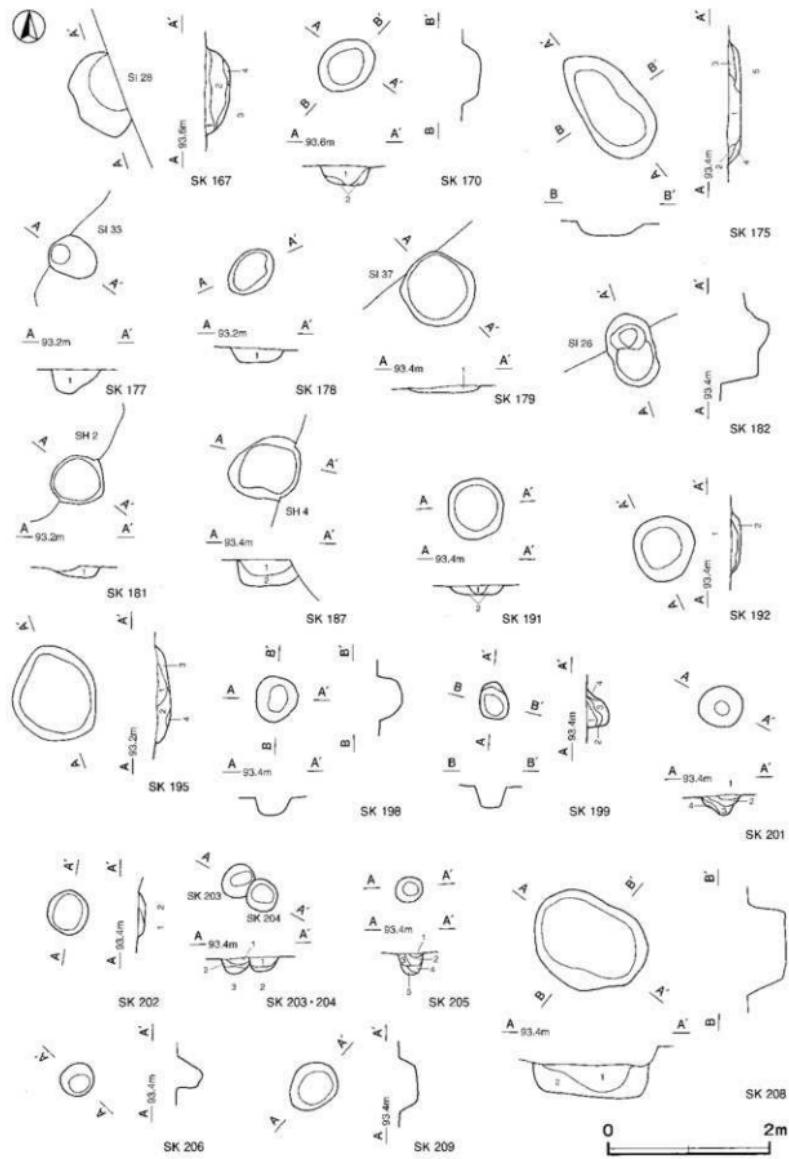
第125図 土坑実測図（2）



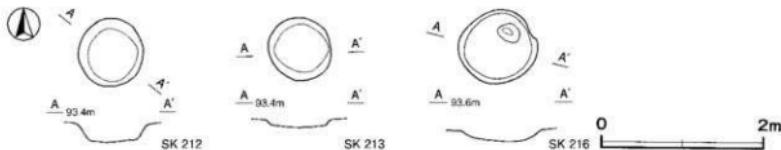
第126図 土坑実測図（3）



第127図 土坑実測図(4)



第128図 土坑実測図（5）



第129図 土坑実測図(6)

第4号土坑土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック・炭化物微量

第6号土坑土層解説

1 灰黄褐色 粘土ブロック・焼土ブロック・炭化物微量

第7号土坑土層解説

1 黑褐色 焼土ブロック・炭化物微量

第13号土坑土層解説

1 灰黄褐色 粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量

第15号土坑土層解説

1 黒褐色 炭化物微量

第19号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック微量・焼土粒子・炭化粒子微量

第21号土坑土層解説

1 黒褐色 炭化物微量

第24号土坑土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量・粘土ブロック少量・炭化粒子微量

2 暗赤褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量

3 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量

4 黑褐色 粘土ブロック中量・炭化物微量

第27号土坑土層解説

1 にふい黄褐色 烧土粒子・炭化粒子微量

第28号土坑土層解説

1 にふい黄褐色 粘土ブロック中量・焼土粒子微量

第29号土坑土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック少量・炭化粒子微量

2 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第32号土坑土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック少量・炭化物微量

第36号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量・焼土粒子微量

第37号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量・焼土粒子微量

第42号土坑土層解説

1 黑褐色 炭化粒子中量・粘土ブロック少量・焼土粒子微量

第43号土坑土層解説

1 黑褐色 炭化物微量・焼土粒子微量

第48号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量

第50号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物・焼土粒子微量

2 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土ブロック・炭化物微量

3 黑褐色 炭化粒子微量

第53号土坑土層解説

1 灰黄褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量

2 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量

3 にふい黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第56号土坑土層解説

1 灰黄褐色 粘土ブロック少量・焼土粒子微量

2 にふい黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第62号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量・粘土粒子微量

第63号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量

第64号土坑土層解説

1 黑褐色 烧土粒子少量・粘土ブロック・炭化物微量

2 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

3 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

4 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量

5 黑褐色 粘土粒子多量・炭化物・焼土粒子微量

6 黑褐色 炭化物中量・粘土ブロック少量

7 黑褐色 粘土粒子多量・炭化物微量

8 黑褐色 粘土粒子多量・炭化物微量

9 黑褐色 粘土ブロック粒子多量・炭化物微量

第65号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・炭化物微量

第66号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量

第67号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量

第69号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

2 黑褐色 粘土ブロック中量・炭化物微量

第71号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・炭化物微量

第74号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量・炭化物微量

第76号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック微量・焼土ブロック少量

第77号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量・焼土粒子微量

第 78 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 79 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第 81 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック微量

第 83 号土坑土層解説

1 底黄色 暗褐色 中量、炭化物・炭化粒子微量

第 87 号土坑土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化物・焼土粒子微量

第 89 号土坑土層解説

1 暗褐色 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量

第 93 号土坑土層解説

1 黑褐色 烧土ブロック・炭化粒子微量

第 97 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第 98 号土坑土層解説

1 暗褐色 烧土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 烧土ブロック・粘土ブロック微量

第 101 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 烧土ブロック中量、炭化物少量
3 黑褐色 烧土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 103 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子微量

第 104 号土坑土層解説

1 にい黄褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
2 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量

第 108 号土坑土層解説

1 黑褐色 烧土粒子微量
2 黑褐色 烧土粒子・炭化粒子微量
3 黑褐色 炭化粒子微量

第 110 号土坑土層解説

1 暗褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
2 にい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 111 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黑褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

第 118 号土坑土層解説

1 暗褐色 烧土粒子多量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量

第 119 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック中量

第 120 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック・焼土粒子少量、
2 黑褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 121 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 にい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3 にい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
4 黑褐色 粘土ブロック・炭化物微量
5 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 にい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 122 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第 123 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化物微量

第 124 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子微量
3 にい黄褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量

第 126 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子微量

第 127 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化物微量

第 128 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第 133 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック多量

第 134 号土坑土層解説

1 暗褐色 烧土ブロック多量、燒土粒子微量

第 137 号土坑土層解説

1 黑褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
4 暗褐色 烧土粒子微量

第 138 号土坑土層解説

1 暗褐色 炭化物少量、燒土粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 炭化粒子少量、粘土ブロック・燒土粒子微量

第 148 号土坑土層解説

1 黑褐色 炭化粒子少量、粘土ブロック・燒土粒子微量

第 149 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子微量
2 黑褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色 粘土ブロック多量
5 黑褐色 粘土ブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量

第 150 号土坑土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第 153 号土坑土層解説

1 にい黄褐色 炭化粒子・粘土粒子少量、燒土粒子微量
2 暗褐色 炭化物少量、燒土粒子微量

第 154 号土坑土層解説

1 にい黄褐色 烧土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 炭化物・燒土粒子微量

第 155 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

第 162 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量
2 暗褐色 炭化粒子微量
3 黒褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
4 暗褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

第 163 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量

第 165 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物少量、燒土粒子微量

第 167 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化物・燒土粒子微量
3 暗褐色 炭化物少量
4 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量

第 170 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子少量
2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物微量

第 175 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子微量
4 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量

第 177 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、燒土ブロック微量

第 178 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 烧土ブロック多量、炭化物微量

第 179 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化物・燒土粒子微量

第 181 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化物少量

第 187 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック少量、燒土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック・燒土ブロック少量

第 191 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量
2 灰黃褐色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量

第 192 号土坑土層解説

- 1 暗赤褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2 にい黄褐色 烧土ブロック中量、粘土ブロック少量

第 195 号土坑土層解説

- 1 黑褐色 烧土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色 烧土粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量
3 暗褐色 烧土粒子少量、粘土ブロック微量
4 にい黄褐色 烧土ブロック少量、炭化粒子微量

第 199 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土粒子微量
2 にい黄褐色 粘土ブロック少量
3 暗褐色 粘土ブロック少量
4 黄褐色 粘土ブロック中量

第 201 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 黄褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 粘土ブロック微量
4 灰黃褐色 烧土粒子中量、炭化物微量

第 202 号土坑土層解説

- 1 灰黃褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 にい黄褐色 粘土ブロック中量、炭化粒子微量

第 203 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量
2 灰黃褐色 粘土ブロック中量
3 暗褐色 粘土ブロック少量

第 204 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック中量、燒土ブロック少量
2 灰黃褐色 粘土ブロック中量

第 205 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 烧土ブロック・粘土ブロック少量、燒土粒子微量
2 灰黃褐色 粘土ブロック中量、炭化物微量
3 にい黄褐色 烧土ブロック中量、炭化物微量
4 黑褐色 粘土ブロック少量、炭化物微量
5 黄褐色 粘土ブロック多量

第 208 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 粘土ブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量
2 黑褐色 粘土ブロック中量、燒土ブロック・炭化物微量

表 10 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	横 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
4	B 2c8	N - 48° - W	楕円形	0.44 × 0.38	12	直立	平坦	人為		
6	B 2d8	N - 70° - E	不整楕円形	1.18 × 0.86	12	傾斜	平坦	人為		
7	B 2b9	N - 68° - E	楕円形	0.65 × 0.62	12	直立 傾斜	平坦	人為		
9	B 2c9	N - 28° - W	楕円形	1.34 × 0.94	17	直立 外傾 傾斜	平坦	人為		
13	B 2b60	N - 5° - W	楕円形	1.02 × 0.70	8	外傾	平坦	自然		
15	C 2b8	N - 15° - W	楕円形	1.08 × 0.92	26	傾斜	平坦	人為		
19	C 2a5	N - 35° - W	楕円形	1.58 × 1.02	20	傾斜	平坦	人為		
21	C 2a5	N - 25° - W	楕円形	0.80 × 0.56	16	外傾 傾斜	平坦	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	幾 梢		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
24	C 2a8	-	円形	0.92 × 0.88	28	直立	圓状	人為		
27	C 2f7	N - 52° - E	楕円形	0.90 × 0.74	10	外傾 板鈎	平坦	自然		
28	C 2b5	N - 46° - E	楕円形	0.48 × 0.42	12	外傾	平坦	人為		
29	C 2f7	N - 52° - E	楕円形	0.44 × 0.34	42	直立	平坦	人為		
32	C 2d9	N - 60° - E	楕円形	1.90 × 1.20	24	直立 外傾	平坦	人為		
36	B 3c3	N - 8° - E	楕円形	0.54 × 0.46	6	傾斜	平坦	人為		
37	B 2j8	N - 45° - W	楕円形	0.99 × 0.68	6	傾斜	平坦	自然		
42	B 3d2	N - 29° - E	楕円形	0.44 × 0.38	14	外傾	平坦	人為		
43	C 2d6	-	円形	0.58 × 0.54	10	外傾 板鈎	平坦	人為		
48	B 2e7	-	円形	0.68 × 0.64	11	板鈎	平坦	人為		
50	B 2e7	N - 41° - W	不整楕円形	1.18 × 0.70	36	直立 外傾	平坦	人為		本跡→SK49
53	C 3f2	N - 67° - E	楕円形	0.70 × 0.56	28	外傾	平坦	人為		本跡→SI 3
56	B 3i4	N - 30° - E	〔満丸方形容〕	0.60 × (0.34)	18	外傾	平坦	人為		本跡→SI 15
62	B 2j0	N - 27° - E	楕円形	0.76 × 0.64	8	外傾	平坦	自然		
63	B 3h1	N - 41° - W	楕円形	0.82 × 0.74	13	外傾	平坦	自然		
64	B 3c3	N - 75° - E	不整楕円形	0.71 × 0.32	52	内傾	凹凸	人為		
65	C 3b1	-	不整円形	0.21 × 0.18	20	外傾	圓状	人為		
66	B 3i1	N - 49° - E	楕円形	1.12 × 0.42	12	外傾	平坦	人為		
67	B 3h1	-	円形	0.78 × 0.76	24	外傾	平坦	人為		
69	B 3d1	-	円形	0.42 × 0.36	18	外傾	平坦	人為		
71	B 3g2	-	円形	0.40 × 0.40	9	外傾	平坦	人為		
74	B 3g1	-	円形	0.91 × 0.86	18	外傾	平坦	人為		
76	B 3j3	-	円形	0.68 × 0.64	3	外傾 板鈎	平坦	人為		
77	B 3h5	N - 28° - W	楕円形	1.20 × 1.08	18	外傾	平坦	人為		
78	B 3i4	N - 4° - W	楕円形	0.62 × 0.54	5	傾斜	平坦	人為		
79	B 3g3	N - 47° - E	楕円形	1.24 × 0.74	4	板鈎	平坦	自然		
81	B 2j6	N - 56° - W	楕円形	0.90 × 0.52	22	外傾	圓状	人為		
83	C 3a1	N - 17° - E	楕円形	1.12 × 0.78	6	外傾	平坦	自然		
87	B 3g4	N - 30° - W	楕円形	0.50 × 0.42	10	外傾	平坦	人為		
89	C 3b4	-	円形	0.90 × 0.84	10	傾斜 〔はづき〕	平坦	人為		
93	B 3j4	N - 67° - E	楕円形	1.14 × 0.48	18	外傾	平坦	人為		
97	B 3j8	N - 67° - W	楕円形	0.64 × 0.50	16	外傾	平坦	人為		本跡→SK96
98	B 3j2	N - 2° - W	満丸長方形	1.06 × 0.62	24	傾斜	圓状	人為		
101	C 3b2	-	満丸長方形	0.70 × 0.50	28	外傾 板鈎	平坦	人為		SI 16 - 18 → 本跡
103	B 3g5	N - 34° - E	楕円形	0.84 × 0.67	24	外傾	圓状	人為		
104	C 3a7	-	楕円形	0.56 × 0.46	28	板鈎	圓状	人為		SI 11 → 本跡
108	D 4b2	-	円形	0.96 × 0.92	30	外傾	平坦	人為		
110	C 4f2	N - 12° - W	楕円形	1.48 × 1.08	28	板鈎	平坦	人為		
111	C 4h3	N - 32° - E	楕円形	1.22 × 1.08	54	外傾	平坦	人為		
112	C 4i4	-	円形	1.32 × 1.28	38	外傾 板鈎	平坦	人為		
118	C 4g2	-	円形	0.94 × 0.86 1.11 × 0.96	90	内傾	平坦	人為		
119	C 4b6	N - 70° - E	楕円形	0.42 × 0.36	32	外傾	圓状	人為		
120	C 3g9	N - 47° - E	楕円形	1.22 × 0.74	22	外傾 板鈎	平坦	人為		
121	C 4g3	N - 25° - E	不整円形	1.32 × 1.28	86	外傾	平坦	人為		
122	C 4i7	-	円形	0.30 × 0.26	32	直立	平坦	人為		
123	C 4i4	N - 30° - E	満丸長方形	0.52 × 0.42	56	外傾 直立	平坦	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	幾 梢		底面	壁面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
124	C 4b3	N - 87° - E	【楕円形】	{1.06} × 0.96	38	傾斜	平坦	人為		SK125 → 本跡
136	C 4b6	N - 57° - W	不整円形	1.00 × 0.90	24	傾斜	平坦	人為		SK126 → 本跡 → SK127
127	C 4b6	-	円形	0.38 × 0.36	68	直立	平坦	人為		SK128 → SK127 → 本跡
128	C 4b6	N - 33° - W	不整椭円形	1.00 × 0.70	18	傾斜	凸	人為		SK129 → SK128 → 本跡
133	C 4g5	N - 40° - E	椭円形	0.78 × 0.60	22	外傾	平坦	人為		SK130 → SK136 → 127
134	C 4g6	-	円形	0.34 × 0.34	42	外傾 直立	平坦	人為		
137	C 4j2	N - 68° - W	椭円形	1.60 × 1.14	36	傾斜	凹凸	人為		SK145 → 本跡
138	C 4j2	N - 64° - W	【椭円形】	0.34 × (0.20)	40	外傾	平坦	人為		SK145 → 本跡 → SK148
148	C 4j3	N - 67° - W	椭円形	0.44 × 0.38	18	傾斜	盤状	人為		SK138 - 145 → 本跡
149	C 4j2	N - 50° - W	【椭円形】	1.54 × (0.94)	30	傾斜	平坦	人為		本跡 → SK146 - 163
150	C 4e4	-	円形	0.34 × 0.32	18	傾斜	盤状	人為		
153	C 5e1	N - 38° - W	【椭円形】	1.36 × (0.92)	48	直立	平坦	人為		本跡 → SK152
154	C 4e6	-	円形	1.02 × 0.98	22	傾斜	平坦	人為		
155	C 4g7	N - 23° - W	不整椭円形	{1.04} × 1.00	24	傾斜	平坦	人為		本跡 → SK165
162	C 4j2	N - 24° - E	椭円形	0.54 × 0.42	34	外傾	凹凸	人為		SK146 → 本跡
163	C 4j2	-	円形	0.64 × 0.64	28	傾斜	盤状	人為		SK149 - 161 → 本跡
165	C 4g7	N - 38° - E	不整椭円形	0.52 × 0.40	30	直立	凹凸	人為		SK155 → 本跡
167	C 4j8	N - 20° - W	【不整椭円形】	1.04 × (0.60)	28	傾斜	平坦	人為		SI 48 → 本跡 → SI 28
170	C 3g9	N - 43° - E	椭円形	0.74 × 0.62	20	傾斜	平坦	人為		
175	C 3i9	N - 40° - W	椭円形	1.50 × 0.80	16	傾斜	平坦	人為		
177	D 3d8	N - 56° - W	椭円形	0.60 × 0.50	30	傾斜	盤状	人為		SI 33 → 本跡
178	D 3b1	N - 46° - E	椭円形	0.66 × 0.46	18	外傾	平坦	人為		SI 32 → 本跡
179	D 3f2	-	円形	0.92 × 0.92	9	傾斜	平坦	人為		SI 37 → 本跡
181	D 3d9	-	円形	0.68 × 0.68	14	傾斜	平坦	人為		本跡 → SH 2
182	C 4i1	N - 18° - W	椭円形	0.92 × 0.56	38	外傾	凹凸	人為		SI 36 → 本跡
187	D 3d6	-	【円形】	0.78 × (0.72)	33	外傾	平坦	人為		SI 39 → 本跡 → SH 4
191	D 3e2	-	円形	0.76 × 0.72	10	傾斜	平坦	人為		
192	D 3d3	-	円形	0.78 × 0.78	12	傾斜	平坦	人為		
195	C 4f7	N - 18° - W	椭円形	1.20 × 1.06	18	外傾	平坦	人為		SI 22 → 本跡
198	D 3c1	-	円形	0.56 × 0.52	28	外傾	平坦	人為		
199	D 3f2	N - 7° - E	椭円形	0.44 × 0.34	27	外傾	平坦	人為		
201	D 3f2	-	円形	0.52 × 0.50	22	傾斜	V字状	人為		
202	D 3f2	-	円形	0.54 × 0.50	10	傾斜	平坦	人為		
203	D 3g2	N - 29° - E	【椭円形】	0.46 × (0.32)	20	傾斜	盤状	人為		本跡 → SK204
204	D 3g2	-	円形	0.40 × 0.38	18	傾斜	盤状	人為		SK203 → 本跡
205	D 3e2	N - 38° - E	椭円形	0.38 × 0.32	26	傾斜	盤状	人為		
206	D 3b3	-	円形	0.42 × 0.40	30	直立 傾斜	凹凸	人為		
208	D 3g2	N - 54° - W	椭円形	1.40 × 1.12	42	外傾 傾斜	平坦	人為		本跡 → SI 42
209	D 3f5	N - 40° - E	椭円形	0.66 × 0.52	24	傾斜	盤状	人為		
212	C 3j8	N - 11° - E	椭円形	0.88 × 0.80	22	傾斜	平坦	人為		
213	C 3i5	-	円形	0.80 × 0.78	11	傾斜	平坦	人為		
216	D 3d7	-	円形	0.94 × 0.94	12	傾斜	盤状	人為		

(3) 柱列跡

確認した柱列跡について、以下記述する。位置については全体図にて記す。

第1号柱列跡（第130図）

位置 調査区西部のF 4a9～F 4a0区、標高93mの平坦な台地上に位置している。

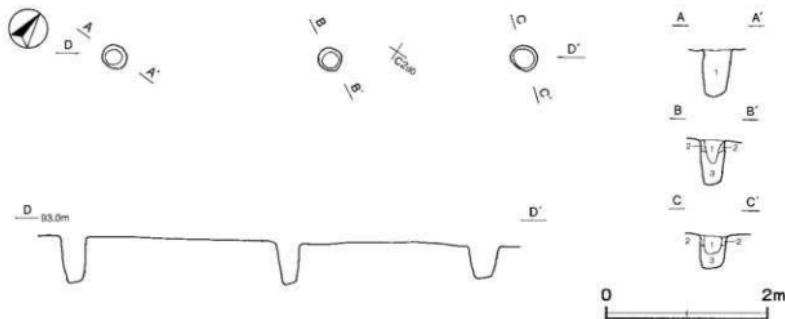
規模と形状 北東方向に配置された柱穴3か所を確認した。軸方向はN-55°-Eで、柱間寸法は、2.7m。(9尺) 2.4m(8尺)と不規則である。柱筋はほぼ描いている。

柱穴 平面形は長径30～32cm、短径28～32cmの円形である。深さは42～58cmで、掘方の断面形はU字形である。第1層は柱痕跡で、第3層は埋土である。

土層解説

1 黒褐色 粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	3 にい青褐色 粘土粒子多量、炭化粒子微量
2 暗褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子微量	

所見 主軸方向は隣接する第5号住居跡と似るが、関連性は確認できなかった。出土遺物は無く、時期は不明である。



第130図 第1号柱列跡実測図

(4) ピット群

確認したピット群について、以下記述する。位置については全体図にて記す。

第1号ピット群跡

位置 調査区北部から南西部の標高93m、C 2a0～D 3a3区にかけての東西24m、南北80mの範囲から、柱穴状のピット36か所を確認した。

規模 平面形は長径18～66cm、短径16～62cmの円形または梢円形で、深さが32～60cmである。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。

所見 時期・性格ともに不明である。

表11 ピット一覧表

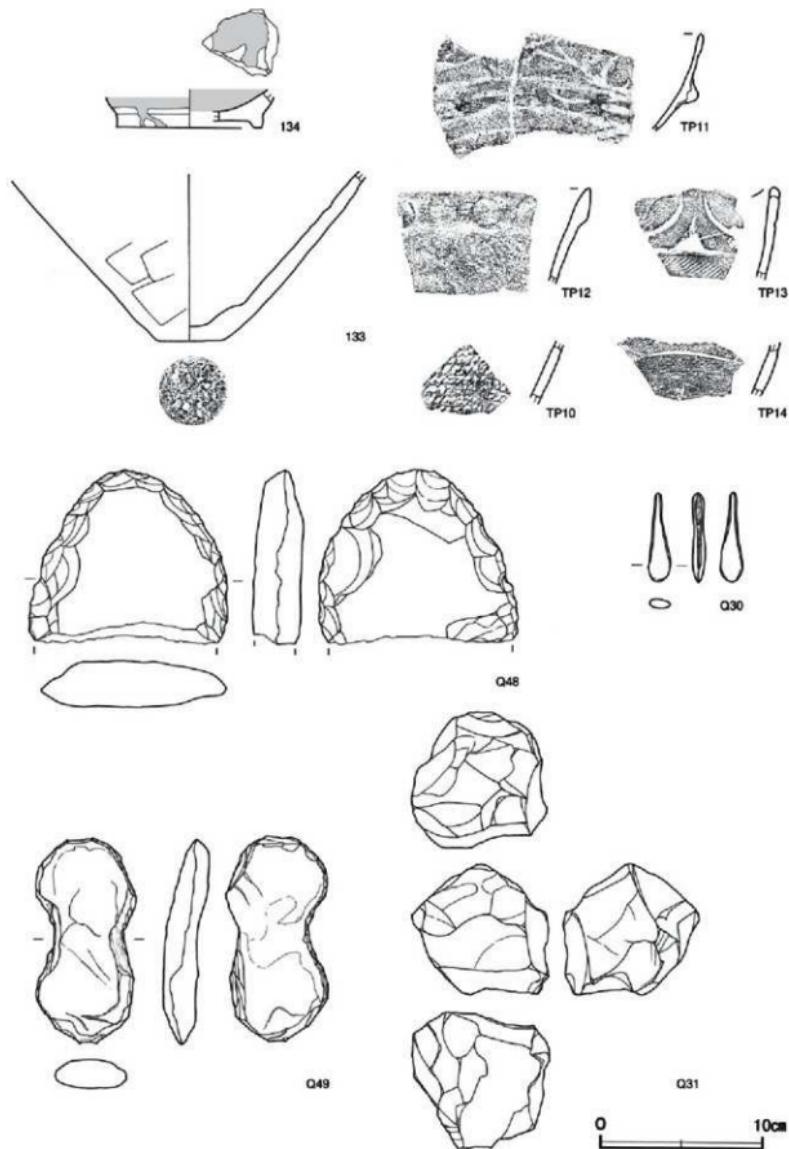
番号	位置	長径方向	平面形	規 條		番号	位置	長径方向	平面形	規 條	
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					長径×短径 (m)	深さ (cm)
P 1	D 3d7	N = 15° - E	楕円形	0.30 × 0.26	35	P 19	D 3b5	-	円形	0.66 × 0.62	26
P 2	D 3d7	-	円形	0.26 × 0.24	27	P 20	D 3b4	-	円形	0.40 × 0.38	35
P 3	D 3d7	-	円形	0.30 × 0.28	34	P 21	D 3b4	-	円形	0.24 × 0.24	37
P 4	D 3d7	-	円形	0.24 × 0.24	34	P 22	D 3b4	-	円形	0.32 × 0.32	49
P 5	D 3e7	N = 45° - W	隅丸方形	0.24 × 0.24	36	P 23	D 3b5	N = 85° - W	楕円形	0.54 × 0.24	50
P 6	D 3e7	N = 22° - W	楕円形	0.27 × 0.24	51	P 24	D 3b3	N = 37° - W	楕円形	0.26 × 0.21	35
P 7	D 3e7	N = 18° - E	楕円形	0.27 × 0.19	38	P 25	D 3b3	-	円形	0.30 × 0.30	39
P 8	D 3e7	N = 80° - W	楕円形	0.26 × 0.19	43	P 26	D 3b3	N = 72° - E	楕円形	0.31 × 0.28	36
P 9	D 3e7	N = 74° - W	楕円形	0.26 × 0.18	47	P 27	D 3b3	N = 23° - W	楕円形	0.21 × 0.16	32
P 10	D 3e7	N = 25° - E	楕円形	0.31 × 0.28	54	P 28	D 3b3	N = 50° - W	楕円形	0.21 × 0.18	37
P 11	D 3d7	N = 28° - E	楕円形	0.40 × 0.34	24	P 29	D 3d	N = 64° - W	楕円形	0.28 × 0.22	38
P 12	D 3d7	N = 47° - W	楕円形	0.56 × 0.42	36	P 30	D 3b2	N = 27° - W	楕円形	0.27 × 0.24	40
P 13	D 3b5	-	円形	0.18 × 0.16	38	P 31	D 3b3	-	円形	0.30 × 0.28	47
P 14	D 3b5	-	円形	0.20 × 0.20	41	P 32	D 3b4	N = 74° - E	楕円形	0.30 × 0.26	42
P 15	D 3b5	N = 6° - W	楕円形	0.32 × 0.28	46	P 33	C 2j0	-	円形	0.20 × 0.20	56
P 16	D 3g5	N = 88° - W	楕円形	0.36 × 0.30	51	P 34	C 2j0	-	円形	0.36 × 0.26	40
P 17	D 3g4	-	円形	0.28 × 0.26	38	P 35	D 2a9	-	円形	0.40 × 0.40	50
P 18	D 3b5	-	円形	0.32 × 0.30	26	P 36	D 3b1	-	円形	0.32 × 0.31	60

遺構出土遺物観察表（第131・132図）

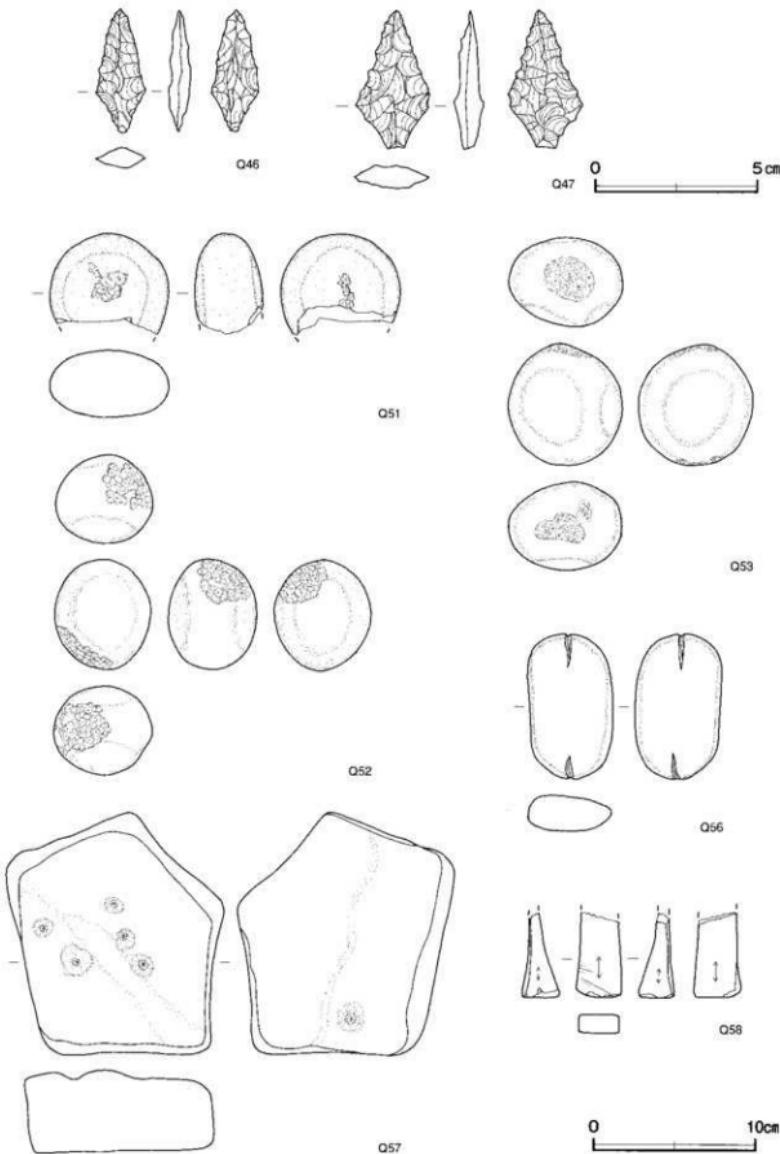
番号	種 別	器種	口径	器高	底形	胎 土	色 調	燒成	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
133	陶文土器	深鉢	-	10.3	4.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐	普通	体部外側ヘラ状工具による削り	表土	縦支後期 20% PL25
134	陶器	瓶	-	(19)	(9.0)	赤色粒子	に赤い黄褐色	普通	長石粒	第1号住居土中	PL30

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	手 法 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP10	陶文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黄褐色	陶文LR	表土	PL25
TP11	陶文土器	深鉢	長石・石英	褐色	横方向の陰帯に3点の突起	表土	安行3a PL25
TP12	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	口縁部に發達 円状の指痕	表土	加賀村B 稲葉 PL25
TP13	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	に赤い黄褐色	三叉門の下に寸継 瓦文RL	表土	安行3a PL25
TP14	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰黃褐色	陶文RL	表土	加賀村B I PL25

番号	器 様	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
Q30	須型 n	5.5	1.4	0.8	6.0	砂岩	磨き痕	SI31 稲土中	PL31
Q31	石核	8.1	8.4	8.5	61.5	トロトロ石	押圧剥離面	表土	PL31
Q46	石磨	2.5	1.0	0.45	0.8	流紋岩	押圧剥離による調整 有孔族	SI 1 稲土中	PL31
Q47	石磨	2.9	1.5	0.6	1.3	瑪瑙	押圧剥離による調整 有孔族	SI 3 稲土中	PL31
Q48	スクレイバー	(10.8)	12.3	3.1	(511)	砂岩	押圧剥離による調整	SI 5 稲土中	PL31
Q49	打製石斧	12.6	6.2	4.0	221	頁岩	押圧剥離による調整 分銅形	SI15 稲土中	PL31
Q51	磨石基盤	(6.2)	7.3	4.2	(240)	砂岩	中央部に敲打痕 下端部欠損	SI13 稲土中	PL32
Q52	磨石基盤	6.8	6.1	5.5	306	砂岩	上面に微痕	SI22 稲土中	PL32
Q53	磨石基盤	7.5	7.1	5.5	372	砂岩	側面上面に微痕 2次火熱痕	SI34 稲土中	PL32
Q55	磨石基盤	8.7	8.5	4.1	420	花崗岩	中央部に敲打痕	SI11 稲土中	PL32
Q56	石斧	9.0	5.2	2.2	167	ホルンフェルス	両面面に刃目	表土	PL31
Q57	圓石	14.8	13.4	5.2	1296	砂岩	圓底表5 四周素1	表土	PL31
Q58	砾石	(5.2)	2.9	2.3	(363)	凝灰岩	砥面4面 他は破断面	表土	PL32



第131図 遺構外出土遺物実測図(1)



第132図 遺構外出土遺物実測図(2)

第4節 まとめ

1はじめに

橋元遺跡は、南流する久慈川右岸の標高93mの下位河岸段丘上に立地している。河床からの比高は8mほどである。

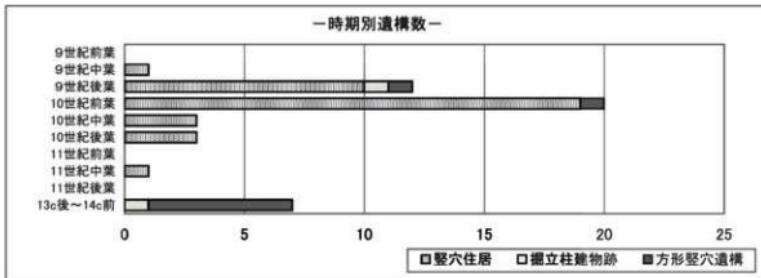
当遺跡の調査は、第1次調査として平成17年12月から平成18年3月まで、第2次調査として平成22年7月1日から平成22年9月30日までの計7か月間にわたって実施した。第1次調査では、竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構1基、焼土遺構3か所、柱列跡1列、土坑102基などを確認した。第2次調査では、竪穴住居跡20軒、住居兼鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構7基、土坑100基、ビット群などを確認した。第1・2次調査で縄文時代、平安時代、中世の遺構や遺物を確認したことから、断続的ではあるが長期間にわたる土地利用の状況が明らかになった。特に平安時代の遺構は竪穴住居跡37軒、住居兼鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構2基などが確認でき、平安時代から本格的に集落が営まれるようになったことが明らかになった。

ここでは、遺跡の中心となる平安時代から中世までの集落の変遷を概観するとともに、鍛冶関連遺物が出土している住居兼鍛冶工房跡と集落の関係について若干の考察を加え、まとめとしたい。

2集落の様相

当遺跡で確認された遺構は、住居跡38軒(縄文時代1軒、平安時代37軒)、掘立柱建物跡2棟(平安時代1棟、中世1棟)、住居と推測できる方形竪穴遺構8基(平安時代2基、中世6基)である。

表12 橋元遺跡時期別遺構数



(1) 縄文時代

当時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、第106・116号土坑の2基などが確認できた。第45号竪穴住居跡の炉内、第116号土坑の覆土下層から後期中葉の加曾利B1式土器が出土している。その他、調査区内の表土や後世の遺構の覆土に、混入、あるいは流れ込んだ後期の加曾利B式の粗製土器や、晩期初頭の安行3a式土器などの縄文土器が確認できた。土器の出土量は少ないが、石鎌・石皿・磨石・打製石斧・スクレイバ-等の石器・石製品も出土している。このことから当調査区では、縄文時代後期中葉に小規模な集団が台地上で生活を営んでいた様相が見られる。

大子地方の縄文時代は、調査事例が少ないため明確ではないが、確認されている縄文時代の遺跡は丘陵段丘の台地上にみられ、遺跡と河川との位置関係は、河川からの水平距離で最短50mから、遺跡と河川との比高は20m内外で河川に面しているのが特徴とされている¹⁾。当遺跡は下位河岸段丘に所在しており、確認された竪穴住居跡は久慈川から水平距離で10mほど、比高は8mほどであることから、大子地方の縄文時代の様相を新たに知る調査事例となる。また土器に着目してみると、本跡から北西方向約8kmに位置する塙平A遺跡と久慈川の約1km下流に位置する番城内遺跡²⁾から大洞A式土器が出土している程度で大子地方での晩期の確認例は特に少ない。今回の調査で晩期初頭に位置づけられる安行3a式土器が確認されたのは貴重な例となる。

(2) 平安時代

当時代の遺構は、竪穴住居跡37軒、住居兼鍛冶工房跡1軒、掘立柱建物跡1棟、方形竪穴遺構2基などが確認できた。当地域にも人々が移り住み、住居等が急増して集落を形成し拡大する時期となるが、11世紀に入ると住居跡1軒と衰退する。時期を出土遺物から、Ⅰ期を9世紀中葉、Ⅱ期を9世紀後葉、Ⅲ期を10世紀前葉、Ⅳ期を10世紀中葉、Ⅴ期を10世紀後葉、Ⅵ期は11世紀中葉の6時期に区分して集落の様相を述べる。また、竪穴住居跡の規模については最大規模の住居跡(長軸6.32m)と最小規模の住居跡(長軸2.88m)の長軸の差から、小形を長軸3.5m未満、中形を長軸3.5m以上~5m未満、大形を長軸5m以上とした。

ア 集落の変遷について

第Ⅰ期（第133図）

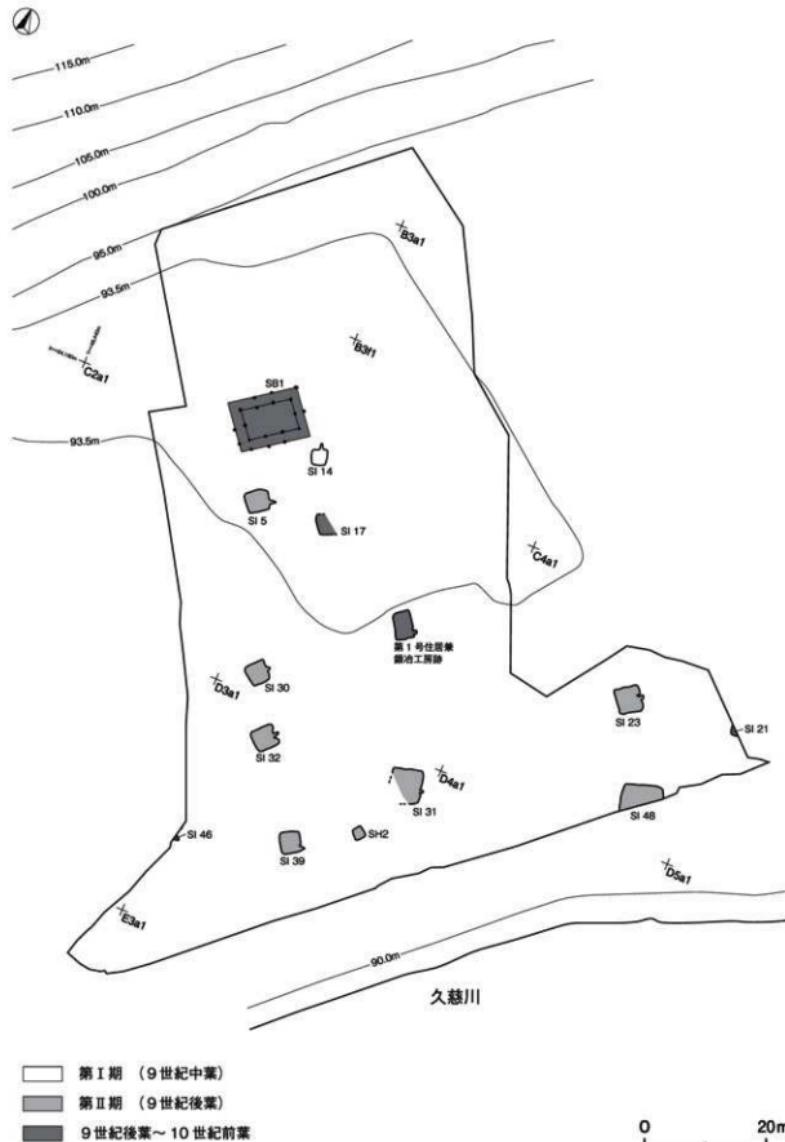
当期は、第14号住居跡が該当し、調査区の北東部に位置する。形状は一辺約2.5mの方形と推定され、主軸方向はN-24°-Wで当遺跡では唯一となる北竜である。主な出土遺物は土師器片であり、鉄製品は保有していない。当期が平安時代における集落形成の黎明期であり、該当する遺構は本跡のみのため不明な点が多いが、周辺域に当該期の集落が営まれていたと考えられる。

第Ⅱ期（第133図）

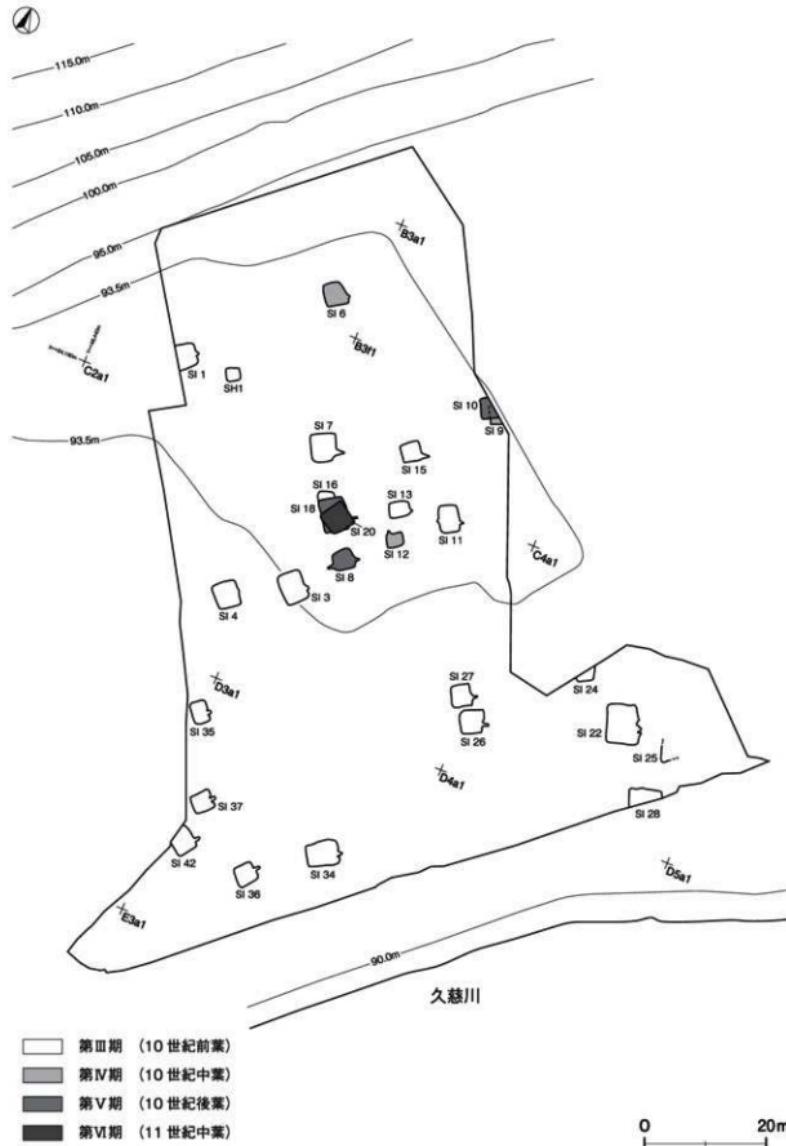
当期は、住居跡10軒（第5・17・21・23・30・31・32・39・46・48号住居跡）と掘立柱建物跡1棟（第1号掘立柱建物跡）、工房跡1軒（第1号住居兼鍛冶工房跡）、方形竪穴遺構1基（第2号方形竪穴遺構）が該当し、その数は前期に比べ急増する。第48号住居跡は、一辺約6.9mの当遺跡で最大の大形住居であり調査区東部から確認された。第31号住居跡も一辺5.5mの大形住居であり調査区南部から確認されている。主軸方向は、第48号住居跡がN-66°-E、第31号住居跡がN-72°-Eとほぼ同じ東向きで、規模から有力者の居宅と考えられる。また、中形住居跡は東部、中央部、南部、西部から確認された。主軸方向は概ね北東向き（N-43°~60°-E）で揃い、住居の形態は方形のみである（第136図）。北西部には掘立柱建物跡1棟が配置されており、穀物などを納めた小形の倉庫と想定される。中央部には工房跡（第1号住居兼鍛冶工房跡）があり、小鍛冶が稼働し始めたと考えられ、当期の鉄器・鉄製品等の保有率は90%と高い数値となっている。主な出土遺物は、第31号住居跡から灰釉陶器の長頸瓶、管状土錐、砥石、第32号住居跡から管状土錐、刀子、鎌、砥石、第1号住居兼鍛冶工房から刀子が2点出土している。

第Ⅲ期（第134図）

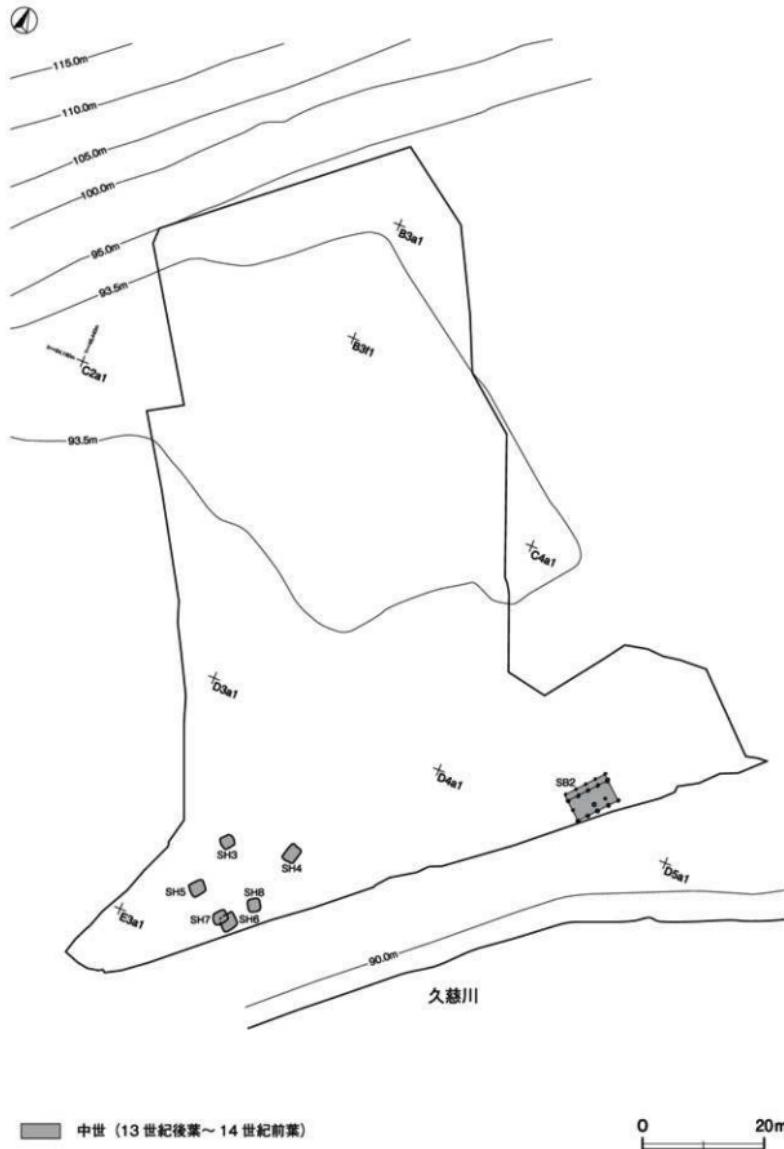
当期は、住居跡19軒（第1・3・4・7・11・13・15・16・22・24~28・34~37・42号住居跡）、



第133図 橋元遺跡遺構配置図(1)



第134図 橋元遺跡遺構配置図（2）



第135図 橋元遺跡遺構配置図（3）

方形堅穴造構 1 基（第 1 号方形堅穴造構）が該当し、確認された住居跡数が最も多い時期である。主軸の向きを大きく分けると、北東向き（N - 40° ~ 56° - E）のグループは第 1 号・3 号・4 号・35 ~ 37 号・42 号住居跡、ほぼ東向き（N - 60° ~ 73° - E）のグループは大形住居跡の第 22 号住居跡を含む第 7 号・11 号・13 号・15 号・26 号・27 号・34 号住居跡で、概ね前期を踏襲している。集落の範囲は調査区の北部を除いて広がっている。住居跡の規模は長軸が 4 m 以上の中のものがみられ、前期よりも若干規模が拡大する傾向にある。形態も方形のみだった前期から、長方形、隅丸長方形などの種類が増え、方形は 23%、長方形は 77% の割合となる。また、第 11 号住居跡は東壁と西壁に竈を持ち、同時に竈を使用していた可能性があるが、その性格については確認することができなかった。鍛冶関連の主な出土遺物は、第 1 号住居跡から刀子、第 3 号住居跡から支脚に転用された羽口、第 15 号住居跡からは鎌、第 22 号住居跡からは釘、第 26 号住居跡から刀子、釘、第 27 号住居跡からは紡錘車の軸と釘、第 34 号住居跡からは釘、第 36 号住居跡からは刀子が出土している。当期は第 1 号住居兼鍛冶工房跡の影響がうかがえ、鉄器・鉄製品作りが行われた結果、製品の種類も増えたと考えられる。当期の鉄器・鉄製品等の保有率は 68% である。紡錘車の軸なども出土していることから、機織りや農作業に鉄製品を使用し生産力を高めていたと考えられる。また第 4 号住居跡からは管状土錐も出土していることから漁労も行っていたことも確認できた。当期が平安時代の最盛期である。

第IV期（第 134 図）

当期は、住居跡 3 軒（第 6・9・12 号住居跡）が該当する。3 軒とも調査区中央部より北側に位置している。第 12 号住居跡は主軸方向が北西向き（N - 35° - W）で、長方形の小形住居である。第 6 号住居跡は主軸方向が北東向き（N - 57° - E）となる方形の小形住居である。主な出土遺物は、第 6 号住居跡からは鉋、砥石が出土し、木材の加工にかかわっていたと考えられる。第 9 号住居跡からは、当遺跡の鍛鍊鍛冶では生産されない鋳造品の鍋底部が出土している。本跡より久慈川の 20km ほど上流にあたる松並平遺跡³⁾、1km ほど下流にある番城内遺跡¹⁾からも、鋳造品の鉄製品は確認されておらず、常陸國、陸奥國どちらからの交易ルートから運ばれたのか確認できなかった。当期は住居跡の数が激減するが、鉄器・鉄製品等の保有率は 3 軒から 4 点と他期に比べて高いことから、集落の中心が調査区北部の調査区外に移り、集落の外れに所在する住居跡が確認されたものと思われる。

第V期（第 134 図）

当期は、住居跡 3 軒（第 8・10・18 号住居跡）が該当する。3 軒とも調査区中央部から北部に位置している。主軸が確認できたのは第 8 号住居跡のみで、北東向き（N - 55° - E）である。住居形態が確認できた第 8 号住居跡と 18 号住居跡は長方形の中形住居である。第 8 号住居跡は北東壁と南東壁の対極に竈を持ち、作り替えた痕跡がみえないことから同時に使用していた可能性がある。当期の主な出土遺物は第 10 号住居跡から刀子、第 18 号住居跡から小皿、鍛冶滓が出土している。当期の鉄器・鉄製品等の保有率は 3 軒から 1 点であり、保有率は 34% と大きく落ち込む、当期より集落は過疎化が進み、11 世紀前葉には住居跡が確認されない。何らかの理由で移住をしたか、または疾病や災害、戦乱等で人命が失われたこと等が考えられるが、詳細は不明である。

第VI期（第 134 図）

11 世紀前葉の住居跡は確認できなかったが、11 世紀中葉の当期に住居跡 1 軒（第 20 号住居跡）が確認できた。竈は確認できなかったが、住居跡の形態は方形の大形住居である。主な出土遺物は小皿や、鋳造品の鍋と推定されるもので、鉄器・鉄製品等の保有は 1 軒から 2 点と高い。しかし当期以降の平安

時代の建物の痕跡は確認できないことから、当期をもって平安時代の集落は終焉を迎える。

イ 堪穴住居の変遷について

ここで平安時代で検出された堪穴住居跡の特徴を述べる。

規 模

当遺跡では、平安時代には大形の住居跡が確認されている。9世紀後葉に比定できる第31・48号住居跡は、推定ではあるがおよその面積は30m²近くになり、約30mの距離をおいて位置している。また、10世紀前葉に比定できる第22号住居跡は、長軸が6.32mで面積が30m²を超え、当時代の住居としてはかなり大形の部類に入ることが確認されている。大形住居3軒は主軸方向がほぼ東向き（N - 66°～72° - E）で、久慈川の上流に向けて流路と平行である。

平面プランが確認できたI期からVI期までの住居跡の面積の平均を算出してみると、I期は1軒のみの確認であるが6.1m²、II期は5軒の平均で13.4m²、III期が13軒の平均で15.2m²、IV期が2軒の確認で10.9m²、V期が1軒の確認で10.1m²、VI期が1軒の確認であるが16.56m²であった。確認された軒数が比較的多いII期とIII期を比較してみると、II期からIII期にかけて若干はあるが、拡大する傾向にあることが確認できた。

構 造

主柱穴は、確認できたものもあったが、4隅のコーナー部に配置した住居跡は確認できなかった。平安時代の住居跡13軒が確認された久慈川下流の番域内遺跡⁵⁾でも、主柱穴が住居のコーナー部に整然と配置された住居跡は1軒しか確認されていないので、こうした様相は地域的な特徴とも考えることができる。壁溝が確認できた住居跡は第23・34・38・48号住居跡の4軒で、壁溝の付設率はわずか11%である。当遺跡は、地山が粘土であることから壁面が崩れにくく掘方のまま壁面として利用できたとも推測される。

形 態

住居跡のプランが確認できる堪穴住居跡の形態を以下の様に分類して記載した。（第136図）

- A 住居跡の平面形が正方形
- B 住居跡の平面形が長方形で、長辺に竈が付設される形態
- C 住居跡の平面形が長方形で、短辺に竈が付設される形態

なお、正方形と長方形の判断基準として、住居の長軸を短軸で割り、1.1未満を方形、1.1以上を長方形として分類した。また、隅丸方形は方形に、隅丸長方形は長方形に分類した。

A形に分類できるのは10軒で全体の45%、B形に分類できるのは8軒で36%、C形に分類できるのは4軒で18%である。

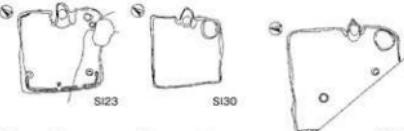
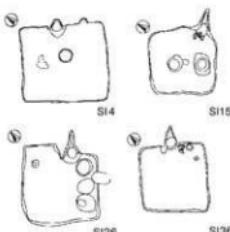
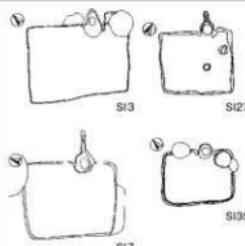
時期的にみると（第137図）、I期はA形のみ、II期でもA形のみである。I・II期はA形のみしか確認できないことから、集落として住居が同じ形態に統一されていたと推測できる。III期になると、A・B・C形の各形態が出現する。III期の中の割合は、B形が主流で50%を占めており、A形は23%、C形は21%である。集落的にみてもIII期が住居数が一番増える時期であり、人口も大幅に増えた時期と考えられる。IV期ではA形・B形1軒ずつとなり、V期ではC形のみである。住居跡の形態からは、特に方形のみ確認されたI・II期から、方形やB・C形の長方形が確認されたIII期への変遷に集落の特徴があると考えられる。集落が形成されはじめたII期は画一的な住居形態であったが、III期には住居形態のバリエーションが増えたことから、新しい文化圈をもつ集団が当集落に移り住んだと考えることがで

		模式図		
分類		A形	B形	C形
				
時 期	I	SI - 5		
	II	SI - 23 SI - 39 SI - 30 SI - 31 SI - 32		
	III	SI - 4 SI - 15 SI - 26	SI - 3 SI - 27 SI - 7 SI - 35 SI - 11 SI - 42 SI - 22	SI - 13 SI - 34 SI - 37
	IV	SI - 6	SI - 12	
	V			SI - 8

第136図 橋元遺跡遺跡住居跡模式図

きる。

住居形態の変遷からは、久慈川の下位河岸段丘にあたる当集落は、低地開発に関わりの深い集団によって開墾され拡大していくが、IV期以降に何らかの社会的大きな変化があり、人々が移動するなどして集落は過疎化していくと推測できる。

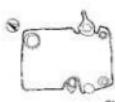
	模 式 図	
	A 形	B 形
I 9 C 中葉	 SI5	
II 9 C 後葉	 SI23, SI30, SI31	
III 10 C 前葉	 SI14, SI15, SI26, SI36	 SI3, SI27, SI17, SI35
IV 10 C 中葉	 SI6	 SI12
V 10 C 後葉		

第 137 図 橋元遺跡住居跡図

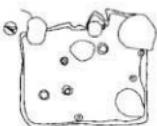
模 式 図

B 形

C 形



SI11



SI22



SI42



SI13



SI34



SI37



SI8

0 2 m

竈形態

確認できた住居跡は第20号住居跡を除いて竈を保有している。竈の袖部は、第6号住居跡を除いて地山の粘土を掘り残して構築されている。また、袖の内側には補強材として、川原石の砂岩や安山岩、または縄文時代の石皿や板状の花崗岩を使用しているものがある。久慈川下流の番城内遺跡⁶⁾でも、補強材として川原石の砂岩などを使用した例が報告されており、久慈川流域の生活文化の共通性がうかがわれる。第3号住居跡では、土師器壺片を両袖の内側に補強材として使用している。また支脚は、石材を使用したものや、第3号住居跡では羽口を転用している。

煙道部は壁外に長く延びるタイプと、壁外に短く出るタイプに大きく分けることができる。竈の形態は以下の様に分類して記載した。

A 煙道が壁外に長く延びる形態

B 煙道が壁外に短く出る形態

また竈の燃焼部の位置から、細分化して

I 燃焼部を住居の壁外につくる形態

II 燃焼部を住居の室内につくる形態

以上の形態に分類し、さらに煙道が長いタイプをa、短いタイプをbとして分類した。(第138図)

A I a形に分類できるのは4基で全体の19%を占めている、A I b形に分類できるのは4基で同じく19%、A II a形に分類できるのは3基で14%、A II b形は7基で一番割合が高く33%、B形は3基で一番割合が低く14%である。このことから、当遺跡では多少の偏りはあるものの5つのタイプが使用されていたことが見てとれる。

時期的にみると(第139図)、I期はA II a形1基のみである。II期はA II a形が1基、A II b形が4基で、A II b形が当期の主流であったことがうかがえる。II期は住居の形態も画一化していたが、竈も主流となる形態があることが確認できた。III期には形態が3つに増え、A I a形が4基、A I b形が2基で、新たにB形が加わり3基確認することができた。当期は住居の形態においてもバリエーションが増えた時期であり、竈形態も同様に種類が増えている。また、特に特徴的なA I a形の竈は、久慈川上流の松並平遺跡では奈良時代後期に4基確認されている⁷⁾。このことを踏まえるとIII期に住居数が急増したのは、久慈川上流に文化圏を持つ集団が当集落に移り住んだ可能性を推測することができる。IV期ではA I b形が2基確認され、V期では、A II a形が第8号住居跡から2基確認されている。

竈の形態から、特にA II b形が主流だったII期から、A I a・A I b・A II b・B形の形態が確認されたIII期に集落の特徴があると考えられる。住居の形態においても同じ時期に変化がみられることから、III期に新しい文化様式をもつ集団が当集落に移着して、生活を営んだことを示している。

住居と竈

以上、住居形態と竈の形態を確認したが、各期の代表的な形態を組み合わせてみると以下のような組み合わせになる。(I期とV期はそれぞれ1軒のみの確認)

I期 A形の住居形態とA II a形の竈

II期 A形の住居形態とA II b形の竈

III期 B形の住居形態とA I a形の竈

IV期 A形もしくはB形の住居形態とA I b形の竈

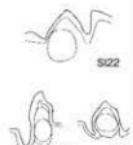
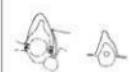
V期 C形の住居形態とA II a形の竈

以上の形態が各期の主流となる住居形態と竈形態の組み合わせとなる。

また、今回の調査では第8号住居跡と第11号住居跡は、竈を2基持ちそれぞれ住居の壁の対極に付設している。2軒とも2基の竈を同時に使用していたと考えられる。番城内遺跡でも2基の竈を有する住居跡が2軒確認されている⁸⁾。当遺跡の形態とは異なり、隣合う壁に竈が付設された形態のもので、竈の向きは2軒とも北竈と東竈であったが、2基の竈を有していることは、地域的な形態であると推定できる。

		模式図				
分類		A I形		A II形		B形
		A I a	A I b	A II a	A II b	
	I					
時	II			SI-5		
期	III	SI-7 SI-15 SI-26 SI-36	SI-3 SI-27	SI-39	SI-23 SI-30 SI-31 SI-32	SI-4 SI-13 SI-35
	IV		SI-6 SI-12			
	V			SI-8竈1 SI-8竈2		

第138図 橋元遺跡竈模式図

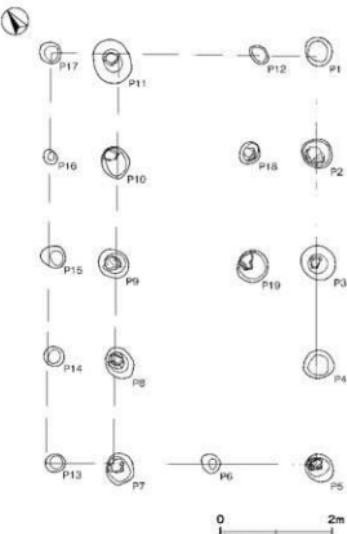
		模 式 図				
		A I 群		A II 群		B 群
		A I a	A I b	A II a	A II b	
時	I 9 C 中葉					
	II 9 C 後葉				 SI23 SI30	
	III 10 C 前葉	 SI7 SI15  SI26 SI36			 SI22 SI37	 SI4 SI13
	IV 10 C 中葉					
	V 10 C 後葉				SI8① SI8②	

第 139 図 橋元遺跡竈形態図

(3) 中世

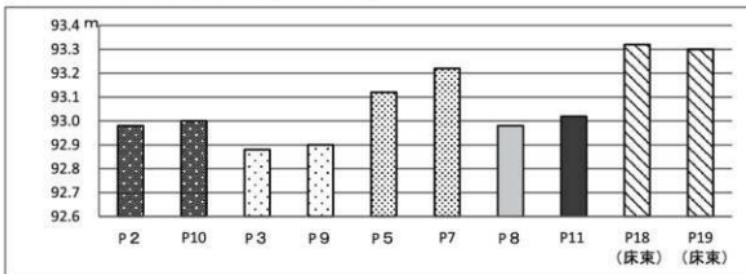
中世の遺構では、掘立柱建物跡1棟（第2号掘立柱建物跡）、方形堅穴遺構6基（第3～8号方形堅穴遺構）などが確認できた。第2号掘立柱建物跡は、底がつく側柱建物跡で住居と考えられる。身舎の14か所の柱穴の内、8か所の柱穴と床東に地下式礎石が使用されている。身舎の柱あたりのレベルは標高92.88m～93.22mで、全体では±34cmの範囲内であるが、相対する身舎（P2とP10、P3とP9、P5とP7）の柱あたりのレベルは僅かに±10cmの誤差内である。また床東のレベルは標高93.30m、93.32mであり±2cmの僅差の誤差内にレベルが揃えられている（表13）。

本跡は久慈川に隣接していることから久慈川と何らかの関係性が推測されるが、当遺跡付近では久慈川の流路は大きく蛇行し、流れが速いことから、水運との関連は考えにくく、建物の性格は不明である。



第140図 第2号掘立柱建物跡

表13 第2号掘立柱建物跡地下式礎石レベル表



方形堅穴遺構は、13世紀後葉から14世紀初頭に比定でき、調査区南部に集中して確認できた。形態はピットを2つ持つという共通したものである。方形堅穴遺構という性格上、特定の職人層・身分層の「仕事場」や「工房」「倉庫」の可能性が考えられている。しかし、当遺跡の方形堅穴遺構が隣接していることや、第7号方形堅穴遺構から炉跡が確認されたこと、第4・5・6・8号方形堅穴遺構の床面中央から焼土や炭化材が確認されていることから、当遺跡で確認された方形堅穴遺構は住居跡と考えたい。主な出土遺物は、砥石、釘などである。

13世紀後葉から14世紀初頭は、社会的に鎌倉幕府の滅亡や南北朝の乱などの動乱があり、また大子地方では所領をめぐって白河結城氏と北条氏が対立していたとされており、下層農民は苦しい生活を送っていたと考えられる。当期以降の建物の痕跡は確認できないことから、当集落は短期のものであった。

3 錫治関連遺構と遺物について

今回の調査で、平安時代の住居兼錫治工房跡を確認し、また当時代の住居跡からは、支脚に転用された羽口や、鉄滓（楕形錫治滓）が出土し、錫治工房との関連が確認できた。ここでは、錫治関連遺構の概要や出土した遺物について述べ、集落との関わりについて概観する。

(1) 規模・形状

第1号住居兼錫治工房跡（以下本工房跡とする）は、調査区中央部の標高93mの河岸段丘上に位置している。長軸446m、短軸2.98mの長方形で、中央部に径41cm、深さ7cmの円形の錫冶炉を有している。

大堀東遺跡⁹⁾には当遺跡の本工房跡同様、住居内で竈と錫冶炉を併せもった工房跡が報告されている。比較してみると、当遺跡の本工房跡は住居の規模はやや小ぶりであるが、錫冶炉は一回り大きいものである。また、錫冶炉跡が17基確認された埼玉県の中堀遺跡¹⁰⁾の錫冶炉と比較しても、本工房の錫冶炉は中規模程度の大きさである。

本工房跡の火床炉は底面の赤変硬化が強く、特に北東部の赤変が強いことから、羽口は北東側に装着されていたものと想定される。また当遺跡の第3号住居跡は、竈の支脚に羽口を転用している。比較的羽口頸部の残りが良く、観察の結果、少なくとも3回は錫冶炉への羽口装着状態の変更があったことが確認できた。

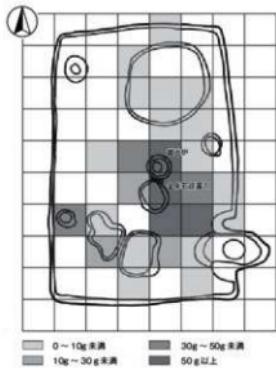
工房内のレイアウトは、錫造剥片や粒状滓の出土分布状況（第71・72図参照）からみると、錫冶炉に隣接し南側に位置する径50cmの円形のピットが、金床石の設置跡と考えられる。併せて錫造剥片や粒状滓の出土分布状況から、工人は金床石の設置跡の西側にいて錫冶の作業を行ったと考えられる。また、本工房は住居の規模から推測して、工人は一人もしくは二人で錫冶作業にあたったと推測できる。

(2) 性格

本工房内から出土した錫治関連遺物（表14参照）から、本工房が鍛錬錫治であることが推測できる。錫治関連遺物として本工房から出土した楕形錫治滓は、極小（第144図参照）であり、識別可能な楕形錫治滓と錫治滓は10点で、重量は計334.2gであり多量の出土とは言えない。また、錫造剥片は本工房内から計601.59gが確認されている。錫造剥片の表面の色を観察してみると黒褐色のものや青光りしているものがみられ、規模が小さくなるにつれ青光りする傾向があり、0.1cm以下のものはほぼ青銀色の光沢をもっていた。このことから、本工房が鍛錬錫治として鉄製品を加工する最終段階を行っていたことが考えられる。また、羽口について穴澤義功氏は、「内径が10cm以上で製鉄に使用、5cm以下で錫治段階で使用される」としている。第3号住居跡の竈の支脚に転用されていた羽口（第144図参照）の内径は2.2～2.8cmであり、羽口からも本工房跡が鍛錬錫治であったことが考えられる。

以上のことを踏まえ、本工房は鉄器を鍛造加工する錫冶炉をもつ、一般集落にある錫冶工房であったと考える。高橋一夫氏の「壊れた多くの農具は修理され、ほかの製品に打ち直した」¹¹⁾との指摘の通り、いわゆる「村の錫冶屋」として、鎌などの農耕用の鉄製品を製作したり、修理などを行っていたと推測できる。楕形錫治滓の出土量が少ないので、鉄製品の材料として岩鉄を使用するのではなく、古い刀子などを再利用するなど「リサイクル」的な性格を持っていたことの裏付けととらえることができる。

本工房跡が作られた時期は、住居や竈の形態から10世紀前半と考えたいが、出土土器が細片のため確定が難しく、内面黒色処理された坏片の様相から9世紀後葉から10世紀前葉と判断した。



第142図 第1号住居兼鍛冶工房跡 楕円形鍛治津・
鍛治津・鉄塊系遺物分布図

(3) 集落への影響

本遺跡における鉄器・鉄製品や石器（砥石）は、本格的な集落が始まった9世紀後葉から確認されるようになり、鎌や鋸、紡錘車軸、刀子等の鉄器・鉄製品27点、砥石6点が出土している。

9世紀後葉に集落が出現すると10軒の住居跡で、9点の鉄器・鉄製品や石器が確認され保有率は90%と高い値となる。10世紀前葉には集落の最盛期を迎える。鉄器・鉄製品の保有率も68%と高いままで推移している。点数的にも、9世紀後葉から10世紀前葉にかけてが最も多く出土している。このことから集落の急激な拡大に伴い、土地の開拓等に鉄器・鉄製品が利用されていたと想定される。開拓に必要な「鍬や鋸などの鉄製品は貴重であったと考えられる」¹²⁾ことから、鉄製農具を鍛冶で修理したり、打ち直したりするため集落内で鍛錬鍛冶を行うことは必然性があったと捉えることもできる。鉄製品と鍛冶関連遺物の広がりをみてみると、鉄製品の出土状況（第142図参照）から、本工房を中心として調査区全体から鉄製品が出土しているが、本工房近くの中央部の北西側の住居跡からは鉄製品を確認することができなかった。また、鍛冶関連遺物の出土状況（第143図参照）は本工房より調査区東部にかけて集中して出土している。想定ではあるが、第158号土坑を廃棄土坑と考えており、方向的にもあうことから、廃棄するルートもしくは調査区外に持ち出すルートがあったとも考えられる。10世紀中葉以降、集落は過疎化していく。10世紀後葉には、34%の保有率まで下がる。

鉄製品の農具や工具の普及は、開拓や畑作農業の盛行を物語るとともに経済力の充実を示すものと受け止められている。つまり、当遺跡では、律令体制のもと開墾や畑作などが行われていたものと考えられ、下位河岸段丘上に畠地が広がっていたものと想定される。また紡錘車の軸の出土は、当遺跡で、10世紀前葉に農耕の傍ら機織りを行っていたことをうかがわせるものである。その後は集落は廃れ、中世に方形堅穴造構が確認されるまで、鉄製品は確認されない。

表14 第1号住居兼鍛冶工房跡 鍛冶関連遺物点数・重量計測表

鍛冶関連遺物	点 数	重さ (g)
鉄塊材	1	95.2
羽口	1	122
楕円形鍛治津（極小）	5	296.3
鍛治津	5	37.9
楕円形鍛治津・鍛治津合計	10	334.2
粘土質溶解物	1	6.7
粒状津		28.36
鍛造剥片		601.59
粘土質溶解物	1	34

* 楕円形鍛治津（小）は、完形で重さ125~249 g

* 楕円形鍛治津（極小）は、完形で重さ124g以下に分類する



第143図 橋元遺跡鐵製品出土状況図



第144図 橋元遺跡鍛冶関連遺物出土状況図

4 おわりに

当遺跡は、住居跡や掘立柱建物跡などの在り方から4期の転換期を見い出すことができる。第1期は、規模は小さいが、人々の生活の痕跡が認められる縄文時代後期である。住居跡1軒ではあるが、調査区域外に集落が展開していたものと考えられる。その後、平安時代になるまで、人々の営みの痕跡は確認されなくなる。

第2期は、平安時代であり住居跡が37軒、住居兼鍛冶工房跡などが確認された。集落が最も繁栄するのは10世紀前葉である。律令制が浸透した時期であるが、住居の形態に変化が見受けられた。遺物では、鎌などの農具類や刀子や鉈などの工具類の鉄製品が確認できる。当集落は下位河岸段丘で農耕が可能な地であり、低地移住に関わりの深い集団が構成した集落であると考えられる。

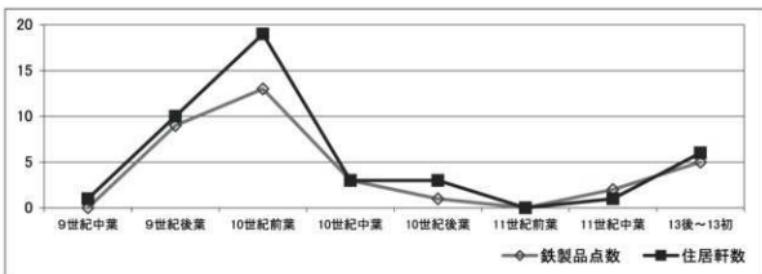
第3期は、住居跡等が減少し、集落が衰退する10世紀中葉である。集落の移動なども推測されるが、律令期の衰退に伴い当遺跡も過疎化していく。また衰退期においても鉄製品を使用していたことが明らかになつた。11世紀中葉造構の堅穴住居跡は確認されていない。

第4期は、地下式礎石を持つ掘立柱建物跡や方形堅穴造構を確認した中世である。鎌倉幕府滅亡などの社会的な動乱の中、当方でも逞しく生きる人々の痕跡を確認することができた。

表16 橋元遺跡鉄器鉄製品出土数

年	農具類 鎌	工具類			武器 鎌	調理具 鍋	織維生産 鉄製紡錘車輪	その他 不明鉄製品	石器 砥石	計
		刀子	鉈	釘						
9世紀中葉										
9世紀後葉		3			1			2	3	9
10世紀前葉	1	4			5	1		1	1	13
10世紀中葉			1			1	1		1	4
10世紀後葉		1								1
11世紀前葉										
11世紀中葉							1	1		2
13後～14前		1		2				1	1	5
計	1	9	1	8	2	2	1	5	6	33

表17 橋元遺跡鉄器鉄製品出土数



以上、当遺跡の性格を少しでも明確にできるよう、推測を重ねながら遺構・遺物について考察を試みてきた。今後の課題は、平安時代に大字地方が陸奥国に属していたと比定されており、陸奥国郡衙や国衙との関連など、中世では大字地方の変遷など、当遺跡を含め近隣地域で更なる調査の集計によって時代背景と関連づけて実態を明らかにしていくことと考える。当遺跡が所在する大字町周辺は、現時点で調査事例が少なく、歴史的

様相が判然としない点が多いが、今回の調査成果が当地域ならび本県における歴史解明の一助となれば幸いである。

註

- 1) 大子町史編さん委員会『大子町史』通史編 上巻 大子町 1988年3月
- 2) 柴田博行「一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 畠城内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第126集 1997年6月
- 3) 牛坂一男ほか「-久慈川上流域における古代集落の調査-松並平遺跡」福島県白河建設事務所 福島県棚倉町教育委員会 1987年3月
- 4) 2) と同じ
- 5) 2) と同じ
- 6) 2) と同じ
- 7) 3) と同じ
- 8) 2) と同じ
- 9) 近藤恒重 田月淳一「大堀東遺跡 小貝川中流域河岸掘削事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第269集 2007年3月
- 10) 田中広明・末木啓介「御障場川堤調節池開削埋蔵文化財発掘調査報告 中源道路」『財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第190集 1997年12月26日
- 11) 10) 高橋一夫「古代東国の考古学研究」有限公司六一書房 2003年9月
- 12) 9) と同じ

参考文献

- 1) 井上輝哉「かじや久保遺跡 一般県道百里飛行場線道路改工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第259集 2006年3月
- 2) 佐藤正好・川井正一「常磐自動車道開削埋蔵文化財発掘調査報告書5 猫の子C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第20集 1983年3月
- 3) 池田敏宏「国庫補助道路改築事業一般国道293号馬頭バイパスに伴う埋蔵文化財発掘調査 古館遺跡・三反田遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第307集』
- 4) 田中広明・末木啓介「御障場川堤調節池開削埋蔵文化財発掘調査報告 中源道路」『財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第190集』 1997年12月26日
- 5) 千種重樹『常陸大子 堀平C遺跡』 大子町教育委員会 1995年9月
- 6) 山武考古学研究所『宝泉寺跡』 大子町教育委員会 1992年3月
- 7) 茨城地方史研究会編『茨城の歴史 県北編』 茨城新聞社 2002年5月
- 8) 大子町史編さん委員会『大子町史 写真集』 大子町 1980年12月
- 9) 細谷義彦『郷町・久慈・多賀の歴史』 郡土出版社 2004年11月
- 縄文土器の編年については、以下の文献に依拠した。
大川清・鈴木公雄・工業書舗編『日本土器事典』旗山閣 1996年12月
小林達雄編『絶対 縄文土器』アム・プロポーション 2007年12月
- 石器・石製品の石材については、以下の資料を参照とした。
柴田徹『河原の石のC・D岩石鑑定図鑑』有限公司考古石材研究所 2005年2月

付 章 1

茨城県橋元遺跡出土鉄刀の自然科学分析調査

株吉田生物研究所

1. はじめに

茨城県に所在する橋元遺跡から出土した鉄刀について、材質を明らかにするために以下の通り自然科学分析を行った。その結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は表1に示す鉄刀である。

表1 調査資料一覧

No.	資料名	概要
1	鉄刀	柄の部分に木質残存。土と鏽に覆われている

3. 方法

刀身部分は蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置 SXS-PRIMUS II を用いた。また、柄部分の木質はサンプルを採取してエポキシ樹脂に包埋し、木口面、柾目面、板目面の薄片プレパラートを作製した。これを透過光の下で検鏡して、樹種同定を行なった。

4. 分析結果

i) 蛍光X線分析

分析結果のスペクトルを付す(図1)。表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。また、Al～Caは土壤に由来する成分と思われる。検出されたデータからは特異な元素は見られず、鉄製品であると判断できる。

表2 橋元遺跡出土鉄刀の成分分析結果一覧表

元素	No.1(wt%)
Al	1.67
Si	4.83
P	0.16
S	0.11
K	0.17
Ca	0.10
Fe	92.90

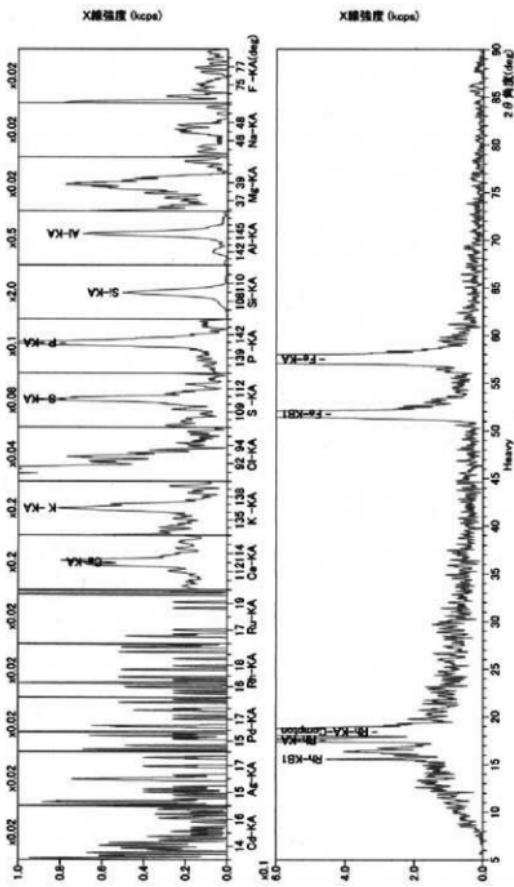


図1 鉄刀

ii) 樹種同定

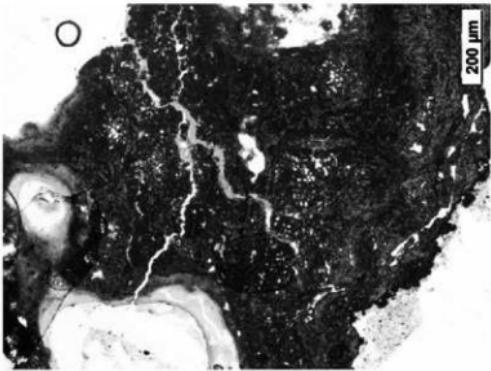
顕微鏡観察から、横断面では年輪は劣化や収縮で確認出来ない。集団状の小道管と放射組織が見られる。放射断面ではほぼ平伏細胞からなる放射組織が見られる。小道管は単穿孔と螺旋肥厚を有する。接線断面では放射組織は少數の1~3列のものと4.5細胞列で、高さのある放射組織が見られる。小道管、軸方向柔細胞、木繊維は階層状を成している。以上の観察結果から、横断面で1年輪分の道管配列などの様子が不明確なので広葉樹以上には分類出来ない。



接续断面



放射断面



横断面

付 章 2

橋元遺跡出土炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

大子町橋元遺跡は、久慈川右岸の低位段丘上に立地する。今回の発掘調査により、平安時代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、縄文時代・平安時代・時期不明の土坑、縄文時代の炉跡、平安時代の櫛跡等が検出されている。今回の分析調査では、堅穴住居跡から出土した炭化材を対象として、年代確認のために放射性炭素年代測定を、木本利用を明らかにするために樹種同定を実施する。

2 試料

試料は、遺構から出土した多数の炭化材のうち、堅穴等の遺構から出土した3点(SI-43 No①, SI-41 No③, SI-1 No 55)である。このうち、SI-43 No①およびSI-41 No③の2点について、放射性炭素年代測定を実施する。樹種同定は、SI-1 No 55 の1点が同定対象として指定されているが、年代測定試料とした2点が年代測定用の炭化材を分割しても樹種同定に十分な量が確保できること、年代値を検討する上で樹種も重要な情報であるとの認識から、これらについても樹種同定を実施することにした。

3 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HC I により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC II によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)→850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差 (One Sigma 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5730 ± 40 年) を

較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柵目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研

表1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構	遺物番号	種類	樹種	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 BP	Code No.
SI-43	No.①	炭化材	クリ	AAA	640 ± 20	-27.60 ± 0.37	590 ± 20	IAAA-102527
SI-41	No.③	炭化材	クリ	AAA	660 ± 20	-28.00 ± 0.35	610 ± 20	IAAA-102528
SI-1	No. 55	炭化材	クリ	-	-	-	-	-

1) 処理方法は、酸処理-アルカリ処理-酸処理(DDD処理)である。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

遺構	試料名	補正年代 (BP)	暦年較正結果					Code No.
			誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比		
SI-43	No.①	593 ± 22	σ	calAD 1,315 -	calAD 1,355	calBP 635 -	595	0.805
				calAD 1,388 -	calAD 1,399	calBP 562 -	551	0.195
		605 ± 22	2σ	calAD 1,302 -	calAD 1,366	calBP 648 -	584	0.742
				calAD 1,382 -	calAD 1,408	calBP 568 -	542	0.258
SI-41	No.③	605 ± 22	σ	calAD 1,306 -	calAD 1,329	calBP 644 -	621	0.402
				calAD 1,340 -	calAD 1,363	calBP 610 -	587	0.405
		610 ± 20		calAD 1,385 -	calAD 1,396	calBP 565 -	554	0.193
			2σ	calAD 1,298 -	calAD 1,371	calBP 652 -	579	0.777
				calAD 1,379 -	calAD 1,404	calBP 571 -	546	0.223

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 柄目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1柄目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。

5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

4 結果

(1) 放射性炭素年代測定

研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Wheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

放射性炭素年代測定結果を表1、暦年校正結果を表2に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、SH 6 №①が 590 ± 20 BP、SH 5 №③が 610 ± 20 BP を示す。また、測定誤差を σ として計算させた暦年校正結果は、SH 6 №①が calAD1315-1399、SH 5 №③ 7 が calAD1306-1396 である。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を、年代測定結果とともに表1に示す。柱材は、全て落葉広葉樹のクリに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

5 考察

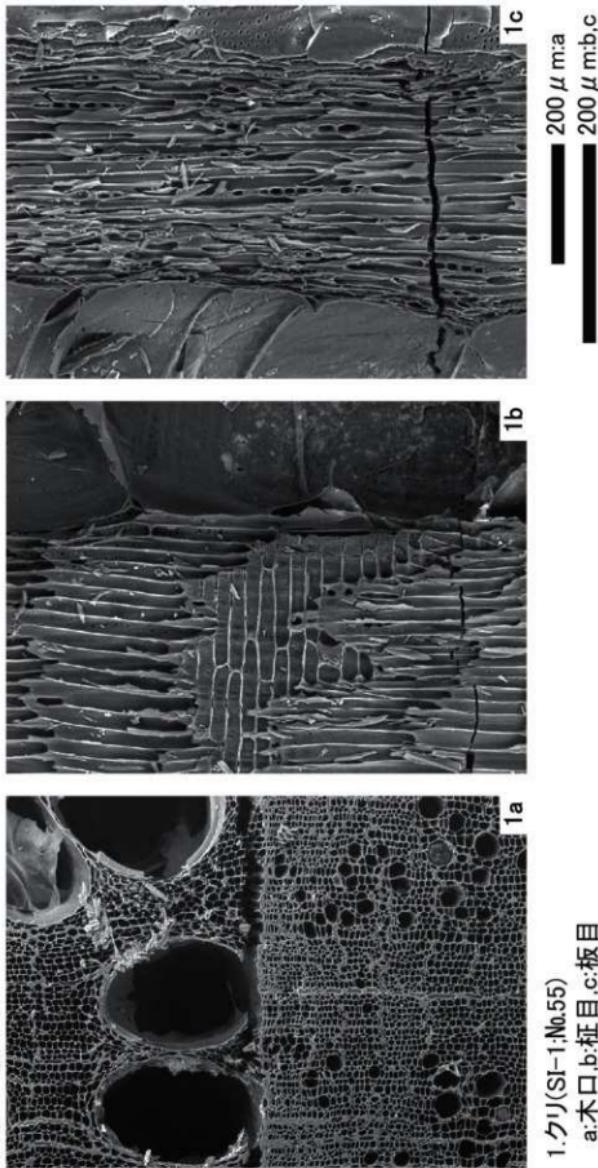
SH 5・6 から出土した炭化材は、出土状況や位置関係が不明であるが、年代測定結果は2点で近似しており、暦年校正結果では鎌倉時代末～室町時代初頭に相当する。その評価については、今後出土遺物や遺構の考古学的分析所見を含めて検討することが望まれる。

今回同定を行った炭化材は、年代測定を実施した試料も含めて、全て落葉広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林などに普通に見られる落葉高木であり、木材は重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、建築・土木に有用である。このことから、周間に生育し、強度・耐朽性に優れたクリ材を選択・利用したことが推定される。周辺地域では、年代測定結果から推定される鎌倉時代末～室町時代初頭頃の炭化材について、同定調査を行った事例がほんんどない。一方大字町では、番城内遺跡で検出された10世紀前半とされる住居跡から出土した炭化材4点が、全てクリに同定された調査例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社,1997)。

引用文献

- 林 昭三,1991. 日本産木材 顯微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫,1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料.31, 京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東隆夫,1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料.32, 京都大学木質科学研究所,66-176.
伊東隆夫,1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料.33, 京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東隆夫,1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料.34, 京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東隆夫,1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料.35, 京都大学木質科学研究所,47-216.
パリノ・サーヴェイ株式会社,1997. 番城内遺跡から出土した炭化材および種実遺体の種類、「一般国道118号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書」,茨城県教育財團文化財調査報告第126集茨城県教育財團,53-55.
島地 謙・伊東隆夫,1982. 国説木材組織. 地球社,176p.

図版1 炭化材



1.クリ(SI-1,No.55)
a:木口,b:杁目,c:板目

付 章 3

橋元遺跡 鍛冶関連遺物観察表

穴澤 義功

* 磨着度の欄は、磨石の弱い順に1, 2, 3と記した。

* メタル度の欄は、メタル度の高い順に特L (☆), L (●), M (○), H (□), 鎔化 (△)、なしと記した。

* 第一号住居兼鍛冶工房跡は鍛冶工房と記した。

番号	遺物 (属性)	長さ	幅	厚さ	重量	磨着度	メタル度	特 徴	出土位置	備 考
1	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(6.8)	14	0.2～ 0.4	(7.2)	3	H (□)	刃部の8割前と茎部の先端が欠けている。背側には、闊とみられる低い段が残されている。刃部側の闊は不明。現状は3片に割れたものを接合している。	覆土中	SI 1 M 1
2	羽口 (鍛冶) 先端～全体	(149)	80	7.7	(78.0)	2	なし	基部側が大きく欠損。先端部は斜め上方に向かって滑損して、顎部にははわずかに溝が残る。通気孔部は貫孔で先端部には26を測る。体部表面は基部側に向かって赤褐色から灰白色、さらに明視色と変化し、通気孔部はすばん褪色となる。外縁の整削は長軸方向へのやや不規則な削りによる。船玉スズを嵌めた粘土で、サス痕の一部は炭化している。また顎部に特有な洋の面筋が三面に確認され、羽口先端の上顎部が変形したことによることから、少なくとも3回の羽口装着状態の変更があったものとされる。	纏焚き口部	口径 22 ～28cm SI 3 DP 1
3	鉄製品 (鍛造品) 箒	(120)	12	0.6	(71.2)	2	鍔化 (△)	頭部の先端が小さく欠け落ちた箒鉗。表面は分厚い酸化土砂に覆われており、先端側の3cm程度がくろうじて竹箒と判別出来る。刃部は両刃の耐久性が高く、先端部では斜め上方に向かって立ち上がる。頭部は幅5mm程度の方舟形を保持する状態で、通常の形態とは異なる。	剪裁穴底部	SI 6 M 2
4	鉄製品 (鍛造品) 鍛造箒(?)	(4.6)	(5.6)	(1.1)	64.3	4	特L (☆)	外周部が前面削りとなり、頭部の半球も表面が削る。下面には浮3mm程度の円弧の凹面形を持ち、突起部が形成されている。突起部の最高点は現状で8mmを測る。比重が高く、特有的な放射割れも生じていることから鍛造品とされる。箒頭部の底面中央部で、突起部は溝口の前縫と想定される。溝口部が3cmを越えることから、やや大きめな鍔を頭の可能性を持つ。また構成No.9も別個体の鍛造品破片とすれば、非常に貴重な出上例となる。茨城県下では、古河市の川口台遺跡が9世紀からの大规模鍛造跡とされている。	覆土中	SI 9 M 3
5	鉄製品 (鍛造品) 刀子	180	(1.3)	0.2～ 0.3	(16.4)	2	鍔化 (△)	比較的金剛形が残る。切先と茎部の先端が小さく欠落する。刃部の表面には薄青状の土砂部が確認される。茎部の長さは8.3cmを測る。刃部は直線状となり。(深)研ぎ跡は確認できない。	床面	SI 10 M 4
6	鉄製品 (鍛造品) 木柄付(?)	(17.8)	(0.8)	刃 0.1 ～ 0.6 柄 (1.4)	101.6	3	鍔化 (△)	木柄の折れ跡を残す完全に近い。全体形形状が「へ」の字に折れ曲がる跡で、切先と背側が小さく欠けている。身幅は3～3.6cm前後を測る。木柄の大部分は縦に走っている部分のみが鉄錆により剥離してしまっているので、縦に走る茎部は完全に消失する。装着状態は縦の身と35度ほど傾いた形で装着させられている。	床面	SI 15 M 5
7	範形鍛治鋤 (小、合鍤)	7.0	3.1	7.0	138.8	2	鍔化 (△)	右下の頭部が削り落した小形の範形鍛治鋤。上面は平坦気味で、左下の頭部には土砂質溶解物がたれる。また背面側には浅い木炭痕が存在する。頭部から下面は浅い底状地で、やや右側の底筋が肥厚して、左方向に向かって薄くなっている。頭部には気泡が跳出して空中となる。合鍤部は左側に残る。	覆土下層	SI 18 M 6
8	範形鍛治鋤 (標準)	3.7	3.4	11.1	16.1	2	なし	左側の頭部が破壊となった。極小の範形鍛治鋤の頭部破片。厚さ8mm程度の薄板状の片である。左側に比較的の平底となる。下手側の頭部が生きていて、中央部には大きな溝が突出する。	覆土中	SI 20 M 7
9	鉄製品 (鍛造品) 鍛造箒(?)	2.5	2.0	0.9	6.1	2	鍔化 (△)	酸化土砂に覆われた鍛造品破片。3片に割れており、うち2片は接合した。もう1片はほぼ笠葉形は推定できるが、接合が失われていて接合はせず。芯部に残る通気孔は厚さが4mm前後を測る薄板状で、上手側が明らかに反り返る。表面には鍛造品に特有な微細な光沢や気孔が確認される。鍛造の体部破片から出したした道構は異なるが、構成No.4と間わりを持つ可能性もあり。	覆土中	SI 20 M 8
10	鉄製品 (鍛造品) 針	(3.4)	0.4	0.5	(2.0)	2	鍔化 (△)	横断面は方形とみられ。針の可能性を持つ。	床面	SI 22 M 10
11	鉄製品 (鍛造品) 木柄鍛造品	(7.6)	0.6	0.5～ 0.6	(8.4)	3	鍔化 (△)	2片が接合。下手側が刃の頭部の可能性を持つ箒頭がやや折れ曲がる。箒頭がわ先端部を欠落する。鋒とすれば折折針の可能性をもち。現状は箒頭が開いてしまっている。	床面	SI 22 M 11
12	羽口 (鍛冶) 先端部	2.9	3.6	2.2	13.1	2	なし	先端部頭部破片。頭部2面と茎部無が破面で、上面には幅13mmほどの通気孔部端面が残る。羽口部位置としては先端部からみて頭部中央となり。頭部下には小塊状のガラス質碎が突出する。羽口の船玉はさきめ細かい粘土質。	覆土中	SI 23 DP 9

番号	遺物 (属性)	長さ	幅	厚さ	重量	組合度	メタリ度	特 徴	出土位置	備 考
13	ガラス質津	16	23	1.6	19	1	なし	不定形塊状のガラス質津。下手側の脚部と尖った下端の中央が小破面となる。全体に発瘤した跡で、破面に気孔が露出する。上面表面の一部は黒色で、側面から下面の大半が茶褐色気味。	覆土中	SI 23 M12
14	羽口 (鍛治) 先端部	18	13	2.5	34	1	なし	先端部小破片。正面から見て右上の羽口で、通風孔部表面は欠落している。表面は黒色ガラス化して発瘤気味。胎土は粘殺入り。	覆土中	SI 26 DP10
15	転形銀治津 (小、合鉄)	8.2	8.8	3.3	192.1	3	H (○)	平面。不整多角形をした完形。上面は小さくまとまっており、右側部や下端の脚部は大きく突出する。残る脚部から下面は全体的に浅い椀形となるが、部分的に中に段を生じている。合鉄部は上面中央の直下か。	竪左脚部付近 覆土上層	SI 26 M13
16	転形銀治津 (無小、合鉄)	6.7	5.3	3.4	70.0	3	鷄化 (△)	右側部が直線状に連切れていたながらも、ほぼ完形。上面が平滑気味で脚部から下面に木炭痕による凹凸が複数している。合鉄部は正面表面皮膜。	覆土中	SI 26 M14
17	転形銀治津 (中)	5.3	6.1	2.9	32.6	2	なし	全体に不規則な形状となった土質の転形銀治津。左脚部は羽口の脚部に接したため脚部に僅み瘤部が連切られている。羽口先の土質治作の性質をもつが、形態は極めて転形銀治津の様。	覆土中	SI 26 M15
18	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(5.6)	1.5	0.2~ 0.3	(36)	2	鷄化 (△)	左右の脚部が小破面となった小ぶりの刀子破片。3片に割れたものを接合しており、右脚部は上手側に向かって大きく反っている。脚部のために、間部は不明。刀脚部は7mmと狭く、研ぎ減りが進んだものか。	覆土下層	SI 26 M16
19	鉄製品 (鍛造品) 釘	(37.5)	1.0	0.4~ 0.6	(4.4)	3	鷄化 (△)	体部半ばで脚部がわが欠損。脚部断面はやや長方形で、下手側の端部には脚部の跡をも持つ。断面では小形の楕の可能性も残る。	覆土中	SI 26 M 17
20	羽口 (鍛治) 先端部	4.4	4.2	1.7	27.1	1	なし	鍛冶口の先端部破片。丸を持った右脚部からかけての破片となる。羽口部は左脚部無くみて上端脚部。内側には径1.8mmを測るサクラしき痕跡を残す。左側の破面からみると外脚部に沿ってひび割れがあり、外側に別の粘土革が巻き付けられていた可能性もあり。	覆土中	SI 27 DP 11
21	鉄製品 (鍛造品) 釘	(2.5)	1.0	0.4~ 0.6	(2.2)	1	鷄化 (△)	上手側に破面が露出。破面に露出する横断面形は下手側の端部がわずかに膨らんでいたため、対とみておく。	覆土中	SI 27 M18
22	鉄製品 (鍛造品) 筋跡車輪	24.4	0.5	0.4~ 0.7	24.1	2	H (○)	ほぼ完形。5片に割れたものを接合した。体部半ばはやや太く、上下方内の脚部に向かって細くなるように成形されている。上手側の端部は小さく折り曲げられている。もう一方の下手側の端部は丸みを持って収束する。円盤部は脱落して跡跡をとめる。	覆土上層	SI 27 M19
23	鉄製品 (鍛造品) 不明製品	5.1	3.1	1.5	24.9	2	鷄化 (△)	厚さ5mm前後の薄板状。表面には複数斜状切れ込みがあり、部分的に黒錆も広がる。上端部は平滑気味で、外周部のやや厚い、粗化土跡を除けば、わずかに反りを持った板状となる。右側部は新しい画面。	覆土中	SI 27 M20
24	転形銀治津 (無小、合鉄)	5.5	2.6	2.3	30.5	2	鷄化 (△)	分厚・醜化土跡に覆われた手の小形転形銀治津。一見、鉄製品のよう見ええが、下面にはやや凹門の如きが転形銀治津の表面が露する。2片で構成しており、芯部は合鉄部と予想される。疊着反応の傾向から、鉄製品が芯部に含まれている可能性もある。	覆土中	SI 28 M21
25	鉄壁 (鍛冶印) 柱上部脚部	8.3	5.9	3.4	95.2	1	なし	内面裏皮が津化して黒色ガラス質津。脚部4面が破面で、外側は弧状の底邊面となっている。内面の裏皮は厚さ1mmないし発瘤状態。脚部表面は下部丸みを持った弧状。胎土はキメの細かい粘土質で、脚部表面と骨材を含むかな。	鍛冶工房 鍛冶跡	DP12
26	羽口 (鍛治) 先端部	2.8	3.9	1.8	12.2	1	なし	先端部小破片。脚部の羽口で、内面には径16mm以上の通風孔部表面が露出する。羽口の部は先端方向からみて右脚部。胎土はキメの細かい粘土質。	覆土中	鍛冶工房 DP13
27	転形銀治津 (無小、合鉄)	3.8	4.4	1.4	27.8	2	鷄化 (△)	左脚部は小破面となった無小の転形銀治津。局手で脚部から下面は浅い楕形となる。左脚部や手の脚部は直線状に連切気味で、変形しているが、表面は津化が進む。合鉄部は芯部にくわざわず。	覆土中層	鍛冶工房 M22
28	転形銀治津 (無小、合鉄)	5.1	4.1	(1.4)	(35.3)	1	鷄化 (△)	上面はわずかに露み、脚部は小さな出入りを示す。下面は浅い舟底状で、木炭痕や粉塵の附着が確認される。合鉄部は下端上手側よりの一部、典型的な転形銀治津に似る。	覆土中層	鍛冶工房 M23
29	転形銀治津 (無小、合鉄)	4.7	4.8	(2.0)	(44.8)	2	H (○)	外觀はハーフマスク形。下手側の脚部は破面となる外観を持つているが、ほぼ完形。小さいながらもまとまつた浅い楕形で、合鉄部は下端寄りに広がる。一般的な典型的な転形銀治津か。	金石床設置 鍛冶工房 跡覆土中層	M24
30	転形銀治津 (無小、合鉄)	6.5	6.5	1.9	85.7	1	鷄化 (△)	ほぼ完形。上面はわずかに露み脚部は小さな出入りを示す。下面は底邊状で、木炭痕や粉塵の付着が確認される。合鉄部は下面下手寄りの一部、典型的な転形銀治津に似る。	覆土中	鍛冶工房 M25
31	転形銀治津 (無小、合鉄)	8.2	6.1	2.0	90.5	2	鷄化 (△)	右脚部がやや底邊状に連切られた不整手半楕。上面右脚の表面にはガラス質が露する。脚部から下面は不規則な粉状に覆われて、合鉄部が予想されるが、全体に分散気味。	鍛冶印 覆土中層	鍛冶工房 M26
32	銀治津	1.8	3.0	1.5	9.2	2	なし	右脚の3分の2がY状の丸みを持った小塊状。外側は丸みを持つているが、基本的に楕形で、上面が平頭となっている。比重が低く、左脚の端部にガラス質が突出する典型的な銀治津である。	鍛冶印 覆土中層	鍛冶工房 M27

番号	遺物 (属性)	長さ	幅	厚さ	重量	縦巻度	メタリ度	特徴	出土位置	備考
33	鍛治鋤	35	28	11	123	1	なし	1cm大の鋸が導方向に連続したような特異な形状。完全品で、側部や下面には木炭質や鉄滓の小込みが確認される。疑似鉄状鉢の集合体の様な形狀を示す。	覆土中層	鍛治工房 M28
34	鍛治鋤 (含鉄)	14	14	11	17	1	錆化 (△)	1cm大の表面が錆色となった小塊状の鍛治鋤。豆粒状で、表面の一部に内部の気孔が露する。表面が錆色となり、わずかに錆着傾向を持つ。	覆土中	鍛治工房 M29
35	鍛治鋤 (含鉄)	18	25	14	53	3	錆化 (△)	小塊状、表面は粉炭を撒えた再結合層に覆われている。上面は平滑気味で、側部から下面は丸みを持った楕円となる。錆着傾向もややあり。	鍛冶炉 覆土中層	鍛治工房 M30
36	鍛治鋤 (含鉄)	27	21	14	94	2	錆化 (△)	左側部が破損。小さなながらも全体形状は扇形鍛治鋤に似る。上面や側面には不規則な木炭痕が認められる。下面の中央部には少く鉄着色。	鍛冶炉 覆土中層	鍛治工房 M 31
37	鐵土器鉗物	22	16	14	34	1	なし	10cm大前の丸みを持つ粘土質解物。軽量の5個の破片を複合した。皮肉の一部が脱落して、内部の微細な気孔が露出する。表面は錆化色の為ややくずれを持つの。	鍛冶炉床	鍛治工房 DP 14
38	鉄製品 (鍛造品) 釺ヶ	22	10	0.6	18	3	錆化 (△)	表面が錆化色で複数の長さ2cmほどの鉄製品。上手側が大きく、下手側の端部には方型断面を持った鉄製品が露出することから、釺の跡跡寄りと推定される。	鍛冶炉 覆土上層	鍛治工房 M 32
39	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(5.7)	14	0.4	(138)	4	H (○)	刃部が欠落した刀子の刀身部側面。一見、茎が丸みを持つことから研ぎ減らされた刀子の刃部様に見えるが、断面形は丸がついていないため、茎部みておこう。刀根の端部は直線状に途切れおり、斜め曲げられている状態が確認される。	覆土中層	鍛治工房 M 33
40	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(4.2)	4.5	0.2~ 0.35	(220)	3	錆化 (△)	下側の右側から上に向かって、側面の鍛治鋤または鉄製品が残る。刀子部は先端と刃部側が欠落する。下面に残るす含鉄部は、外側的には含鉄鍛治鋤となっているが、下手側の端部に細い棒状の鉄製品から突出部が認められる。	覆土中層	鍛治工房 M 34
41	粒状鋤	-	-	-	-	-	なし	鍛冶炉に隣接するP 5周辺から北東側に向けて確認される。	覆土中	鍛治工房 M 35
42	鍛造鋤片	-	-	-	-	-	なし	鍛冶炉に隣接するP 5周辺から確認される。	覆土中	鍛治工房 M 36
43	複形鍛治鋤 (小)	3.4	6.0	2.3	60.3	2	なし	下手側の側部全体が錆色となっただけの複形鋤。上面は平気味で、下手側の側部には長い段を付けている。下面は浅い楕円形で、斜角部の上面と木炭を残しきずみを残す。破面は錆斑に溝が露出し、やや光沢を持つ。	覆土中	SI 31 M 57
44	鉄製品 (鍛造品) 釺ヶ	2.6	1.5	0.6	1.9	3	錆化 (△)	左側の端部すな手側に折れ曲がった小ぶりの複形鋤製品。体部は先端が破損となっており、径6cm前後を測る。左側の側部は先端側に向かい組んで終点する。断面は方形。	覆土中	SI 32 M 37
45	鉄製品 (鍛造品) 刀子ヶ	(6.2)	0.7	0.5~ 0.7	(8.8)	3	H (○)	左側の端部が扁平棒状、または複形鋤が露出する。右側の端部は細くなつて小塊片が露出する。断面形は左右とも扁平で刀子に近い。併し、外側部に刃と木炭によく差別化できない。	覆土下層	SI 32 M 38
46	鉄製品 (鍛造品) 釺ヶ	(6.6)	1.0	0.8~ 0.9	(20.3)	3	錆化 (△)	下手側の端部は径6.5mmほどの方型断面が露出。上手側の端部は小さな研突状に広がつて刃羽根に特徴する。刃の頭部の可能性もある。体部には二つのコブ状の刃と身に覆われる。刃をすすぐとやや長めの、長い刃の可能性がややあるかも知れない。	覆土中	SI 34 M 39
47	鉄製品 (鍛造品) 不明鉄製品	4.3	0.8	0.7	7.6	4	H (○)	端部の両端が破面。上手側がやや扁平面に括がり、下手側は方型断面となつている。上面の両部分がわざわざ組み、折れ曲がつてゐる可能性もある。表面が錆化して断面にははれつた。	覆土上層	SI 36 M 40
48	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(14.4)	(1.7)	0.2~ 0.7	(26.5)	4	H (○)	長楕の両端部が小破面。構成No.1と似た直線状の形態で、両開きの可能性を持つ。左部は先端が欠け落ちている。骨歛する研ぎ跡は認められない。	覆土下層	SI 36 M 41
49	鉄製品 (鍛造品) 不明鉄製品	4.7	1.9	1.3~ 1.6	14.8	3	錆化 (△)	分割型複形鋤に覆われている。下手側の端部には径4mmほどの方形断面と持つ鉄製品が含まれていることがわかる。上手側は醜化土中に覆われて生きているかどうかが不明。	覆土中	SI 39 M 42
50	複形鍛治鋤 (極小)	2.5	2.0	1.2	7.8	1	錆化 (△)	右側の側部上面が破滅となつた極小の複形鍛治鋤の肩部破面。上面は生きており、下面は表皮が脱落して内部の気孔が露出する。津波質と比較的の密。	覆土中	SH 4 M 43
51	鉄塊系遺物 (合鉄)	1.8	2.0	1.8	101	3	L ●	表面全体が茶褐色の鉄化土中に覆われている。全体に錆着傾向をもち、細胞面は刃の頭部様にになっている。全体經營的に鉄塊系遺物か。	覆土中	SH 4 M 44
52	鉄製品 (鍛造品) 釺	7.1	2.2	0.9~ 1.1	23.3	2	錆化 (△)	長さ12cmほどの棒状不明品。一見すると異なる棒の様に見えるのが側部が中空気味で、上面には薄板を巻き合せたような細い開闊が生じている。この開闊が生きていれば、何らかの鉄製品の基部をかしめる目的を持つ鉄製品とみられる。	覆土中層	SH 5 M 45
53	鉄製品 (鍛造品) 不明鉄製品	(1.7)	0.8	0.7	1.7	2	錆化 (△)		覆土上層	SH 5 M 46

番号	遺物 (属性)	長さ	幅	厚さ	重量	縦巻度	メタリ度	特徴	出土位置	備考
54	鉄製品 (鍛造品) 刀子	35	27	1.4	5.8	1	なし	一見鏡治漆様の外觀を持つ扁平状器。表面には粉状様の圧痕が残り、上手がむ脇部を中心に表層が剥落する。内部は緻密な気孔が広がる発酵状。	覆土中	SH 6 DP19
55	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(3.6)	1.4	0.4	(4.6)	3	錆化 (△)	左右の脇部が切り落としたように欠落。身幅は1.2cmほどで、背面には直線状のひび割れが露出している。左側の下面表皮が脱落している。	覆土中	SH 6 M 47
56	鉄製品 (鍛造品) 刀	7.8	1.3	0.7	13.5	2	L ●	脇部と腹部が明顯に残る。横断面形状は方形で、脇部方面に向かいわざかに刃を生じていている。頭部の張り出しや反りの状態からみて、本部に打ち込まれた既使用品か。	覆土中	SB 2 M 48
57	輪形鍛冶漆 (小、合巣)	5.1	3.6	1.8	60.7	4	H (○)	平面、不規半円形。上面の中央部には長さ3.5cm以上の木炭跡が露出している。下面下手側にはコブ状の錆化した跡が突出する。左脇部は底面の可塑性大、鋸齒が強く元は芯部に合致部が広範囲あつたとみられるが、現状は錆化が進んでいる。脇部から下面は輪形。	覆土中層	SK 3 M 49
58	輪形鍛冶漆 (小、合巣)	20	3.2	1.9	14.4	1	なし	脇部4面が破面となった小形。上下面と右脇部が生きている。鋸齒の結晶はやや肥厚し、生きている表面には木炭痕と気孔が並ぶ。	覆土中	SK112 M 50
59	羽口 (鍛冶) 先端部	(7.1)	(4.8)	(3.9)	(87.1)	2	なし	先端部破片で2片が結合する。残存部位は先端側からみて右半分で、脇部4面と基部側が破損となる。通風孔部はほぼ貫孔で現状では2cmを測る。先端部は黒色ガラス質に溶解して溶損角度はごく弱い。胎土にはわずかに纖維質を含む。	覆土中層	SK115 DP22
60	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(11.7)	(1.3)	0.4~ 0.8	(28.9)	3	H (○)	長袖の両端部破面。2片が接着している。残存部位は刃部側の8方角と蒸氣側の2側面度で、両側の可塑性あり。刃部幅は1cm前後の細辺で、先端部方面に向かい丸みももちろんが狭くなっている。	覆土上層	SK132 M 51
61	輪形鍛冶漆 (小)	3.7	3.6	(2.4)	(34.4)	2	なし	脇部2面が破面となった粘土質の強い。上面は黒色ガラス質に溶化して、下部は浅い削型となる。鍛冶炉の小匣型で未成された可能性あり。	覆土中	SK152 M 52
62	羽口 (鍛冶) 先端部	19	27	1.7	7.8	2	なし	上面に通風孔跡が確認される。先端部のみの破片。先端部はガラス質に溶解して、厚さ1cmほどの塊状の未焼部分となる。羽口外側と脇部2面が破面。通風孔部の径は現状で16mm以上を測り、もう一回り大きいものと推定される。羽口胎土は土器胎土に似る。	床面	SK158 DP23
63	羽口 (鍛冶) 発酵跡付	38	34	3.5	38.4	2	なし	先端部の小破片。先端側からみて脇部側の破片で、頂部には小塊状の発酵したガラス質滓が突起する。脇部2面と基部側が破面となる。通風孔部は幅7mmほどが残存する。羽口胎土は移入入り。	床面	SK158 DP24
64	羽口 (鍛冶) 発酵跡付	38	27	3.4	25.5	2	なし	表面に厚さ2cm近いガラス質滓が固着した羽口先端部破片。脇部2面と体部側は破面となる。羽口の先端側からみた脇部破面で、上面には通風孔部の凹面が幅1.2cmほどの範囲で残されていて。脇部の内側に木炭焼があり、破面に黒色ガラス質滓が露出する。羽口胎土は土器胎土に似る。	覆土下層	SK158 DP25
65	輪形鍛冶漆 (小、合巣)	5.7	5.5	2.6	89.6	3	錆化 (△)	脇部3面が破面となった厚さ17cmほどの小形の輪形鍛冶漆片。深い舟底状に突出する。側部の立ち上がりは急、岸は緻密で上部に気孔が確認される。	床面	SK158 M55
66	鉄製品 (鍛造品) 刀子	41	2.9	0.7~ 0.8	8.6	2	錆化 (△)	通し字状に切れ目がある。長袖の両端に小破面が露出し、横断面形が長方形が殊であることがわかる。一見、錆状の外觀を示すが、断面から見ると切れ目がいたる所部の可能性あり。	覆土中層	SK158 M 53
67	鉄製品 (鍛造品) 刀子	(10.3)	(0.9)	0.6	17.2	2	なし	長袖の両端部が欠落。切先と刃部側に加えて茎部の半分以上が欠落する。4片に削れたものを接着している。背側には闊が予想されるが、刃部側は不明瞭。錆化が進み、切先側は上方に向く。	底面	SK158 M 54
68	鉄製品 (鍛造品) 小刀	(33.6)	4.2	0.5	259	未計測	未計測	長袖の両端部が欠落。切先と刃部側に加えて茎部の半分以上が欠落する。4片に削れたものを接着している。背側には闊が予想されるが、刃部側は不明瞭。錆化が進み、切先側は上方に向く。	底面	SK184 M 56

写 真 図 版



出土土師器集合



平成17年度調査区遠景（北東から）



平成17年度調査区遠景（南東から）

PL2



平成17年度調査区遠景（南から）



平成22年度調査区遠景（北東から）



平成22年度調査区遠景（北から）



平成22年度調査区全景（南西から）

PL4



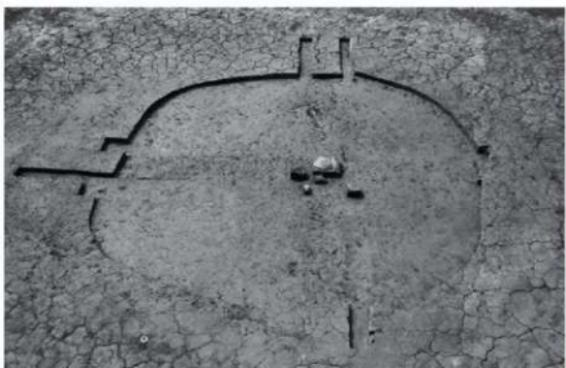
平成17年度調査
遺跡全景



平成22年度調査
遺跡全景



第2号掘立柱建物跡
完掘状況
(上空から)



第45号住居跡
遺物出土状況



第45号住居跡
遺物出土状況



第1号住居跡
遺物出土状況

PL6



第3号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡
完掘状況



第6号住居跡
遺物出土状況



第7・14号住居跡
完掘状況



第8号住居跡
竈1遺物出土状況



第8号住居跡
竈2遺物出土状況

PL8



第 8 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 11 号 住 居 跡
竈 1 完 挖 状 況



第 11 号 住 居 跡
竈 2 完 挖 状 況



第 11 号 住 居 蹤
完 挖 状 況



第 12 号 住 居 蹤
遺 物 出 土 状 況



第 13 号 住 居 蹤
完 挖 状 況

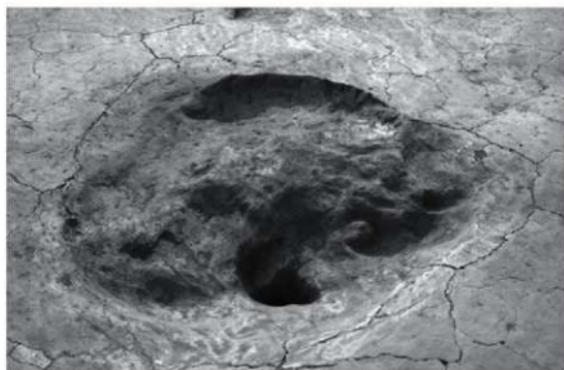
PL10



第15号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡
炉完掘状況

第 15 号 住 居 蹤
遺 物 出 土 状 況



第 20 号 住 居 蹤
遺 物 出 土 状 況



第 23 号 住 居 蹤
完 壕 状 況



PL12



第 26 号 住 居 跡
完 挖 状 況



第 26 号 住 居 跡
竪 完 挖 状 況



第 31 号 住 居 跡
遺 物 出 土 状 況

第31号住居跡
完掘状況



第32号住居跡
完掘状況



第34号住居跡
遺物出土状況





第34号住居跡
完掘状況



第36号住居跡
甕遺物出土状況



第36号住居跡
遺物出土状況



第37号住居跡
完掘状況



第39号住居跡
遺物出土状況



第39号住居跡
遺物出土状況

PL16



第42号住居跡
完掘状況



第48号住居跡
完掘状況



第1号住居兼
鍛冶工房跡
遺物出土状況



第 1 号 住 居 兼
鐵 冶 工 房 跡
完 挖 状 況



第 1 号 住 居 兼
鐵 冶 工 房 跡
爐 遺 物 出 土 状 況



第 1 号 住 居 兼
鐵 冶 工 房 距
爐 遺 物 出 土 状 況



第1号住居兼
鍛冶工房跡
炉 完 挖 状 況



第1号掘立柱建物跡
完 挖 状 況



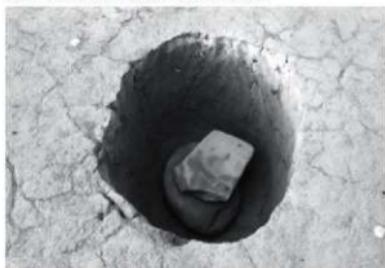
第2号掘立柱建物跡
完 挖 状 況



第2号掘立柱建物跡 P 2 完掘状況



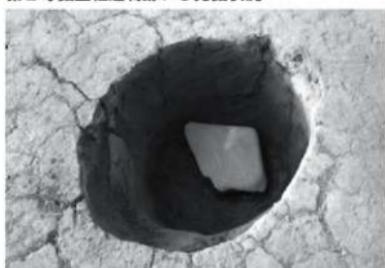
第2号掘立柱建物跡 P 5 完掘状況



第2号掘立柱建物跡 P 8 完掘状況



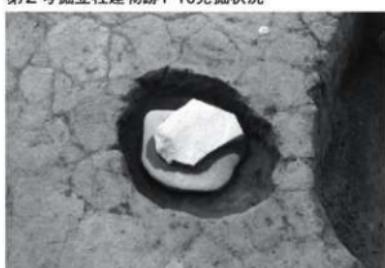
第2号掘立柱建物跡 P 9 完掘状況



第2号掘立柱建物跡 P 10 完掘状況



第2号掘立柱建物跡 P 11 完掘状況



第2号掘立柱建物跡 P 18 完掘状況

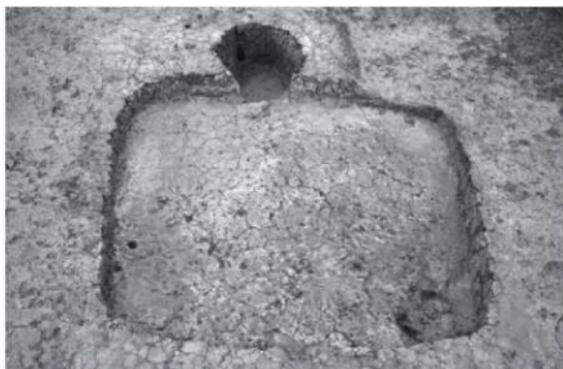


第2号掘立柱建物跡 P 19 完掘状況

PL20



第1号方形竖穴遺構
遺物出土状況



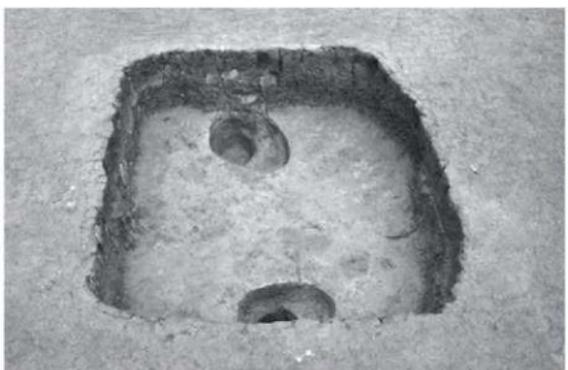
第1号方形竖穴遺構
完掘状況



第3号方形竖穴遺構
完掘状況



第4号方形竪穴遺構
完 堀 状 況

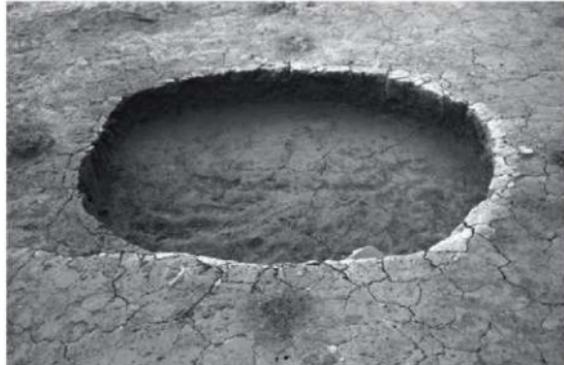


第5号方形竪穴遺構
完 堀 状 況



第 8 号 土 坑
完 堀 状 況

PL22



第 9 号 土 坑
完 挖 状 況



第 115 号 土 坑
遗 物 出 土 状 況



第 129 号 土 坑
遗 物 出 土 状 況

第 132 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



第 158 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



第 175 号 土 坑
完 挖 状 况



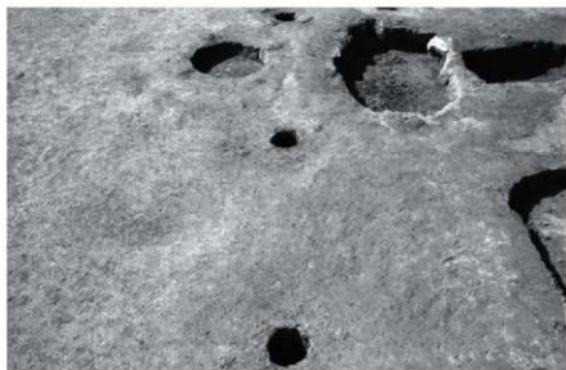
PL24



第 184 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



第 3 号 烧 土 遗 槽
完 据 状 况



第 1 号 柱 列 跡
完 据 状 况



第1·3·12·45号住居跡、第116号土坑、遺構外出土土器



SI 34-88



SK158-117



SI 31-75



SI 18-43



SK173-128



SI 13-39



SI 3-10



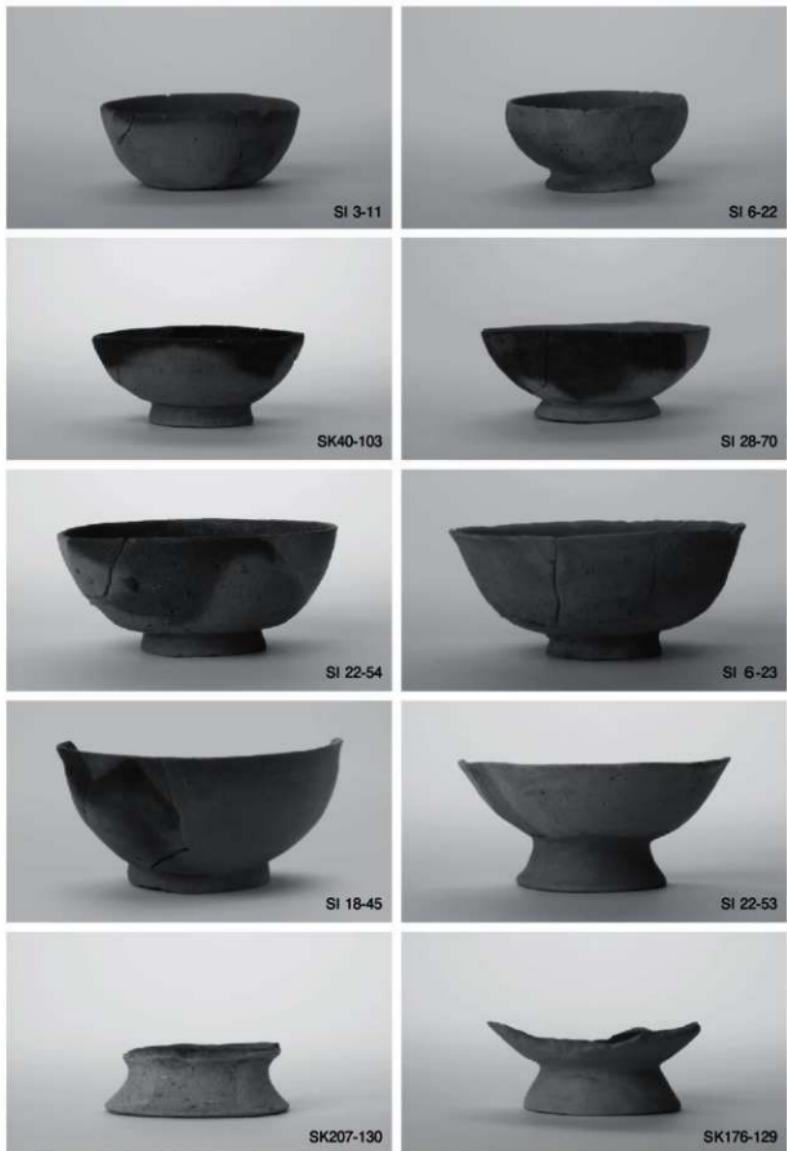
SK158-118



SK142-115

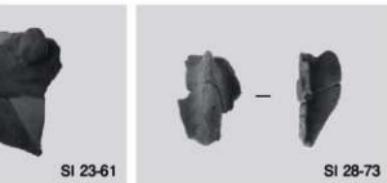


SK113-111



第3·6·18·22·28号住居跡、第40·176·207号土坑出土土器

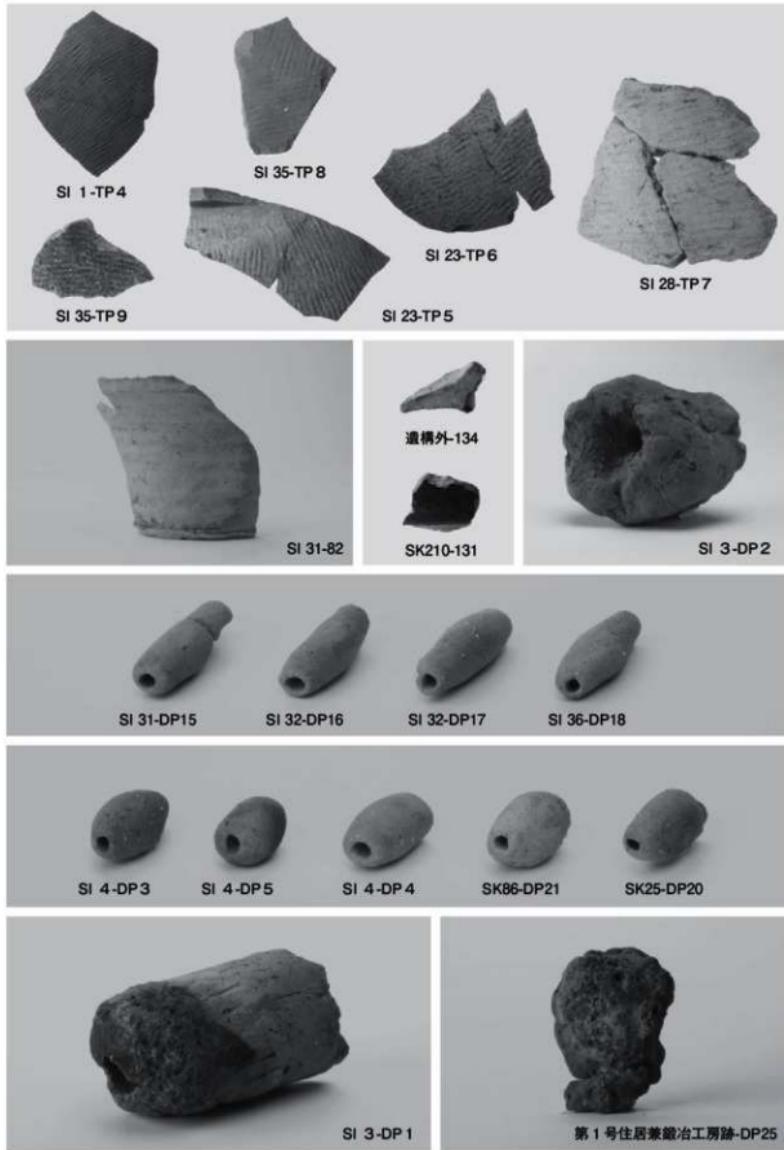
PL28



第1·3·6·18·20·23·28·31号住居跡，第1号方形竪穴構造，第158号土坑出土土器



第3·6·18·26·27·36·37号住居跡、第158号土坑出土土器



第1・23・28・31・35号住居跡、第210号土坑、遺構外出土土器

第3・4・31・32・36号住居跡、第1号住居兼鍛冶工房跡、第25・86号土坑出土土製品（支脚・管状土錘・炉壁）



第11号住居跡、第106号土坑、遺構外出土石器・石製品



遺構外-Q51



遺構外-Q52



遺構外-Q53



遺構外-Q55



SK 106-Q 2



SI 6-Q 4



SI 32-Q 9



SI 32-Q10



SH 7-Q11



SK 131-Q 12



SI 31-Q13



遺構外-Q58



SI 12-Q 7

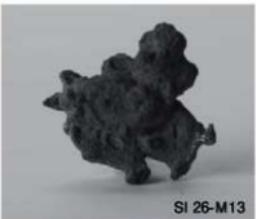


SI 18-Q 8

第6・12・18・31・32号住居跡、第7号方形竪穴遺構、第106・131号土坑、遺構外出土石器



SI 18-M 6



SI 26-M13



SI 26-M14



SI 26-M15



第1号住居兼鍛冶工房跡-M25



第1号住居兼鍛冶工房跡-M26



SK158-M55



SK3-M49



第1号住居兼鍛冶工房跡-M24



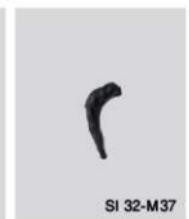
SK184-M56



SI 15-M 5



SI 9-M 3



SI 32-M37

第9·15·18·26·32号住居跡，第1号住居兼鍛冶工房跡，第3·158·184号土坑出土鐵製品·鐵
滓



第1·6·10·22·26·27·32·34·36·39号住居跡，第1号住居兼鍛冶工房跡，第2号掘立柱建
物跡，第4·6号方形竖穴遺構，第132·158号土坑出土鐵製品

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows Vista
編集 Adobe Indesign CS4
図版作成 Adobe Illustrator CS4
写真調整 Adobe Photoshop CS4
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
図面類 EPSON ES-10000G
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe Indesign CS4でレイアウトして入稿

茨城県教育財團文化財調査報告第356集

橋 元 遺 跡

国道118号袋田バイパス道路改築 事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成24(2012)年 3月14日 印刷
平成24(2012)年 3月16日 発行

発行 財團法人茨城県教育財團

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
HP <http://www.ibaraki-mabun.org>

印刷 (有)川田プリント
〒310-0041 水戸市上水戸4丁目6-53
TEL 029-253-5551



付図 橋元遺跡全体図（『茨城県教育財団文化財調査報告』第356集）

A horizontal line segment with arrows at both ends, representing a distance. The left end is labeled '0' and the right end is labeled '20m'. The line is approximately 100 pixels long.